1965年3月2日第3種郵便物認可 2024年3月1日発行 毎月1回1日発行 第43巻第4号 Record Collectors' Magazine

レコード・コレクターズ

3

2024
Vol.43, No.3

Band on the Run

ポール・マッカートニー&ウィングス『バンド・オン・ザ・ラン』

代表作に新たな角度から光をあてる50周年記念盤

ザ・ポーグス～シェイン・マガウアン

CamScannerでスキャン

29 特集 ポール・マッカトニー＆ウィングス
『バンド・オン・ザ・ラン』

30 ポール・マッカートニーのキャリアにおける
代表作となったアルバムを振り返る 文＝大鷹俊一

36 対談 直枝政広(カーネーション)×ポニーのヒサミツ 構成＝松永良平
普遍的な魅力とウィングスのバンドとしての特異性を詰め込んだアルバムを語る

42 2024年に聴く『バンド・オン・ザ・ラン』 文＝柴崎祐二

46 波乱に満ちたアフリカへの旅がもたらしたものとは 文＝藤本国彦

52 『バンド・オン・ザ・ラン』全曲ガイド 文＝萩原健太

58 ゆるいテーマでつながった『バンド・オン・ザ・ラン』の
歌詞を読み解く 文＝朝日順子

64 『バンド・オン・ザ・ラン』50周年記念エディション解説 文＝小山守

68 追悼 デニー・レイン "ポールの片腕"にとどまらない豊潤なキャリアを振り返る 文＝若月眞人

72 デニー・レイン重要アルバム選 選・文＝若月眞人

77 特集 ザ・ポーグス～シェイン・マガウアン

78 ヒストリー 文＝五十嵐正

84 ザ・ポーグス～シェイン・マガウアン＆ザ・ポープス・アルバム・ガイド
文＝小野島大

91 シェイン・マガウアン関連重要音源紹介 文＝行川和彦

92 映像で見るシェイン・マガウアン 文＝村尾泰郎

94 特集 リトル・リチャード

94 サントラ・アルバムと全盛期の3作で振り返る
ロックンロールのオリジネイター 文＝出田圭

98 音楽的功績と苦難を描く
『リトル・リチャード：アイ・アム・エヴリシング』 文＝鳥居真道

100 クイーン 文＝安田謙一
日本のファンによって収録曲が決まった来日記念盤『絆(Kizuna)』

108 フェイ・ウォン 文＝宗像明将
90年代に最も成功した中華圏の女性シンガーの7タイトルがアナログで再発

CamScannerでスキャン

3 2024 Vol.43, No.3

112 『SPレコード博物館』 取材・文＝小川真一
圧倒的な量のSPレコードが伝える時代の空気

116 NOKKO 文＝油上尚希
10枚組ボックス・セット

COLLECTORS' TOPIC
104 ボズ・スキャッグス 文＝金澤寿和
デモ・トラック集がリリースされる

108 〈アライヴ・ザ・ライヴ〉レーベル 文＝舩曳将仁
ハード・ロック系の未発表音源が多数を占めるタイトル

120 菊池ひみこ 文＝片島吉章
世界的な評価を受けるキーボーディストのリーダー作全タイトルが再発

連載
15 Legendary LIVE in U.K. 写真＝イアン・ディクソン
16 ミュージック・ゴーズ・オン
松尾翔平(Superyou) 取材・文＝柴崎祐二
22 ブリティッシュ・ロックの肖像 写真・文＝富岡秀次
122 矢野誠の点と線 取材・文＝除川哲朗
126 スティーヴ・クロッパー・リメンバーズ 取材・文＝稲葉光俊
130 ヴィクター・ハーバートから紐解く
ロスト・アメリカーナ 文＝高橋健太郎
135 初盤道 文＝真保安一郎
137 和久井光司のアナログ奇聴怪会
138 ウィ・ヒア・ニュー・サウンズ 文＝武田昭彦
139 赤岩和美の海外盤DVD&Blu-rayロック映像情報
140 コモエスタ八重樫のちょっと一服
141 DJフクタケのゆるみっくす7"
142 インフォ・ステーション
142 ピックアップ・ニュース
146 ブックス
152 ライヴ・リポート
153 コンサート&イヴェント
154 レターズ&編集後記
157 バック・ナンバー、定期購読のご案内
＊「大塚修一のレコード・コレクター紳士録」は休載いたします

後ろから見るページ
1 リイシュー・アルバム・ガイド
2 2月のリリース情報
8 国内盤
22 海外盤
11 ニュー・アルバム・ピックアップ

STAFF
編集長▶竹部康
編集▶杉原徹彦／工藤大／芦崎瑞樹
表紙・本文デザイン▶川畑あずさ
デザイン&プリプレス▶
笹川典久／柳井健仁／浅本美和
広告▶矢川俊介

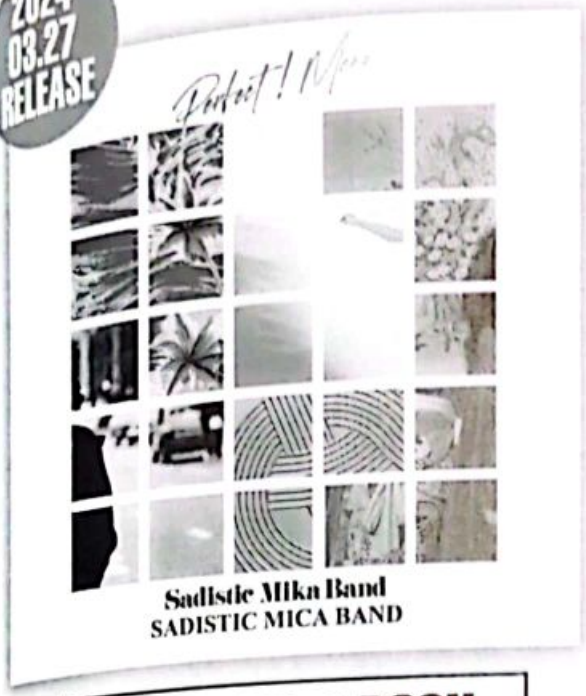
Copyright ©2024 by Music Magazine
All rights reserved. Printed in Japan
本誌記事の無断複写・転載は固くお断りいたします。

CamScannerでスキャン

サディスティック・ミカ・バンド
PERFECT! MENU

MIKAがボーカル期の第1期と
桐島かれんがボーカル期の第2期のオリジナル・アルバム全4作品とライブ・アルバム全2作品を最新リマスター。
また、今回新たに発掘された1974年の京都円山公園でのライブ音源を収録したディスク7、
初CD化満載のライブバージョン、テイク違いなどのレアトラックを集めたディスク8、
さらに1975年の英国BBC「Old Gray Whistle Test」でのスタジオ・ライブ映像など
日本の音楽史的にも貴重なトレジャーを収録

2024.03.27 RELEASE



8CD＋BD＋BOOK

定価¥22,000(本体¥20,000 税率10%) UPCY-90244

CD1 : SADISTIC MIKA BAND
(オリジナルリリース : 1973/5/5)
Remastered by Miles Showell at Abbey Road

CD2 : 黒船
(オリジナルリリース : 1974/11/5)
Remastered by Miles Showell at Abbey Road

CD3 : HOT! MENU
(オリジナルリリース : 1975/11/5)
Remastered by Miles Showell at Abbey Road

CD4 : Live in London
(オリジナルリリース : 1976/7/5)
Remastered by Miles Showell at Abbey Road

CD5 : 天晴
(オリジナルリリース : 1989/4/8)
Remastered by 砂原良徳

CD6 : 晴天 SADISTIC MICA BAND LIVE IN TOKYO 1989
(オリジナルリリース : 1989/7/12)
Remastered by 砂原良徳

Mastered at Abbey Road Studios

CD7

全曲初CD化

Live at 京都円山公園野外音楽堂 in July 1974

01. 塀までひとっとび
02. 影絵小屋 / Shadow Show
03. ピクニック・ブギ / Picnic Boogie
04. 銀座カンカン娘
05. ロックンロール・バンド
06. タイムマシンにおねがい
07. ダンス・ハ・スンダ / Dance Is Over
08. TSOP (The Sound of Philadelphia)~ソウル・トレインのテーマ

CD8

RARE TRACKS

01. サイクリング・ブギ~1972年4月3日共立講堂 LIVE 初音源CD化
02. サイクリング・ブギ~ALBUM BONUS Version
03. レコーディング・データ
04. サイクリング・ブギ~Single Version
05. オーロラ・ガール
06. ハイ・ベイビー
07. お花見ブギ
08. ピクニック・ブギ / Picnic Boogie
~1973年4月9日共立講堂 LIVE 初CD化
09. シトロン・ガール (金牛座流星群に歌いつがれた恋歌) / Citron Girl
~1973年4月9日共立講堂 LIVE 初CD化
10. アリエヌ共和国 / Arienu Republic
~1973年4月9日共立講堂 LIVE
11. ピクニック・ブギ / Picnic Boogie
~1973年5月1日ラブジェネレーション・コンサート@日本武道館
12. 銀河列車 / Galaxy Way
~1973年5月1日ラブジェネレーション・コンサート@日本武道館
13. SUKI SUKI SUKI 初CD化
~US PROMO MONO Version (邦題 : 塀までひとっとび)
14. OKINAWA (STRANGE FISH) 初CD化
~ENGLISH Version (邦題 : オキナワ BOOGALOO)
15. HI JACK (I'M JUST DYING) 初CD化
~UK Single Shortened Version (邦題 : ヘーイ ごきげんはいかが)
16. マダマダ産婆~1975年9月21日LIVE@神田共立講堂
17. 愛と快楽主義者~Single Version
18. Boys & Girls~English Version
19. Boys & Girls~Single Version

Blu-ray

- 「ハイ・ベイビー」~TVK ヤングインパルス 初Blu-ray化
- 「塀までひとっとび」
~1974年8月10日 都山 ONE STEP FESTIVAL
- 「TIME TO NOODLE (邦題 : WA KAH' CHICO)」 初Blu-ray化
~1975年10月7日、BBC「Old Gray Whistle Test」より
- 「SUKI SUKI SUKI (邦題 : 塀までひとっとび)」 初Blu-ray化
~1975年10月7日、BBC「Old Gray Whistle Test」より

CamScannerでスキャン

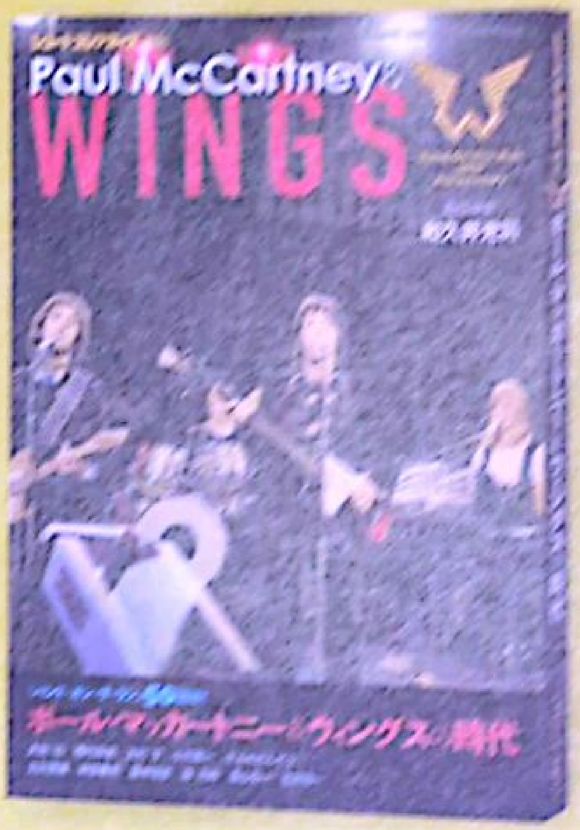
レコード・コレクターズ 増刊

ポール・マッカートニー&ウィングスの時代

『バンド・オン・ザ・ラン』50周年！

責任編集 和久井光司

ウィングスは1970年代のビートルズだった！
モンスター・アルバム『バンド・オン・ザ・ラン』のリリースから50年。
ウィングスの功績を徹底的に振り返り、歴史をアップデイトする究極の一冊！



ウィングス・メンバーのソロ活動と参加作品

日本のメディアが報じたウィングス

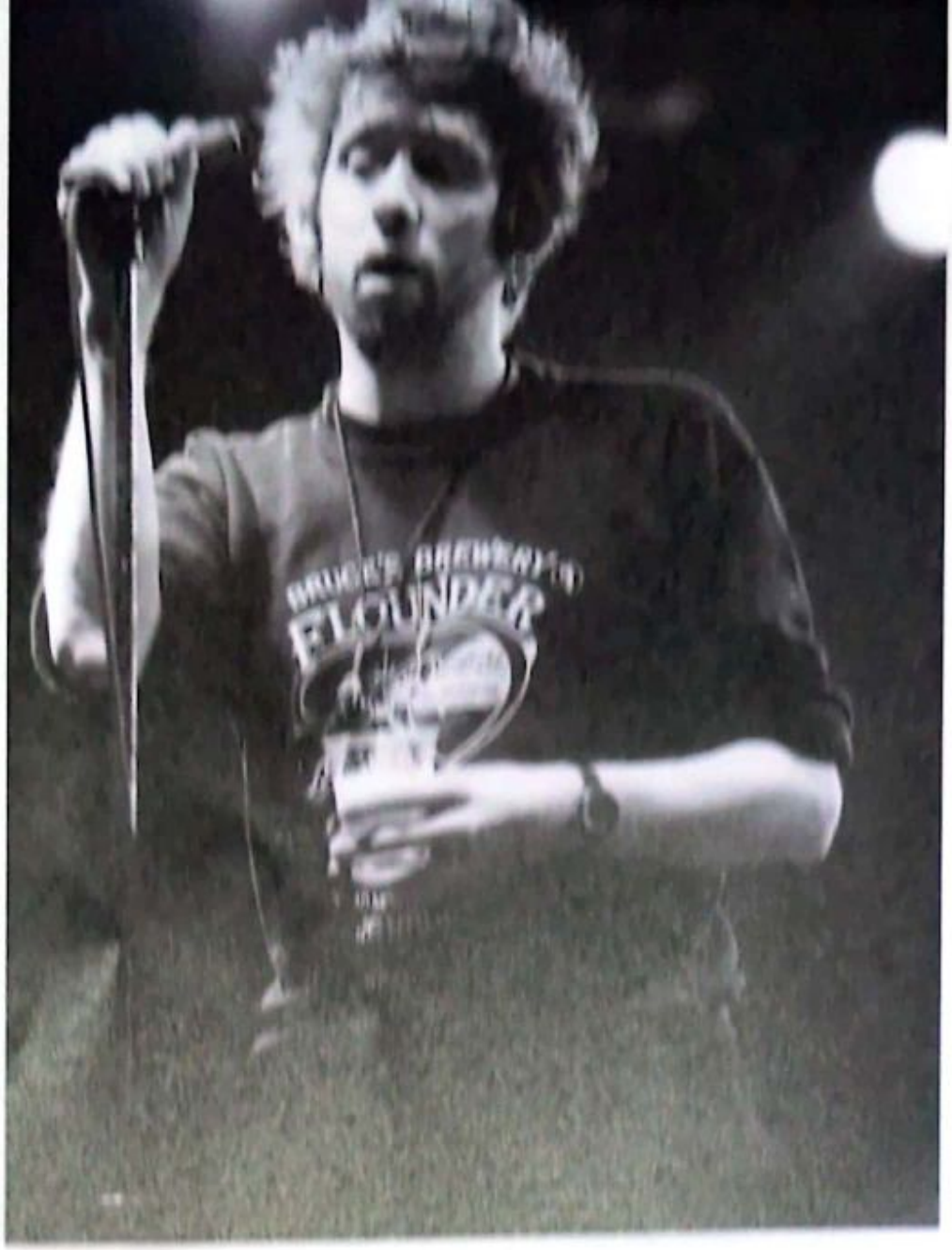
Power Pop Album Guide

70年代ロックにおけるウィングスの位置

A5判208ページ／2420円（本体2200円）／発売中

株式会社ミュージック・マガジン http://musicmagazine.jp

CamScannerでスキャン



shot 167: The Pogues (Shane MacGowan)
Wembley Arena, London 26 October 1988

レコード・コレクターズ 3 2024 Vol.43, No.3

文中の記号

アルバムを示す記号　シングル、曲名を示す記号

国内盤＝[illegible]　国内盤＝[illegible]

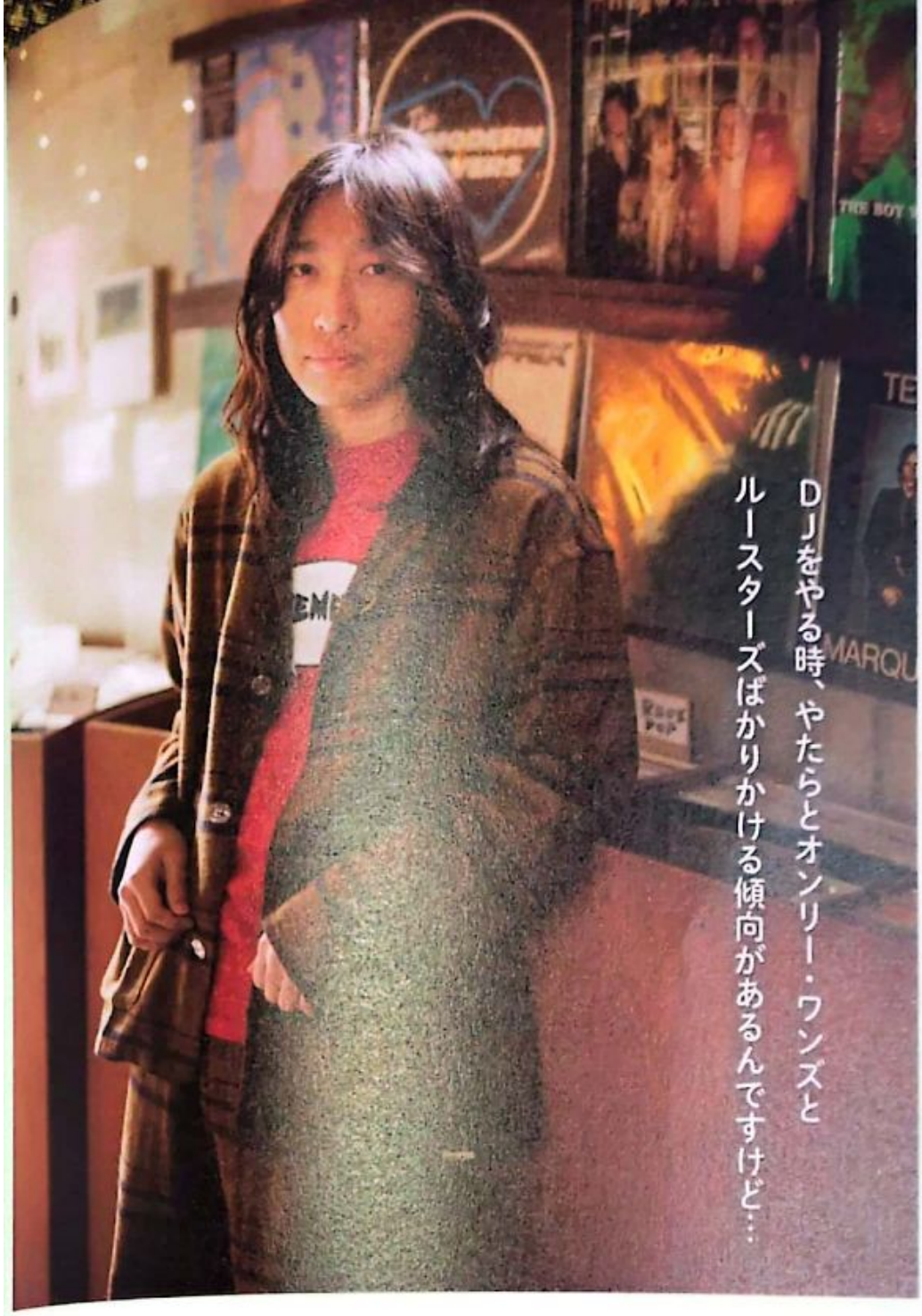
海外盤＝[illegible]　海外盤＝[illegible]

* 本誌ではアルバムやシングルを、オリジナル盤のタイトル、レーベル、番号で表記するケースが多くあります。アーティストの出身国または日本以外のイギリスから発売されたレコードのみ、その国名とレーベル名の順に記します。
* 掲載されている価格は、特記されている場合を除き税抜きの価格です。

楽器略号

ac=アコースティック・ギター　acc=アコーディオン
as=アルト・サックス　b=ベース
bs=バリトン・サックス　cl=クラリネット
ds=ドラムス　el=エレクトリック
fh=フリューゲルホルン　fl=フルート　g=ギター
hca=ハーモニカ　kbd=キーボード
org=オルガン　p=ピアノ　per=各種打楽器
s=各種サックス　sg=スティール・ギター
ss=ソプラノ・サックス　syn=シンセサイザー
tb=トロンボーン　tp=トランペット
ts=テナー・サックス　vlb=ヴィブラフォン
vln=ヴァイオリン　vo=ヴォーカル

CamScannerでスキャン



DJをやる時、やたらとオンリー・ワンズと
ルースターズばかりかける傾向があるんですけど…

まつお・しょうへい
様々なバンドでの活動を経て、2011年に自作曲の演奏を主眼としたSuper Ganbari Goal Keepersを結成、12年にファースト・ミニ・アルバム『ルサンチマン・エクスプロージョン』を発表した。『Dodometic youth』（19年）など作品のリリースと並行して"ブラックナードフェス"など自主イヴェントも多く手掛け、シーンの活性化にも貢献している。ベーシスト脱退を機に、21年からSuperyouとして新たな活動を開始した。並行して"ほたるたち"のギタリストとしても活動中。

松尾翔平

（Superyou）

第66回

最新音楽生活考

MUSIC GOES ON

取材・文＝柴崎祐二　写真＝栗原論　イラストレイション＝我喜屋位瑳務

CamScannerでスキャン

今回ご登場いただいた松尾翔平と私が知り合ったのは、10年以上前、あるイヴェントで共通の友人を通じて紹介されたことがきっかけだったと思う。彼は当時、Super Ganbari Goal Keepersというロック・バンドをやっていて、早速作品を聴いてみたところ、正統的なギター・ポップ、オルタナティヴ・ロックの意匠を受け継ぎながらも、いかにもナードな若者たちらしいルサンチマンが充満したその楽曲に、即座に魅了されたのだった。

青春の懊悩が爽やかなサウンドに乗せられ、ビターな味わいを醸す。しかも、2015年にはレコード好きの悲哀(?)を描いた、そのものズバリ〈レコードコレクターズ〉なる楽曲もリリースしているのだった。そんなこともあって、本連載を開始して以来、いつか登場してもらいたいと思っていたところ、21年の11月に、メンバーの脱退を受けて突然活動を休止してしまう。一ファンとしてなんとも残念だったが、間を置かずに新たなバンドを始動させたという情報も知った。

その名も、〝Superyou〟。ベーシスト兼スタイリストの井上はこねを迎え、オルタナティヴ・ロックやギター・ポップに根ざした前身バンドを受け継ぐ音楽を聴かせながらも、そのアンサンブルや歌詞、そしてヴィジュアル面で大きくイメージを刷新し、言うなれば〝成熟したインディー・ロック〟を奏でる存在へとスケール・アップしていた。そしてその印象は、1月に発表された待望のファースト『TODAY』を聴いて、より一層強められることとなった。青臭さを撒き散らしていたあのショウヘイマン(松尾のかつてのステージ・ネーム)が、こんなにも機微に富んだ、けれどみずみずしさを保った作品を作り上げるなんて!

Superyou
『TODAY』
ローズ ROSE307X／LP+CD／¥3500／発売中
ベースに新メンバーを迎えたSuperyouとしての初アルバム。デビュー・シングル「1995」を含む9曲収録

幼少期から新バンドに至るまでの音楽遍歴と、最近の関心について話を訊いた。

王道よりも傍流を

「僕は東京生まれなんですけど、幼少の頃に親の仕事の関係でインドネシアのジャカルタに引っ越して以来、そこで生活していたんです。現地在住の日本人のコミュニティがあって、大人たちが集まって日本の曲をカラオケで歌うんですけど、それが音楽にちゃんと接した最初の記憶です。みんながユーミンとか、スピッツとかを歌う様子…。その頃から引っ込み思案だったので、自分では歌わず端っこの方でそれを聴いていました。

それと、母親がピアノが好きだったので、僕も習わされていました。インドネシアならではの体験でいうと、観光地で生のガムランを聴いたり、学校で民俗楽器を習ったりもしました。最近、エキゾチックな音楽が好きになってきたんですけど、元をたどるとその頃の経験が影響しているのかもしれません。中学の頃にジャカルタ暴動が発生して…治安の問題で家族揃って日本に帰ってきました。

日本に戻ってからは主にテレビを通じて音楽に親しむようになりました。スペースシャワーTVやMTVが見られたので、そこで流れる非主流っぽいものに惹かれるようになって。特にハマったのは、ブランキー・ジェット・シティ。言葉の乗せ方、その内容、メロディから何から、そ

CamScannerでスキャン

れまで聴いていたJポップ系とは全く違っていて、何か危険なものに触れているような感覚でした。不良っぽいけどマッチョではないっていう独特の雰囲気にも惹かれました。アルバムで言うと、リアルタイムで買った『HARLEM JETS』（00年）を一番聴き込みました。

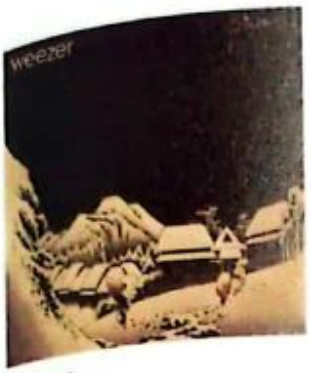
ケーブルテレビの番組を見ていると自然と海外の情報も入ってくるので、徐々にオルタナ系の洋楽バンドも好きになっていきました。特にウィーザーは衝撃でした。ブランキーは自分とは異なる世界の音楽という感じだったんですが、ウィーザーはもっとナードで、具体的に共感できる部分が多くて。彼らがサマーソニックに出たときのライヴ映像を見て、動きも妙だし、ヴィジュアル的にも自分とあんまり遠くないなとシンパシーを抱いたりしていました（笑）。で、『ピンカートン』というアルバムを手に入れたんですけど、屈折した歌詞の内容に衝撃を受け、余計好きになりました。

ペイヴメントを好きになったのもその時期でした。ケーブルテレビで〈ステレオ〉という曲（97年）のMVを見たのがきっかけです。他にも、ダイナソーJr.とか、ピクシーズとか…そのあたりが自分の嗜好の礎になっていると思います。その頃からこっそり一人でギターを弾くようになりました。ウィーザーとブランキーのギター・スコアを買って練習していましたね。中学3年になって受験勉強をはじめると、友だちに会うことも少なくなっていくので、さらに音楽にハマっていきました。ハイサウンズや月光堂、それにディスクワールドとか、地元のレコード屋を回って日本のロックや海外のオルタナ系中心に買い漁っていました」

高校に進んでからは、より一層熱心にショップ回りをするようになったという。

「御茶ノ水に校舎があったので、毎日、放課後にディスクユニオンとレンタル・ショップのジャニスに通う生活でした。友だちと音楽の話をする中で、もともと好きだったオルタナ系のルーツにあたるものにも興味が出てきて、70年代のパンクを掘るようになりました。特にニューヨークのアーティストにハマりました。テレヴィジョンやリチャード・ヘル、ジョナサン・リッチマン…それと、ジョニー・サンダース。NYパンクのバンドは、繊細なんだけれどどこかひねくれていて、やさぐれてもいる。あの独特の雰囲気が大好きです。もちろんUKのパンクも聴いてはいたんですけど、ニューヨークのアーティスト特有の繊細そうな感じの方がしっくりきたんですよね。そういう意味では、UKのバンドでもオンリー・ワンズは特別に好きですね。

同時に、ニューヨーク・パンクへの興味をきっかけに60年代のガレージ・パンク系も聴くようになりました。本当は



Weezer
"Pinkerton"
DGC/Geffen[US] DGCD25007
[1996]（CD）
米オルタナ・ロック／パワー・ポップ・バンドのセカンド・アルバム。中心人物リヴァース・クオモは親日家としても有名

The Only Ones
"The Only Ones"
CBS[UK] S CBS82830[1978]（LP）
代表曲'Another Girl, Another Planet'ほか全曲をピーター・ペレットが手掛けた1st

CamScannerでスキャン

『ナゲッツ』の4枚組ボックスが欲しかったんですが、学生でお金もないので、最初は1枚ものの編集盤を聴いていました。そこからスタンデルズとか、シーズとか、周辺のバンドを掘っていきましたね。

有名なサイケ系のバンドよりも、もっとプリミティヴで少し破綻している感じに惹かれるんです。シャッグスとかのいわゆる〝アウトサイダー・ミュージック〟と呼ばれるものを集めたコンピレーション〝Songs In The Key Of Z〟シリーズとか…。これは今でもそうなんですけど、全体的に王道ではなくて、その傍流にあるものに惹かれる傾向がありますね。と言いながら、後々にローリング・ストーンズを聴いて〝これだけあれば最高じゃん〟と思ったりもするんですけど（笑）」

アングラからストレートな表現へ

本来ならば高校時代にバンドを組んで活動してみたかったという松尾。その後、希望を抱いて大学に入るが…。

「入学してすぐに音楽サークルに入るんですが、聴いている音楽は他の人たちと重なっているはずなのに、なぜか馴染めないという現象が起きてしまって…（笑）。結局、ネットのメンバー募集で出会った初対面の人とバンドを組むことになりました。その人が、INUとかザ・スターリンとか80年代の日本のパンクが好きだったので、そのあたりのカヴァーや、オリジナル曲をやったりしていました。ガセネタの曲名から取った〝雨上がりのバラード〟というのがバンド名で、高円寺の二万電圧とか無力無善寺とかに出演したり、思い切りジャパニーズ・アングラ志向のバンドでした。後のSuper Ganbari Goal Keepersの時代に、イヴェントで山崎春美さんと一緒に演奏させてもらったんですが、すごく光栄でしたね。

〝雨上がりのバラード〟は新たなメンバーが入って、ハードコア・パンク志向から、クリンペライとかに影響を受けた管楽器が入った室内楽寄りになっていきました。当時は〝関西ゼロ世代〟が台頭してきていて、オシリペンペンズの映像を見て衝撃を受けたり、高円寺の円盤で自主制作CDを買ったりしていました。

そういうアヴァンギャルドな音楽をやりつつも、どこかでもともと好きだったメロディアスな音楽をやりたいなという気持ちが膨らんできて、社会人になってから歌もののバンドにギターとして参加したんです。並行して自分でも歌ものの曲を作り始めて、それがSuper Ganbari Goal Keepersに発展していきました。

その頃に大きな刺激を受けたのが、ニューヨークのインディー・ロック・バンド、ザ・ペインズ・オブ・ビーイング・ピュア・アット・ハートです。ちょうどデビュー・アルバムが出たあとで話題になっていたんですけど、大学時代を通じて前衛的な音楽をやっていたこともあって、最初に聴いたときに〝こんなストレートな音楽を堂々とやっていいんだ〟という新鮮な衝撃があったんです。しかも、僕がかつて熱心に聴いていたオルタナ系の要素も強くて、こういうのを自分でもやってみたいし、やれるなと思ったんです。

同じ時期、ザ・スミスの曲も大きなインスピレーション源になっていました。それ以前にも聴いたことはあったんですけど、社会に出て仕事で疎外感を感じたり孤独感を覚えることが多くて、改めて歌われている内容が自分にリンクして聞こえてきたんです。モリッシーの歌詞は、弱者を歌っていても、どこか美しさとユーモアがあるんですよね。

CamScannerでスキャン

最新のインディー系も再びチェックするようになったんですが、その流れで特に好きになったのが、ロンドンのバンド、ヤックです。マリコ・ドイさんという日本人の女性の方がベースを担当しているんですけど、サウンドはもちろん、その編成のヴィジュアル的なカッコよさにも惹かれました。現在のSuperyouの活動にとってもヒントになっています」

Superyouの結成について訊いてみた。

「もともと、今の所属レーベルであるROSE RECORDSに声をかけてもらって、Super Ganbari Goal Keepersの新作を発表する予定だったんです。ところが、ベースのメンバーが漫画家を目指すということで突然脱退してしまって。残ったメンバーとこれからどうしようと相談している中で、いっそ、バンド名もイメージもガラッと変えてみたら面白いんじゃないかという話になったんです。それで（井上）はこねさんを誘って心機一転、再スタートしました。昔から、たとえばエイプリル・フール～はっぴいえんどとか、はちみつぱい～ムーンライダーズみたいに、人脈的には重なっているんだけど音楽性が大きく変わるようなバンドの変遷に憧れがあって、それを自分たちでも踏襲してみた形ですね。本当はもう少し緩やかな変化にするつもりだったんですけど、はこねさんのスタイリングやギターの司さんのアート・ディレクションのおかげもあって、本当にガラッとイメージが変わってしまいました（笑）。

それまで男性のルサンチマンとか疎外感をテーマにやってきたけれど、自分の中である程度やり切ったという手応えもあったし、メンバーそれぞれの相違や特性をちゃんと出していった方がいいなと思うようになったんです」

じっくり音に向き合って楽しむ

近年のお気に入りも挙げてもらった。

「最近はザ・ルースターズにハマっています。初期作品をはじめ以前にも聴いたことはあったんですが、今は80年代半ばのネオサイケ化した時期、アルバムでいうと『θ PHY』（84年）がすごく好きです。特に1曲目の〈VÉNUS〉がとにかく最高…。たまに自分でDJをやることがあって、その時にやたらとオンリー・ワンズとルースターズばかりかける傾向があるんですけど、〈VÉNUS〉をかけるとすごくいいんですよね。ピーター・ペレットにも通じる、どこか破綻しかかった美学を感じるというか…。

それと、コロナ禍中にパソコンを使って一人でデモを作る機会が増えたんですけど、ミックスをするときに、モジュレーションをかなり強めにかける傾向があって。そのサウンドがかなりルースターズの『θ PHY』に近いなと気付いたんです。この時期のルースターズは、そういう音像的な部分でも自分の今の嗜好と重なる部分が大きいなと思います。極端にいえば、アンビエントとか、その周辺の80年代っぽい空間的な音とか、デジタルっぽい質感とか、以前から再注目されている要素がこのアルバムの中に絶妙なバランスで溶け込んでいるなと思います。自分たちでも、こういうサウンドをやってみたいなと思っています」

あることがきっかけとなり、以前に愛好していたガレージ・パンク～サイケ系も聴き直しているという。

「ここ数年、裸のラリーズのオフィシャル再発が盛り上がっていますけど、それを聴いているうちに、水谷孝さんのギターのサウンドを含めて、60年代のガレ

CamScannerでスキャン

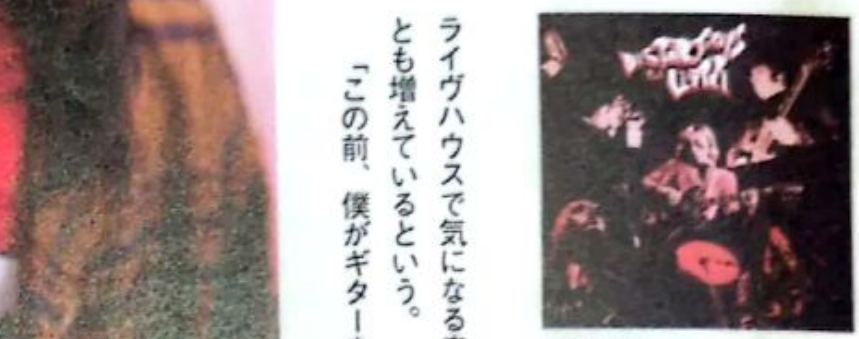
ージ系の音がその背景にあるのかもしれないと改めて気付いたんです。そういう視点を経て自分の中で再燃しているのが、ミネアポリスのガレージ・サイケ・バンド、ザ・リッターです。代表曲〈アクション・ウーマン〉（67年）の歪みまくったギターの音は、何度聴いても本当に素晴らしいですね。ファズやディストーションの効いた破壊的なサウンドには、否応なく反応してしまいます」

ライヴ活動を活発化させる中で、再びライヴハウスで気になる音楽に出会うことも増えているという。

「この前、僕がギターを担当している別のバンド〝ほたるたち〟で、ミック&ニュー・リヴィングデッドというバンドと対バンしたんですが、ライヴが凄まじくて、メンバーの方が以前やっていた光束夜のライヴ盤を買わせてもらいました。不失者のような3人編成なんですけど、もっとシンプルかつエクストリームな感じで、グッときました。

2010年代半ば以降、ストリーミング・サーヴィスが普及してから、次から次へと色んな音楽を聴けるようにはなったんですが、どうしても量をこなしながら〝情報を聴いている〟感じがしてしまって、自分の中で、果たしてそれでいいのかなと疑問を抱くようになっていったんです。そんなときに、対バンで知ったいいバンドの音源をじっくり聴いているうちに、改めて音楽にちゃんと向き合って楽しもうという気になってきたんです。

それと、ROSE RECORDSの主宰者でもある曽我部恵一さんからいいレコード・プレイヤーを薦めてもらったこともあって、最近は、アナログ盤を買って時間をかけてじっくり聴くのも楽しいですね」〔1月11日　下北沢・PINK MOON RECORDSで〕



The Litter
"Distortions"
Warlock [US] 9445-671 [1967] (LP)
プロデューサーのウォーレン・ケンドリックが書いたガレージ・サイケの古典'Action Woman'収録の1作目

CamScannerでスキャン

ブリティッシュ・ロックの肖像

Portraits In British Rock From London

369

写真・文＝富岡秀次　撮影協力：鈴木ヒロシ氏

有賀幹夫（下）

ローリング・ストーンズ公式写真家が見た、バンドの変化とチャーリー・ワッツ

――2023年にローリング・ストーンズのドラマー、チャーリー・ワッツのジャズ・パフォーマンス・レコーディング音源を2枚のLP／CDにまとめたアルバム、"Anthology"が発売されましたね。

「チャーリーのアンソロジー盤が制作されることになって、私が01年に撮影したチャーリーの写真について、BMGから問い合わせがきました。"多分、ミキオの写真だと思うが確認してほしい"と。その写真は、01年にブルーノート東京で撮影したものです。もうストーンズ・キャンプでも当時の情報をよく知る人がいなくなってきていて、今では私が古株となり、ストーンズのマネージメントに情報を提供する立場となった、ということですね。ジャケットの写真はアントン・コービンの撮影で、私の写真はインナーで使われています。個人的にとても印象深い仕事になりました。海外盤はBMGから23年7月ごろに発売されましたが、日本盤は残念ながらリリースされていません」

――有賀さんが公式フォトグラファーになってから、ストーンズに幾つかの変化が見られます。ファインダーを覗き演奏を間近で聴きながらどのように感じていますか。

「ストーンズは、93年にビル・

CamScannerでスキャン

ワイマン（b）が脱退して以降、バンドではなくなりユニットという形態に変化したと思います。フアンとしては少し寂しい気もしましたが、ビルが抜けてからの〈ヴードゥー・ラウンジ・ツアー〉（94～95年）のミック・ジャガーのパフォーマンスは圧倒的でした。エンターテイナーとしてまだまだ世界のトップ・レヴェルをキープしているところは素晴らしいとしかいいようがありません。

ビルがいた頃には〝ストーンズって5人組だよね〟という認識がありましたが、今はなんといってもミックとキースがいれば〝ザ・ローリング・ストーンズって最高だよね〟と思えるんです。批判でもなんでも飲み込んでしまう魅力がストーンズにはありますよね。

先日、知り合いのライターの人と話をしていて、近田春夫さんが〝ストーンズはダリル・ジョーンズ（b）が入ってからダンス・バンドになった〟とおっしゃっていたと聞きました。だから今の方が好きだって。面白いことに、この話をストーンズ好きの私と同世代のミュージシャンに話したら〝だから、俺は嫌なんだ。ビルがいた時代のストーンズが好きだ！〟と。こういうファン同士の会話を喚起させてくれるのがストーンズなんですよね」

――チャーリーの死（21年）について。

「残念だけれど仕方のないことですよね。チャーリーの後釜でスティーヴ・ジョーダンが入った。当時の〈ノー・フィルター・ツアー〉で、既にチャーリーの代役を務める発表がされていて、その流れで正式に加入することになったのは自然ですね。スティーヴもボズ・スキャッグスやジョン・メイヤーのプロデュースとかで本当に売れっ子なので、ストーンズにコミットするには、たくさんの仕事をキャンセルしたんじゃないかな。21年のロサンジェルスと22年のハイド・パークを撮影したんですが、スティーヴは頑張っていました。しかし、〈ダイスをころがせ〉と〈無情の世界〉〈ミッドナイト・ランブラー〉の3曲だけは、どうしても体感が違いすぎました。スティーヴはとんでもない凄腕ですが、チャーリーの醸し出すビートの強弱、スウィング感というか立体感が、どうしても恋しくなってしまうのです」

――ストーンズと写真家、有賀さんの関わりについて思うところは。

「ストーンズ・マフィアの一員である私は、今でも前述したローリング・ストーンズのアーカイヴを構成する歴史的に大切な写真を提供し、〝Exhibitionism〟（前号参照）のようなイヴェントがあればその都度、迅速に対応できる。今、しばらく来日ツアーが行なわれていなくて、彼らのライヴ撮影ができていない状態ですが、それでも彼らとの関係が継続しているのは本当に幸せなことだと感じています。なぜなら、ストーンズがロック界の頂点であり、彼らを超える被写体は存在しないのですから。〝私はかつてザ・ローリング・ストーンズを撮影していた〟と回想するような状態にはなりたくないのです」

〔インタヴューは23年6月2日、東京都小平市の有賀氏自宅で〕

Charlie Watts "Anthology"
BMG BMGCAT816DCD［2023］
（CD）
ジャズの編成によるソロ・アルバムからの曲を中心に、未発表ライヴ音源も収録したアンソロジー

"Anthology"に掲載された、有賀幹夫氏撮影のポートレイト

CamScannerでスキャン

特集

ポール・マッカトニー＆ウィングス『バンド・オン・ザ・ラン』

ポール・マッカートニー＆ウィングスの73年作『バンド・オン・ザ・ラン』は長らく彼らの代表作の一枚として親しまれてきました。今回は50周年記念デラックス・エディションを中心にしながら、このアルバムの魅力を改めて振り返ってみたいと思います。オーケストレイションを施す前の〝アンダーダブド・ミックス〟からは、このときの彼らの不思議な〝バンド〟としてのあり方の面白さが見えてくるかもしれません。

イラストレイション＝田中紀衣

CamScannerでスキャン

『バンド・オン・ザ・ラン』とその時代

ポール・マッカートニーのキャリアにおける代表作となったアルバムを振り返る

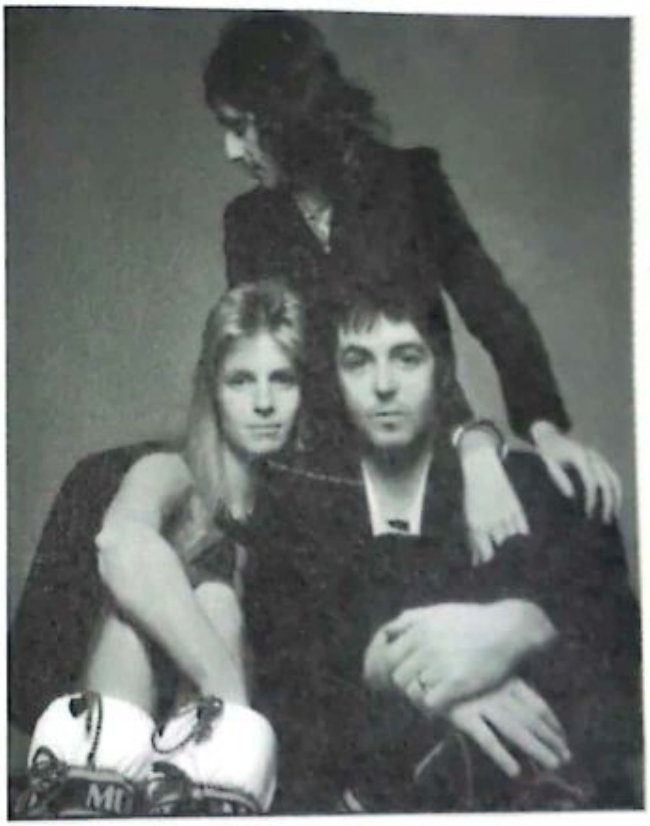
文＝大鷹俊一

ポール・マッカートニーの最高作に挙げる人も多いウィングスのアルバム『バンド・オン・ザ・ラン』。自分もそんな一人で、ポールならではのヴァラエティに富んだ楽曲の数々に加え、なんとか動かしてきたウィングスの危機的状況、レコーディング・シチュエーションなどからくる特別な緊張感がアルバム深部に横たわり、いつものポール作品とは違うムードが漂っているのも、今となれば魅力と言ってよい。

そんなアルバムが出たのが、73年の12月7日（アメリカは5日、日本は74年2月10日のこと）。そして今年2月2日、30thアニヴァーサリー・エディションがリリースされた。ハーフ・スピードでカッティングされた1LP、アンダーダブド・ミックスを加えた2LP、同2CD、さらにドルビー・アトモス・ミックスなど各種フォーマットでの発売となる。

リアルタイムでは、ポールによるビートルズの解散とアップルでの共同経営の解消を求める訴えが認められ、71年、正式にグループ解散となった。それ以前から各メンバーの活動領域は広がり、複雑な問題も絡まり合って四人の間はギスギスした関係が続いていた。だが、音楽シーン全体では多様なサウンドが次々と生まれ、アーティストたちの意欲的な展開へとつながるアクティヴな時代でもあった。『バンド・オン・ザ・ラン』だけを近視眼的に見れば、そうしたものとあまりリンクはしていない風ではある。だが、もう少し高みから見れば、やはり時代の空気感を背負っているのだ。そのせいか、今でも生々しさをどこかに残しているように感じられる。

今回の〝改めての魅力発見〟は、そういう背景があってのこととも言える。そこらを意識しながら、この時代を振り返ってみよう。



73年、『バンド・オン・ザ・ラン』プロモーション用に撮影された一枚。左からリンダ・マッカートニー、デニー・レイン、ポール・マッカートニー
©1973 MPL Communications Ltd / Photographer: Clive Arrowsmith

CamScannerでスキャン

"プログレの時代"としての1973年

73年を大胆に括るとすれば"プログレの時代"だ。それはただお前が好きなだけだろう、とすぐに突っ込まれそうだが、そうとも言えないのは、73年に出たこの手のレコードをリスティングするとすぐわかる。

ピンク・フロイド『狂気』、キング・クリムゾン『太陽と戦慄』、イエス『イエスソングス』、ジェスロ・タル『パッション・プレイ』、ジェネシス『月影の騎士』、エマーソン・レイク&パーマー『恐怖の頭脳改革』、ムーディー・ブルース『神秘な世界』、PFM『幻の映像』、カン『フューチャー・デイズ』などなど、いずれも各バンドの代表作と言っておかしくないもので"プログレの時代"と言いたくなるのも納得してもらえるはず。

Pink Floyd
"The Dark Side Of The Moon"
Harvest[UK] Q4SHVL804
[1973] (LP)

ロックの核となっていたルーツ・ミュージックにこだわることなく、クラシック、ジャズ、トラッド、現代音楽など、さまざまなテイストを個々のグループが柔軟に取り込むことで、複雑な音楽性を持ったアルバムが生み出されていた。これはいわゆるプログレ的な音に限った話ではなく、ザ・フー『四重人格』、エルトン・ジョン『グッバイ・イエロー・ブリック・ロード』など、スケールの大きなアルバム作りをアーティストたちが競い合っていたのである。

もともとロックンロールやブルースからエッセンスを吸収してミクスチャーしてきたロックだったが、個々人の器楽テクニックが深められることでより高度な表現が実現していった。それにつれ、音楽性もジャズやクラシック、さらに今で言うワールド・ミュージック的なものなど、他要素を複雑に取り込んで表現領域を広げ、研ぎ澄まされていった。そうしたクリエイティヴィティが互いを刺激し合っていたのだ。

それはロックだけじゃない。ブラック・ミュージックではスティーヴィー・ワンダーが『トーキング・ブック』に続き『インナーヴィジョンズ』を、カーティス・メイフィールドが『バック・トゥ・ザ・ワールド』を、ダニー・ハサウェイが『愛と自由を求めて(Extension Of A Man)』を発表するなど数々の名盤が出され、今で言うニュー・ソウルの扉を開けていったし、スライ&ザ・ファミリー・ストーンが『フレッシュ』で、自ら切り開いた道をクールなファンクネスへと進めていくなど、各所で豊かな実りが生まれていたのだ。

ロック中心の聴き手だった自分自身の当時を思い出すと、特別に歴史的な瞬間とは思ってもいなかった。聴く手段が限られていたから財布と切実に相談しつつ頑張ってはいたものの(笑)、聴きたい枚数とのバランスは完全に壊れていた。だが、そんななかからチョイスした作品たちには深い感銘を受けたり、圧倒されたりしていた。

アーティスト/バンドの側も、位相は違えど似た感覚は持っていたはずだ。ポップスやロックンロール、カントリー&ウェスタン、フォークをミックスし、ビートルズやボブ・ディランを先頭にして60年代に始まった新しいポピュラー・ミュージックの流れ。それは、サブカルチャーやサイケデリック文化と並走して"ロック"という新しい高みに到達した。その流れを先導してきたポール・マッカートニーをはじめとす

CamScannerでスキャン

るビートルたちにも、新しい動きに対する特別な思いがあったに違いない。

そしてもう一つ見逃せない点が、表現の主戦場が3分間のシングル盤から、LP片面、または両面を費やしたフィールドへと拡がったこと。音楽性の自由度が増すと同時に、それにふさわしい楽曲の構成力、バンドであればそのアンサンブルの必然性が問われることにもなった。平たく言えば、許容量にふさわしい才能と、テクニックが求められていくわけだ。さまざまな面で時代をリードしてきたポールのような人が、たとえサウンドや求める音楽性の違いはあったにせよ、そういう前向きな状況に燃えないわけがない。しかも、ビートルズを抜けてなおソロではなくバンドという形に固執した彼にとって、挑戦のテーマとしてこれ以上のものはなかったといえる。だが、ポールには大きな壁もあった。

ビートルズ解散と各メンバーの活躍

もちろん、ビートルズ問題だ。タイトル曲「バンド・オン・ザ・ラン」がビートル ズ時代から得意としたメドレー風であった り、「ビカソの遺言」で「ジェット」のコ

John Lennon
"Mind Games"
Apple[UK]PCS7165[1973]
LP)

ビートルズ作品を連想させることからも、そこを見ておくことは重要なポイントだ。

70年4月10日『デイリー・ミラー』での"ポール・マッカートニー、ビートルズ脱退"の報を皮切りにビートルズ解散は具体化。同年12月31日、ポールはロンドン高等裁判所にビートルズの解散とアップルの共同経営の解消を求める訴えを起こす。これは当時、アレン・クライン（アブコ）がアップルを支配していたことを背景とし"アップルがビートルズの収入を管理する"という契約の無効化を目指したものだった。翌71年4月に"アレン側はビートルズの財政を管理できない"との判決が下されるが、メンバー全員が判決の確認書にサインしたのは3年後の74年末だった。75年1月9日、ビートルズは法律上に正式な解散となる。

こうした一連の法的なゴタゴタにポールのような人はうんざりだったろうし、当初からアレンに対して懐疑的だった彼にとり、いろいろと複雑な思いが募るばかりであったに違いない。

『バンド・オン・ザ・ラン』が制作された73年後半当時、他のファブ・フォーはどんな状況だったかというと、ジョンは『サムタイム・イン・ニューヨーク・シティ』（72年）に続くアルバム『マインド・ゲームス』のレコーディングを夏に終えた頃。『サムタイム…』はソロ作中もっとも政治色が強く、またライヴも収められた意欲的な作品だった。だが、商業的にも評価的にも成果はもう一つで、ヴィザ問題の裁判騒ぎや平和運動に対するFBIの監視など心労が重なる。『マインド・ゲームス』の中には「あいすません（Aisumasen△I'm sorry▽）」と題したヨーコへの謝罪を歌った曲が収められているが、彼女との間にも亀裂が生じるようになってレコーディング後に別居という事態となる。その後、約18か月にわたる別居、いわゆる"ロスト・ウィークエンド"というソロ・ジョンにとって一番厳しい時代が始まるのだった。

真逆に絶好調だったのが、ビートルズの枠がなくなったことでやりたいことのすべ

CamScannerでスキャン

ナを詰め込んだアルバム『オール・シングス・マスト・パス』を発表、3枚組のボリュームながら全米／全英No.1という成果を挙げたジョージ・ハリスンだ。

ジョージは、そのシタールの師であるラヴィ・シャンカールから、バングラデシュ独立に伴う内戦で1000万人もの難民、餓死者が出ている状況を聞く。彼はそれに応え、チャリティ・ライヴを71年8月、ニューヨークで開催した。また、12月には『バングラデシュ・コンサート』としてライヴ・アルバムのリリースとフィルムの上映を実現した。

ジョージの呼びかけに応えて、コンサートにはボブ・ディラン、エリック・クラプトン、レオン・ラッセル、ビリー・プレストン、バッドフィンガー、そしてリンゴ・スターらが出演した。そうした活動を通じて、ジョージは静かなるビートル＝グループの後方に位置する人というイメージから抜け出し、積極的に前面に出て活動を拡げていく。そうした中で作られたのが『リヴィング・イン・ザ・マテリアル・ワールド』だった。73年6月にリリースされたこのアルバムは、ロニー・スペクターに提供した「トライ・サム・バイ・サム」のセルフカヴァーだけフィル・スペクターが加わっているものの、実質的に初のセルフプロデュース。リンゴを始め、クラウス・フォアマン、ニッキー・ホプキンス、ジム・ケルトナーら仲間たちが集まり作られた。ジョージらしい上下するメロディの、穏やかな「ギヴ・ミー・ラヴ」に始まるアルバムは『オール・シングス・マスト・パス』のような挑戦心に富んだものとは違ったが、着実に歩みを進める彼の姿を素直に反映したものとなった。

George Harrison
"Living In The Material World"
Apple[UK] PAS10006[1973]
[LP]

そんなジョージと頻繁に交流するようになったリンゴも、解散時に力を入れていた俳優業から重心を移して音楽活動へと向かっていた。70年に『センチメンタル・ジャーニー』『カントリー・アルバム』と2枚のソロ・アルバムを出してはいたものの、前者は「スターダスト」などスタンダード曲のカヴァー集、後者はリンゴのカントリー＆ウェスタン・ミュージック好きを反映してナッシュヴィルのミュージシャンたちと作った趣味的な一枚で、あまり話題にはならなかった。

そんなリンゴは映画「マイウェイ・マイラブ」（原題は"That'll Be The Day"）の撮影後、先述したようにジョージの『リヴィング・イン・ザ・マテリアル・ワールド』のレコーディングに参加。それをきっかけに制作意欲を燃やしたのが、73年11月にリリースされたサード・ソロ『リンゴ』だ。ジョージはもちろん、ジョン、ポールにも協力を依頼。個々の交流状況は多様にせよ、アルバムという大きな枠内でビートルズ再結集は実現した。グループ内でのリンゴの役割通りでもあった。

ニルソンやカーリー・サイモンなどでヒットを連発していたリチャード・ペリーのプロデュースで制作されたこのアルバムだが、華やかなスポットライトを浴びるステージ上に天使とともに佇み、それを仲間たちが客席から声援するというジャケットがいかにもリンゴらしい。内容的にも、これまで彼がリリースしたソロ中最高作で、ジョンの提供した「アイム・ザ・グレーテス

ト」に始まり、ジョージと一緒に曲を書き全米1位となった「想い出のフォトグラフ」、ポールとリンダの手による「シックス・オクロック」、ジョージがビートルズ時代の友人／ロード・マネージャーだったマル・エヴァンスと書いた「ユー・アンド・ミー」など、とにかくファブ・フォー色が色濃く流れている。このアルバムは、各国でチャート1位獲得のヒットとなった。

アレン・クラインを軸とした嫌悪が募るばかりの裁判問題とは別に、かつてのバンドメイトとの距離感は違ってきていた。そして、他の3人がそれぞれの方向性の中で手応えを得ていた時期だけに、ポールとしても、より大きな成果を求める気持ちが強まっていたに違いない。

時代の複雑な動きが刻み込まれた作品

障害があったり、逆境であるほど奮い立つのがポールならでは。ビートルズの仲間たちが興味の赴くままにソロ活動を展開するなか、バンドという形態にこだわる彼が〝ウイングスとしてのセカンド『レッド・ロード・スピードウェイ』をもう一段高め、深めたアルバムを〟と考えたのも当然だろう。そのための新しい試みを考えられたのが、ナイジェリア、ラゴスでのレコーディングだった。なぜラゴス？という疑問に正解は出ていない。ポールがEMIにレコーディング可能な場所を照会した中にあったというし、同行したエンジニア、ジェフ・エメリックの証言だと〝たぶんポールは単に、どこかエキゾティックな場所、陽のよく照るあたたかな場所でレコーディングしたかっただけだと思う〟とのこと。

しかし、そうだったろうか。それだけならもっと手軽な場所はいくらでもあるはずで、深い思いがあった気がしてならない。ジョージのインドへの傾倒・カルカッタのスタジオでのレコーディング経験や、ヨーコを通じて深まるジョンの日本文化への向き合い方などを見ていて、どこか潜在的に、異カルチャーの要素を取り入れる時代の必然性を感じていたのではないか。

ボブ・マーリー、ピーター・トッシュなどからなるウェイラーズがアイランドと契約し、メジャー・デビュー盤『キャッチ・ア・ファイア』を出したのが73年4月。前年にはジミー・クリフが主演した映画『ハーダー・ゼイ・カム』が公開されるなど、在英ジャマイカンたちに愛聴されたスカ、ロックステディ（レゲエ）が、よりポピュラーなものとして扱われる流れも起きていた。

The Wailers
"Catch A Fire"
Island[UK] ILPS9241[1973]
(LP)

「オブ・ラ・ディ、オブ・ラ・ダ」でいち早くスカとカリプソをミックスさせたような世界を聞かせたポールにとり、もちろん身近なことだったろう。

ジャズでも、南アフリカ出身のダラー・ブランド（現アブドゥーラ・イブラヒム）が、『アフリカン・ピアノ』（69年）はじめアフリカをキーワードとしたアルバムをリリースする。ワールド・ミュージックという呼び方はなかったが、より広い視野に立ち、音楽を作り出そうとする動きは確実にあったのだ。

当時のイギリス・シーンに戻ってみよう。僕がロックの中でアフリカン・ミュージックを最初に意識したのはオシビサだった。ファースト・アルバム『オシビサ』は、ブロークンものでおなじみだったロジャー・デ

CamScannerでスキャン

Osibisa
"Osibisa"
MCA[UK] MDKS8001[1971]
(LP)

ィーンのイラストがジャケットだったし、アフロ・ロックという打ち出しが新鮮で、72年には日本公演まであった（未見ながら、資料によるとあまり客入りは芳しくなかったらしい）。続いて、サックスのドゥドゥ・プクワナなどが結成したアサガイもヴァーティゴからデビューしたり、大好きだったスティーヴ・ウィンウッドやデイヴ・メイスンなどが結成したトラフィックには、ガーナ生まれのリーバップ・クワク・バーが正式メンバーとして『ウェルカム・トゥ・ザ・キャンティーン』『ザ・ロウ・スパーク・オブ・ハイヒールド・ボーイズ』といったアルバムに74年の解散まで参加する。ロック・サークルで音楽性が拡大していっているのは明らかだったし、こうした動きにアーティストが注目するのは当然だろう。

ポールの場合、大きかったのはデニー・レインの存在だ。デニーは元クリームのジンジャー・ベイカーが作ったグループ、エア・フォースに加入。レミ・カバカ（ステイーヴ・ウィンウッドなどと共演していた）も参加したライヴ盤『ジンジャー・ベイカーズ・エア・フォース』（70年）の「マン・オブ・コンスタント・ソロウ」ではヴォーカルを受け持つなど、重要なパートを担っている。そして、ジンジャーは71年11月にナイジェリア、ラゴスに出向き、73年1月にバタコタ（ARC）・スタジオを作り上げている。その間、フェラ・クティが加わったソロ・アルバム『ストラタヴァリアス』を出してライヴにも参加し合うなど、着実に現地に足がかりを築いていく。

こうしたジンジャーの活動が、ポールを大きく後押ししたことは間違いない。というか、そのネットワークがなかったらおそらくやろうと思わなかったはずで、こうした多面的な要因のなかでラゴス行きへの道は作り上げられていったのだ。

もちろん、ビートルズの中でもっとも早く現代音楽やサイケデリックに興味を示したと本人が語るような旺盛な好奇心・冒険心も刺激されていたのだろう。アフリカン・ミュージックの吸収や新しいリズムとの出会いへに向けて、具体性を持つところまでいかなくとも〝まずは行動を〟というのは、事前の告知なしにライヴの地を訪れるようなウィングスでの姿と重なる。少なくとも、単なる思いつきというよりは音楽的な好奇心がポールを突き動かしたのではないだろうかと思える。

現地での苦労や大騒ぎはよく語られている通りだ。8トラック・レコーダーしかないスタジオでの顛末など、ジェフ・エメリックがいなかったらと考えると恐ろしい。フェラ・クティとの一触即発の関係も、一歩間違えば、互いに取り返しのつかないトラブルとなりかねなかった。そんな緊張感が『バンド・オン・ザ・ラン』のどこかに漂っている。ポールならではの美しいメロディがあり、短い曲をつなげてコンパクトながらコンセプチュアルなものとして聴かせる手法があり、どれも過剰になることなくみごとにまとめられてはいてもだ。

その背景には、同時代における無限の可能性を持った音楽的拡がりや、互いの交流が進むような流れがある。加えて、ビートルズのクロージング風景への思い。それらが幾重にも重なり、一枚のアルバムながら複雑な魅力を孕んだものにしているのだ。

CamScannerでスキャン

対談

直枝政広（カーネーション）×ポニーのヒサミツ

普遍的な魅力とウィングスのバンドとしての特異性を詰め込んだアルバムを語る

構成＝松永良平

ポール・マッカートニー&ウイングスの『バンド・オン・ザ・ラン』50周年のリイシューということで、往年のアンダーダブド・ミックス、音源を収録した、そしてハイレゾの配信もスタートなど各界の話題をさらっています。そこでこの作品について、カーネーションの直枝政広、ポール・マッカートニーの熱心なファンでもあるシンガーソングライター、ポニーのヒサミツ2人に、今回たっぷり語ってもらった。

元ビートルズが活躍した73年

――今回は『バンド・オン・ザ・ラン』50周年のリイシューということで、お二人に早速音源を聴いていただきました。以前、未発表デモなどのボーナス・トラック多数、さらに「ワン・ハンド・クラッピング」（ウイングスのTVドキュメンタリー）などの映像も入って一冊の本みたいな仕様にもなっていたデラックス・エディションが出たのが2010年です。今回はかなりシンプル。CD2枚組、輸入盤ではLPと2枚組LPで出ます。

直枝 あれ、LP2枚組も出るんだ？ 僕は焦って1枚ものを予約したかも……。じゃ、やっぱり2枚組にしよう（笑）。

――今回はヴォリュームというより、オリジナル・ヴァージョン10曲（US盤に準拠）と、アンダーダブド。[illegible]、オーケストラなどがオーヴァーダブされる以前の9曲のみ。これは、いわゆるCDボックスの時代ではもうなくなって、アナログで再入手しやすくやってるのが最良のリイシューなのかなと思いました。

ポニー （ストリーミングで試聴したディスク1の音に関しては）あまり前回との違いがわからなかったです。

直枝 僕もよくわからなかったですね。音で言えば、前回のデラックス・エディションのときに封入されていたハイレゾが究極にすごいんですよ。24ビット/96kHzで聴くとめちゃいいですよ。それにこのアルバムは、もともと低域がちゃんと入ってる。最初から音が良いというか、独特の良さがあるので、聴いてて楽しいですよ。特にドラムとベースね。

――僕ら（ポニー、松永）はリアル・タイムの世代ではないんですけど、直枝さんはばっちり直撃の世代ですよね。

直枝 そう（笑）。（リリース当時は）小学6年ですから。

――73年は、ちょうどビートルズのベスト盤の『赤盤』『青盤』が前半に。ジョン・レノンの『マインド・ゲームス』が11月。ひと月くらい後に『バンド・オン・ザ・ラン』が出ます。

直枝 元ビートルズがめっちゃいいアルバムを出してくれてたんだね、あの頃。

――ジョージ・ハリスンも6月に『リヴィ

ング・イン・ザ・マテリアル・ワールド』を出してます。

直枝　もう最高の年じゃないですか。

――そんな中で『バンド・オン・ザ・ラン』が出た、まさにその瞬間のことを覚えてらっしゃいますか。

直枝　当時、太い帯つきの日本盤を買ってます。レコード屋に走っていって予約したと思うんです。聴いたらもう、のっけから文句なしですよ。本当にいいアルバム。音がいい。音がいいっていうのは、何かと比較してどこがいいとかじゃなく、単純に聴きやすいんです。エコーで無理やり飾っていない感じがいいなあと思いました。

©1973 MPL Communications Ltd / Photographer: Clive Arrowsmith

――それと、やっぱり「バンド・オン・ザ・ラン」という冒頭の曲のすごさ。

直枝　そうですね。この曲のインパクトはすごかったですね。あの頭のギター・フレーズ一発でやられた。うっとりですよ。このまま終わるのかなと思ってたら、めくるめく展開。スペクタクルですよね。ものすごくヒットしたし、ラジオでもずっとかかりまくってました。

――でも、ここで〝バンド・オン・ザ・ラン〟という打ち出しをしたのは印象的ですよね。実際は、ウィングスはむしろ逆境だった。レコーディング前にヘンリー・マッカロクとケンカ別れしたり、デニー・サイウェルがアフリカに行きたくなかったとかゴネて脱退。むしろバンドはバラバラだった。

ボニー　なのに、ポールは、できるものは全部自分がやるからって（笑）。現地で強盗にもあったっていう話ですよね。

――ラジカセごとデモ・テープ、歌詞のメモを盗まれたっていう、スーパースターなのにウソみたいなトラブルですよね。今回の50周年エディションの最大の売りである、〝アンダーダブド・ミックス〟は、その紛失したミックスとは関係ないんですが、とにかく興味深い音源でした。資料にも「今回初めて発見された」と書いてあります。

トニー・ヴィスコンティ（オーケストレイションを担当）にオーヴァーダブを依頼する以前に、ジェフ・エメリックが仮ミックスをしていたものであると…。曲順もその出てきたテープに入っていた順番を踏襲しているそうです。

直枝　ポールって、だいたい最後にベースを入れるでしょ。縦ぎはぎの曲が多いから。だから、この音源はベーシックの完成形という感じですよね。もっと素っ裸な部分もある音源かなと思ってんですけど。でも「ジェット」のイントロのしょぼい感じとか、逆に最高にいいよね（笑）。

ボニー　ちょっとナイジェリアで録った空気感というか、陽気な感じも出ていて。

――もともと「ジェット」って隠し味的に

CamScannerでスキャン

レゲエぽいフィールがあることが、今回出てきた音源だとよくわかりますね。

ポニー　最終的なスタジオ・ヴァージョンだと、その要素は潰されている感じですが、今回の〝アンダーダブド〟だと、カラ元気というか、いろんなかけ声も聞こえて、バンドの危機的状況の中で必死に盛り上げようとしてたのかなと思いました。

――そして、やっぱり「バンド・オン・ザ・ラン」という曲は、興味深く聴きました。

ポニー　この仮ミックスの時点で組曲としてはもうきちんと完成されてたんですね。あとは、オーケストラがないところのショボさが楽しいなと思いました（笑）。あの転調の部分とかやっぱり…。

直枝　あそこでテープにハサミを入れるのは緊張しただろうな（笑）。本当にバラバラのアイデアなんですね。メドレーにしようと思ってテンポを調整して、いろんなアイデアを試してたんですかね。

――一応、するっと通して演奏できるような感じに最終的にはなっているけど…。

直枝　（ポールにとって）ベースが入ったっていうことは構成は決まったということですからね。ベースがない状態を聴いたらテープの継ぎはぎがもっと明解にわかる感じになってるでしょう。ごまかすのがうまいんだよ（笑）。

ポニー　「ノー・ワーズ」は〝最後はなんでこんな場所でフェイド・アウトしちゃうんだろう？〟って、ずっと思ってて、その謎が〝アンダーダブド〟版でわかるんじゃないかと思ってたんですけど、やっぱり同じ場所で切れてました。

――そこは最初から決まってた。

直枝　僕は「ノー・ワーズ」好きですね。これはプロの世界だよ。デニー・レインとポールの共作で。完璧だなと思います。

3人しかいないウィングス

――〝アンダーダブド・ミックス〟の曲順には何か意図があったと思いますか。

ポニー　僕はあまり感じなかったです。

直枝　作業上、たまたまだろうなという。

――不思議な曲順ですもんね。だけどあんまり意識せずに聴いていたら、要するにポストプロダクションが少ない順なのかなとも思える。「レット・ミー・ロール・イット」なんて、ほぼ何も変わってないというか。ヴォーカルは仮なんでしょうけど。

直枝　ヴォーカルはちょっと違ってましたね。

ポニー　逆に〝アンダーダブド〟では変なギターが増えてたり。

――「レット・ミー・ロール・イット」は、〝アンダーダブド〟版を聴くと、あの印象的なギターの音がやたら大きくないですか。

直枝　すごくデカくて最高なんだ。ビートルズ共通の手癖だよね。ジョンもああいうリフを弾くときがある。あれは気に入ってるポイントだろうし、最後に入れたのかも。仮ミックスのときには、最新のテイクを大きくしがちだから。

ポニー　近年のライヴだと、この曲はポールがドヤ顔でギターを弾いてますよね（笑）。それを見ても自分で気に入ってるんだろうなと。

直枝　「レット・ミー・ロール・イット」ってシングルになってないんだっけ？

――「ジェット」のB面ですね。映画『リ

『リコリス・ピザ～オリジナル・サウンドトラック』
ユニバーサル UICU1342［2022］
ポール・トーマス・アンダーソン監督、21年の映画のサントラ。「レット・ミー・ロール・イット」を収録

CamScannerでスキャン

コリス・ビザ』(21年)を見てあまりにもいいからシングルで買い直したんです(笑)。

直枝 『リコリス・ビザ』ね。あの映画でのこの曲の使い方はドラッギーでエロかったね。

ポニー あと、〝アングーグブド〟版では「マムーニア」も結構そのままですよね。

直枝 あと「1985年」はまだインスト状態だったけど、あのカット・インのアイデアはすでにあって、ほんとすごいよね。

――今三十代半ばのポニーさんは、『バンド・オン・ザ・ラン』はどういうタイミングで聴きました?

ポニー いつ聴いたかはうろ覚えなんですけど、最初に聴いたときは意外と地味でけっこう変なアルバムだなという印象でした。最初『ウィングスパン』(01年のベスト盤)で、「バンド・オン・ザ・ラン」を単体で聴いて〝なんてポップでいい曲なんだ〟って。当時からアルバム『バンド・オン・ザ・ラン』はポールの史上最高の傑作みたいに言われてましたし、ポップなアルバムを期待してその後、聴いてみたところ「プルーバード」あたりから〝あれ? ちょっと変になってきたぞ〟と(笑)。でも、何度か通して聴いているうちに〝ちょっと変なところも含めてやっぱり最高、ポールそのものじゃん〟となり、どんどん好きになっていったという感じですね。

――『ウィングスパン』が出たときの世評を覚えてますけど、〝ウィングスを好きでいいんだよ〟みたいに解放してあげるムードでしたね。それくらいウィングスという存在が、ある時期以降はよくわからなくなっていたのかもしれないです。そういう意味で、3人しかいない時期だけど『バンド・オン・ザ・ラン』って、ウィングスって何だったのかを考えるには最適なアルバムですよね。

直枝 この3人の声質はすごく相性がいいじゃないですか。『ワイルド・ライフ』はまだそうでもなくてね。リンダのキーに寄せすぎたのか、ポールの歌が苦しそうだったけど、だんだんなじんできたんですよね。

ポニー ポールのソロっぽくはあるんですけど、絶対、リンダとデニー・レインの存在が必要だった感じもすごくして。そこが、不思議な質感になっていますよね。

直枝 そうね。特にデニー・レインの役目ってどういう感じだと思いますか。

ポニー どれがデニー・レインの演奏なのかとかは聴いても正直よくわからないですけど(笑)。ポールは自分で全部できちゃう人だけど、ウィングスとしては、そばにいてついてきてくれる人がリンダ以外にも必要だったのかなと思います。そこに一番うってつけの人が、ポールの言うことを素直に聞いて、ポールの思いのままにやってくれるデニー・レインだったのかなと。そうじゃない人は去っていったし。

直枝 デニー・レインもあんまり難しいことをしないから。

ポニー 全然しないですね。このアルバムもデニー・レインのリズム・ギターとポールのドラムから録ったという説もあり、そういうとき注文しやすかったのかなとか。

直枝 そういう相棒がバンドにいるといいんだろうね。

ポニー そう思います。ポールが全部ひとりでやるよりも。

――そうですよね。結局、ウィングスってどういうバンドだったかと考えると、ポールとリンダとデニー・レインという三要素の構成としか言えない。巨大な才能と献身的な奥さんと音楽面で相槌を打ちながら助けてくれる人。でも、バンドとしてのバランスは成り立っている。そういう意味では純粋ですよね。

CamScannerでスキャン

直枝　リンダがモーグ（シンセサイザー）を弾くけれども、難しいことはやらないんだよね（笑）。コードも難しくないものだし、ポールは優しいよね。

ポニー　それも考えて作られてるんですよね。リンダが無理なく弾けるようにって。ポールが自分で弾けばもっと難しいことができるんだろうけど、リンダの音も入れたかったし目立たせたかったんでしょうね。

直枝　だからよけい〝アングーグッド〟で聴けるモーグが良くて。はまってるんだよね。

――それはある意味では音楽的制約なんですけど、別の面から見ると「レット・ミー・ロール・イット」みたいなスケールの大きな曲を生んだ一因とも言えませんか。ジョンは大きな曲を作ってくるじゃないですか。「マインド・ゲームス」にしても「イマジン」にしても。ポールも何かそういう大きなモニュメントみたいなものがほしかったでしょう。「マイ・ラヴ」はそういう意味では甘い方のモニュメントですけど。このアルバムではそういう意味での大きさが達成されてますよね。しかもポールらしい音楽で。

直枝　素晴らしい（笑）。そうだよね。

――ポール自身はアイデア過剰な人だから、ほかのやり方もあるし、別のコードも使いたいと思っていたふしもあるかもしれないけど、これはウィングスの作品だから…。

直枝　彼らに文句は言いたくないし（笑）。

ポニー　これ以上メンバーを失いたくないというのもあったかも。

直枝　映像で見てると、リンダはリンダで気が強そうだしね。

トラブルを乗り越え生まれた作品

ポニー　そういう意味で、僕の中ではポールはちょっと元気がないときの方が、いいアルバムを作る気がしていて。

直枝　どういうこと？（笑）。

ポニー　なんというか自信満々のときの方が若干、僕は外しているような気がしてて。『バンド・オン・ザ・ラン』もメンバーの脱退とかいろいろトラブルがあり、そういう状況の方がいいアルバムができる（笑）。ポールがちょっと自信をなくしているときの方がシンプルなことをやってくれるというか、こちらがやってほしいことを素直にやってくれるような気がしてるんです。今回、あらためて聴いたら、このアルバムもそのひとつだなと思いました。

直枝　なるほど。確かにね。

ポニー　このアルバムは、ポールの頭の中にあるものが素直に構築できたからこそ名作になったのかもしれないですね。

――ヘンリー・マッカロクがいたら、たぶんこうなってない。

ポニー　力の強い人が一人入るだけでもだいぶ変わっちゃいそうですから。ポールも気を遣いそうだし。

――それはあったんじゃないですか。やっぱり元ビートルズという圧を見せないように、ちょっと自分を抑えてた部分はあって、それと自分のバンドでやりたいこととの塩梅が一番うまくいった。この後は『ヴィーナス・アンド・マーズ』で、大々的な全米ツアーを控えてるし、もう全然バンドとしてのモードが変わっちゃう。

直枝　73年って、僕はトッド・ラングレンの〝A Wizard A True Star〟のショックがあった年でもあるんです。そこへんも分かれ目でしたね。トッドもひとりでやれるけど、あんなに作り込んで、かつわかりやすさもある。シンセサイザーの使い方ひとつとっても随分アプローチが違うなあと。

――73年に、直枝さんの耳においては『バンド・オン・ザ・ラン』と〝A Wizard A True Star〟が並び立っているというのは

CamScannerでスキャン

[illegible]

直杉　ただ、「レッド・ローズ・スピードウェイ」と同じアップルで、両時代的な空気みたいなものがあって、時代が映ってる感じがして。

――そういう意味では、シングル曲を入れたりとか、今回のアルバムは曲ごとの完成度がかなり高い。

ポニー　曲ごとに完成度が高いし、時代を感じさせない（笑）。

直杉　ただ、次の作品はアルバムとしての統一感がもっと出てきて、「ヴィーナス・アンド・マース」のような壮大な世界から少し世界が広がった感じがして。ジョンの「ロックンロール」はOKだけど、ポールは「バンド・オン・ザ・ラン」まではなんでも、そういう意味で言うと、結局何か物聞くんじゃないけど（笑）。商業ロックっぽいイメージがちょっと抵抗感があったんですよね。だけど、その後のシングル盤は続けて聴いてました。いい曲いっぱいあるから。ただ、アルバムはね、他のメンバーが曲を書き始めるし……。

――そういう意味でも、バンドであってバンドでない、だけどバンドなんだよと宣言しているし、「バンド・オン・ザ・ラン」はギリギリの瞬間です。

ポニー　「ジェット」とかは、今はライヴの定番になってますけど、当時としてはこのアルバムはライヴのことなんか考えてなさそうな曲ばかりですよね。そこがまた、いいのかもしれないですね。

直杉　レコーディングは自分で最初にドラムを叩き始めたからね。まずは曲、ライヴのことまで考える余裕はない（笑）。

ポニー　今作もポールのドラム、最高ですよね。歌うような人のドラムだなっていう感じがする。

――カナダのラングレー・スクール・ミュージック・プロジェクトという、70年代にカナダのヒッピーあがりの先生たちが子供に歌わせていた作品で、「バンド・オン・ザ・ラン」をやっているんですけど、すごくいいんですよ。子供たちがこの曲が好きだったということがわかる。

ポニー　楽しそうですよね。

――そういう、子供に好かれるようなところはビートルズ時代から続く色ではありますけど、このアルバムにもかなり濃厚な気がします。子供というか少年少女向け。

ポニー　「ミセス・ヴァンデビルト」とかも、そうかもしれないですし、「マムーア」もちょっと子守歌っぽい。確かに子供も聴きやすいアルバムかも。

――バンドが逃げ出す、とかいうコンセプトも荒唐無稽なコメディみたいだし、SF映画っぽいところもあるじゃないですか。逃げ出すという行為が単純にドラマ仕立てで楽しい、みたいな。

ポニー　若干、そういう役を演じているみたいなニュアンスもありそうですよね。

――70年代のNHKの少年ドラマ・シリーズとかも同じ時期だったりして、そういう時代を生きていた多感な少年少女の感受性とかにこのときのポールはうまく合致してたんじゃないかという気がします。ジョンだとちょっと大人じゃないですか。大人の鑑賞に耐えうるもの、というより、ずっと自分たちのそばにある音楽を作るぞっていうことを、やろうとしている人なんだなとは思いますね。

直杉　「レット・ミー・ロール・イット」はその中でもちょっとやばい歌詞だから、これはちょっと子供には聴かせられないけどね。娘たちには"あっち行って"って言って演奏してたと思うよ（笑）。

［1月23日　ミュージック・マガジンで］

2024年に聴く『バンド・オン・ザ・ラン』

グローバリゼーションと〝脱自然体〟の視点から名盤を捉えなおす

文＝柴崎祐二

編集部から提示された本稿のお題は〝『バンド・オン・ザ・ラン』を2024年の視点から評価せよ〟というものだ。しかし、いきなりちゃぶ台をひっくり返すようだが、近年、『バンド・オン・ザ・ラン』はビートルズ後のポール・マッカートニーの諸作の中で、他を圧する人気作とはいいがたいのが実情ではないか。ポールおよびウィングスの最高傑作としてリリース当初から高い評価を獲得し、かつては〝ロック名盤○○選〟的な企画の常連であったはずなのに、今世紀に入って以来、徐々にそうした絶対的な地位から退いてきたように思える。

たとえば、米『ローリング・ストーン』の〝史上もっとも偉大なアルバム500枚〟という企画でも、それが最長されていた当初（03年）は本作もしっかりランクインしていたのにも関わらず、20年の改訂版からはあえなく選外となっている。あるいは、オルタナティヴ・ロック以降のポップ・ミュージック批評を牽引してきた米『ピッチフォーク』も、それ以前のソロ作、例えば『ラム』や『マッカートニー』の高評価レヴューを掲載してきたのとは対象的に、『バンド・オン・ザ・ラン』（や他のウィングス作品）については丸々スルーしてしまっている。もっと直接的な例でいえば、『ミュージック・マガジン』08年3月号の特集〝消えた（？）名盤100〔ロック編〕〟では、かつては名盤として語られていたけれどそこから転落してしまった作品の一枚として、本作が掲載されている。加えて、他でもない本誌22年6月号特集〝70年代ロック・アルバム200〟でも、14位に入った『ラム』に対して『バンド・オン・ザ・ラン』は、63位というやや微妙（？）な順位に甘んじていた。

こうした例は枚挙に暇がないが、はっきり指摘できるのは、ある時期以降、主に非リアルタイム世代のリスナーの間で、〝ビートルズ以後のポールといえばまずは『ラム』を聴くべし〟というコンセンサスが共有されてきたということだ。これは、アーティストの〝個〟へフォーカスした初期ソロ作の質感が、DTM／宅録全盛時代たる現代において、その先駆例として愛でられているという事態を表わしていると同時に、一人のシンガー・ソングライターとしての素の魅力が、インディ・ロック以降の価値観にうまく合致した結果といえるだろう。

かたや『バンド・オン・ザ・ラン』はといえば…。同作のサウンドは（少なくともそれまでの作品に比べると）素朴というよりは豪奢で、表題曲に顕著なように、ときにロック・オペラ的な壮大さも目立つ。コンセプト・アルバム風の統一感も、容易には聞き流させてくれないハイ・カロリーな印象に繋がっている。なにかにつけて〝自

CamScannerでスキャン

Paul & Linda McCartney
"Ram"
Apple[UK]PAS10003[1971]
(LP)

然体。が好まれる趨勢のなかにあって、圧倒的な密度とスケール感を持つ本作がややトゥー・マッチなものとして受け止められているのだとしても不思議はないし、私個人としても長らくそういう認識を持っていたのが正直なところである。

『リコリス・ピザ』が思い出させたもの

しかし、一昨年に一本の映画と出会ったのをきっかけに、私は本作の価値を今一度考え直すようになった。その映画とは、アメリカ映画界随一の鬼才、ポール・トーマス・アンダーソン監督による日下の最新作『リコリス・ピザ』だ。70年代前半のロスアンゼルスを舞台に、カメラ・アシスタントのアラナ（ダニエル・ハイム）とビジネスへの野心を燃やす高校生、ゲイリー（クーパー・ホフマン）によるすれ違う恋愛模様を描く同作で、『バンド・オン・ザ・ラン』収録の「レット・ミー・ロール・イット」がごく印象的な形で使われていたのだ。この曲が流れるロマンチックなシーンは、必ずしも現代のコアな音楽ファンから批評的な価値を置かれていないような曲をあえて使用することで、観客をハッとさせてきたアンダーソン監督一流の手法が冴えわたった名場面といえる。年の離れた一見、いびつな二人による不器用な恋を描写するにあたり、「レット・ミー・ロール・イット」の鋭角的なギター・サウンドや、その激しいエモーションがみごと効果を発揮していた。どうやら私は、そういうサウンドだけが発散しうるエモーションがあることを、あるいはまた、奥ゆかしさや静けさとは無縁のロック曲だけが体験させてくれる感動があることを、長らく忘れてしまっていたらしい。『リコリス・ピザ』は、そのことを鮮やかに思い出させてくれたのだった。

ふんわりした日常に寄り添う飾らなさとは反対にある、ふてぶてしく、シアトリカルで、ゴツゴツした喧騒。ポールの長いキャリアにおいて『マッカートニー』や『ラム』が前者を請け負っているのだとしたら、『バンド・オン・ザ・ラン』は、どちらかといえば後者を代表するものだろう。『リコリス・ピザ』劇中の「レット・ミー・ロール・イット」にいたく感動したのは、おそらく私自身が心のどこかで〝自然体〟や〝飾らなさ〟に対し、それが思いのほか長い期間にわたって時代のムードを決定づけてきたがゆえに、ある種の膨満感を抱いていたことがあるのだろう。もっといえば、そういう時代性のなかで〝等身大の自分〟を希求する、その仕草に隠されたナルシシズムに対して知らず知らず疑念を抱いていたからなのかもしれない。ロックたるもの、シアトリカルかつトゥー・マッチで何が悪いのか。少なくとも、ポール・マッカートニーという人の作家性を考えたとき、それらを脇において彼の音楽を味わおうとするなんていかにもナンセンスではないか。

そうした気づきを経たうえで『バンド・オン・ザ・ラン』に再び触れると、本作が、今こそ語るべきトピックに満ちているのに気づく。まず指摘したいのが、同時代の音楽シーンとの共鳴だ。表題曲や「1985年」の入り組んだ曲構成には、ザ・フーらのロック・オペラや、当時、一世を風靡していたピンク・フロイド『狂気』などプログレッシヴ・ロックへのライヴァル意識も

CamScannerでスキャン

グラム・ロックとワールド・ミュージック

より重要に思われるのは、グラム・ロックへの共鳴だ。しばしば時代の徒花として軽くあしらわれてしまいがちなグラム・ロックだが、功成り名遂げてロック界の頂点にあったボールは、それを単なる子供向け音楽として退けてしまう狭量な人物ではなかった。むしろ積極的に親しみ、特に、シーンの牽引役だったTレックスの音楽を大いに楽しんでいたのだという。グラム・ロックがその実、ロックンロール・リヴァイヴァルと密接な関係で発展したものだったことを考えれば、『ゲッド・バック』の発案者でもあったボールがそれに呼応するのは当然だったろう。この路線は、グリッター・ビートを採用した72年のシングル「ハイ・ハイ・ハイ」から顕著になり、『バンド・オン・ザ・ラン』前に発表された「愛しのヘレン」でも踏襲されていることから単なる気まぐれ以上のものだったはずだし、『バンド・オン・ザ・ラン』では「ジェット」や「ミセス・ヴァンデビルト」にグラム的な要素が注入されているのがわかる。

このグラム色をアレンジ面から下支えしたのが、Tレックスやデイヴィッド・ボウイとの仕事で知られるトニー・ヴィスコンティだ。ボールの依頼を受け、たった二日間でスコアを仕上げたという彼がいたからこそ、このアルバム特有のゴージャスなムードが完成されたのだった。表題曲や「ジェット」をはじめ、彼のオーケストレーションはときに過剰とすらいえるが、同時に、この時代ならではのシンフォニックな美意識と野太いキャンプ感覚を刻み込んでいる。

こうした派手で装飾的な質感は、先にも述べた通り、ここ20数年来の音楽シーンではあまり歓迎される類のものではなかったかもしれない。しかし昨今、長らく続いた〝自然体〟覇権の時代がいよいよ崩れ去りそうな気配があるなかで、にわかに再評価の対象として浮かび上がってこないとも限らない。そして実際、そういうムードが高まっているのも感じる。例えば、かねてよりビートルズなどの強い影響を指摘されてきたロック・バンド、ザ・レモン・ツイッグスのように、ロック・オペラ的な表現に積極的に挑む者たちもいるし、イタリアのロック・バンド、マネスキンのように、あからさまにグラム的な表現を追求するアーティストもいる。わかりやすく言えば、どうやら今、そういった〝ロックらしいきらびやかなロック〟が復権し、装飾性や劇的な要素が〝普段着のロック〟に取って代わりつつあるようなのだ。この事態は、かつてポップ・カルチャーの中で圧倒的な成功を勝ち取ったロックが、その後の様々な他

T.Rex
"The Slider"
EMI[UK]BLN8001[1972]
(LP)

The Lemon Twigs
"Go To School"
4AD[EU] 4AD0094CD
[2018] (CD)

CamScannerでスキャン

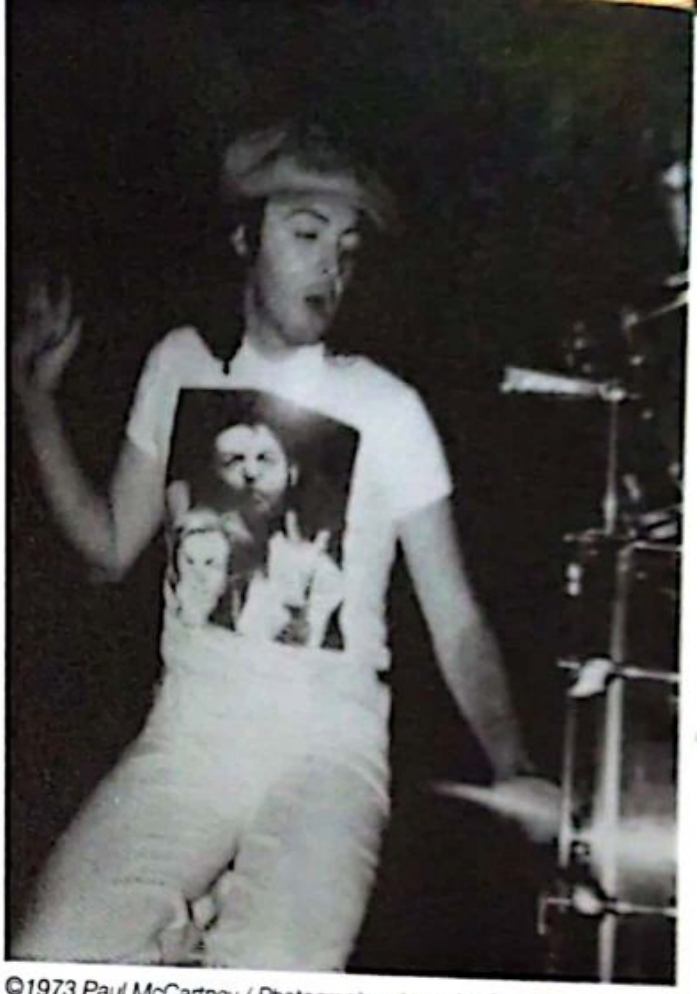
ジャンルの興隆によって相対化され尽くしたがゆえに、ある種の文化的記号として、明確に〝ロック的〟な意匠を纏いながら(一周して)逆説的に蘇っているということの表われなのかもしれない。そこではむしろ〝ありのまま〟よりも、いかにもロック的なペルソナや、いかにも大時代的で壮大なサウンドが珍重されることもあるだろう。そのような流れを受け、ポールのディスコグラフィのなかで再び『バンド・オン・ザ・ラン』の存在感が筆頭に躍り出ていく可能性は十分にある。

加えて、本作に聴ける〝非西洋的〟な要素と、そこに観察できる微妙な距離感も、現在の視点からぜひ再考してみるべき点だろう。よく知られている通り、本作のベーシック・トラックは、ナイジェリアのラゴスで録音された。ポール自身、かねてよりアフリカ音楽に惹かれていたというが、だからといって、現地のリズムや楽器、ミュージシャンを全面的に起用するという発想は持たなかった。あくまで新鮮な制作環境に身を起きたかったから、というのがラゴス行きの理由の定説になっている。これは、ある意味で彼の無頓着さを物語ってもいるだろうが、結果的に、後のワールド・ミュージックの時代に多くの西洋の白人アーティストがつまずくことになった〝文化の盗用〟の問題を回避することにも繋がった。ポールは、ラゴス滞在中にアフロビートの祖であるフェラ・クティのライヴを観ていたく感動したというが、反対にフェラは、ポールがアフリカの音楽を収奪しようとしているという危惧を抱き、そのことを公言しポールを弱らせた。ポールはスタジオへフェラを招き、現地の音楽を盗用するつもりは全くなく、あくまで自分自身の音楽を作っている旨を録音テープを実際に聴かせながら伝え、二人はぶじ和解したという(こうした経緯を経たがゆえに、本作が緊張感漲る傑作になりえたとも推察できる)。この一連のエピソードは、ポスト・コロニアリズムの思想を深く理解する土壌が未整備だった当時の西洋ロック界にとっては、比較的小さな挿話でしかなかったかもしれない。しかし、その後、ポール・サイモンらが踏んだ轍がいかに大きな論争を呼び起こしたか知っている後年の音楽ファンからすると、ポール・マッカートニーのフェラへの対応は、それがどれほどまで意図されたものだったかは置くとしても、結果的に大きな教訓を伝えているともいえる。

Fela Ransome-Kuti & The Africa '70
"Afrodisiac"
Regal Zonophone/EMI
[Nigeria] SLRZ1034[1973]
(LP)

一方で『バンド・オン・ザ・ラン』には、特に目立っているわけではないにせよ、非西洋的な要素もたしかに滲んでいる。例えば「ジェット」にはレゲエからの影響が観察できるし、モロッコ滞在の経験に触発されたという「マムーニア」からは、他でもないアフリカ由来の要素を嗅ぎ取ることができる。そういう意味で、『バンド・オン・ザ・ラン』は、ワールド・ミュージックの時代を部分的に先取りする作品だったともいえそうだ。加えて、一部の曲の響きに、西洋とアフリカの間に横たわる権力勾配の存在を反省的に読み取ることも可能だろう。音楽のグローバリゼーションが進行する只中にあって、西洋のポップ・ミュージックが非西洋のローカリティとどのように対峙したのかという問題意識に照らしてみても、本作は貴重なテキストたり得ている。

CamScannerでスキャン



©1973 Paul McCartney / Photographer: Linda McCartney

ナイジェリアへの〝脱走〟を振り返る

波乱に満ちたアフリカへの旅がもたらしたものとは

文＝藤本国彦

『バンド・オン・ザ・ラン』の50周年記念盤が、51年目に発売されることになった。何度も手を変え品を変えての発売になるので、『ロンドン・タウン』と『バック・トゥ・ジ・エッグ』の記念盤もお忘れなく、とつい言いたくなるところだが、今回の目玉は〝アンダーダブド・ミックス〟である。ジョン・レノンの後追いが好きなポールのこと、『ダブル・ファンタジー』のジョンのヴォーカルを強調した〝ストリップド・ダウン〟ヴァージョンを意識にしたのかなと少しだけ思った。

『ダブル・ファンタジー』がらみで、ついでにもう一言。広島のレコード店、ジスボーイの菅田泰治氏とメールでやりとりをしていた際に（ようやく）気がついたことがある。ジョンとヨーコ『ウェディング・アルバム』ボックス・セットの、LPが入っている中ジャケットの写真は再出発を宣言した『ダブル・ファンタジー』に繋がるイメージだったのかと。

以下、本題――。ビートルズ時代に、ライヴ活動に〝ゲット・バック〟できなかったポールの思い。それがウィングス結成の大きな原動力になった。とりわけ重要なのは、デビュー前のビートルズと同じく〝ドサ回り〟のライヴを、一般的にはあまり知られていないメンバーとともに行なったことだ。〝あなたたちはジョンとヨーコみたいになるのか〟と訊かれて〝いや、ジョンとヨーコがポールとリンダになるんだ〟と返したポールの反骨心。ジョンがこっちを向いてくれないなら、自分のバンドをビートルズ級にするしかない。

〝こだわりに縛われていたんだ。「自分

CamScannerでスキャン

の言い分を証明しなければいけない。ビートルズですべてが終わったわけじゃないんだ」って。〝過去の実績があると大変だよ。それに対する唯一の答えは、ビートルズ後は諦めるということだ。僕にはふたつの選択肢しかなかった。諦めるか続けるか。そして続けるという道を選んだ以上、止めることはできなかった〟。

ウィングス結成についてポールはこんなふうに告白しているが、バンドを結成し、もう一度最初からやり直したポールは偉いとジョンは後に語っていた。

ビートルズのデビュー・アルバム『プリーズ・プリーズ・ミー』と同じく、時間をかけずに仕上げた『ウィングス・ワイルド・ライフ』でアルバム・デビューしたウィングス。73年になると、セカンド・アルバム『レッド・ローズ・スピードウェイ』からの最初のシングル「マイ・ラヴ」と、007シリーズの映画主題歌として発表されたシングル「007死ぬのは奴らだ」が立て続けに大ヒットした。5月に行なわれた英国ツアーは、追加公演を含む16公演がすべて完売となり、7月の4回の追加公演も即完売。その勢いに乗って、ポールは7月27日にスコットランドの農場でニュー・アルバムの曲作りと新曲のリハーサルを開始した。作業は5週間に及んだが、8月に入ると、ポールとヘンリー・マッカロクが演奏に関して口論となる。弾いてほしいとポールに言われたギター・フレーズをヘンリーが拒否し、そのままスタジオを出て行ってしまったのだ。映画『レット・イット・ビー』(今なら『ザ・ビートルズ：Get Back』)のポールとジョージのやりとりを思い浮かべるのがいいかなと思うが、ここでヘンリーが〝言う通りに弾けばいいんだろ〟と言ったらどうなっていただろうか。

そして、刺激的な環境でのアルバム制作を望んでいたポールは、英米以外にあるEMIスタジオのリストを見てラゴス行きを決めた。イギリス以外の具体的な場所を決める前に、ポールはこう思ったという。

〝EMIが作ったスタジオなら、勝手がわかるだろうし、コンディションもいいだろう。ジョージがインドで作業をしたことがあったから、そういう遠い場所にもスタジオを持っているのを知っていた〟。

EMIからスタジオのリストをもらったポールは、ブラジル、ナイジェリア、中国、フランスなどの候補地の中から、最終的にナイジェリアのラゴスか、ブラジルのリオデジャネイロに絞った。どちらの都市にも、刺激的な音楽的環境があると考えたからだ。イギリスでの録音税の高さを嫌って海外での録音を望んだ可能性もある。

2010年に出たアーカイヴ・コレクションのブックレットで、ポールはこう振り返っている——。〝おそらくリオのほうが賢明な選択だっただろうけど、実際僕らはいいアルバムを作ったわけだから、そうとも言えないよね。いずれにせよ、「アフリカか、うん、素晴らしい雰囲気だろうね」と思ったからラゴスにしたんだ〟

だが、8月29日に出発する直前、ヘンリー・マッカロクとデニー・サイウェルが電話でポールに同行しないことを伝える。スコットランドの農場を訪れた記者に対しポールはこの出来事に対して〝アルバムでドラムが叩ける！〟と強気の(?)発言を残しているが、いきなりトリオとなってしまった状況について〝彼らが行かないと聞いて、何時間かへこんだあと、「わかった。じゃあ見てろよ」と思ったんだ。それがモチベーションになった。最高のアルバムを作ってやる。彼らがそれを聴いたら「ちくしょう、行けばよかった」と思わせてやる〟と語っている。

CamScannerでスキャン

トラブル続きのナイジェリア録音

逆境に強いのがポールの良さであり、持ち味だ。ポール自身、〝逆境や緊張からは良いものが生まれるって言うだろ？〟本当に苦労した結果は質の高いものが多いとも。このアルバムがまさにそれを証明している〟と語る一方で、〝逆境の中でいいアルバムができた〟と言われるのを嫌がっている。〝もしかしたらそのとおりだから〟と。メンバーの脱退だけでなく、ラゴスに着くまでがまずたいへんだった。飛行機の機体前方から着陸を見ようと思っていたのに、パイロットが霧に覆われたジャングルの樹冠の下で着陸帯を見つけようと、何度も往復する。ポールは何もできずにそれを傍観するしかなく〝着陸できるのか〟と不安に思ったという。

着いたら着いたで、スタジオだけでなく、街自体、まだあちこち建設中というありさま。スタジオも建設中で、ヴォーカル・ブースもない。しかも、9月は雨期で豪雨がひどく、最悪の環境だった。ラゴスに同行した、ビートルズの『リヴォルヴァー』(66年)以降のレコーディング・エンジニア、ジェフ・エメリックは、ラゴスのスタジオについてこう回想している。

〝スタジオは原始的だった。小さくてアコースティック・スクリーンもないし、ドラム・ブースもない。マイクも古いものしかなく、8トラックのテープ・マシーンにもアンプが半分しかなかった。その8トラックでベーシックなリズム・トラックを何とか全部レコーディングできたけど〟。

また、ある日の夜、ポールとリンダがナイフを持った6人組の強盗に襲われるという事件が起こった。リンダがとっさに〝彼に触らないで。彼はミュージシャンよ。あなたと同じソウル・ブラザーよ、彼に手を出さないで！〟と叫んでことなきを得たが、一歩間違えば大惨事になりかねなかった。いや〝ことなきを得た〟と書いたが、実際はテープとカメラと金と引き換えに殺されずに済んだのだった。翌日、スタジオのオーナーからこう言われたという。〝もし黒人だったら殺されていますよ。身元がバレると彼らは考えますから。でもあなたたちは白人だから、特定できないことを彼らはわかっているんです。命拾いしましたね〟。

奪われたテープには、新曲のデモ音源が収録されていた。だが、楽観的なポールに言わせると、こうなる——。〝曲を思い出さなければならない羽目になったけど、それは実は悪いことじゃなかった。僕とジョンが作曲を始めたころ、カセット・レコーダーなんて存在しなかったことも思い出して自分に言い聞かせた。そして「テープに入っていた曲を覚えているかな」と思って試してみると、ほとんど覚えていたんだ〟。

想定外の出来事が続くなか、ポールが過労で失神してしまうという事態まで起こった。気管支の痙攣で息がほとんどできないポールを見たリンダは、死んでしまったのではないかと錯乱する。それほどの状態だったが、タクシーで病院に着いた頃にポールは目を覚ました。ポール曰く〝病院に向かいながら、「くそっ、僕はここで死ぬんだ。これで終わりだ。これが最後の旅だ」みたいな感じで、とにかく危なかった〟と。

レコーディングに際しては、クリームの

Paul McCartney & Wings
'My Love / The Mess'
Apple R5985 [1973] (7")

CamScannerでスキャン

ルドラマー、ジンジャー・ベイカーがラゴスにスタジオ（ARCスタジオ）を持っていたので、すぐに連絡をくれたという。デニー・レインが一時、ジンジャー・ベイカーのバンド、エア・フォースのメンバーだったので、ラゴス行きは事前に伝えていたに違いない。また、ジンジャーの友人の地元の大物音楽家、フェラ・クティもスタジオにやってきた。だが、ここでもまた一悶着が起こる。地元紙の記者の前で"黒人音楽を盗みに来た西洋人"と、ポールはフェラ・クティに一方的に責められてしまったのだ。

"お前はこのヴァイヴを盗みに来たんだ。でもアフリカ人にお金は入らない"

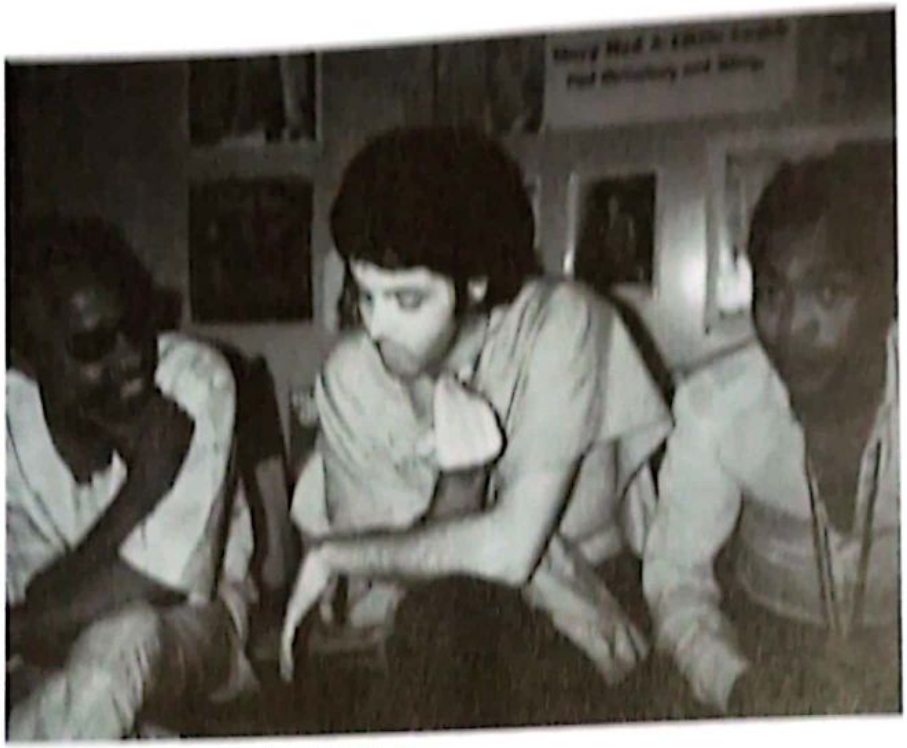
ポールがレコーディングした音源を数曲聴かせてなんとか誤解は解けたものの、ポールがその後、現地のミュージシャンを使わなかったのと、「ミセス・ヴァンデビルト」と「マムーニア」にアフリカ風のサウンドが少し感じられる程度に留めたのは、この一件があったからだろう（ナイジェリアのドラマーでルエア・フォースのメンバーだったレミ・カバカは「ブルーバード」に参加しているが、録音はロンドン）。

運に見放されたかのような負の連鎖続きではあったものの、ラゴスのスタッフの尽力もあり環境を整えることができ、レコーディングが始まった。デモを録るように、まず、ポールがドラムを叩き、デニーと二人でアコースティック・ギターの伴奏を加え、リンダも交えて音を徐々に重ねていく。

"ラゴスでレコーディングしたバック・トラックはごくシンプルなものばかりだった。デモを録る時みたいに、まずは僕がドラムを叩き、そこにデニーと2人でアコースティック・ギターの伴奏を加える。そこに少しずつ必要な装飾を加えていったんだ"（ポール）

"ポールがドラムを叩き、僕がリズム・ギターを弾くというのが基本形だった。ジンジャー・ベイカーのスタジオに行き1曲（「ビカソの道具」）やり、ジンジャーが小石の詰まった消火バケツをマラカス代わりに演奏したのを覚えている。まるでホーム・スタジオみたいだったよ"（デニー）

"ピアノとキーボードを弾くのに精一杯だったから、私の時間はほとんどそれに費やされた"（リンダ）



スタジオでフェラ・クティ（右）と会話するポール
©1973 Paul McCartney / Photographer: Linda McCartney

こうしてベーシック・トラックの収録は1か月半で終了。9月22日にイギリスに戻り、1週間後の9月末から10月にかけてロンドンのジョージ・マーティンのAIRスタジオでリード・ヴォーカルやハーモニーのパート、オーケストラ演奏などの追加レコーディングを行なった。ポールが豪華ゲストの参加を嫌ったため、アルバムに手を貸したのは、先に触れたジンジャー・ベイカーとレミ・カバカ（ともにパーカッション）、旧知のハウイ・ケイシー（サックス）、ローディーのイアン・ホーンとトレヴァー・ジョーンズ（バッキング・ヴォーカル）などごくわずかだった。

この時期にはリンダのソロ曲の録音も並行して断続的に行なわれており、10月4日に「オリエンタル・ナイトフィッシュ」、11月11日に「アイ・ガット・アップ」、11月20日に「ワイド・プレイリー」の3曲が録音された（いずれも98年の『ワイド・プレイリー』に収録）。11月の2曲のレコーディングには、この後、ウィングスのギタリストになるジミー・マッカロウが参加しているが、70年代に噂されていた、「ジェット」のギターをジミーが加えた可能性はあるのだろうか。ちなみに、50周年盤の〝アンダーダブド・ミックス〟（ラフ・ミックス）は、10月14日にジェフ・エメリックがAIRスタジオのピーター・スウェッテナムの力を借りて制作したものとのこと。

ロンドンでの仕上げ作業

ところで、ロンドンに戻った時にも、あまりに楽天的な（？）ポールらしいエピソードがある。実はナイジェリアへの入国にはヴィザが必要で、黄熱病、腸チフス、コレラの予防接種と、滞在中はマラリアの薬を服用する必要があったのに、病気が蔓延している地域とは知らずに足を踏み入れていたのだった。

〝レコーディングを終えてイギリスに戻ってみると、EMIからこんな手紙が届いていた――「親愛なるポール、コレラが大量発生しているから、何があっても決してラゴスには行ってはいけない」。つまり僕らは知らぬ間にコレラから生還していた、というわけさ！〟（ポール）

Mary Hopkin
"Earth Song / Ocean Song"
Apple SAPCOR21 [1971] (LP)
邦題『大地の歌』。トニー・ヴィスコンティプロデュースの2nd作

レコーディングの最終仕上げとしてオーケストラを加えたのは、トニー・ヴィスコンティだった。バッドフィンガーの前身、アイヴィーズのデビュー作『メイビー・トゥモロウ』（69年）やメリー・ホプキン（71年にトニーと結婚）の『大地の歌』（71年）のプロデュースを手掛けるなど、〝ビートルズ人脈〟の一人として重宝され、デイヴィッド・ボウイやTレックスのプロデューサーとしても活躍していたトニーだったが、特にTレックスのアレンジを気に入ったポールが電話で編曲を依頼した。トニーの作業時間は、わずか二日間だった。

〝ほとんど寝ずに水曜の朝イチの午前10時に、50人のミュージシャンを前にして指揮台に立った。死にそうだったのを覚えているよ〟（トニー）

「バンド・オン・ザ・ラン」の〝ダダダダ、ダン、ダン、ダン〟という、スロ

CamScannerでスキャン

ウなパートとアップテンポなパートを繋ぐわずか5小節のオーケストラ・アレンジ（これも50人編成）や、「ジェット」のパワフルなサックスのアレンジをはじめ、ポップス黄金時代のストリングスにTレックス風の色合いもしのばせたという「ピカソの遺言」、弦楽四重奏によるイントロが味わい深い「ノー・ワーズ」、そしてフィナーレにふさわしい劇的なオーケストレーションを施した「西暦1985年」と、トニー・ヴィスコンティの見事な手腕が、アルバムを名作として押し上げた。

さらに10月下旬の三日間に、ロンドン、キングズウェイのスタジオでジェフ・エメリックがミックス。アルバムは完成した。

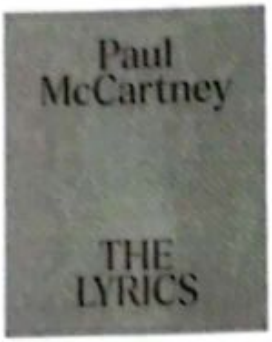
"リード・ヴォーカルやハーモニーのパート、オーケストラの演奏はイギリスに帰国したあとで加えた。オーケストラのパートに関しては、ラゴスでレコーディングした音源を16トラックのテープ・マシンに移し替えてからオーヴァーダビングした。ただし収録曲の半数くらいは8トラックのテープ・マシンでレコーディングしたマスターから、そのままミックスしている。アルバム全体のミックスダウンに費したのは3日間だった。（ジェフ）

こうしてアルバム『バンド・オン・ザ・ラン』は、73年12月7日（アメリカは12月5日）に発売され、ポールにとって、起死回生の一作となった。オープニングのタイトル曲からエンディングの「西暦1985年」までの息つく暇を与えぬ緩急自在の曲構成もさることながら、特筆すべきはポールのマルチプレイヤーとしての魅力だ。腕前の確かさはビートルズ時代にすでに証明されていたが、ここではドラム、ギター、ベース、ピアノ、シンセなど、まさに八面六臂の活躍。適材適所にどの楽器や音を配置したらいいのか、瞬時にわかってしまうと思わせるようなセンスの良さは心憎いほどである。

アルバム・タイトルともなった「バンド・オン・ザ・ラン」の着想についてポールは73年に"If we ever get out of here（もしここを出られたら）"というフレーズは、アップルでの長い会議に嫌気がさしていたジョージの口癖だったと語っていた。彼が"僕らはみんなある意味で囚人だ"と言っていたと。88年にはこうも語っている。"僕らはマリファナで無法者にされていた。『バンド・オン・ザ・ラン』での僕たちの主張は「僕らを悪い方に立たせないでくれ…。僕らは犯罪者ではないし、そうなりたいとも思わない」ということ。だから刑務所から脱獄する人たちの物語を作ったんだ"と。さらに21年に出版された『THE LYRICS』では、ポールは"band"という言葉について"主に刑務所から脱走した人たちのグループのことを指している"と書いている。

10月28日にロンドン西部のオスタレー・ハウスの敷地内で撮影された秀逸なジャケット写真（ポールとは旧知の写真家、クライヴ・アロウスミスが手掛けた）は、もちろん、タイトル曲にまつわるポールのイメージが元になっている。

参考資料：『バンド・オン・ザ・ラン（スーパー・デラックス・エディション）』ライナー・ノーツ（10年）



『THE LYRICS』
ポール・マッカートニー、ポール・マルドゥーン著／ザ・ビートルズ・クラブ訳／リットーミュージック／2022年

CamScannerでスキャン

『バンド・オン・ザ・ラン』全曲ガイド

文＝萩原健太

A①
バンド・オン・ザ・ラン
Paul McCartney

ビートルズ時代、レコード会社での商談中などにジョージ・ハリスンがよく口にしていたという〝もし、ここから出られたら（If I ever get out of here）〟というひとことに触発されて生まれた曲。音楽ビジネスにおける面倒な立場、マリファナ所持に絡む法的トラブルなど、当時抱え込んでいた様々な制約を念頭に、自分たちはある種の〝囚人〟だという思いからポールが構築した逃走の物語だ。

それぞれ色合いが違う3パートで構成された完成度の高い組曲に仕上がっている。まずギターの1弦と2弦を使ったソウルっぽい4度ダブル・ストップ・フレーズとモーグ・シンセのえぐい音色が印象的

A②
ジェット
Paul McCartney

前曲「バンド・オン・ザ・ラン」の第3パート同様、ナイジェリアではほとんど手をつけずロンドンに戻ってから完成させられたキャッチーなロック・チューン。タイトルに冠された〝ジェット〟というのはポールが娘、メアリーのために買い与えた小馬の名前だとか。以前は飼っていた子犬の名前とも語っていたけれど。とにかくこういう勢いのある名前をペットにつけるのがポールは好きなのだろう。

歌詞に関してはリンダとの結婚当初、彼女の父親である弁護士、リー・イーストマンの保守的な考え方が今ひとつしっくりこなかった経験なども盛り込まれているらしい。が、基本的にあまり意味のある

"Band On The Run"

原盤＝Apple［US］SO3415

＊愛しのヘレン（Helen Wheels）」を含むアメリカ盤LPを対象としています

「バンド・オン・ザ・ラン
50周年記念エディション」

ユニバーサル UICY16206〜7［2SHM-CD］

＊内容については64〜67ページをご参照ください

CamScannerでスキャン

Band On The Run

に絡むバラード・パートが1分強。"four walls"という監獄ものの歌詞に欠かせない伝統フレーズをいきなり盛り込み、囚われの身であることが提示され、やがてレゲエ・グルーヴも採り入れたファンキーな中間部へ。ここが1分弱。前述したジョージの口癖もフィーチャーしつつ脱獄への意欲が告げられる。ここまでがナイジェリア録音だ。そこから後半、アコースティック・ギターのカッティングに導かれてスタートするカントリー・ロック・テイストの3パート目に突入して、以降3分ほど、いよいよ逃走劇だ。ここはロンドン録音。アーシーな手触りのパートではあるが、随所にメジャー・セヴンス・コードなどを効果的に交え、ポールならではの洗練された浮遊感も共存させているところが憎い。

それにしても、ひとつひとつのパートを単独で拡張すれば十分に独立した曲として成立しそうなところを、贅沢にもぎゅっと一曲にまとめあげてしまうところがいかにもポールならでは。それら各パートを絶妙につなぎ合わせてみせるトニー・ヴィスコンティ編曲による60人編成のオーケストラも聞きものだ。3パート合わせて5分超の楽曲ながら、74年になってからアルバムからのセカンド・シングルとしてリリースされ全米1位／全英3位にランクした。途中3カ所ほどつまんで4分以内に短く編集されたプロモ用ラジオ・エディットもある。

Jet

歌詞ではなさそう。"ジェット"という語の勢いと、リンダの父親に抱いた曹長（サージェント・メイジャー）っぽいイメージと、それらの語の響きから発想したと思われる、たとえば婦人参政権を表わす"サフラジェット"とか、母親を表わす"メイター"とか、そういった単語たちの響きの面白さと…。それらが雑然と渦巻く解読不能な言葉遊び。それがストレートなロック・グルーヴに乗って炸裂している。レゲエっぽいギター・カッティングを従え、B、C#、Dという3音を使ったゴリゴリのリフをベースとユニゾンするサックスはビートルズがキャヴァーン・クラブで活動していた時代の仲間、デリー&ザ・シニアズのメンバーだったハウィ・ケイシーによる演奏。その後、打ち伸ばされるC#m7コードの響きがちょっぴり意外でたまらない。一筋縄にはいかないポールらしさ全開だ。この曲でもモーグのまっすぐな音色が多用され、音像に分厚さを付加している。

当初ポールはこのアルバムからシングル・カットをしない意向だった。同セッションで録音した「愛しのヘレン」だけをシングルとしてリリースすればいいと主張していたらしい。が、発売当初アルバムのセールスが思うように伸びないことに不安を覚えたレコード会社からの説得でまず本曲のシングル化が決定。結果、74年に全米／全英ともに最高7位まで上昇するヒットとなった。

CamScannerでスキャン

A③

ブルーバード

Paul McCartney

Bluebird

70年か71年ごろ原型が作られたらしい。タイトルからも想像できる通り、ビートルズ時代の「ブラックバード」に託された個人の解放というテーマを引き継ぐ一曲だ。「イエスタデイ」同様、アコースティック・ギターのチューニングを全音分まるまる下げて演奏。なので、実際のキーはE♭なのだが便宜上Fのキーで説明すると。冒頭、Am7(add 11)という必殺のコードの響きが醸し出す謎めいた浮遊感にまずやられる。そこからGmとCのいわゆる"ツー・ファイヴ進行"を経てFとB♭、それぞれのメジャー・セヴンスの美しい繰り返しへ…。絶妙のコード展開だ。ちなみに『ウィングス・オーヴァー・アメリカ』などに記録されたライヴ・ヴァージョンは通常チューニングでの演奏。なので普通にキーはFだ。そちらも華やかで悪くないが、全音低い本スタジオ・ヴァージョンの沈鬱な表情も味わい深い。

コーラスのラインも見事。バーカッションによるリズム・アレンジもサックス・ソロも的確。バーカッションはナイジェリア出身のジャズ・ドラマー、レミ・カバカの演奏だが、彼がたまたまロンドンにいるときのセッションだとかで、この曲もロンドン録音だ。サックスは前曲同様ハウィ・ケイシー。サックス・ダビングの際、ポールが彼にコード進行とともにフレーズを口伝えする映像も残されており、ファンにとってはとても興味深いものだった。

A④

ミセス・ヴァンデビルト

Paul McCartney

Mrs. Vandebilt

"ホー！ ヘイ・ホー！"の掛け声がやけに頭に残るマイナー調のアップテンポ曲。19世紀のアメリカで海運業と鉄道事業で財を成したヴァンダービルト家を意識して書かれたのではないかと言われている。スペルから"R"が抜かれ"ヴァンデビルト"とされてはいるものの、途中の"財産が奪われても泥棒を責めない"という歌詞の一節は明らかに20世紀に入ってから経済的に衰退したヴァンダービルト家に言及したものらしい。冒頭の一節"ジャングルの中でテント暮らし／家賃がいらないだけバンガローよりましだ"は、ミュージック・ホール時代のコメディアン、チャーリー・チェスターのラジオ番組に登場する原住民の決めフレーズの転用。ラストに挿入される笑い声もチェスターの番組に触発されたものだとか。リンダが弾いているらしき超シンプルなエレクトリック・ピアノ演奏が加わってくるサビの部分、一瞬のメロウな展開がボールらしさを届けてくれる。ユニゾンしたりハモったり、バンドっぽい多彩なコーラスが聞けるのもうれしい。やはりハウィ・ケイシーがサックスで参加。なんだかやけにピッチが悪いのが気になるのだが…。

英米ではシングル・カットされなかったが、ヨーロッパなどでは「ブルーバード」をB面に収めてシングル化。オランダ、ドイツはじめいくつかの国でヒット・チャート入りを果たしている。

CamScannerでスキャン

A⑤

レット・ミー・ロール・イット
Paul McCartney

Let Me Roll It

〝この気持ち（フィール）を伝えられない／俺のハートはまるで車輪（ホイール）のよう／それをロールさせてくれ…〟というホットなラヴ・ソングでもあり、かつ紙巻きのマリファナをロールするというニュアンスも折り重ねられているらしき歌詞がやばい。ポールのお気に入り曲のようで、現在に至るまでライヴに欠かせない重要なレパートリーとして演奏し続けている。この曲をライヴで披露する際、ポールはベースではなくギターに持ち替えて演奏することが多い。そこからもわかる通り、まさにギター・リフこそが主役と言うべき傑作曲だ。スピード感と粘っこさ、そしてトリッキーな感触などがスリリングに共存する強力なリフ。そのリフや切迫した唱法にジョン・レノンからの影響を指摘する者も少なくない。ポールは基本的にその指摘を否定しているのだが、ヴォーカルにかけられたエコーに関しては確かにジョンを想起させると認めているようだ。ロカビリー時代に多用されたテープ・レコーダーによるリピート・エコーで、これをポールは〝ボグ・エコー〟と呼んでおり、ジョンもこのエコーが大好きだったのだと語っている。

イギリスや日本ではシングル「ジェット」のB面としてもリリース。アメリカ盤の「ジェット」のB面は当初「マムーニア」だったがセカンド・プレスからはこの曲がB面になった。

B①

マムーニア
Paul McCartney

Mamunia

Cのキーとaのキーをくるくると行き来しながら展開する、いかにもポールらしいアコースティック・ギター演奏をフィーチャーした一曲。『バンド・オン・ザ・ラン』セッションの最初にレコーディングされた愛らしいナンバーだが、収録曲中、唯一ライヴで演奏されたことがない作品だとか。タイトルはアラビア語で〝安全な避難所〟という意味。かつてポールとリンダが滞在したマラケシュの同名ホテル（綴りが若干違う）にインスパイアされたという説もあったが、実際にはナイジェリアのラゴスにあった家の名前からとられたタイトルらしい。

内容的にはロサンゼルスの雨をテーマにした曲。ぼくの読解力では英詞に託されたポールの真意は今ひとつわからないのだけれど、自分たちの起源である海を満たすために雨が降る、大地で自由になる日を待つ種のために雨が降る、だから雨雲が出てもいやがるな、傘を置いてレインコートを脱いで雨を感じるんだ…的な？　基本的にはドラムレスのアコースティック曲。ベース・ドラムの音が聞こえるが、これはポールのロード・クルーが担当したものだとか。前述した通り当初は米盤シングル「ジェット」のB面にも収められてリリースされたが、A面としてのポテンシャルがあると判断され（結局は実現しなかったものの）セカンド・プレスでは「レット・ミー・ロール・イット」に差し替えられた。

CamScannerでスキャン

B②

ノー・ワーズ

Paul McCartney & Denny Laine

No Words

A-A7-G6-F#7という導入部の流れるようなコード進行にせよ、スライド・ギターをフィーチャーしたサビでEのキーに転調してからの流れにせよ、想いを寄せる女性に自分のことだけを見つめていてほしい、その愛情に言葉はいらない…と綴る甘い歌詞にせよ、ポールの得意ワザの集大成的な印象もあるが、これはポールとデニー・レインの共作曲。デニー主導で途中まで書かれた楽曲をポールが手助けして完成へと導いたらしい。共作者としてではあったが、デニーの名が初めてソングライターとしてクレジットされたウィングス作品だった。前作『レッド・ローズ・スピードウェイ』制作時、すでに仕上がっていた曲だそうだが、本作『バンド・オン・ザ・ラン』でようやくレコーディングが実現した。

リード・メロディはデニー、ポール、リンダの3人がコーラスで綴る。奥に埋もれているようだがポールのロード・クルー二人もコーラスに参加している。デニーとポールがそれぞれソロで歌う個所も。そういう意味ではウィングスのメンバーもスタッフも一丸となって作り上げた曲という感触もあり。ファンにとってはやけにうれしい仕上がりだった。トニー・ヴィスコンティ編曲によるストリング・カルテットと、ホーンあるいはモーグ・シンセサイザーによるカウンター・ラインなどが美しく絡みながら音像をバックアップしている。

B③

愛しのヘレン

Paul McCartney

Helen Wheels

前述した通り、当初ポールは『バンド・オン・ザ・ラン』からはシングルをカットしない意向だった。その代わり、同じナイジェリアのラゴスでのセッションでレコーディングされた本曲をアルバム未収録シングルとして先行リリースするという計画。だが、リード・シングルなしのアルバム・リリースを不安視したレコード会社の判断で、アメリカ盤の『バンド・オン・ザ・ラン』にだけ本曲が収録されることになった。今回の50周年記念エディションではアメリカ盤にならい本曲もオリジナル・アルバム収録曲として扱われている。

前年のシングル「ハイ・ハイ・ハイ」などの流れを汲むシャッフル・ロックンロール。ここで歌われる〝ヘレン〟とは、ポールの当時の愛車だった4輪駆動のランド・ローヴァーに付けられたニックネームだ。もともとは〝Hell On Wheels〟（車輪上の地獄）〟という物騒な呼び名だったが、徐々に略されて〝ヘレン〟になったらしい。スコットランドにあった自分の農場から愛車を駆ってロンドンへ向かう旅路が歌われている。歌詞にはイギリス各地の名前が出てくるが、これはチャック・ベリーの「スウィート・リトル・シックスティーン」をはじめ、歌詞に地名を折り込むことが多かった古きよきアメリカン・ロックンロールへのオマージュかもしれない。全英チャート12位、全米10位にそれぞれランク。

CamScannerでスキャン

B(4)

ピカソの遺言

Paul McCartney

Picasso's Last Words (Drink To Me)

レコーディングに先駆けてジャマイカで休暇を過ごしていたポールとリンダは、映画『パピヨン』の撮影でやはり当地を訪れていた名優ダスティン・ホフマンと出会い会食することになった。食後に交わした会話の中、"どんな題材でも曲にできる"と主張するポールの言葉を信じなかったダスティン・ホフマンは、手近なところにあった雑誌に掲載されていた画家パブロ・ピカソ他界のニュース記事の中に見つけたピカソ最後の言葉"Drink to me, drink to my health. You know I can't drink anymore"で曲を作れるかポールに提案。もちろんポールはその場であっという間に曲を仕上げてしまい、ダスティン・ホフマンは大いに感激したという。その曲を下敷きに仕上げられたのが本曲だ。

オープニングはデニーのヴォーカルで、以降、リズムが唐突に変化したり、間奏部にストリングスによる「ジェット」のリフが登場したり、エンディングに「ミセス・ヴァンデビルト」の"ホー! ヘイ・ホー!"コーラスが出てきたり。まるでピカソの作風のように自由奔放な音のコラージュが展開していく。それによってアルバム全体がある種のコンセプト・アルバムとしての色彩を帯びることになった。ナイジェリアのイケジャ郊外にあるARCスタジオでの録音。スタジオの持ち主だったジンジャー・ベイカーがパーカッションで参加している。

B(5)

1985年

Paul McCartney

Nineteen Hundred And Eighty Five

ポールが奏でるピアノが牽引する軽快なグルーヴに乗せ、"85年には人類は誰も生き残っていないだろう"と歌われる曲。当時、まだ見ぬ近未来を歌った作品だった。以前ポールに電話インタヴューしたとき、この曲に関して聞いてみた。彼は"ビートルズ時代には自分が64歳になったときのことを歌った曲を作ったりもしたけど、たまたま思いついた数字を使っただけ。1985年という年代や64歳という年齢に特に意味があるわけじゃない。でも、今でもコンサートではこの曲を歌っているよ。実際はもう何十年も前のことを描いた歌詞なのに、まるで未来のことを歌っているような、ちょっと変な気分になるね。この曲は今でも未来についてのラヴ・ソングなんだ"と答えてくれたっけ。

曲が進むにつれ、古きよき時代のスウィンギーなタム・ロールや懐かしいグッド・タイム・ミュージック的なホーン・セクション群や壮麗なストリングス・セクションなどが次々と現われ、近未来的なモーグ・シンセサイザーやメロトロンの音色、そしてディストーション・ギターなどとスリリングに絡んでいく。過去と未来が交錯するヴァーチャルなダンス・ホールといった風情。そして大団円を迎えたところで、改めてアルバム1曲目「バンド・オン・ザ・ラン」のコーラス・リフが登場しフェイド・アウト。冒頭へと連環を描いていくのだった。

CamScannerでスキャン

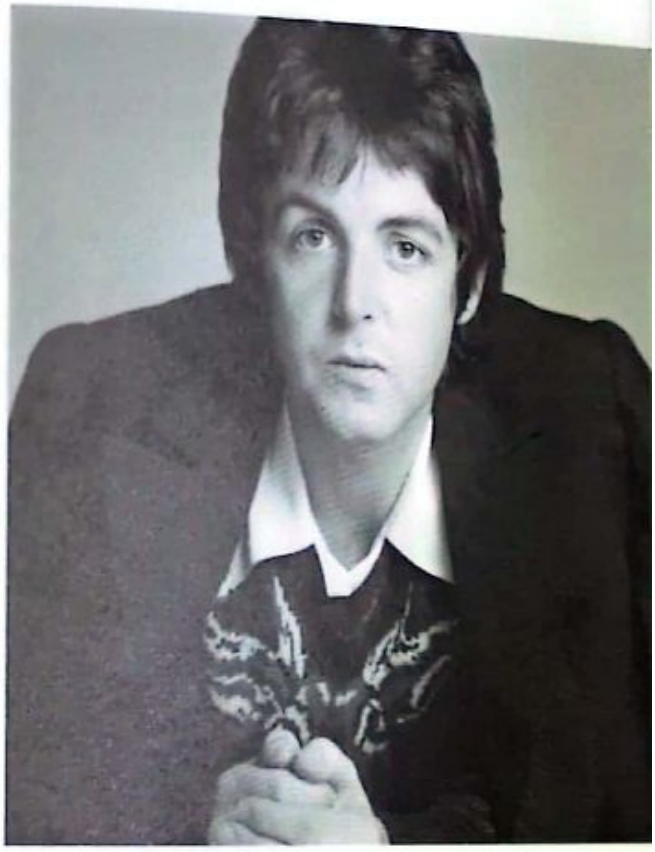
“逃亡中の輩たち”が紡ぐロード・ソング

ゆるいテーマでつながった『バンド・オン・ザ・ラン』の歌詞を読み解く

文＝朝日順子

イーグルス〈ならず者〉（73年）と映画『明日に向って撃て！』（69年）等にみられる〝無法者ブーム〟があったことや、マリファナで逮捕される心配がつきまとっていたことで、表題曲を出発点とした『バンド・オン・ザ・ラン』のゆるいテーマ〝脱獄〟が生まれたとポール・マッカートニーは発言してきた。デニー・レインが亡くなった直後の〝Mojo〟2024年3月号のインタヴューでも当時、イーグルスやオールマン・ブラザーズ・バンドの曲にみられる〝俺＝世間〟のカウボーイのような反骨心に影響されたと語っている。無法者ブームとは何だろう。反体制の思想と結びついてアウトロウを気取るのが、60年代後半から若者の間で流行。とりわけ音楽産業の中心LAでは、ミュージシャンたちがツアーでドサ回りをする自分たちを、金と女を求めて町から町へと移動する西部開拓時代の無法者に重ね合わせ、ビジネスに取り込まれないようにとLAのキャニオンの自然の中に住んだ（詳しくは拙著〝ルート66を聴く：アメリカン・ロード・ソングは何を歌っているのか〟をお読みください）。イーグルス『ならず者』も、そんな背景から生まれた作品で、オールマン・ブラザーズ・バンドの初作収録の〈夢〉は、グレッグ・オールマンがLA時代にキャニオンで書いた曲だ。

アメリカにはプリズン・ソング（囚人の歌）が古くからある。例えば、コロナのロックダウン中に伝記を読んだというくらい、ポールが現在でも大好きなレッドベリー。服役中に才能を見いだされた彼の代表曲の〈ミッドナイト・スペシャル〉を、ポールは幾度となくカヴァーしてきた。他にもボブ・ディランが書き、ザ・バンドの演奏で



©1973 MPL Communications Ltd / Photographer: Clive Arrowsmith

CamScannerでスキャン

知られる〈アイ・シャル・ビー・リリースト〉。74年のナッシュヴィル・セッションの時にポールが滞在したのは、プリズン・ソング〈思い出のグリーン・グラス〉の作者、カーリー・プットマンの家だ。60年代にイギリスでも大ヒットしたこの曲では、〈バンド・オン・ザ・ラン〉同様、四方を壁に囲まれる状態が歌われるため、ポールが影響を受けたとしてもおかしくない。

"Band On The Run"の言葉には、ポールによれば"逃亡中の輩たち"と"ツアー中のバンド"のダブル・ミーニングがあるそうだ。"on"には「途中」の意味があり、動きと勢いのあるネーミングだけでもヒットを予感させる。前作『レッド・ローズ・スピードウェイ』のアルバム名もバイク移動のイメージがあるが、プリズン・ソングとロード・ソングの合わせ技で、本作はより米国市場に狙いを定めたように思える(やっぱりアメリカの一般大衆には、"羊"や"野生"より"バイク"や"脱獄"がウける)。それでは、米盤オリジナルの曲順に沿って歌詞を1曲ずつ詳しくみていこう。

バンド・オン・ザ・ラン

アップルの会議でジョージ・ハリスンが、"僕らみんな、自分自身の中に捕らわれた囚人だ"と言ったことも、この曲の発想源のひとつだそう。ポール流の明るいプリズン・ソングで、「脱獄したら金なんか慈善団体に寄付して 1日1パイントのビールにありつけさえすればいい!」と、イギリス色をちらつかせる。彼の書く歌詞は、ビートルズよりウィングス時代の方が、ずっとイギリス色が強い。子供の頃から持ち続けるアメリカに対する憧れの反面、60年代後半以降の政治観からくる"反アメリカ"精神が、ポールの歌詞のイギリス流ユーモアには込められているのだ。

歌詞に登場する「看守」を意味するイギリス英語"jailer"は、ポールの暗いプリズン・ソング〈1882〉(『レッド・ローズ…』デラックス・エディション収録。こちらの方がレッドベリーの影響が濃厚だ)にも登場する。この「ジェイラー」と韻を踏ませるために登場する「セイラー・サム」は自社のキャラクターで、ポールが映画化の権利を取得した漫画『ルパート・ベア』に登場する船乗り。ネットで見てもらえば分かるが、かなり濃いキャラだ。『ルパート・ベア』のアニメを70年から計画していた(〈リトル・ラム・ドラゴンフライ〉も挿入歌になるはずだった)ポールは、84年に実現させ、マイナー・ヒット〈ウィ・オール・スタンド・トゥゲザー〉が生まれた。

ジェット

「近々結婚するって君が言った時の ご両親の微妙な顔が 今でも思い浮かぶよ」の言葉で始まる。キャピトルが本曲をシングルで出す提案をした理由はフックが多いからだそう。キャッチーな言葉もフックになっており、私が子供の頃(昔はビートルズよりウィングスが好きでした)、〈ジェット〉は結婚したい男と、女の父親の歌なのに、"Sergeant Major(少将)""Suffragette(婦人参政権支持の女性活動家)""mater(イギリスの古い口語で「母」)"が出てくるのが不思議で、意味が分からずとも印象に残ったのを覚えている。ポールによれば少将は、やや堅物だったリンダの父、ギルバート&サリヴァン『ペンザンスの海賊』で歌われる少将の歌、コメディ番組「ブーツィ・アンド・スナッジ」の主役の一人であるイギリス軍の曹長が発想の元だそう。「少佐は淑女かと思った」と女装のイメージが出てくるため、〈オブ・ラ・ディ、オブ・ラ・ダ〉の歌詞後半で男女が入れ替わっ

CamScannerでスキャン

©1973 Paul McCartney / Photographer: Linda McCartney.

がみに風が通る様や、「背中によじ登って二人で空を駆け巡ろう」と歌われるので、本曲のジェットを馬とするのは、単にポールによる記憶の上書きとも言い切れない。

ブルーバード

青い鳥の視点で書かれた曲。すべてが静まった夜に飛来した歌い手の鳥は、キスをした相手の鳥と共に、夜中の海を渡って自由を手に入れる。2羽は無人島で幸せに暮すのだ。逃亡して自由を手に入れる、本作のテーマにあっている。

ミセス・ヴァンデビルト

権力を持つ金持ちにルールを押しつけられることなく、ジャングルで気ままに暮したいという、ポールの反骨精神が表われた曲。次作の〈幸せのアンサー〉でも歌われる、〝お高くとまった貴族 vs. 庶民の俺〟の図式だ。「ジャングルの中 テントに住まう家賃も要らない」は、コメディアンのチャーリー・チェスターのラジオ番組によく登場した言葉だそう。「ホ・ヘイ・ホー」のかけ声は囚人の労働歌を思わせるが、ポール・マジックにかかると、ディズニー映画『白雪姫』でこびとが歌う〈ハイ・ホー〉

たように、ふざけて遊んでいると思われる。"Suffragette"は単にジェットと韻を踏ませるために登場する〝かけ声〟と思われるが、非常に変わった言葉なので、デイヴィッド・ボウイの〈サフラジェット・シティ〉が頭の隅にあったのではないだろうか。

本曲で何度も叫ばれる女性の名前：ジェットは、ポールが飼っていたラブラドール・レトリヴァーの黒い子犬の名から思いついたもの。近年のポールや娘メアリーの話では、スタッドランドで子供たちに買った黒い子馬の名前から思いついたことになっている。このようなポールの小話の変遷を含め、膨大なデータから背景を丹念に拾ったのが、22年発刊の"The McCartney Legacy"だ。この本によれば、犬のジェットが生まれた数年後に子馬のジェットを買ったそう。どちらの名前も、"jet black"（真っ黒）の言葉からきていると思われる。ついでにポールは去年、黒い子犬を迎えて、またしてもジェットと名付けたようで、事態をよりややこしくしている。美しいたて

のようなのんきな雰囲気になって楽しい。

「財産が目減りすると」と出てくるのは、米国の財閥ヴァンダービルト家の資産の話で、ミセス・ヴァンダービルトは一族の女性――アンダーソン・クーパー（CNNの超有名キャスター）の母でもあるグロリア・ヴァンダービルトや、行儀作法の専門家エイミー・ヴァンダービルト――がモデルと思われる。直後の「強盗に遭っても不平を言えない」は、マッカートニー夫妻がラゴスで強盗に遭った事件を思い起こさせる。ポールがラゴス行きを決めたのは、フェラ・クティも登場するドキュメンタリー『ジンジャー・ベイカー・イン・アフリカ』を観たからともいわれ（映像でジンジャーは、オーヴァーヒートさせないために車に動物の死体をくくりつける等、ハードボイルドなロード・トリップを経てラゴス入りしているので、ポールのあこがれた〝無法者〟のイメージの一端が分かる）、バンドのヴィザもラゴス在住のベイカーに手配してもらった。強盗事件に関して、金だけでなくデモ・テープも取られたから、記憶を頼りにレコーディングするはめになった、とポールは面白おかしく小話にしているが、実際とスコットランドに保管されていたようだ。また、ベイカーは自伝『ヘルレイザー』に、現地の人々が〝サイン下さい〟と言っただけなのに、ポールとリンダが強盗と勘違いしてすべて渡してしまったと記している。

本曲の後半、呼びかける相手はミセス・ワシントン（ポールによれば米国首都から名付けられた。首都には最高裁判所があるため、司法の象徴でもあるのだろう）に代わり、「十分な刑期を果たしたのだから ほっといてくれ」と、アルバムのテーマに繋げる意図が感じられる。

レット・ミー・ロール・イット

スコットランドで晴れた日に思いついた曲。ジョージの〈アイド・ハヴ・ユー・エニータイム〉に含まれる言葉〝let me roll it to you〟が登場する。ポールは自著〝The Lyrics〟で、この〝roll〟にはマリファナの〝ジョイントを巻く〟と、ロックンロールの〝ロール〟（＝セックス）を掛け合わせたと語っている。ついでに、現在でもライヴで〝今日の客層はちょっと気取ってないか？〟と思っても、マリファナの匂いがしてくると〝よし、よし〟と思うそうだ。「俺のハートは車輪のようだ お前に転がしていくぜ！」と、訳すと赤面ものの歌詞であることも付け加えておく。

マムーニア

ラゴス滞在中は雨季だったそう。「雨は生命の源でもあるのだから LAで雨雲に見舞われたからといって 不平を言ってはいけない」と優しく歌う、〈ワイルド・ライフ〉や〈ゴールデン・アース・ガール〉（『オフ・ザ・グラウンド』収録）に通じるエコロジカルな曲。

ポールは〝The Lyrics〟で、〝雲〟や天気に言及するオノ・ヨーコの作る詩が昔から好きだったこと、ジョン・レノンが〈ジュリア〉でヨーコを「オーシャン・チャイルド」と詠んだように、リンダを〈ゴールデン・アース・ガール〉で歌にしたこと、ジョンの歌を通してヨーコの言葉が自分の歌詞に影響を与えたことを認めている。天気を主題に、実際の行動を促す本曲にも、ヨーコの影響があるのかもしれない。

雨を体で感じてごらんと、レインコートを脱ぐように提案される際のイギリス英語〝mac〟は、ビートルズの曲にも何曲か登場する。歌詞で呼びかけられるマムーニアの名は、マラケシュで滞在したホテルの名前

CamScannerでスキャン

で、『レッド・ローズ・スピードウェイ』デラックス・エディションのブックレットには、ホテルの外観が掲載されている。ラゴスでも同名の表札を目にしたそうだ。

ノー・ワーズ

曲名には、「僕の愛は言葉で言い表わせない」の意味が込められている。共作者のデニー・レインによれば、曲作りは多産なソングライターのポールに任せていたが、彼にもっと曲作りするようによく言われていたそうだ。本作制作に際し、いつものように〝なにか曲ない?〟と聞かれ、断片的なものが2曲あると答えると、ポールはやすやすとそれらを繋げて、「君の奥底にある燃えるような恋心を隠さないで」と歌われるブリッジを書き足したという。

愛しのヘレン

〈マネー〉をシングル・カットしたことでピンク・フロイド『狂気』の売り上げが大幅に伸びたことから、『バンド・オン・ザ・ラン』をヒットさせるために、アメリカで好評のシングル〈愛しのヘレン〉を収めるよう、キャピトルがポールに提案したため、本曲はアメリカ盤にのみ収録された。

ポールいわく、ずっとロード・ソングをやりたかったが、〈テイク・イット・イージー〉や〈ルート66〉といったアメリカの曲ばかりなので、イギリス版を作ったそうだ。イギリスのバンドにもキンクス〈モーターウェイ〉、モット・ザ・フープル〈オール・ザ・ウェイ・フロム・メンフィス〉、ローリング・ストーンズ〈メモリー・モーテル〉、モーターヘッド〈ロード・クルー〉等のロード・ソングがあるが、イギリス国内のことを歌った曲は少ない。

〈愛しのヘレン〉は、マッカートニー夫妻が子供を乗せてランドローヴァーで頻繁に島をガタガタ上下した体験からきており、リンダと二人であてもなく車で走った体験を元にした〈トゥ・オブ・アス〉のウィングス版だ。スコットランドからロンドン近郊までのロードについて、グラスゴー、カーライル、リヴァプールといった地名と共に歌われる。ケンダル・フリーウェイと出てくるが、イギリスにケンダルの地名はあっても、高速道路をアメリカのようにフリーウェイとは呼ばないので(キンクスの曲のようにモーターウェイと呼ぶ)、ジョークになっている。「M6(イギリスの南北に長い高速道路)を南に走ると、リヴァプールではウェストコースト・サウンドが聞こえる」の部分にも爆笑させられる。

セイラー・サムが、再び韻を踏むためだけ(今回はバーミンガムと)に登場し、〈バンド・オン・ザ・ラン〉にも出てくる「決して見つからない」の言葉も歌われる。

原題"Helen Wheels"は、愛車ランドローヴァーのあだ名"hell on wheels"——「車輪の付いた地獄」「すごいやり手」の意味のイディオムで、歌詞にも登場——からきている。ヘレンと女性名をつけ、愛車への賛歌にもなっている。余談だが、ポールは66歳の時に、結婚前のナンシー・シェヴェルとフォード・ブロンコを運転してルート66の旅を敢行している。ポールが旅した証拠を残そうと、オクラホマ州のルート66上には、地元住民により記念の看板が建てられた。

ピカソの遺言

ナレーターがピカソの死を報じ(この部分はデニーが歌っている)、途中からポールがピカソになり「朝3時に寝床に入ろうとしたら 何の前触れもなしにそれはやってきた ベイビーお前を向こうで待っている」と歌う、とてもよくできた歌詞だ。

ジャマイカで休暇中のポールが、『パピ

CamScannerでスキャン

ン』（脱獄の映画！）撮影中のダスティン・ホフマンのところに遊びに行き（ポールの小話では一晩の出来事になっているが、実際は二日に渡りやり取りがあった）、ダスティンが感銘を受けたピカソ最期の言葉が含まれる雑誌の記事からポールが目の前で本曲を作った。『タイム』誌のサイトで閲覧できる73年4月23日号のこの記事を読むと、友人を夕食でもてなすピカソは、「私に乾杯しておくれ 私の健康を祝して もうこれ以上飲めないのだから」と、本曲のサビそのままの言葉を言った（この言葉が詩的だったので、ダスティンは曲にできないかと提案）。記事には、食後に仕事に戻ったピカソが朝の3時まで絵を描き、その日の昼に亡くなったともある。本曲の途中で挿入されているフランス語は、曲とは関係ない“観光”に関する文言のようだ。

ウィングスのピカソ関連曲には他にも、ピカソの絵画「老いたギター弾き」を見て書かれた〈ホエン・ザ・ウィンド・イズ・ブロウイング〉（『ワイルド・ライフ』デラックス・エディション収録）がある。

1985年

最初の1行「1985年に生き残っている者は誰もいない」を思いついてから、続きを書くのに難儀した曲だそう。2行目が続くと「1985年に生き残っている者でお前の代わりになるような娘は誰もいない」と受け取れるようになっていて、苦労の跡がうかがえる。子供の頃にジョージ・オーウェル『1984』を読み、近未来に興味が湧いたそうで、本曲でも1985年の女はいい女だとしても、俺にはお前がいるから関係ないさ、と歌われる。

〈1985年〉の大団円で終わる本作には、それまでの内省的なアルバムからは感じられない明るさがみなぎっていて、シンガー・ソングライターからスタジアム・ロックへと移り変わる時代を予感させる。

ジェフ・エメリックの自伝『ザ・ビートルズ・サウンド 最後の真実』によれば、本作の歌詞はラゴスに着いてから細かく手直しされたらしいが、全体を繋ぐゆるいテーマにあわせるための調整だったのだろう。この“ゆるさ”がウィングスの持ち味で、大仰な雰囲気を持つ曲がありつつも、プログレのコンセプト・アルバムと違い大上段に構えた難解さはなく、音優先の気楽さに溢れている。バブルガム・ポップやグラム・ロック寄りの、いい意味でダサい親しみやすさがある。

『エジプト・ステーション』（18年）にも全体を繋ぐゆるいテーマ（各駅停車の旅）がある。収録曲〈ディスパイト・リピーティッド・ウォーニングス〉は組曲だが、当時ポールは、キース・ウェストの〈エクサープト・フロム・ティーンエイジ・オペラ〉（67年）の影響でロック・オペラ風の組曲を作り始めたと語っている。組曲〈バンド・オン・ザ・ラン〉が誕生した頃は、ロック・オペラやロック・ミュージカル全盛の時代。ポールの組曲には他に〈アンクル・アルバート〜ハルセイ提督〉や〈007死ぬのは奴らだ〉があるが、本作表題曲の歌詞が一番分かりやすい。

ビートルズ後半にはスウィンギング・ロンドンの中心にいたポールが、トレンドの最先端から解き放たれて自由になり、本作前年にはバスに子供や犬も乗せたウィングス欧州ツアーを決行している。ツアー・バンドならではの雰囲気がよく出た本作の、難解ではない、イメージ優先のテーマに沿った曲やアルバム作りの手法は、後のスタジアム級のバンドに影響を与えたのではないかと思うのだ。

CamScannerでスキャン

『バンド・オン・ザ・ラン 50周年記念エディション』解説

差異が多く興味深い音源〝アンダーダブド・ミックス〟を収録した2枚組

文＝小山守

ポール・マッカートニーの〝アーカイヴ・コレクション〟シリーズは、2010年の『バンド・オン・ザ・ラン』から始まり、約11年間を費やしてリイシューを重ね、2020年の『フレイミング・パイ』でひと区切りとなった。そこから約3年を経て、今回『バンド・オン・ザ・ラン 50周年記念エディション』が発売されている。ここからビートルズと同様に50周年記念シリーズが続くのかはまだわからないが、ポールのリイシュー・プロジェクトが新たな局面に突入したことは間違いない。それがまたしても『バンド・オン・ザ・ラン』から始まるというのはなんとも象徴的で、ポール本人もこのアルバムを特別に捉えているからではないだろうか。彼のソロ・ワークスの中でも確実にひとつのピークであり、個人的にも最高傑作と断言できる作品である。

今回の50周年記念エディションは、CD、アナログLP、デジタルの3形態でのリリース。CDは2枚組で、1枚目が米国盤オリジナル・アルバム本編、2枚目が今回初出となる〝アンダーダブド・ミックス〟を収録しており、リンダ・マッカートニー撮影のポラロイド写真を使った両面印刷のポスターが付く。CDだと今回はこれ一択で、いわゆるデラックス・エディションの類いもない。2010年の〝アーカイヴ・シリーズ〟での本作のスーパー・デラックス・エディションは、レア音源、映像、ブックレットなどをこれでもかと詰め込んだ、超の付く豪華版だったから、その趣向はもうやり尽くしたということなのか、今回は対照的といえるくらいにシンプルな内容だ。高価ではないぶん、買い求めやすい数居の低さが魅力ともいえるだろう。

一方、アナログLP（輸入盤）は2枚組と1枚ものの2種類があり、〝スペシャル・エディション〟と銘打たれた2枚組はCDと同内容で、1枚ものはオリジナル・アルバム本編のみ。どちらも73年のオリジナル・マスター・テープから高品質でデジタル変換した音源を元に、アビー・ロード・スタジオのマイルズ・ショーウェルによるハーフ・スピード・カッティングが施されたものだ。CDと同様にリンダ撮影のポラロイド・ポスターが付属する（2枚組には2枚のポスターが付く）。そしてデジタルは〝アンダーダブド・ミックス〟が単体で配信されるのに加え、アルバム本編が初めてドルビー・アトモス・ミックスを施してリリースされ、こちらはジャイルズ・マーティンとスティーヴ・オーチャードが新たにミックスを手がけている。

ここではそれらのうち、CD2枚組を詳細に紹介していくことにする。1枚目は前述したように米国盤オリジナル・アルバム本編なので、8曲目に「愛しのヘレン」が

CamScannerでスキャン

『バンド・オン・ザ・ラン
50周年記念エディション』
【1】①バンド・オン・ザ・ラン ②ジェット ③ブルーバード ④ミセス・ヴァンデビルト ⑤レット・イット・ロール・イット ⑥マムーニア ⑦ノー・ワーズ ⑧愛しのヘレン ⑨ピカソの遺言 ⑩1985年
【2】ピアンダーダブド・ミックス ①バンド・オン・ザ・ラン ②マムーニア ③ノー・ワーズ ④ジェット ⑤ブルーバード ⑥ミセス・ヴァンデビルト ⑦1985年 ⑧ピカソの遺言 ⑨レット・ミー・ロール・イット
ユニバーサル UICY16206〜7
／2SHM-CD／¥3800／
歌詞・訳詞つき／
英文解説翻訳つき／2・2発売

入った全10曲収録だ。ポール自身がアルバムにふさわしくないと主張した曲なわけだが、今回はボーナス・トラックが皆無なので、それに近い位置付けということなのだろう。この1枚目は試聴した限り、音質面で大きな変化はない。これもまた、2010年のリマスターでかなり丁寧な作業が施されて飛躍的に向上したためと思われる。近年のリイシューの傾向からアナログ及びデジタルを重視している感は強く、より斬新なミックスを求めるならばデジタルのドルビー・アトモス・ミックスで体験してほしい、ということではないだろうか。ただ残念ながら、現時点でそちらは未聴。

スッピンの音の魅力

というわけで、今回のCD2枚組での焦点は、2枚目の〝アンダーダブド・ミックス〟にほぼ絞られるということになる。これはオーケストラなどのオーヴァーダブが行なわれる以前、文字通り〝アンダーダブ〟の状態の音源だ。本作は73年9月22日までナイジェリアのラゴスでレコーディングを行ない、ロンドンに帰国してから10月14日にジョージ・マーティンのAIRスタジオで、エンジニアのジェフ・エメリックがピーター・スウェッチナムの力を借りていったんミックスしており、その時のラフ・ミックス状態のもの。その後、トニー・ヴィスコンティによってオーケストラ、ストリングス、管楽器類などのオーヴァーダブが施されて完成に至ることになる。装飾系の楽器で化粧を施す以前のスッピンの音というのが大きな魅力だし、それだけではなく、ヴォーカル・テイクが違っていたり細かい修正の跡があったり、曲の構成が変わっていたりと差異が多く、実に興味深い音源だ。となるとビートルズ『レット・イット・ビー』の50周年記念盤におけるグリン・ジョンズ・ミックスの「ゲット・バック」と、状況や意味合いなどは異なるものの、〝化粧以前のスッピン〟というところでは似た位置付けの音源といえる。だからやはりこれを世に出したのは快挙と思えるのだ。ちなみにラフ・ミックスそのままなので、まだ最終的な曲順が決まっていなかったのだろう、完成形とは曲順がかなり異なっている。また「愛しのヘレン」は未収録だ。

CamScannerでスキャン

それでは、1曲ごとに完成形との主な違いを挙げていくことにする。まず1曲目、完成形と同じタイトル曲の［2］①からしてかなりの数の違いがある。完成形だと出だしが真ん中と右チャンネルのツイン・ギターで始まるが、ここでは最初のワン・フレーズだけ右からの1本しか鳴っておらず、すぐツインになるという流れ。この曲は中間部のゴージャスなオーケストラが目立っていたわけだが、それがまったくなく、ツイン・ギターの絡みとキーボードだけでうねりを生み出している。その直後にアコースティック・ギターが中心となって走り出し、完成形ではボールのヴォーカルに絡むようにしてデニー・レインのギターが装飾的な味付けをしているが、それがまだ入っていない（3分40秒あたりでボールがギター・フレーズを口真似しているような甲高い声も聞こえる）。だからとてもシンプルでプリミティヴな演奏だ。さらにはヴォーカルも異なる部分がいくつかある。後半の3分あたり、完成形だと"We're Searching every one"の後に"Band on the run"を4回繰り返すのだが、ここでは2回繰り返した後に"ウッ"というトチったような声が入って後の2回は歌われず、次の"Well

the underdog"へとなだれ込んでおり、失敗テイクと思われる。エンディング近くではボールのヴォーカルが完成形にはない"オー、イエー"、"フゥー"、"イエーイエー"などのシャウトを繰り返し、ノリノリだ。

［2］②はこの曲の特徴的なボンゴが完成形だと完全に右チャンネルに振られていたが、ここではやや左寄りの奥まったところで鳴っており、全体としてもおおむね左に偏った音像でバランスが悪い。そのあたりが完成形ではしっかり修正されている。またエンディング近くでリンダ・マッカートニーのシンセサイザー・ソロが左→右→左と揺れていくわけだが、それが真ん中のやや奥まった位置で動かずに鳴っている。続く［2］③は冒頭から随所で活躍するストリングスがまだ入っていない状態で、そのぶんデニーのダイナミックに躍動するギターが完全に主役の曲になっている。

次の［2］④も、オーケストラとサックスによる分厚いイントロが絶大なインパクトを放っていたが、ここではそれがないため、ライヴ感の強いダイナミックなバンド・サウンドそのものが際立った印象だ。加えて、完成形だと間奏の2分3秒あたりからピアノ・ソロに続いて入るシンセ・ソロがまだなく、ギターが目立っている。さらにはエンディングのサックス・ソロもなく、ボールがそのサックスのフレーズを口真似するかのように"ファンファンファン、イォ～"などと口ずさんでいる。［2］⑤はサビ部分の最後にあたる"Bluebird Alba"に絡んで右からカウベルが大きく鳴っていたが、それがかなり引っ込んで音も小さめ。また完成形では間奏でサックス・ソロと、それに絡む"And at last we will be free"などのヴォーカルが入っていたが、そのどちらも入っておらず、アコギ主体の演奏が淡々と続くのみ。また、曲終わりのギリギリ最後のところで、誰かがなにかをつぶやいている声が消されずに残っている。

演奏力そのものがむき出しに

後半（アナログのB面）に移ると、［2］⑥は完成形だと二度にわたって短めのサックス・ソロが挿入されるが、ここではどちらも入っていない。その二度目に該当する3分22秒あたりでは、完成形ではサックスとハモるように鳴るギター・フレーズが、単体となって目立っている。また、最初のブレイクの後の1分40秒あたりで"ホッ、ヘイホー"の"ホッ"が抜けていたり、完

CamScannerでスキャン

成形だと後半にポールが"What's use of hurrying"の後に"no use"という合いの手っぽいシャウトを二度入れているが、そのどちらも入っていない。

7曲目からはアルバムのクライマックスとなる重要曲が2曲続く。[2]⑦はポールのヴォーカルまったくなしのインスト・ヴァージョン（コーラスは入っている）。この曲はなんといっても終盤のオーケストラで上り詰めていくのがキモなわけだが、それが入る前の状態で、完成形だとオーケストラに埋もれてしまっていたデニーのギター・ソロ及びリンダのシンセ・ソロをクリアに聴くことができる（ただし、3分43秒から入るギター・ソロの頭の部分がカットされてしまっており、入り方が不自然）。両者がジャム・セッションっぽくソロを応酬し、どんどん熱を帯びていくような演奏だ。バンド・サウンドのみでエンディングまで完奏するものの、終わり方がいささかショボい。最後の「バンド・オン・ザ・ラン」パートは入っていない。次の[2]⑧は、最初の"Drink to me"のヴォーカルが完成形よりも前に出ていてかなり生々しい。めまぐるしく変化する曲構成やエディットはできあがっているが、「ジェット」パート以降で活躍するストリングスやホルンがまったく入っていない。1分34秒あたりのラジオのアナウンス風SEや3分50秒過ぎの酒場の賑わいのようなSE、といった装飾類もなし。その酒場の部分では、完成形にはない口笛やポールのハミングなど生声の類いがかなり入っていて、エンディングの「ミセス・ヴァンデビルト」パートでも"イザデイザデ～、ホー、マンボ～"などのラテン調の奇声が聴こえたりする。

そしてラストの[2]⑨。ヘヴィなギター・ロック的な曲だけにオーヴァーダブは皆無なのだが、全体の構成が違う。完成形では平メロ→サビ、平メロ→サビ、ときたところでサビがもう1回あり、その後、最初の平メロ→サビに戻る、となっているが、ここではその真ん中のサビの繰り返しがなく、平メロ→サビを4度繰り返す、というシンプルな構成になっている（歌詞でいえば一番→二番→一番→二番で、完成形とは違い二番の歌詞が二度出てくる）。真ん中部分の間奏が若干短く、全体では7秒ほど長い（4分50秒→4分57秒）。そのサビ部分の"Let Me Roll It..."でのポールのダブル・ヴォーカル的なコーラスが、完成形だと真ん中に集められて重層的になっているのだが、ここでは左右に振り分けられていっそう広がりのある音像になっている。そのためコーラス部分もクリアに聴くことができ、3分以降の後半部分ではかなりエモーショナルにシャウトしているのがわかる。それと消し忘れっぽいギターの音があり、イントロの15秒のところと、後半の4分4秒の2カ所で、断片的なギターが残っている。さらにはエンディングが若干長く、完成形よりもきれいにフェイド・アウトしており、最後にオルガン・ソロが少しだけ聴ける。もうひとつ、このヴァージョンは全体的にヴォーカルのエコーがきつめで、完成形の方がずっとナチュラルだ。

総じて、オーヴァーダブで多彩な装飾を施す前の、バンドとしての演奏力そのものがむき出しになった音源といえるだろう。3人だけになってしまった状態とはいえ、ここでのウィングスのパワフルでツボを押さえた演奏はやはり素晴らしく、特に「1985年」でのグルーヴィーに転がっていくプレイや「ジェット」でのワイルドで粗野なバンド・サウンドなどは、今聴いても唸らされるものがあるし、いわゆるジャム・バンド的な側面も大きな魅力と思える。こうした試みは今後も期待したい。

CamScannerでスキャン

追悼 デニー・レイン

“ポールの片腕”にとどまらない豊潤なキャリアを振り返る

文＝若月眞人

©1973 MPL Communications Ltd / Photographer: Clive Arrowsmith

23年12月5日、デニー・レインが亡くなった。新型コロナウイルスからの回復後に発症した間質性肺疾患で闘病を続けていたという。遡って11月27日にはウィングス時代の同僚だったデニー・サイウェルとローレンス・ジューバー、ミッキー・ドレンツ、ピーター・アッシャー、ジェレミー・クライド（チャド&ジェレミー）らが集まり、治療費を募る慈善公演が開催されていたが、友人らの願いも空しく、それから十日足らずでレインは79年の生涯を閉じたのだった。

国内外を問わず、その死去を伝える記事の大半はレインを元ムーディー・ブルース、元ウィングスという肩書で紹介していた。それは間違いではないし、実際、レインの代表曲といえばレインが歌った前者の「ゴー・ナウ」と、ポール・マッカートニーと共作した後者の大ヒット曲「夢の旅人」ということになるが、熱心なファンであればそれだけの人ではなかったこともご存知だろう。以下、追悼の意を込めてレインのキャリアを駆け足で振り返っていこう。

多くのバンドで主軸を担った60年代

デニー・レインことブライアン・フレデリック・ハインズ（44年10月29日、バーミンガムの生まれ）が“ジョニー・ディーン”を名乗り、最初のリーダー・バンド：ジョニー・ディーン&ザ・ドミネイターズを結成したのはビート・ブーム前夜の62年のこと。ジャンゴ・ラインハルト（ラインハルトの両親と同様、レインの祖母もロマだったという）の音楽に感化され、11歳でギターを弾き始め、このころ既に曲作りにも手を染めていたレインだが、最大の関心はポップ・スターとして成功を収めることにあり、実際、当時のステージでは担当楽器のギターやハーモニカそっちのけでバク転や側転を披露することもあったらしい。

そうしたギミックも奏功し、ドミネイターズはまずまずの人気を得たが、62年秋、レインは生涯のステージ・ネームとなるデニー・レインを名乗り、新たにデニー・レイン&ザ・ディプロマッツを結成。のちのムーヴ～エレクトリック・ライト・オーケストラのベヴ・ベヴァンがドラマーを務めたことでも知られるこのバンドでも、彼は自身を含むメンバーの髪を金髪で統一したり、短期間ながら、エルヴィス・プレスリーの物真似で評判をとっていたニッキー・ジェイムズ（レインらより早くレコード・デビュー。その後、ムーディー・ブルース

CamScannerでスキャン

のスレッショルド・レーベルと契約を交わしている）を〝フロントマン〟に迎えてみたりと、注目を集めるべくさまざまな手段を試みているが、それも無駄ではなかったのだろう。ディプロマッツはやがて地元バーミンガムで最も有力なソウル／R&Bバンドの一つに数えられるまでになり、63年7月には同地で開催されたビートルズの公演の前座に抜擢。同年初頭にはアビー・ロード・スタジオでオーディションを兼ねたレコーディングも経験している。この際に録音されたレインの自作曲の一つ「フォーエヴァー・アンド・ア・デイ」は、40余年を経て、ムーディー・ブルースの『クラシック・アーティスツ』（06年）で陽の目を見たが、レインとディプロマッツは、結局レコード・デビューには至らず、閉塞感を覚えたレインは64年4月のステージをもってグループと袂を分かつ。

独立に先立って、レインはR&Bプリーチャーズなるバンドを組んでいたが、64年5月にはレイ・トーマス、マイク・ピンダー、R&Bプリーチャーズのメンバーだったグレアム・エッジ、クリント・ウーウィックと新たなバンドを結成。幾度かの変更を経てバンド名はムーディー・ブルースに落ち着く。のちにムーヴ、Tレックス等々を成功に導く気鋭のマネージャー：トニー・セクンダの助力もあってロンドンに進出した5人は、プロデューサーのアレックス・ウォートン（元モスト・ブラザーズのアレックス・マレー）を介してデッカと契約。64年9月に「スティール・ユア・ハート・アウェイ」を発表する。ボビー・パーカーの楽曲を取り上げたこのデビュー・シングル（B面にはレインとピンダーのオリジナルを収録）は不発に終わるも、同年11月にリリースされたベシー・バンクスのレパートリーのカヴァー「ゴー・ナウ」は英チャートで首位、アメリカでも10位に達する大ヒットを記録。ムーディー・ブルースはブレイクを果たし、この曲のレコーディングをメンバーに提案したフロントマン：レインは宿願だったポップ・スターの仲間入りを果たしている。ポール・マッカートニーとの交流が深まったのもこの時期だった。

65年2月のシングル「アイ・ドント・ウォント・トゥ・ゴー・オン・ウィザウト・ユー」（オリジナルはドリフターズ）を最後にウォートンとバンドの関係は終了。以降、彼らのプロデュースはデニー・コーデルが手がけることになり、数カ月後にはマネージャーもまたブライアン・エプスタインに交代している。65～66年にかけて、レインとピンダーの共作から成る3枚のシングルを発表するも、いずれもマイナー・ヒットに終わり、66年10月にレインはバンドを脱退。周到に準備を進めていたのだろう。既にデッカとのソロ契約も整いつつあり、時を同じくしてムーディー・ブルースから手を引いたエプスタインとコーデルからのサポートも内定。やがてヴァイオリニスト2名、チェリスト2名とドラマー、ベーシストから成るバック・バンド：エレクトリック・ストリング・バンドも編成された。

ストリング・セクションを含む構成からしばしば後年のエレクトリック・ライト・オーケストラとの類似性が指摘されるエレクトリック・ストリング・バンドだが、クラシック畑出身の4名と居並ぶリズム・コンビの顔触れも特筆すべきもので、ドラマーは元プリティ・シングスのヴィヴ・プリンス、結成当初のベーシストは――英ロック・マニアならご存知であろう――あのマイケル〝ビンキー〟マッケンジーが務めていた。マッケンジーは66年春に早くも脱退。後任のクリフ・バートン（元ブルー・フレイムズ）も半年ほどでアンディ・リーに交

CamScannerでスキャン

作するなど、ラインナップは流動的で、その変遷理由ゆえに生演奏時の技術的なトラブルもすくなくなかったが、レインのこの独創的な試みは関係者の関心を喚起。バンドはさまざまな会場に招かれ（67年8月のナショナル・ジャズ・アンド・ブルース・フェスティヴァルにも出演している）、その特異な演奏を披露している。

いずれもチャート入りは逃したものの、この間にレインが発表した2枚のシングル――ジョン・ポール・ジョーンズにストリング・アレンジを委ねた67年4月の「セイ・ユー・ドント・マインド」、68年1月の「トゥー・マッチ・イン・ラヴ」――はメディアや同業者から好意的な評価を受け、キャッチーな後者はムーヴがステージでカヴァー。前者もまた発表から間もなくゾンビーズがレパートリーに取り入れている（72年にはコリン・ブランストーンのカヴァー・ヴァージョンで英15位のヒットを記録）。

発表を見送られたサード・シングル「ホワイ・ディド・ユー・カム」（及び同曲を含む3枚のカップリング・ナンバー）や近年音盤化された放送用音源を含め、この時期にレインが残した音源はそのキャリアにあってもとりわけ強力だったが、ヒット曲なしにバンドを維持することは難しく、68年をもってバンドは解散。デッカとの契約も終了し、予定されていたアルバムも発表されずじまいだった。

ウィングスを離れてソロ活動に転向

レインは当面のプランもないままスペインに渡り、数カ月後に帰国。それから間もなくトニー・セクンダからある提案を受ける。当時の彼は、ムーヴを脱退し、同郷のバンド：アグリーズに関わっていたトレヴァー・バートンと、そのアグリーズの4人――スティーヴ・ギボンズ、デイヴ・モーガン、リチャード・タンディ、キース・スマート――から成るバンドの結成を計画していた。67年のエプスタインの急死を受け、レインのマネージメントを引き受けていたセクンダは、ボールズを名乗るこのグループへの合流を彼に促している。

面々とは気心の知れた間柄だったレイン（同じころ彼とバートンはまだリック・グレッチ加入前のブラインド・フェイスのレコーディングにも連れ立って参加していた）はこれを承諾。〝第二のトラフィック〟を狙っていたとされるセクンダは、彼らに似合いのコテージを用意し、バンドはそこで共同生活を送りながら、トラフィック所縁のジミー・ミラーのプロデュースの下、リハーサルと断続的なレコーディングを重ねていくことになる。しかしながらそんな矢先、モーガン、タンディ、スマートが相次いで離脱（タンディとスマートはその後それぞれエレクトリック・ライト・オーケストラ、ウィザードに合流した）。スマートに代わるドラマーとして加わった元スプーキー・トゥースのマイク・ケリーもほどなくして古巣に舞い戻り、その穴はアラン・ホワイト（ほどなくプラスティック・オノ・バンドに招集されることになる）が埋めている。

そんな不安定な状況と、お決まりの薬物とアルコールの問題、予算を巡るセクンダとミラーの決裂などからボールズは数カ月で解散。71年に至って、バートンの作／歌唱による「ファイト・フォー・マイ・カントリー」と、レインとバートンの歌唱をフィーチャーしたレインとホワイトの共作「ジェニー・スロウ・ダウン」をA／B面に配したシングル（仏盤ではA面を同一曲の別ヴァージョン、B面がバートン作の「ハウンド・ドッグ・ハウリング」に差し替え）が出されたが、完成したとされるその他のトラックはいまもって発表されていない。

CamScannerでスキャン

その後もしばらくレインはバートンと活動を共にしていたが、69年暮れにジンジャー・ベイカー（『バンド・オン・ザ・ラン』との関わりはよく知られている通り）から誘いを受け、ジンジャー・ベイカーズ・エア・フォースに加入。錚々たるメンバーが揃ったバンドで、レインは唯一のシングル「マン・オブ・コンスタント・ソロウ」の編曲とリード・ヴォーカルを担うなど厚遇を受けたが、70年暮れに発表される『ジンジャー・ベイカーズ・エア・フォース2』（クレジット上は客演扱いながら、同作に収録されたかつての持ち歌「アイ・ドント・ウォント・トゥ・ゴー・オン・ウィザウト・ユー」でレインはリード・シンガーを務めている）の完成を待たずして脱退。ソロ活動の再開を念頭に、ロバート・スティグウッドら関係者との接触を重ねていく。

Linda McCartney
"Wide Prairie"
MPL/Parlophone 7243 4 97910 2 2
(CD) [1998]

マッカートニーからバンドへの加入を打診されたのはそんなころのことで、これを快諾し、ウィングスのメンバーとなったレインは、以来およそ10年に亘ってマッカートニー夫妻とバンドを支え続け、マイケル・マクギアの『マクギア』（74年）、ジョージ・ハリスンの「過ぎ去りし日々」（81年）といった作品にも協力するなど、常に夫妻の傍らにあった。しかし、そんなレインも81年にウィングスからの脱退を表明。レインの参加が認められるマッカートニーのアルバムは『パイプス・オブ・ピース』（83年）をもって途絶え、両者の共演曲を含む〝新作〟はウィングス時代の録音を含むリンダ・マッカートニーの遺作『ワイド・プレイリー』（98年）が最後になった。

ウィングスを離れたレインはソロ・アーティストとしてレコーディングやコンサートを続ける一方、他アーティストの作品や企画色の濃いプロジェクトにも参加。新作の発表が途切れがちになった90年代以降は、いわゆるジョイント・コンサートにも積極的に出演し、90年代後半から00年代初頭の数年間は元ステッペンウルフのニック・セント・ニコラスが組織したワールド・クラシック・ロッカーズのコンサート・ツアーに同行（このツアーではサイウェルや同郷のスペンサー・デイヴィスらと共演）。新しいところではトッド・ラングレン、ジョーイ・モランドらと〈イット・ワズ・フィフティ・イヤーズ・アゴー・トゥデイ：アー・トリビュート・トゥ・ザ・ビートルズ〉と銘打ったツアー（22年）も行なっている。また、06年には特別ゲストとしてアラン・パーソンズ・ライヴ・プロジェクトの来日公演にも同行。ウィングスやビートルズ関連のイヴェントにもたびたび出演している。

〝ポールの片腕〟という経歴や過去の名声に頼ったこの類の仕事は、野心に溢れた往時の彼を知る者には不似合いにも思え、些か寂しくもあった。しかし当のレインは自身の歩みに満足し、マイ・ペースな活動を続けることを楽しんでいたのだろう。18年にはムーディー・ブルースの一員としてロックの殿堂入りも果たし、かつてのバンドメイトや後任のジャスティン・ヘイワードらとともに授賞式に出席しているが、そのときのレインの笑顔はなんとも幸せそうだった。若き日に思い描いた展開とは違っていたかもしれないが、いつもギリギリのところでツキが巡ってくる――得難い仲間に恵まれた幸運な人生だったのだと思う。

CamScannerでスキャン

Denny Laine
デニー・レイン重要アルバム選

選・文＝若月眞人

＊品番に特記がないものはLPです

The Moody Blues
"The Magnificent Moodies"

Decca LK4711（mono）
［1965］

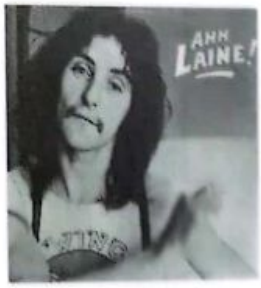
デニー・コーデル制作による新曲とヒット曲「ゴー・ナウ」で構成された1stアルバムで、米国産の楽曲のカヴァー8曲と、レインとマイク・ピンダーの共作4曲で構成。レインはうち10曲でリード・シンガーを務め、ギタリスト／ハーモニカ奏者としても達者なところを見せている、メロウな「ゴー・ナウ」の成功を受けて発表された本作だが、聴きどころはハイ・テンションな歌唱と演奏が楽しめるソウル／R&Bナンバー。わけてもサニー・ボーイ・ウィリアムスン「バイ・バイ・バード」のカヴァーは出色で、フランスではチャートを記録した。

Ginger Baker's Air Force
"Ginger Baker's Air Force"

Polydor 2662-001
［1970］

レインとともにバーミンガム勢躍進の礎を築いたスティーヴ・ウィンウッド、グレアム・ボンド（ジンジャー・ベイカーのかつてのバンマス）ら総勢10名から成るジャズ・ロック・グループの70年1月の公演の模様を収録したデビュー・アルバム（英37位／米33位）。リーダーのベイカー以下、技巧派揃いのバンドゆえレインの出番は限られているが、アフリカンな「アイコ・ビヤエ」ではブルージーなギター・ソロ、スタジオ・ヴァージョンがシングル・カットされた「マン・オブ・コンスタント・ソロウ」では陰影に富んだ歌唱で、自身の個性を印象付けている。

Denny Laine
"Ahh Laine!"

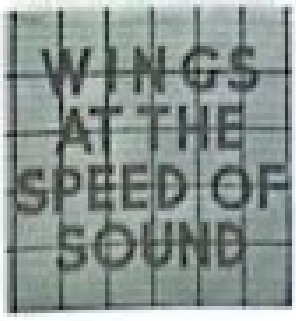


Wizard WZ2001
［1973］

『バンド・オン・ザ・ラン』にわずかに先んじて発表された初のソロ・アルバム。トニー・セクンダが設立したレーベルからのリリースだが、ブラム・ビート人脈の参加は、なし。ストーン・ザ・クロウズのスティーヴ・トンプソン（b）とコリン・アレン（ds）、のちのレオン・ラッセル夫人：メアリー・マクリアリー（vo）らをバックにロック、ソウル、カントリー等々の影響を滲ませたポップ・ソングを披露している。既にウィングスをあるべき場所だと感じていたからか"満を持しての"といった意気込みは感じられないが、この人の持ち味が最も端的に表われた一枚だ。

CamScannerでスキャン

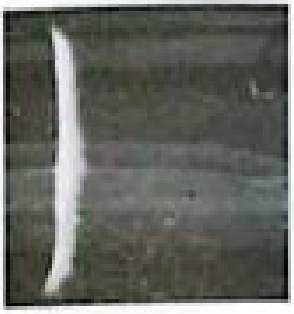
Wings "Wings At The Speed Of Sound"



MPL PAS10010 [1976]

ワールド・ツアーの合間を縫って制作されたウィングスの5枚目のアルバム（英2位／米1位）。メンバー全員にリード・シンガーとしての見せ場が用意された本作でレインは「君のいないノート」「やすらぎの時」の2曲を担当しているが、特筆すべきはウィングスのアルバムに収録された初のレインの単独作（それまでは"共作者"に留まっていた）となった後者。彼が残したロック・ナンバーの中でも群を抜く佳曲で、ポール・マッカートニー、リンダ・マッカートニー、ジミー・マッカロク（元ストーン・ザ・クロウズ）らの創星に富んだサポートにも耳を奪われる。

Wings "Wings Over America"



MPL PCSP720 [1976]

レインにとって生涯忘れられない思い出になっていたであろう、76年の全米ツアーのハイライトが記録されたライヴ盤。LP3枚組の大作だったが、英チャートで8位、アメリカでは首位に達している。レインの最高の瞬間は、質問の余地なく、ピアノの前に陣取り、往時以上に説得力のある歌唱を披露する「ゴー・ナウ」だが、サイモン&ガーファンクルのカヴァー「リチャード・コーリー」（かつてゼムも取り上げていた）を含むその他の3曲でもメイン・ヴォーカルを担当。各種ギター、ベース、ハーモニカ等々も小器用にこなし、全編で存在感を放っている。

Denny Laine "Holly Days"

EMI EMA781 [1977]

ポールの会社MPLコミュニケーションズによるバディ・ホリー作品の出版権の買収に伴って企画されたホリーの楽曲（及び共作曲）のカヴァー集。北米や日本では78年に発売された。当初はナッシュヴィルで現地のミュージシャンと録音する予定だったが、プロデューサー候補のレイ・スティーヴンスが多忙だったため計画を変更。ポールが独力で制作したベーシック・トラックにレインとリンダがヴォーカル・パートなどを加え、完成している。リズム・ボックスの使用も目立つローファイな作風だが、レインの人懐こい歌声との相性は意外に悪くない。

Wings "London Town"

MPL PAS10012 [1978]

英2位／米4位という成績を残したウィングスの6作目のスタジオ・アルバム。制作半ばでのマッカロクとジョー・イングリッシュの相次ぐ脱退、さらにリンダの結婚／出産という事情も重なり、ポールとレインの二人によって仕上げられている。そうした経緯ゆえにレイン色の強いアルバムと言われることも多い本作だが、実際、単独作こそないものの、レインは表題曲を含む5曲にポールの共作者としてクレジット。フォーキーな「チルドレン・チルドレン」と、「子供に光を」でリード・ヴォーカルを任され、後者ではスパニッシュ・ギターの腕前も披露している。

CamScannerでスキャン

Wings
"Back To The Egg"

MPL PCTC257
[1979]

ウィングスの7作目にして最後のスタジオ・アルバム。有名どころが大挙参加した「ロケストラのテーマ」、シングル・カットされた「ゲッティング・クローサー」（レインとポールのツイン・ヴォーカル版も録音されるが未採用に）のような華やかなロック・チューン、ニュー・ウェイヴ調のアグレッシヴなナンバー、ポールのソロ・アルバムに似合いそうなメロディアスな小品等が混在といった雑然とした作品だが、レインもパブ・ロック風味の自作曲「アゲイン・アンド・アゲイン・アンド・アゲイン」を静かに披露。楽し[illegible]

Denny Laine
"Japanese Tears"

Scratch SCRL5001
[1980]

ウィングスの活動停止を受けて発表されたソロ第3弾。ツアーの中止を嘆く日本のファンに着想を得たという表題曲（ありがちながら、旋律は中華風）のように、短命に終わったデニー・レイン・バンドのメンバー（ドラマーはウィングスのスティーヴ・ホリー）らと録音した新曲、から、77年のウィングスの未発表曲「アイ・ウッド・オンリー・スマイル」（後年、ウィングス名義の『別ヴァージョン』が発表）、レインが全面録音を仕上げたトラックまで雑多な音源で構成された作品だが、甘[illegible]

Denny Laine
"Anyone Can Fly"

Polydor 2383 389
[1982]

ノーマン・ハリケーン・スミスのプロデュースのもと、レインのバンドのメンバーだったゴードン・セラー（元ペガーズ・オペラ）、クリス・スレイド（元マンフレッド・マンズ・アース・バンド〜ユーライア・ヒープ）らをバックに録音されたソロ4作目アルバム。レゲエとカントリーの要素が混在する風変わりな「ランニング・ラウンド・イン・サークルズ」以下、それぞれに趣向を凝らしたトラックが登場するが、きわめつきはタイトル・トラック。ギターの弾き語りを基調にしたフォーク調の作品で、その表題からウィングス[illegible]

Denny Laine
"Wings On My Feet"

President PTLS1087
[1987]

リック・ウェイクマン、スレイドらの参加を得た、通算6作目にして最高のソロ・アルバム。前作にあたる85年の『ホームタウン・ガールズ』（こちらには、この時期からレインとたびたび共演しているエディ・ハーディン、マギー・ベルらが参加）は、コンテンポラリーなサウンドに挑むも、アレンジ等々の詰めの甘さから不首尾に終わった残念な一枚だったが、ウエイクマンらの適切なサポートを得た本作ではそうした試みが見事に成功。レインの歌唱もいつになく安定しており、シンセサイザーを効果的に使用したモダンなポップ・ロックによく似合っている。

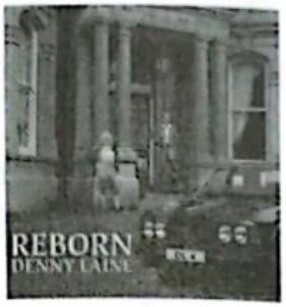
CamScannerでスキャン

Denny Laine "Master Suite"

Thunderbolt THBL058 [1988]

レインがほぼ独力で完成させたギター・インストゥルメンタル・アルバム。同年のロック・アルバム『ロンリー・ロード』と一対を成す、ニュー・エイジ風の静謐な作品だ。60年代にスペインに滞在した際、レインは"ロマのように暮らしながら"現地の音楽家からフラメンコ・ギターの手解きを受けたというが（バック・カヴァーには"スペインでの懐かしい思い出に"という文言も）、ガット・ギターを使用したエキゾチックなフレーズも本作を魅力的にしている。08年には本盤の収録曲の一部を改題し、曲順を改めた『ザ・ブルー・ミュージシャン』が発売された。

Denny Laine "Reborn"



Scratch SCRCD013 [1996] (CD)

シンセサイザーを駆使し、独力でオケを用意した前作『オール・アイ・ウォント・イズ・フリーダム』（90年）の未熟さを省みてのことだろう。レインは『ホームタウン・ガールズ』を手がけたニック・スミスを再び共同プロデューサーとして起用。スミス所縁のアラン・ウォーマルド（g）、元トレメローズのレン"チップ"ホークス（vo）らを迎え、この10thアルバムを制作している。結果的に生前最後のソロ作になった本作だが、仕上がりは上々。随所に聴けるブルージーなギターや電子楽器の使用も効果的な、集大成というに相応しい作品になっている。

Denny Laine "Wings At The Sound Of Denny Laine"

Scratch SCRCD016 [1996] (CD)

全曲新録による"デニー・レイン、ウィングスを歌う"、あるいは"トリビュート・トゥ・ウィングス"といった内容の"企画もの"だが、「セイ・ユー・ドント・マインド」「ゴー・ナウ」、ビートルズの「ブラックバード」といったウィングスのステージで取り上げられていた"非ウィングス曲"、ムーディー・ブルース時代のレインのレパートリー「キャント・ノーバディ・ラヴ・ユー」（原曲はソロモン・バーク）のリメイクも選ばれている。大半は原曲に忠実な歌唱／演奏ゆえ新味は皆無だが、レインとウィングスのファンなら好奇心をそそられるに違いない。

Denny Laine & Chris Hill "Arctic Song"

Ribble RR04 [1998] (CD)

『アークティック・ソング』は王立地理学会の会員だったクリストファー・ヒルの体験を基に、ヒル（作詞）とレイン（作曲）によって書かれ、97年にストーニーハースト大学で初演されたミュージカル。本作は、同作用の音楽を纏めたもので、トラッド・フォーク調からモダンなビートと電子音に支配されたコンテンポラリーな楽曲まで多彩なトラックが並んでいる。制作、プログラミング等々を担当するポール・インダー・キミスターやジャッキー・ダンクワース（vo）の活躍が際立つも、収録曲の大半を担うレインも常以上に表情豊かな歌唱で楽しませてくれる。

CamScannerでスキャン

特集

ザ・ポーグス ～シェイン・マガウアン

パンク・ロックがもたらしたたぎる衝動と、アイルランド音楽の芳醇さを見事融合させた、唯一無二の音楽性を誇るザ・ポーグス。彼らのメイン・ソングライター／ヴォーカリストであり、バンドの顔だったシェイン・マガウアンが2023年11月30日に亡くなりました。血の通った人間の営みを胸に響く歌詞に仕立てた街角の詩人が送った人生は、彼の生み出した音楽のように波乱万丈でユーモアと悲哀に満ちたものでした。早すぎたその死を悼み、キャリアの中心だったザ・ポーグスを軸にして、その足跡と彼の遺した作品を振り返ります。

1988年のサード・アルバム"If I Should Fall From Grace With God"発表当時のザ・ポーグス。下段左から、ダリル・ハント(b)、フィリップ・シェヴロン(g)、シェイン・マガウアン(vo, g)、ジェム・ファイナー(banjo, mandola, sなど)、上段左からスパイダー・ステイシー(tin whistle, vo)、アンドリュー・ランケン(ds)、テリー・ウッズ(cittern, concertina, mandolaなど)、ジェイムズ・ファーンリー(acc, p, g, celloなど)

CamScannerでスキャン

ファースト"Red Roses For Me"（1984年）発表当時。左からスパイダー・ステイシー、ジェイムズ・ファーンリー、ケイト・オリオーダン(b)、ジェム・ファイナー。手前がシェイン・マガウアン

ザ・ポーグス ～シェイン・マガウアン・ヒストリー

伝統歌を奔放な解釈で奏でたパンク・バンドと都会に生きる庶民の心情を歌った詩人の物語

文＝五十嵐正

昨2023年11月30日、ダブリンでザ・ポーグスのシェイン・マガウアンが肺炎のために65歳で亡くなった。昨年、脳炎と診断されて長期入院していたが、11月23日に妻ヴィクトリアが退院を発表し、数日後に結婚記念日を祝って「まだ生きていることに感謝している」と語ったと伝えられたばかりだった。シェインが長年、酒とドラッグの問題を抱えていたことはよく知られており、04年に彼は〝25年ほど前〟に余命6週間を宣告されたと明かしていた。だから、45年ほど長く生きたとも言えるわけだが、その死の知らせは突然であり、彼とポーグスの音楽、アイルランドの音楽を愛する我々は深い悲しみに暮れることになった。

12月8日の葬儀には、ヒギンス大統領も出席し、ポーグスをはじめ、ミュージシャン仲間が多数集まって彼の名曲の数々を歌い故人を送ったが、長時間に及んだ式を複数のチャンネルがずっと中継するなど、まさに国をあげてシェインの死を悼んだ。

〝反逆者〟に憧れた少年

シェイン・マガウアンは、1957年12月25日にイングランド南東部のケント州タンブリッジ・ウェルズ近郊で生まれた。ア

CamScannerでスキャン

イルランド人の両親はより良い暮らしを求め英国に移住していた。ダブリン出身の父モーリスは衣料品の会社に職を見つけたが、文学と詩をこよなく愛する人だった。母テレーズは歌とアイリッシュ・ダンスの名手で、コンテストで受賞歴もある。子供たちにゲール語と英語の歌やバラッドを教えた。

一家はやがてタンブリッジ・ウェルズの郊外に家を買うが、息子は幼少期の大半を母の実家で過ごした。ティペラリー州ボリソケーン近郊にある素朴な田舎家で、週末には近所の人たちがたくさん集って、音楽、ダンス、飲酒を楽しむ場として地元では有名な場所だった。そんな田舎暮らしのなかで、シェインはアイルランド人のアイデンティティを見出す。また、彼はそこで5歳からギネスを呑み始めたとも言っていた。

母は息子の将来に大きな期待を抱き、地元の小学校ではなく、授業料のかかるホルムウッド・ハウスに通わせた。国語の教師は、11歳でドストエフスキー、D・H・ロレンス、そしてジョイスの『フィネガンズ・ウェイク』まで読む熱心な読書家である生徒の文才に驚いた。彼の作品の幾つかは学校の機関誌に掲載され、13歳で「デイリー・ミラー」紙のコンクールに入賞した。

12歳の時、彼はロンドンのウェストミンスター・パブリック・スクールへの奨学金を得る。英国で最も評価の高い学校のひとつで、首相6人を含む多数の著名人を輩出してきた名門だ。ところが、英国紳士の学校に入学したシェインは、さっそく容姿と強い訛りからいじめにあう。アイルランド人は長らく二等市民扱いされる差別を受けてきたが、身をもってそれを知ったのだ。

シェインはとても知的な少年だったが、学業の成績にはまったく興味がなかった。ブレンダン・ビーハンのような作家で歌手でIRAの闘士でアル中という〝反逆者〟に憧れた少年は、伝統を重んじる学校にはなじまなかった。15歳でドラッグ所持で逮捕されて退学処分となった。74年に入学したハマースミス・カレッジも早々にやめた。さらに、医者に処方されたバリウムの中毒になってしまう。彼は18歳の誕生日を含む半年間、精神科で入院治療を受けた。

そんな十代後半の月日に音楽が彼にとって重要になっていく。最初に衝撃を受けたコンサートは71年に観たモット・ザ・フープルだったというが、退院後は音楽と酒への情熱を満たすため、レコード店の店員やバーテンダーなどの仕事を転々として暮らしていた。そんなある日、彼は自分の進むべき道を見出す。セックス・ピストルズを観て、まさに啓示を与えられたのだ。彼はロンドンのパンク・シーンの混沌としたエネルギーに引き込まれていく。ファンジン〝Bondage〟を発行していた時期もあった。

しかし、舞台を見上げるよりも、そこに立ちたいと、彼は友人のバンド、ザ・ニップス（後にザ・ニップル・エレクターズと改名）に参加する。自称〝シェイン・オ・フーリガン〟はフロントマン兼ソングライターとなり、80年代初頭にパンクの火が消える前にロカビリーを取り入れた4枚のシングルを発表するも、話題にならなかった。

流行は移り行く。80年代に入ると、パンク・ムーヴメントからエネルギーが失われ、いわゆるニュー・ロマンティック・バンドの化粧とシンセのサウンドに道を譲った。だが、シェインには新しいコンセプトがあった。アイルランドの伝統音楽をパンクの反逆精神で演奏しようというのだ。

伝統歌に襲いかかるパンク・バンド

シェインは77年のラモーンズのライヴで出会って以来の友人、ティン・ウィッスル奏者のピーター〝スパイダー〟ステイシー

CamScannerでスキャン

と、82年に、最初は別々に終わったニュー・リパブリカンズ、続いてポーグ・マホーン（ゲール語で〝俺のケツにキスしろ〟という意味）を結成する。彼らに、ジェム・ファイナー（バンジョー）、ケイト・オリオーダン（ベース）、ジェイムズ・ファーンリー（アコーディオン）、アンドリュー・ランケン（ドラムズ）が加わった。

82年10月、ポーグ・マホーンはパブでデビューを飾る。パンクの影響とアイルランドの伝統楽器を融合させようとした演奏は〝混乱しているが、気骨はある〟と評された。結成時のメンバーは担当楽器をまともに演奏できなかったが、全員が熱心に学び、その騒々しいライヴはすぐに地元ロンドンで忠実なファンを獲得する。

シェインは伝統音楽といっても、チーフタンズやデ・ダナンのようなバンドはあまりにクリーンすぎると感じ、賑やかなパブ・セッションの雰囲気や、バンドのスタイルやレパートリーに影響を受けたダブリナーズの騒々しさを好んだ。そして、そのダブリナーズとの違いは〝もっと速く演奏し、もっと勢いがある〟。そんな彼らの取り組みを〝彼らはフォーク音楽に襲いかかり、襟首を掴んで階段から投げ落とした〟とビリー・ブラッグは評した。

84年に彼らはクラッシュのツアーで前座を務め、狂的なエネルギーのライヴはより広い注目を集める。自主制作で初のシングル「ダーク・ストリーツ・オブ・ロンドン」を発表後、エルヴィス・コステロやマッドネス、ダムドを送り出したインディ・レーベル、ステイッフと契約。ポーグスと名を改め、同年10月にデビュー・アルバム『赤い薔薇を僕に（Red Roses For Me）』を発表する。パンクのように演奏する奔放な解釈の伝統歌5曲と、自由を得た爽快感から貧困とホームレスに至るまでの移民の生活を描くデビュー曲「ダーク・ストリーツ・オブ・ロンドン」他、都会の片隅で生きる庶民の心情を歌うシェインの自作曲をミックスした内容は評判を呼ぶ。発売後すぐに、彼らはエルヴィス・コステロ&ジ・アトラクションズのツアーの前座に招かれた。バンドの認知度は高まり、コステロが次作のプロデューサーを買って出ることになる。

85年春、小生はロンドンでポーグスのライヴを観た。リチャード・トンプソンのコンサートで彼らが前座出演したのだが、その夜は悪名高い伝説となっている。

年齢が高めのリチャードの観客の冷めた反応に、ポーグスのファンというより、地元の仲間たちがいらだち、次々と舞台に上がり、モッシュ、ダイヴとやり放題。バンドも一緒に大騒ぎするハチャメチャな状況

初期のザ・ポーグス

CamScannerでスキャン

になったのだ。アイルランドの国旗も振られ、やがて舞台上の一団が肩を組んで歌い始めた。〝リチャード・トンプソン？ 一体全体どこのくそったれなんだよ？〟。

よく覚えているのは、係員に連れ出されるファンが近くを通ったときの様子だ。やってやったぜといった満足そうな表情に、当時の英国社会の片隅で鬱屈とした思いを抱える若者と、そんな彼らにとってのポーグスのようなバンドの意味を感じ取った。

ポーグスの創立メンバーの誰もアイルランド生まれではない。彼らはロンドンのバンドであり、その音楽には移民としての体験が刻まれていた。とりわけ当時はサッチャー政権期で、サッチャリズムに苦しんだ労働者階級としての体験が、アイルランド移民の反権威的な姿勢を強めた。シェインはそんな人びとの思いを伝える物語を語り、何世紀にもわたって別離や望郷、報われぬ愛などを歌ってきた伝統歌の心にとりつくようなメロディに乗せたのだ。

そんなシェインのソングライターの才能が開花したのが、フィリップ・シェヴロン（g）が加わり、コステロがプロデュースした2作目『ラム酒、愛、そして鞭の響き（Rum Sodomy & The Lash）』だ。コステロは彼らのやんちゃ臭さを残しつつも作品に焦点を当て、トップ20入りするヒット作にした。名曲「ブラウン・アイの男」などの充実した自作曲に加え、若い世代にも訴えかける作品に生き返らせた伝統歌もある。その多くはダブリナーズから学んだものだった。イワン・マッコール作「ダーティ・オールド・タウン」はもともと別の街について書かれたものだが、ポーグスが取り上げた後、ダブリンを指すと考えられるようになった。この2枚のアルバムで、シェインは現代の傑出したソングライターのひとりとして賞賛されることになる。

ケイトがコステロ夫人となるべく脱退。後任のベーシストにダリル・ハントが加わった。さらに、経験豊富なアイルランド人ミュージシャン、マルチ器楽奏者のテリー・ウッズ（元スティーライ・スパン）が参加したことで、バンドのサウンドは伝統的なものから、世界の他の土地の音楽への関心も窺わせるものに変化していく。

87年にポーグスはU2のツアーの前座を務め、ウェンブリー・スタジアムからマディソン・スクエア・ガーデンまでの大会場の舞台に立った。そして、同年のダブリナーズとの共演「アイリッシュ・ローヴァー」はアイルランドで第1位／全英第8位を獲得。2組のバンドは一緒にアイルランドと英国の人気TV番組に出演した。この頃には彼らは伝統と現代をつなぐリンクとなる重要なバンドだという認識も広がってきた。

しかし、ポーグスの名声と彼の曲に対する評価が急速に高まるにつれ、シェインの酒とドラッグは深刻な問題となってきた。他にメンバーのなかにも大酒飲みはいたが、彼は飲みっぷりが桁違いで、糸の切れた凧だった。彼は移動の飛行機やリハーサル、写真撮影、時にはコンサートさえも欠席するようになった。88年にはダブリンとロンドンで病院に担ぎ込まれる騒動も起こす。

次のアルバム『堕ちた天使（If I Should Fall From Grace With God）』はスティッフ倒産の結果、英国・欧州ではワーナー・ミュージック、北米ではアイランド・レコードから発売されることになった。プロデューサーにはロック界の売れっ子、スティーヴ・リリーホワイトを迎えた。

翌年初頭発売のアルバムに先駆け、87年末のホリデイ・シーズンに先行シングルとして発売されたのが、シェインとファイナーが数年かけて完成させた「ニューヨークの夢（Fairytale Of New York）」だった。

CamScannerでスキャン

1990年頃のザ・ポーグス

クリスマスのニューヨーク市を舞台にアイルランド移民のカップルの物語が見事な語り口で歌われる名曲中の名曲で、リリーホワイト夫人のシンガー・ソングライター、カースティ・マッコールとシェインの素晴らしいデュエットで歌われ、全英チャートでは2位、アイルランドでは首位を獲得。今ではいくつものアンケートや調査で史上最も愛されているクリスマス・ソングと認められている。何度も再発され、英国では通算300万枚以上を売り上げている。

『堕ちた天使』は彼らの創造力が最も発揮されたアルバムとなり、世界中で100万枚以上を売った。バンドはそのサウンドの幅を広げ、アイリッシュ／ケルティックだけでなく、ファイナーが中近東旋律から、スペイン風、スパイ映画音楽風までの様々な曲を書いて、多彩な内容になっていた。

続く89年のアルバムの表題が〝ピース・アンド・ラヴ〟というのは皮肉だった。その頃までにはポーグスの内部には平和も愛もほとんどなくなっていた。シェインの酒とドラッグに対する旺盛な欲求は、バンド内に緊張感をもたらした。頻繁に酔っぱらって舞台に立ち、ドラッグの霧の中で歌詞を忘れ、舞台から落ちることもあり、その予測不能の行動は大きな負担になっていた。

『ピース・アンド・ラヴ』は初めて伝統歌なし、全曲オリジナルで固めた内容だったが、シェインは半数の曲しか書いていない。体調が明らかに創作に悪影響を与えていた。一方、他のメンバーは今回もサウンドの幅を広げる試みをしていた。ビッグ・バンド・ジャズ風のインストで始まり、ソカにザディコのアコーディオンを合わせたような曲などがある。そして、シェインがポーグスと最後に録音したアルバムとなったのは、クラッシュのジョー・ストラマーがプロデュースした90年の『ヘルズ・ディッチ』で、「夏の日のシャム」他を収録する。

解雇、再結成、そして…

シェインは長年の飲酒に加え、ヘロイン中毒にもなっていたが、バンドは精力的な活動のペースを保ち続けた。彼の肉体と精神は過酷なツアーに耐えられぬところまできていた。何度も転倒してケガをしたり、

CamScannerでスキャン

車にはねられたりもした。薬物と酒の摂取が、これ以上続けば余命数週間と医師から告げられ、ダブリンのセント・ジョン・オブ・ゴッド病院で隔離されて治療を受けた。

彼に対するバンドの寛容さが薄れていったのも仕方がないだろう。91年夏の日本ツアーの途上でその日が遂にやってきた。列車内で呑む日本酒で泥酔して、シェインは4回のコンサートのうち2回を欠席した。

△WOMADフェスティヴァル▽出演で横浜に滞在中、シェインはホテルの一室に呼び出され、プロ失格とその任を解かれた。

後任はジョー・ストラマーが臨時で務めたあと、スパイダーが引き継いだ。残された7人のポーグスは93年に『ウェイティング・フォー・ハーブ』を発表するが、その後、ウッズとファーンリーの脱退やシェヴロンの体調不良での離脱。メンバーが半分くらい替わって、95年に7作目『ポーグ・マホーン』を発表したが、その翌年にファイナーが脱退を決めたときに、バンドの活動を止めるべきという判断がなされた。

シェインの方は、シェイン・マガウアン&ザ・ポープスを結成して、"The Snake"(94年)と"The Crock Of Gold"(97年)のアルバム2枚を発表した。ポーグスの音楽性の延長線上にありつつ、もっとロックぽい曲があったりもした。批評的にも商業的にもそこそこの成功を収めたが、酒とドラッグの消費の勢いは止まらず、シェインは胃潰瘍とアルコール性肝炎に苦しんだ。99年にシネイド・オコナーが、彼女の目の前でシェインがヘロインを吸引したと警察に通報したのは有名な話だ。

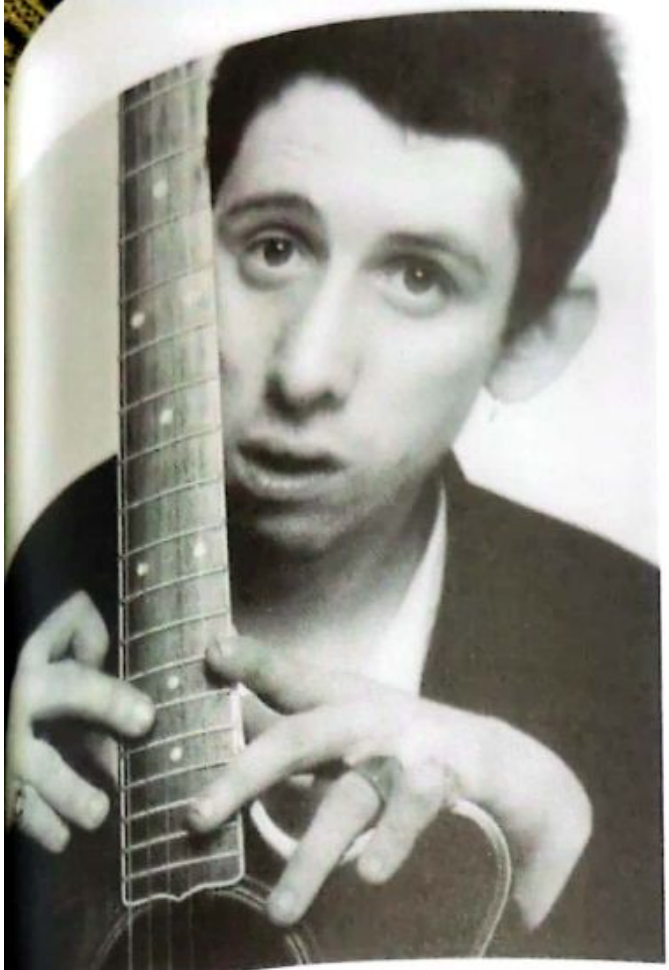
01年にポーグスはシェインを含む顔ぶれで再結成ツアーを開始する。その後も英国とアイルランドで定期的に演奏活動を続け、米東海岸や欧州各国でもツアーを行なった。結成30周年となる12年にはパリで収録されたライヴ・アルバムとヴィデオ"In Paris: 30th Anniversary"とボックス"30 Years"を発表したが、新曲や新しいスタジオ録音が届くことはなかった。13年にギタリストのシェヴロンが死去。ポーグスは14年夏に最後のライヴを行なった後、解散した。ベーシストのハントは22年8月に亡くなった。

その後、シェインは大きな舞台に立つことはほとんどなくなった。10年から11年にかけて、新しいバンド、シェイン・ギャングとダブリンのクラブで演奏したこともあったが、15年にダブリンのスタジオを出る際に転倒し、骨盤を骨折したことがきっかけで車椅子を使う生活となってしまった。

18年1月、ダブリンのナショナル・コンサート・ホールで、シェインの60歳の誕生日を祝うコンサートが開催された。U2のボノ、シネイド・オコナー、ニック・ケイヴ、ジョニー・デップなど、彼の友人たち、仲間たち、多くのミュージシャンが彼に捧げる歌や演奏を披露し、詩人でもあるヒギンズ大統領からシェインに生涯功労賞が贈られた。そして、20年にはそんな彼の人生を描いたジュリアン・テンプル監督のドキュメンタリー映画が作られ、22年に日本でも『シェイン 世界が愛する厄介者のうた』の邦題で劇場公開されている。

シェイン・マガウアンは、アイルランド音楽を知らない何百万もの人びとにその扉を開き、多くの同胞が卑屈になりがちだった時代に英国内のアイルランド人に誇りを植え付け、アイルランドそのものをクールな国にした。アイリッシュ・パンクというジャンルを独力で作り出す一方、そのスタイルを越えて、多くの人びとにインスピレーションを与えたソングライターでもあった。人生の裏側を見つめ、孤独、喪失感、後悔といった心の痛みを素晴らしく詩的に表現した曲はこれからも愛され続けるはずだ。

CamScannerでスキャン



ザ・ポーグス／シェイン・マガウアン＆ザ・ポープス・アルバム・ガイド

文＝小野島大

The Pogues "Red Roses For Me"

Stiff SEEZ55 [1984] (LP)

[A] ①Transmetropolitan ②The Battle Of Brisbane ③The Auld Triangle ④Waxie's Dargle ⑤Boys From The County Hell ⑥Sea Shanty ⑦Dark Streets Of London [B] ①Streams Of Whiskey ②Poor Paddy ③Dingle Regatta ④Greenland Whale Fisheries ⑤Down In The Ground Where The Dead Men Go

ロンドンで"ニップル・エレクターズ"というパンク・バンドをやっていたシェイン・マガウアン（VO）が、自分のルーツであるアイルランド民謡をパンクとミックスした音楽をやろうと思いつき、1982年にポーグスを結成。84年にリリースした1作目。

ファーストにして、既に揺るぎないオリジナリティを確立している。楽曲は全13曲中、シェインのオリジナルが7曲、残り6曲がトラディショナルなアイルランド民謡のカヴァーやアイルランドの作家の提供曲という構成だが、メロディアスで美しい楽曲に加え、どれも野放図で大衆的な活気とパンキッシュなエネルギーに満ちあふれ、痛快そのものだ。ポストパンクやニュー・ウェイヴの動きが完全に沈静化、U2が全世界的にブレイク、ザ・スミスが登場、ネオ・アコースティックの台頭で、よりナチュラルでオーガニックな方向にシーンが向いていた当時、インパクトは抜群だった。名曲A⑦に活写されるロンドンのストリートの情景がひどく生々しく切なく、心に沁みる。

CamScannerでスキャン

The Pogues
"Rum Sodomy & The Lash"
Stiff SEEZ58 [1985] (LP)

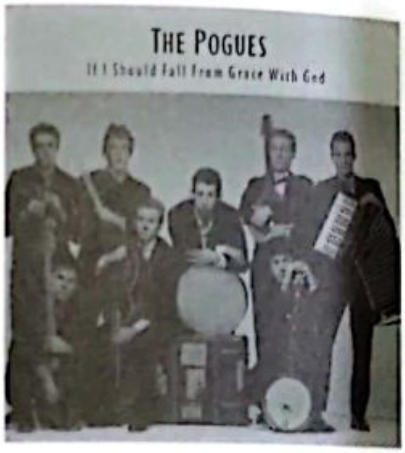
[A] ①The Sick Bed Of Cúchulainn ②The Old Main Drag ③Wild Cats Of Kilkenny ④I'm A Man You Don't Meet Every Day ⑤A Pair Of Brown Eyes ⑥Sally MacLennane [B] ①Dirty Old Town ②Jesse James ③Navigator ④Billy's Bones ⑤The Gentleman Soldier ⑥And The Band Played Waltzing Matilda

エルヴィス・コステロのプロデュースによる2作目。全英13位まで上昇するヒットとなった。

コステロは、自分の仕事はプロのプロデューサーにいじられる前に彼らの傷だらけの栄光をそのままキャプチャすることだった、と語っている。その言葉通り、ファーストで示されたポーグスの美点はそのままに、さらに磨きがかけられた。演奏と楽曲の充実は前作以上。見事な成長ぶりだ。全12曲中6曲がシェインのオリジナル曲で、英国フォークのイワン・マッコールのカヴァーB①は初めてアイルランドでヒットを記録した(チャート27位)。マッコールはシンガー・ソングライター、カースティ・マッコールの父親としても知られる。B⑥はスコットランド生まれのシンガー・ソングライター、エリック・ボーグルの反戦歌のカヴァー。第一次大戦に材をとり、戦場の悲惨を淡々と叙事詩風に綴る大作が、アルバムの最後を見事に締めている。

ケイト・オリオーダン(b)が後にコステロと結婚、バンドを脱退している。

The Pogues
"If I Should Fall From Grace With God"
Pogue Mahone NYR1 [1988] (LP)



[A] ①If I Should Fall From Grace With God ②Turkish Song Of The Damned ③Bottle Of Smoke ④Fairytale Of New York ⑤Metropolis ⑥Thousands Are Sailing [B] ①Fiesta ②Medley (The Recruiting Sergeant/The Rocky Road To Dublin/Galway Races) ③Streets Of Sorrow/Birmingham Six ④Lullaby Of London ⑤Sit Down By The Fire ⑥The Broad Majestic Shannon ⑦Worms

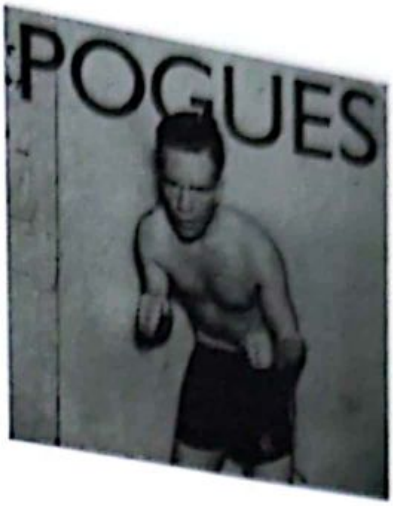
全英3位を記録、シングル・カットされたA④は2位まで上昇、現在に至るまでクリスマス・ソングの定番として愛されている。名実ともに彼らの代表作である。バンドの勢いを感じる快作だ。

前作でカヴァーを取り上げたイワン・マッコールの娘カースティがA④に参加し、シェインと息の合ったデュエットを披露、さらに彼女の夫のスティーヴ・リリーホワイトがアルバムのプロデュースを担当した。A④を始めアイルランド移民の心情に寄り添った歌が多くを占めるが、それは見事に普遍化されている。アイリッシュだけでなくトルコやスペイン音楽の照射をも受けた楽曲はさらに彩りと幅を増している。

ほとんどの曲は幾多のライヴを経て完成されていたため、リリーホワイトがやることはあまりなく、ただバンドの音をストレートに録るだけだったというが、ほんの少しサウンドにメリハリを加えることでバンドの歌と演奏をくっきりと立たせることに成功している。見事な傑作であり、80年代を代表する英国音楽作品だ。

CamScannerでスキャン

The Pogues
"Peace And Love"
Pogue Mahone WEA WX247[1989] (LP)

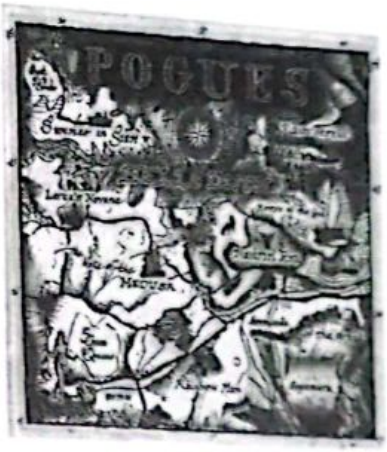


[A] ①Gridlock ②White City ③Young Ned Of The Hill ④Misty Morning, Albert Bridge ⑤Cotton Fields ⑥Blue Heaven ⑦Down All The Days
[B] ①USA ②Lorelei ③Gartloney Rats ④Boat Train ⑤Tombstone ⑥Night Train To Lorca ⑦London You're A Lady

前作の大成功を受け、1年半後にリリースされた通算4作目。前作に続き全英チャート5位の大ヒットとなり、バンドの絶好調ぶりを示した形となったが、実際はこの頃からシェインのアルコール耽溺による奇行と体調不良は、仕事に支障をきたすほどになっていた。これまで彼らのアルバムに必ず収録されていたアイリッシュ・トラッドのカヴァーがなく、全曲がメンバーによるオリジナル曲だが、その半数以上はシェイン以外のメンバーによるもので、シェイン以外のメンバーがヴォーカルをとる曲も多く収録されている。まるでシェインの不調を補うような他メンバーの奮闘だ。

サウンド面ではメンバーの嗜好が前面に出てきた分、中近東、アフリカなど、より幅広い音楽性が感じ取れ、とりわけジャズ色が強まっている。演奏は充実の極み。サウンドが全体に分厚くなり、前作に続きプロデュースを担当したリリーホワイトの小技も効いているが、構築性が強まった分、従来のイキイキしたライヴ・バンドらしさは後退した感も。

The Pogues
"Hell's Ditch"
Pogue Mahone 9031-72554-2[1990] (CD)



①The Sunnyside Of The Street ②Sayonara ③The Ghost Of A Smile ④Hell's Ditch ⑤Lorca's Novena ⑥Summer In Siam ⑦Rain Street ⑧Rainbow Man ⑨The Wake Of The Medusa ⑩House Of The Gods ⑪5 Green Queens And Jean ⑫Maidrin Rua ⑬Six To Go

ジョー・ストラマーがプロデュースした第5作。ジョーは以前、フィリップ・シェヴロン病欠のときの代打としてツアーに参加したことがあり、ザ・クラッシュ時代から付き合いのある友人でもあった。望みうる最高のプロデューサーだったはずが、しかし本作発表後にシェインは脱退。度を過ぎたアルコールとドラッグへの耽溺でまともにバンド活動が続けられない状態になっており、やむをえずの解雇だった。

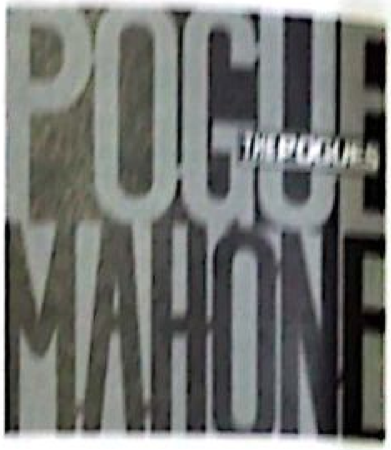
シェインは本作の全13曲中9曲で作曲に関わっているが、前作以上にアイリッシュ音楽色が薄れ、スペインや中南米への関心が深まっているようでもある。これはストラマーの影響かもしれないが、生涯アイリッシュ音楽しかやらないと誓ったはずのシェインは、この時点で既にザ・ポーグスを続ける意思が希薄になっていたのかもしれない。とはいえ90年イタリア・ワールド・カップの最中に制作されたという本作は、そうしたボーダーを越えた熱がアルバム全体を覆っているようでもあり、意外に出来は悪くないと思う。

CamScannerでスキャン

The Pogues
"Waiting For Herb"
WEA 4509 93463 2 [1993] (CD)

①Tuesday Morning ②Smell Of Petroleum ③Haunting ④Once Upon A Time ⑤Sitting On Top Of The World ⑥Drunken Boat ⑦Big City ⑧Girl From The Wadi Hammamat ⑨Modern World ⑩Pachinko ⑪My Baby's Gone ⑫Small Hours

The Pogues
"Pogue Mahone"
WEA 0630 11210 2 [1995] (CD)



①How Come ②Living In A World Without Her ③When The Ship Comes In ④Anniversary ⑤Amadie ⑥Love You 'Till The End ⑦Bright Lights ⑧Oretown ⑨Pont Mirabeau ⑩Tosspint ⑪Four O'clock In The Morning ⑫Where That Love's Been Gone ⑬The Sun And The Moon

CamScannerでスキャン

1991年7月、スイスのレザンでのライヴで、アルバムでいえば"Hell's Ditch"の頃、シェインがクビになる直前の演奏である。そんな時期だけに、シェインのヴォーカルはヨレヨレだ。歌い出しを間違え、リズムは外れるし、メロディもまともに追えていない。バンドの演奏は充実の極みで、客の反応も凄まじいだけに、その落差は痛々しい。

だが、それでもここでのポーグスのパフォーマンスに、今そこで息づく特別なリアリティがあることも確かだ。やはり彼らは根っからのライヴ・バンドなのである。音質は海賊盤並みだが支障にはなっていない。

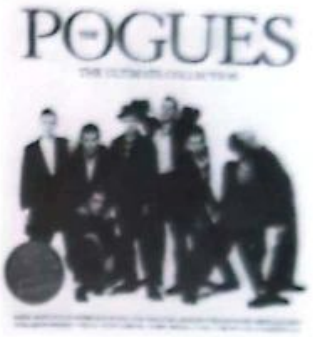
①Streams Of Whiskey ②If I Should Fall From Grace With God ③Boys From The County Hell ④Young Ned Of The Hill ⑤Rain Street ⑥Sayonara ⑦Battle Of Brisbane ⑧The Body Of An American ⑨Summer In Siam ⑩Thousands Are Sailing ⑪Sunnyside Of The Street ⑫Dirty Old Town ⑬The Sickbed Of Cuchulainn ⑭Yeah, Yeah, Yeah, Yeah, Yeah ⑮Fiesta ⑯Sally MacLennane

The Pogues
"Streams Of Whiskey: Live In Leysin, Switzerland"
Sanctuary CMRCD3881991［2002］（CD）

ポーグスのベスト盤のディスク2に2001年12月の、5年ぶりに再結成した彼らのロンドンでのライヴを収録。シェインがバンドに復帰したのは1991年の馘首以来10年ぶりのことだ。

残念ながらシェイン在籍時のライヴで、一番コンディションが良く勢いがあったであろう80年代半ばのものは公式音源では発表されていないようだ。現在聴けるなかではこれがベストに近い出来だろう。例によってヴォーカルはヨレ気味だが、熱狂的な歓声と大合唱にバックアップされ懸命に歌うシェインの歌声はやはり感動的だ。彼の声には歴史と人生が宿っている。

[1]①Rainy Night In Soho etc.〔全22曲〕 [2] <Live At The Brixton Academy> ①Streams Of Whiskey ②If I Should Fall From Grace With God ③Boys From The County Hell ④The Broad Majestic Shannon ⑤Young Ned Of The Hill ⑥Turkish Song Of The Damned ⑦Rainy Night In Soho ⑧Tuesday Morning ⑨Rain Street ⑩A Pair Of Brown Eyes ⑪Repeal Of The Licensing Laws ⑫The Old Main Drag ⑬Thousands Are Sailing ⑭Body Of An American ⑮Sally MacLennane ⑯Lullaby Of London ⑰Dirty Old Town ⑱Bottle Of Smoke ⑲The Sickbed Of Cuchulainn ⑳Fairytale Of New York ㉑Fiesta ㉒The Irish Rover

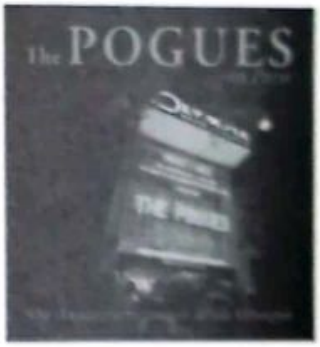


The Pogues
"The Ultimate Collection"
Pogue Mahone/Warner 2 56462254 2［2005］（2CD）

バンド結成30周年を記念して2012年9月にパリで行なわれたコンサートの実況盤。01年の再結成以来、新曲を作ることなくひたすらツアーを繰り返してきた。再結成後のポーグスとは、音楽活動である以上に、彼らの生活であり人生そのものとなっていた。

［1］⑮の大合唱は、ポーグスの歌が地域・民族・言語を越え共有される普遍性を獲得したことを示している。既にそれはポーグスの歌ではなく民衆の歌になっている。シェインらの音楽人生は楽曲を作るだけではなく、それをライヴを通じてこんなスタンダードに育てあげ、やっと完結したのかもしれない。

[1]①Streams Of Whiskey ②If I Should Fall From Grace With God ③The Broad Majestic Shannon ④Greenland Whale Fisheries ⑩Repeal Of The Licensing Laws ⑪Lullaby Of London ⑫The Body Of An American ⑬Young Ned Of The Hill ⑭Boys From The County Hell ⑮Dirty Old Town ⑯Bottle Of Smoke ⑰The Sickbed Of Culchulainn etc.〔全17曲〕 [2]①Sally MacLennane ②Rainy Night In Soho ③The Irish Rover ④Star Of The County Down ⑤Poor Paddy On The Railway ⑥Fairytale Of New York ⑦Fiesta



The Pogues
"In Paris: 30th Anniversary Concert At The Olympia"
Polydor 371 969-6［2012］（2CD）

CamScannerでスキャン

ザ・ポーグス

The Pogues with Joe Strummer
"Live In London"
Rhino 8256483333547 [2014] (CD)

2013年発表のボックス"30 Years"で初めて日の目を見た音源で、その後、ヴァイナルで単独リリース。シェイン脱退後の91年に元ザ・クラッシュのジョー・ストラマーが参加して行なわれたツアーのロンドン公演を収録した。

単発ライヴではなくツアーまでやるのは彼らの親密さを示すが、ジョーの歌の記名性が強すぎ、ポーグスのライヴではなくポーグスのカヴァーを歌うジョーのライヴといった趣。異に乗ってクラッシュの曲まで歌い、観客は大喜び。もちろんポーグス流にアレンジされている。シェイン脱退の喪失感を埋めるに足る、楽しいライヴではある。

[A] ①If I Should Fall From Grace With God ②Sayonara ③Cotton Fields ④Young Ned Of The Hill ⑤Rain Street ⑥Repeal Of The Licensing Laws [B] ①Tombstone ②Turkish Song Of The Damned ③Gartloney Rats ④London Calling ⑤Thousands Are Sailing ⑥The Sunnyside Of The Street [C] ①Straight To Hell ②Medley (The Recruiting Sergeant/The Rocky Road To Dublin/The Galway Races) ③Dirty Old Town ④The Sickbed Of Cuchulainn ⑤The Star Of The County Down ⑥I Fought The Law [D] ①Hell's Ditch ②Brand New Cadillac ③Fiesta ④Yeah, Yeah, Yeah, Yeah, Yeah

The Pogues
"BBC Sessions 1984-1986"
Pogue Mahone/BBC 2190295266646 [2020] (CD)

タイトル通り80年代中期のBBCのラジオ・セッションを集めたもの。CD及び配信は、もともとヴァイナルで先行リリースされていたものに2回分のセッション音源を追加収録した全23曲。ブレイクする前とはいえ、バンドとしては充実期にあり勢いもある。このころのライヴ録音は公式な形ではリリースされていないので非常に貴重。しかし、観客のいないスタジオ・ライヴなので、観客を巻き込んだ熱気のようなものを期待してはいけない。バンドの演奏力の確かさ、コンディションがいいときのシェインのヴォーカルの素晴らしさを感じるには十分だろう。

<Broadcast 17th April 1984 (as Pogue Mahone) The John Peel Show) > ①Streams Of Whiskey ②Greenland Whale Fisheries <Broadcast 9th July 1984 The David 'Kid' Jensen Show> ⑤Dingle Regatta ⑥Poor Paddy On The Railway <Broadcast 12th December 1984 The John Peel Show> ⑧Whiskey You're The Devil ⑨A Pair Of Brown Eyes <Broadcast 11th July 1985 The Janice Long Show> ⑩Wild Cats Of Kilkenny ⑪Billy's Bones ⑫The Old Main Drag ⑬Dirty Old Town <Broadcast 5th November 1986 The Janice Long Show> ⑳If I Should Fall From Grace With God ㉑Lullaby Of London etc.(全23曲)

シェイン・マガウアン&ザ・ポープス

Shane MacGowan & The Popes
"The Snake"
ZTT 4509-98104-2 [1994] (CD)

ザ・ポープスとの1作目。アイリッシュ音楽とロックンロールの融合を目指していたシェインにとっては、その領域をはみ出しつつあったポーグスをクビになったのはむしろ足枷がとれた気分もあったかも。俳優のジョニー・デップ、シン・リジーやダブリナーズのメンバー、そしてポーグスのジェムやスパイダーもバックアップ。ポーグス時代よりもロック色が強まり、全体に派手でメリハリが効いていてエネルギッシュだが、彼らしいひなびた味わい深さもある佳作。オリジナルは12曲入りだが、翌年に4曲を追加し曲順もジャケも変えた新装版がリリースされた。

①The Church Of The Holy Spook ②That Woman's Got Me Drinking ③The Song With No Name ④Aisling ⑤I'll Be Your Handbag ⑥Her Father Didn't Like Me Anyway ⑦A Mexican Funeral In Paris ⑧The Snake With Eyes Of Garnet ⑨Donegal Express ⑩Victoria ⑪The Rising Of The Moon ⑫Bring Down The Lamp

CamScannerでスキャン

Shane MacGowan & The Popes
"The Crock Of Gold"
ZTT [illegible] (1997) (CD)

[illegible]ザ・ポーグスが、[illegible]シェイン[illegible]アルバ[illegible]

①Paddy Rolling Stone ②Rock 'n' Roll Paddy ③Paddy Public Enemy No. 1 ④Back In The County Hell ⑤Lonesome Highway ⑥Come To The Bower ⑦[illegible] Cowboy ⑧More Pricks Than Kicks ⑨Truck Drivin' Man ⑩Joey's In America ⑪[illegible] Fairy ⑫Mother Mo Chroi ⑬Spanish Lady ⑭St. John Of Gods ⑮Skipping Rhymes ⑯[illegible] ⑰Wanderin' Star

Shane MacGowan's Popes
"Across The Broad Atlantic"
Eagle [illegible] (2001) (CD)

シェイン&ザ・ポープスのニューヨークにおけるライヴを収録したアルバム。シェインのコンディションは良くなく、曲の聞き取りは困難だが、ヴォーカルは声もよく通っていた。[illegible]も充実しているのがうかがえる。なにより会場の熱気が素晴らしく、その場の熱気と一体感をよくとらえている。ノ11曲を始め、ザ・ポーグスの曲、そしてカヴァーがバランスよく構成される。ハンク・ウィリアムスのうらぶれたカヴァーのがいい。⑳はシェインの[illegible]サが登場しシェインとデュエットする。また[illegible]のノリだが、テレサの調子外れな歌が微笑ましい。

①If I Should Fall From Grace With God ②Rock & Roll Paddy ③Nancy Whiskey ④A Rainy Night In Soho ⑤Poor Paddy Works On The Railway ⑥The Broad Majestic Shannon ⑦Popes Instrumental: My Ballymurney Love/The Limpet General/Song Of Chaos ⑧Dirty Old Town ⑨Mother Mo Chroi ⑩Body Of An American ⑪Granuaile ⑫More Pricks Than Kicks ⑬Aisling ⑭A Pair Of Brown Eyes ⑮Streams Of Whiskey ⑯Lonesome Highway ⑰Angel Of Death ⑱Sick Bed Of Cuchulainn ⑲The Irish Rover ⑳Fairytale Of New York

The Popes Featuring Shane MacGowan
"Outlaw Heaven"
Shake The Tree STTR001 (2009) (CD)

シェイン&ザ・ポープスは199[illegible]年に始まるが、ポープスは2000年に単独でリリースするなど活動を継続。[illegible]オリジナル・メンバーのトム・マクアナミー（バンジョー）の死去で06年に脱退したが、まもなく新メンバーを加え再結成。09年に本作を発表。シェインが3曲にゲスト・ヴォーカルとして参加した。

アルバム全体としてはかなりハードな曲もあり、リード・ヴォーカルのポール・マクギネスの荒々しくマッチョな声質もあってアイリッシュ色は希薄だが、やはりシェインが歌う⑥の味わい深さは格別だ。

①Black Is The Colour ②Let The Bells Ring Out ③Angels Are Coming ④How'd Ya Get In Your Heaven ⑤Outlaw Heaven ⑦Boys They Don't Cry ⑧You're Gonna Shine ⑨Crucified ⑩Bastards ⑪Underneath The Blue Sky ⑫Slip Away ⑬Loneliness Of A Long Distance Drinker

その他、シェイン・マガウアン関連重要音源紹介

ポーグス以前とソロ、共演、参加作品を振り返る

文＝行川和彦

シェイン・マガウアンのデビュー盤は、女性ベーシストを擁したニップル・エレクターズのシングル"King Of The Bop"＝[1]。ロカビリーがかったゴキゲンなパンク・ロックである。〝乳首勃起〟というバンド名に問題が生じたのか、まもなくバンド名をニップスに変更。ハーモニカ入りの"All The Time In The World"（78年）と、ボブ・ディラン風の歌ものがA面の"Gabrielle"（79年）というシングルを発表した。ライヴ録音のLP"Only The End Of The Beginning"（80年）は、パンク・ロック時代のシェインのベスト選曲だ。ポール・ウェラーがプロデュースしたシングル"Happy Song"を81年に出すも、ニップスは解散する。

ポーグス結成以降の〝別プロジェクト〟による初作は、ニック・ケイヴとのコラボレーションEP"What A Wonderful World"＝[2]。二人が歌い綴るルイ・アームストロングの表題曲は、ポーグスをクビになった直後だけに自虐的だ。お互いの曲をカヴァーし、シェインはニック・ケイヴ&ザ・バッド・シーズの"Lucy"を、しっとりと歌う。

95年には同郷のシネイド・オコナーとデュエットEP"Haunted"＝[3]を発表。映画『シド&ナンシー』（86年）のサントラに提供したポーグス時代の曲がメイン・トラックで、おっとりした仕上がりながら、昨年他界した同士のデュエットだけに今聴くと胸に響く。同年には、エンヤの姉でクラナドのメンバーでもあるモイア・ブレナンとの"You're The One"を、シングルと映画『サークル・オブ・フレンズ』（95年）のサントラで発表。曲を作ってはいてもシェインはわりと脇役だ。この2曲は、オリジナル盤とは別ジャケットで95年以降に出た『スネイク』の再発盤にも収められている。

96年には"My Way"のカヴァー・シングルを出す。フランク・シナトラでお馴染みの歌詞を歌ったが、破滅型の〝同志〟シド・ヴィシャスのパンク・ロック・ヴァージョンみたいな歌い方と加速度がハマりすぎ。これは最初で最後のソロ名義での音盤でもある。

シェインは激しいサウンドのバンドにも人気だった。ボストンの〝アイリッシュ・パンク・バンド〟であるドロップキック・マーフィーズの、00年録音の『シング・ラウド、シング・プラウド！』の1曲に参加。ダブリン出身のフォーク・メタル・バンド、クルアチャンの"Folk-Lore"（02年）の2曲でも歌っている。

アイルランドつながりではない絡みでは、ルル・ゲンズブールのファースト『フロム・ゲンズブール・トゥ・ルル』（11年）で1曲客演。シェインの最後の方のレコーディング仕事の一つと思われる。

[1] Nipple Erectors
'King Of The Bop/
Nervous Wreck'
Soho SH1～2[1978]（7"）

[2] Nick Cave & Shane
MacGowan
'What A Wonderful World'
Mute CD MUTE151[1992]
(CD)

[3] Shane MacGowan &
Sinéad O'Connor
'Haunted'
ZTT ZANG65CD[1995]

CamScannerでスキャン

映像で見るシェイン・マガウアン

ライヴ、ドキュメンタリーから劇映画までに刻まれた"厄介者"の魅力

文＝村尾泰郎

シェイン・マガウアンのユニークなキャラクターを知るには、動く姿を見るのがいちばん。なかでも、シェインの波乱に富んだ人生を紹介した映画『シェイン　世界が愛する厄介者の歌』（22年製作）は必見の作品だ。数々の音楽ドキュメンタリーを手掛けたジュリアン・テンプルが監督を担当。シェインの発言を中心にしながら、オリジナルのアニメ、アーカイヴ映像など様々な素材を織り込んだ編集でユーモラスな語り口で、シェインの歌の世界観を表現する。

2時間を超える大作だが、シェインがポーグスを結成するまでを1時間かけてじっくり描いて人間性に迫っている。6歳の頃から酒やタバコをはじめ、親戚のように家族や隣人たちがどんちゃん騒ぎをするなかで、一緒にトラッド・ソングを歌っていたシェイン。この映画を見れば、いかに彼のなかにアイルランド魂が息づいていたかがわかる。また、パンクに触発されてライヴハウスをうろついているうちに、ロンドンのパンク・シーンの顔になった無名時代の映像も紹介。ステージ前で騒いでいるだけでも目を惹く存在で、その頃からカリスマ性があったことがわかる。

撮影中に"何かモータウンのレコードをかけろ"とスタッフに要求。撮影の後で、と言われると"かけないなら喋らない"とゴネたり、ボビー・ギレスピーに何歳の頃にロンドンに引っ越したのか、と質問されて"質問はやめろ"と睨みつけたり。そうした"厄介者"ぶりが垣間見える瞬間がカメラに収められているのも面白いが、撮影時、シェインは車椅子生活を送っていて、ステージに立つのが難しそうな様子に心が痛む。

『シェイン　ザ・ポーグス：堕ちた天使の詩』（01年製作）＝[1]は、シェインがまだステージに立っていた頃のドキュメンタリーで、シェインの日常を追いかけながらキャリアを振り返る。プライヴェートな映像が多く、シェイン観察日記といった趣も。

夜の街を飲み歩き、店の前でうずくまっている物乞いらしき男に金を与えたかと思うと、目の前に止めてある自転車を揺さぶって"これを売ったらいくらになるかな"と値踏みする。ただの酔っ払いにしか見えないところがシェインらしさ。酒の席で、長年連れ添ったパートナー、ヴィクトリア・クラークに"元気のもとは?"と聞かれたシェインが、間髪入れず"君さ"と答えてヴィクトリアが"まあ"と声を失う。そんなささやかな瞬間が印象に残る。

ライヴ映像では、人気絶頂の88年のロンドン公演を収録した『コンプリート・オブ・ザ・ポーグス』＝[2]が素晴らしい。ホーン・セクションを従えた豪華な編成で、シ

CamScannerでスキャン

シェインはタバコを指に挟み、酒の入ったグラスを持ってぶっきらぼうに歌う。カースティ・マッコールを迎えて歌う「ニューヨークの夢」ではステージに雪を降らせて熱唱。観客も一緒に歌い、シェインはポップ・スターの魅力を放っている。

そんなシェインを支えるバンドのタフで躍動感溢れる演奏も見事。彼らの演奏に支えられてたからこそ、シェインは好き勝手ができた。本DVDにはドキュメンタリー作品『コンプリートリー・ポーグド』も収録されていて、そこにはバンド・メンバーへのインタヴューも。それぞれシェインに負けないタフな連中で、まるで船乗り仲間のような雰囲気だ。この数年後にバンドは飲み過ぎて仕事ができないシェインをクビにするが、バンドとシェインの結びつきが確認できるのも本作の見どころだ。

シェイン・マガウアン&ザ・ポーブス『ライヴ・アット・モントルー』=3は、ポーグスを脱退したシェインが新たに結成したバンド、ポーブスの95年のライヴの模様を収録したもの。モントルー・フェスティヴァルという大きな場所なのもあってか、バンドの演奏力は充分だけれど、88年のロンドン公演の時の猥雑なエネルギーは感じられず、しっかり仕事をこなしているといった感じ。映像を見る限り、シェインは演奏中に酒を飲んでいない。新バンドをスタートして再起を目指すシェインの頑張りが伝わるステージだ。

『ポーグヴィジョン』(91年)はポーグスのミュージック・ヴィデオを集めたもの。個人的に好きなのは、メンバーと楽しくワイワイやってる姿をまとめただけの初めてのヴィデオ「ストリームズ・オブ・ウィスキー」。ポーグスというバンドの魅力を簡潔に表現している愛すべき作品だ。そして、モノクロ映像で古いハリウッド映画のように仕上げた「ニューヨークの夢」を見れば、シェインが役者としても個性的な味を持っていることがわかる。

だから、シェインは役者として映画に起用されたこともあった。ほとんどが一瞬の出演だが、なかでも印象に残るのが『ストレート・トゥ・ヘル』(87年製作)=4だ。本作でシェインが演じたのは、砂漠の街を仕切るボスの下で働くチンピラ。劇中で主人公グループの一人を演じたジョー・ストラマーと銃撃戦をする、というファンには嬉しい見せ場がちゃんと用意してあった。

インタヴューでも、ライヴでも、そして、役を演じている時もシェインは同じ。いつも飾らず、自分自身であり続けた。だからこそ、周囲に慕われたのだろう。厄介者でありながら正直者。そんな愛すべきパーソナリティが映像作品からも伝わってくる。

1『シェイン ザ・ポーグス：堕ちた天使の詩』
ナウオンメディア NOOOOO042
[2006] (DVD)

2ザ・ポーグス
『コンプリート・オブ・ザ・ポーグス』
トランスフォーマー TMSS047
[2007] (DVD)

3シェイン・マクガワン&ザ・ポーブス
『ライヴ・アット・モントルー』
ビデオアーツ VABG1149
[2005] (DVD)

4『ストレート・トゥ・ヘル』
アイ・ヴィ・シー IVCF2215
[2003] (DVD)

CamScannerでスキャン

特集 リトル・リチャード

サントラ・アルバムと全盛期の3作で振り返るロックンロールのオリジネイター

文＝出田圭

出色のパイオ・ドキュメンタリー映画『リトル・リチャード：アイ・アム・エヴリシング』（98ページ参照）の日本公開を機に、同映画のサウンドトラックと、リトル・リチャード（1932・2020）の全盛期であるスペシャルティ・レーベルでのアルバム3タイトルがCDリリースされる。ほかならぬロックンロールのオリジネイターである。ポプ・ディランやビートルズの魂に火をつけ、ミック・ジャガーやデイヴィッド・ボウイを解き放ち、ジェイムズ・ブラウンにはいわば過剰人としても先駆けた。プリンスやマイケル・ジャクソンの髪形やコスチュームも、言ってしまえばリチャードのアップデート版だ。

かくもパイオニアたるリチャードの生涯を、傑出したその音楽とパフォーマンスに加え、LGBTQ+の視点や知見を交えつつ、観る者に再考させてくれるのが『リトル・リチャード：アイ・アム・エヴリシング』（以下、『アイ・アム』と略記）という映画だ。常になにかを突破するようでもあったその歌声の持ち主は、もがきながら解放を体現しつづけた人でもあった。

■映画サウンドトラック

サントラ・アルバム『アイ・アム・エヴ

CamScannerでスキャン

[illegible]在籍当時、西海岸LAでの録音も複数あったリチャードではあるが、本サントラでは、時代が少し異なる⑭を除くすべてのスペシャルティ音源が、代表曲の大半を生んだといえるニューオーリンズ録音から選ばれている。閃光のようなオープニングは58年のヒット①。映画『アイ・アム』内ではライヴのアーカイヴ映像・音声が使われていた。おもに56〜57年に録音された一連の8ビート曲のひとつでもあるこれは、リチャードのシングル第9弾であり15曲めのヒットにあたる。〈ファッツ・ドミノやエルヴィス・プレスリーもそうだが、リチャードにはシングル両面ヒットが多かった〉。『アイ・アム』にもあったように、ジャッキー・ブレンストン「ロケット88」でのアイク・ターナーのピアノにヒントを得た曲としても知られるこれは、しばしばステージのオープニングを飾り、96年アトランタ五輪の閉会セレモニーでの熱血パフォーマンスもこの曲が最初だった。

ヴァレリー・ジューンによる②は、ゴスペルを源流にもつリチャードの大きな影響源となったひとり、シスター・ロゼッタ・サープの曲。少年リチャードがサープ本人の前で歌ってみせて喜ばせたという曲のひとつでもある。サープを重視する姿勢もこの映画の長所に挙げられると思う。

地元ジョージア州メイコンのラジオ局用に録音したとも聞く③は、リチャードがスペシャルティに送りつけたデモ演奏で、ロックンロール以前の時期のスタイルが聴ける。98年のコンパイルCD "The Very Best Of "Little Richard"" が初出。

ゴスペルライクなブルージー・スロウ④は、シングル「トゥッティ・フルッティ」のB面曲に女性コーラスを加えたヴァージョン。『アイ・アム』ではオリジナルのシングル・ヴァージョンが鳴っていたようだ。

ここからがロックンロール時代。その起爆装置ともいえる歴史的ヒット⑤は55年録音。すでに特徴的なシャウトをかますリチャードだが、『アイ・アム』ではその影響源でもある伝説的ゴスペル・シンガー、マリオン・ウィリアムズの一瞬のシャウトを捉えたアーカイヴ動画も見られる。

前曲⑤を超えてリチャード最大のヒットを記録した、史上屈指の名曲といってよいだろう⑥。超のつく早クチ&アップテンポがパット・ブーン対策（ブーンは⑤のカヴァーでリチャードを凌ぐヒットを記録）だったことや、ビートルズ版でのポール・マッカートニーのシャウトが本人からの直伝だったことなども有名。

8ビートも強烈な⑦は、⑤⑥と並んでリチャードの代名詞的なヒット。つづく⑧は

『リトル・リチャード：アイ・アム・エヴリシング～オリジナル・サウンドトラック』

ユニバーサル UCCO1242／SHM-CD／¥2600／歌詞・訳詞・解説つき／3・1発売

①グッド・ゴリー・ミス・モリー
②ストレンジ・シングス・ハプニング・エヴリ・デイ－ヴァレリー・ジューン
③ベイビー（デモ）
④アイム・ジャスト・ア・ロンリー・ガイ
⑤トゥッティ・フルッティ
⑥のっぽのサリー
⑦ルシール
⑧ババ・ラマ・バマ・ルー
⑨リップ・イット・アップ
⑩レディ・テディ
⑪女はそれを我慢できない
⑫センド・ミー・サム・ラヴィン
⑬トゥッティ・フルッティ－コリー・ヘンリー
⑭クエーサー－タマール＝カリ

少し異色で、スペシャルティ離脱後の64年、一時復帰しての西海岸録音。前記コンパイルCD"The Very Best Of..."などでも聴くことができた。

56年のほぼ同時期に録音された⑨⑩も強力。バックの演奏にも共通点は多いが、イケイケなノリのなか緩急の利いたヴォーカルが多彩なニュアンスを匂わせる⑨、それを凌駕する勢いでぐいぐい迫る⑩と、甲乙つけがたい両曲である。後者⑩の演奏シーンがフィーチャーされたコメディ映画が『女はそれを我慢できない』（56年）であり、ボビー・トゥループ作の⑪はその映画主題歌（ただし映画で聴けたものとはテイク違い）。男声コーラスは、巡業でニューオーリンズ入りしていたというコースターズ（当時、ロビンズ）とされ、彼ららしい軽妙洒脱な風味の利いた仕上がりになっている。

57年のヒット⑫はニューオーリンズR&Bスタイルの秀逸バラード。依然ロックンロール旋風全開モードだった当時の、貴重なミディアム系ヒットのひとつだ。

代表曲⑤をコリー・ヘンリーがリメイクした⑬。映画のエンド・ロールでも聴けるここでの歌詞は⑤を踏襲したものだが、『アイ・アム』本編でのヘンリーは、⑤の録音以前に関係者オンリーで披露されたという有名な（もしくは知る人ぞ知る？）いわばゲイのワイ歌調リリックで歌ってくれる。

巻末⑭は、作曲家タマール＝カリによる映画スコア。曲名の"quasar"は、強く発光する未知の天体（いわゆる準星）の意をもつ語で、『アイ・アム』でもシンボリックなキーワードになっている。巻頭①はその表象というべきオープニング曲でもあった。

以上がサントラの内容。スコア⑭以外の収録曲はおもにリチャードのブレイクスルー前後から全盛期までの時期にリンクしているのだが、『アイ・アム』は波乱の生涯をさらに追いつづける。

■ヒアズ・リトル・リチャード

57年にリリースされたリチャードの初アルバム。ジャケの強烈インパクトもコミで、リチャード随一の名盤だ。前ページ掲載のサントラ曲目表でいうと⑤⑥⑨⑩を含む作品。と書いただけで充実ぶりが推し量れそうだが、それに留まらぬ怪物盤といえる。

収録12曲のうち10曲がニューオーリンズ録音。それらの多くが、『アイ・アム』にも登場してくれるアール・パーマー（ds）とアルヴィン・レッド・タイラー（bs）のほか、リー・アレン（ts）、フランク・フィールズ（b）、エドガー・ブランチャード（g）らニューオーリンズ・レジェンド勢と組んでのもの（同地録音曲については後述の2タイトルも同様のことがいえる）。

サントラ以外の曲だけを見ても、キャッチーなラインが日本にも旋風を起こし余波も長くつづいたと聞く「ジェニ・ジェニ」、エディ・ボー'I'm Wise'を大胆に改変しつつニューオーリンズ色も活かしたグルーヴィ・チューン「スリッピン・アンド・スライディン」、骨太なミディアム「ミス・アン」、サントラ曲⑫にも近いニューオーリンズR&Bスタイルのバラード「キャント・ビリーヴ・ユー・ワナ・リーヴ」と目も眩むようなラインナップ。サントラ曲①の原案風でもある「トゥルー・ファイン・ママ」、自身のツアー・バンド、ジ・アップセッターズとの録音とされる「シーズ・ガット・イット」（この曲も前記映画『女はそれを我慢できない』に演奏シーンがあった）の西海岸録音2曲も充実、と聴きものだらけ。サントラの③でデモ録音が聴けた「ベイビー」の完成版も収録。

■リトル・リチャード VOL2

58年のセカンド・アルバム。サントラ曲目表の①⑦⑪⑫を含む作品で、これもまた

CamScannerでスキャン

『ヒアズ・リトル・リチャード』
UCCO90393

『リトル・リチャード Vol.2』
UCCO90394

『ザ・ファビュラス・リトル・リチャード』
UCCO90395

ポリドールはすべてユニバーサル　各¥1800　歌詞・訳詞・解説つき　映画公開に合わせカタログ3枚をアンコール・プレス

ームストロングの有名曲とは別曲）は、前記、パット・ブーン対策の余波なのか相当に高速。かたや、同じ56年の同時期録音である「オール・アラウンド・ザ・ワールド」（リトル・ウィリー・ジョンの初期ヒットとは別曲）は、アップテンポながらもニューオーリンズ風の揺れが心地よい、といった具合に変化にも富む。先駆的・画期的ともいえたポピュラー曲カヴァー「ベイビー・フェイス」、後述の「カンサス・シティ」のスピンオフ的な「ヘイ・ヘイ・ヘイ・ヘイ」など多彩な内容が楽しめる。

■ザ・ファビュラス・リトル・リチャード

58年のサード・アルバムは、前作と同じく転身後のリリースで、サントラの④を収録。ニューオーリンズ録音と西海岸録音がほぼ半々だが、リリース当時のシーンを反映してか、複数で女声コーラスが重ねられている。スペシャルティでの初期録音をはじめ出来のばらつきも否めないが、火を噴くようなロックンロールから、独特のポピュラー感覚も発揮した複数の自作曲まで、前作以上に幅広い表現が楽しめる。

有名曲からいくと、〝ヘイ・ヘイ〜〟のフックをもつリチャード版「カンサス・シティ」はのちにビートルズがカヴァー。ビッグ・メイベルやジェリー・リー・ルイスの「ホール・ロッタ・シェイキン」（リチャードは後年、ヴィー・ジェイ・レーベルでも再演）、ピアノ・レッド'Rockin' With Red'の改題「シー・ノウズ・ハウ・トゥ・ロック」などは前記のアップセッターズとの録音とされる。「ダイレクトリー・フロム・マイ・ハート」と「メイビー・アイム・ライト」は、かつて50年代前半にジョニー・オーティス楽団と共演したピーコック録音曲の再演。フェイ・アダムズのヒット曲リメイク「シェイク・ア・ハンド」やニューオーリンズR&B調なども含むミディアム〜スロウ系の数曲での歌声も、粗削りな面はあれ、随所でぐっとくる。ジャンプ・ブルーズ調のピアノ弾語りデモ録音をもとにした「チキン・リトル・ベイビー」も収録。

CamScannerでスキャン

「リトル・リチャード：アイ・アム・エヴリシング」

音楽的功績と、黒人でクィア、ゆえの苦難を同時に描くドキュメンタリー

文＝島居真道

リトル・リチャード。チャック・ベリー、ファッツ・ドミノ、ボー・ディドリーらと並ぶロックンロールのオリジネイターであり、エルヴィス・プレスリー、ビートルズ、ローリング・ストーンズ、ボブ・ディラン、デイヴィッド・ボウイ、クイーン、プリンスといった後進たちにひらめきを授けたレジェンド中のレジェンドだ。「トゥッティ・フルッティ」、冒頭のシャウトこそが、来るロックという文化の扉を開いたといっても過言ではない。しかし、このような偉大な功績にもかかわらず、生前に受けた後輩たちに匹敵するほどの賞賛は受けていない。リチャードは、ジョージア州メイコンという保守的な町に生まれる。祖父は牧師で、両親も敬虔なクリスチャンだった。父親に連れられて通った教会でゴスペルに出会い、人前で歌うことの喜びを覚える。母親のアドバイスを身に着けて出かけることもあったそうだ。男らしくない息子が許せなかった父親は、リチャードをクィアであることを理由に家から追い出してしまう。

しかし、リチャードは自分に正直でいることを諦めず、音楽の世界で大暴れして名を上げる。その一方で、レーベルと不利な契約を交わしてしまい十分な支払いを受けられなかったり、白人のプレスリーやパット・ブーンによるカヴァーのほうがヒットする状況に忸怩たる思いを抱いたりもした。

「ロング・トール・サリー」はブーンが歌えないようにテンポを上げ、節回しを複雑にしたという痛快な挿話が披露される。ブーンが漂白した「トゥッティ・フルッティ」も、元はアナル・セックスの歌だった。

当時、黒人差別が公然と行なわれており、コンサートも白人の部と黒人の部とに分けられていた。しかし、リチャードの音楽を求めて白人のキッズたちが黒人の部に忍び込んでいたそうだ。このエピソードはまさ

CamScannerでスキャン

『リトル・リチャード：アイ・アム・エヴリシング』
3月1日（金）からシネマート新宿ほか全国順次公開
配給：キングレコード
©2023 Cable News Network, Inc. A Warner Bros. Discovery Company All Rights Reserved

に恋愛の方を求めるものだといえる。

リチャードは、クィアとして堂々と振る舞い、人々を解放した一方で、そのことが罪悪感となり、自分は地獄に落ちるのではないかという不安に苛まれるようになる。やがて神職につく覚悟を決めて神学校に通い、ゴスペルのアルバムをリリースしたりもする。そうかと思えば、派手な生活が恋しくなり音楽業界へとカムバックする。再度神職に戻るが、やはりまたもカムバックを果たす。彼ほど中庸という言葉が似合わない人はいない。リチャードは両極端を行ったり来たりする人物だった。

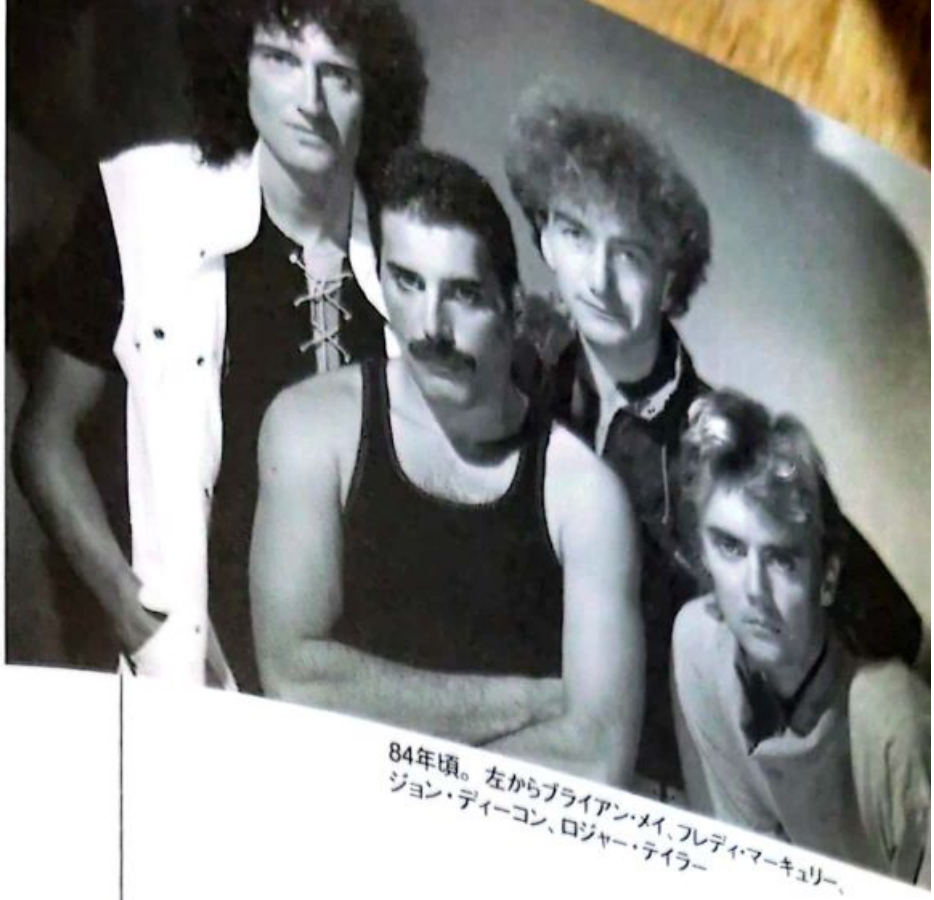
この映画は、リチャードの人物像を掘り下げつつ、特異的な音楽への言及も欠かしていない。特に興味深かったのは、リチャードのユニークなピアノの演奏スタイルの元ネタや、ポップス史に革命をもたらした、突進するような8分のリズムの起源についての話だ。ここでネタバラシをして楽しみを奪ってしまうわけにもいかないので、ぜひ本編で確認されたい。

ロックンロールのオリジネイターたるリチャードにも当然、インスピレーションを与えた先達が存在した。シスター・ロゼッタ・サープはその一人である。また、ブラザー・ジョー・メイ、マリオン・ウィリアムズ、クララ・ウォードといったゴスペル・シンガーたちから受けた影響についての言及もされている。すべての起源として扱われがちなロックンロールにも前史があるのだと再確認できた。

『ピンク・フラミンゴ』や『ヘアスプレー』などで知られる映画監督のジョン・ウォーターズが登場し、トレードマークである口ひげは、リチャードへのリスペクトを込めたものだと語っていた。たしかに同じ髭だと思う。音楽に限らず、ポップ・カルチャーに与えた影響の強さを思い知らされた。彼は人々を鼓舞する存在だったのだ。

後世に残る大きな仕事をしたからといって、それに見合った評価を十分に受けられるとは限らない。ともすれば、人種や属性、性的指向のせいで、なかったことにされてしまうことだってある。リチャードには、〝黒人でクィア〟であるために十分に評価されないという壁が立ちはだかっていた。それゆえ、リチャードは虚勢を張り、自己喧伝せざるを得なかったのだ。その姿には胸を打つものがあった。改めてリチャードの功績を称えるこの映画は、彼に捧げられた鎮魂歌だといって差し支えないだろう。

CamScannerでスキャン



84年頃。左からブライアン・メイ、フレディ・マーキュリー、ジョン・ディーコン、ロジャー・テイラー

クイーン

日本のファンによって収録曲が決まった来日記念盤『絆（Kizuna）』

文＝安田謙一

クイーンがアルバム『戦慄の王女』でデビューしてから50年。英国では73年だが、日本では1年遅れの74年の発売だったので、この号が出るころには、20年1月以来、4年ぶりとなるクイーン＋アダム・ランバートによる来日公演〈The Rhapsody Tour〉も無事行なわれているだろう。

23年の大晦日にはなんとNHKの「紅白歌合戦」に出場し、「ドント・ストップ・ミー・ナウ」を演奏した。デビュー以来、彼らが、特に日本で熱狂的な支持を受けてきたことは広く知られるが、このたび日本独自に企画されたコンピレーションは、その歴史をなんらかの形で反映しようとした試みといえるだろう。そのタイトルは『絆（Kizuna）』だ。

投票結果を反映したライヴ・ベスト盤

『絆（Kizuna）』はライヴ音源だけで構成されたベスト・アルバムである。CDはSHM-CD仕様で、ほかに限定2000枚で2枚組のアナログ盤（180g重量盤）も発売がアナウンスされている。

彼らが過去に発表したライヴ盤のうち、『ライヴ・キラーズ』（79年）、『ライヴ・マジック』（86年）、『クイーン・ライヴ!! ウェンブリー1986』（92年）、『オン・ファイアー／クイーン1982』（04年）、『ライヴ・アット・ザ・レインボー'74』（14年）、『オデオン座の夜〜ハマースミス1975』（15年）という6タイトルに収録された全150曲の中から、23年11月15日から30日にわたって、ユニバーサルミュージック特設サイトで〝あなたの好きなクイーンのライヴ・トラックを投票しよう！〟と銘打って募集されたアンケート集計（ひとり2曲を選択）によって選ばれた上位16

CamScannerでスキャン

曲が制約されていた。曲の重複を避けるため、同じ曲がランクインした場合は、その中からもっとも得票数の多いヴァージョンが選ばれている。

20年にクイーン＋アダム・ランバートで来日した際には、同じくアンケート形式でスタジオ録音曲から選曲された『グレイテスト・ヒッツ・イン・ジャパン』が発売されているが、いわばその第2弾とも言える企画である。

1曲目は「愛にすべてを」。〈ホット・スペース・ツアー〉の82年6月5日に英国ミルトン・キーンズで行なわれたライヴを収録した『オン・ファイアー』のヴァージョンが収録されている。ピアノの弾き語りから〝アー・ユー・レディ…ブラザーズ・アンド・シスターズ?〟と煽って、曲に突入する。スタジオ録音では、多重録音を活用したゴスペル・クワイア風の重厚なコーラスが〝売り〟なのだが、（ロジャー・テイラーが孤軍奮闘しているが）その部分抜きでも、この曲がもつパワーとダイナミズムは一片も欠けてはいない。むしろ、高揚感は増しているのでは、という奇跡がある。つくづく、いいヴォーカリスト、そして、いいバンドである。〝ライヴ音源で構成されるベスト盤〟という、演者によっては見劣りしちゃいそうな企画も、クイーンだからこうして成立する。この1曲だけでも、その真理が集約されている。

2曲目（投票の2位ということになる）は、なかなかの意外性もともなう「'39」。79年の『ライヴ・キラーズ』の音源が収録されている。この歌好きな人、俺だけだと思っていた…という人が大勢いた、という典型例かもしれない。テレビで女優の杏が、この曲に対する思い入れを話しているのを見たときも、びっくりしたし、嬉しかった。ブライアン・メイ作の伝承的なフォーク・ソングのスタイルのSF的詞に、雑誌『COM』的世界を連想してしまう。

続いて（第3位ですね）、同じく『ライヴ・キラーズ』から「ドント・ストップ・ミー・ナウ」。このライヴはアルバム『ジャズ』（78年）のツアーが収録されている。今ではすっかりスタンダード感のある曲（なにせ「紅白歌合戦」出場曲！）だが、まだ、ここでは新曲であることは、観客の（それほどは大きくない）リアクションが記録している。この曲を聴くと、エドガー・ライト監督の映画『ショーン・オブ・ザ・デッド』（04年）のパブでのゾンビとの秀逸な格闘シーンを思い出す人もいるだろう。長い間、クイーンの曲が〝ネタ〟として愛されてきた記憶が蘇る。それもまた、自分にとっては忘れがたいものである。

…という流れから、第4位「ボヘミアン・ラプソディ」がここにくる。『ウェンブリー1986』から収録されている。ペネローペ・スフィーリス監督の映画『ウェイ

『絆（Kizuna）』
ユニバーサル UICY80362
¥2500／SHM-CD／1・31発売／
歌詞・訳詞つき／
解説＝伊藤政則、宇都宮Kaz、山田順一

①愛にすべてを
②'39
③ドント・ストップ・ミー・ナウ
④ボヘミアン・ラプソディ
⑤永遠の翼
⑥RADIO GA GA
⑦ウィ・ウィル・ロック・ユー
⑧伝説のチャンピオン
⑨キラー・クイーン
⑩ONE VISION -ひとつだけの世界-
⑪ラヴ・オブ・マイ・ライフ
⑫ハマー・トゥ・フォール
⑬ステイング・パワー
⑭カインド・オブ・マジック
⑮心の絆
⑯セイヴ・ミー

ンズ・ワールド』（92年）での車中の合唱シーンが蘇る。これもまた喜劇映画で、『ショーン・オブ・ザ・デッド』の「ドント・ストップ・ミー・ナウ」同様、ある種のネタである。映画は笑いと愛情をもってクイーンの音楽を何度も救ってきた。その流れがあって、ブライアン・シンガーの『ボヘミアン・ラプソディ』（18年）に辿り着く、という歴史もある。91年にフレディ・マーキュリーがこの世を去って、（一度は）実体を失ったクイーンが映画の力を借りて、その存在を世に示し続けたのである。とりわけ『ウェインズ・ワールド』では、YouTubeが登場する前の、（見ようにも見ることができなかった）〝クイーンの愛し方〟を可視化してくれた。これに尽きる。音源にあわせて、意味もわからずに〝ガリレオー、ガリレオー〟と声を出す楽しみを肯定してくれた。76年と81年の来日公演を体験、そこで披露された「ボヘミアン・ラプソディ」の中盤のオペラ展開部がテープで再現されたことに、正直言ってがっかりした記憶がある筆者は、そうか、ここは観客が勝手に楽しむために与えられた時間だったのか、と、[illegible]

・ガイド」で85年の日本公演のライヴ盤について書かせてもらったのだが、そこでも触れているように、この85年は〈ロック・イン・リオ〉と〈ライヴ・エイド〉という巨大フェスでクイーンが蘇生した、という年でもある。彼らのパフォーマンスを素直に楽しむ観客の存在によってクイーンの音楽が完成した、そんな感慨がいまは強くある。高い完成度のスタジオ・アルバムでなによりも人を驚かせることに力を注いできたバンドが、世界屈指のライヴ・バンドとして昇華する、その歴史を、この『絆（Kizuna）』で体感している。おいおい、まだ4曲しか聴いていないんだぞ、ということで5曲目（第5位）が、またまた意外、『世界に捧ぐ』（77年）収録の「永遠の翼」だ。アルバム『ライヴ・キラーズ』からの音源が使用されている。英国ではシングル・カット、32位とそれほどヒットはしなかったが、観客はしっかりとサビを合唱している。これも2位の「39」同様、〝この曲好きなのは俺だけかと思っていた…〟の代表格かもしれない。ジョン・ディーコン、いい曲書くんだよなあ。このアルバムに収録された16曲でいえば、ディーコンの作曲が[illegible]

リーとの共作）、ついでにロジャー・テイラーは「RADIO GA GA」と「カインド・オブ・マジック」の2曲、バンド全員の合作が「ONE VISION-ひとつだけの世界-」、さらにフレディ・マーキュリー作が7曲、ブライアン・メイ作が4曲、と、自然にバランスが取れているのも、いかにもクイーンらしいという気がする。

私がリアルタイムで聴いていたのは『ジャズ』まで。ちょうどパンク／ニュー・ウェイヴの波にさらされ、少し後ろめたさも感じていた。それを『ニューミュージック・マガジン』の中村とうようのポジティヴな評文に勇気づけられたことはいまだに忘れられない。ちょうど、10曲目の「ONE VISION-ひとつだけの世界-」以降（11曲目は除いて）は、現役として接してはいない80年代中期の曲が続くのだが、改めて、そこに込められた熱意に感動させられる。フレディの「ハマー・トゥ・フォール！」というなぜか早口での曲紹介に血がたぎる。

日本のファンが選んだ、という思い込みがあるせいで、「ラヴ・オブ・マイ・ライフ」もまた、それにコーラスする日本人の姿を想像してしまった。先にも書いたように、いつの間にかスタジオ音源とライヴ音源と

CamScannerでスキャン

ーン来日記念関連リリース 1月31日同時発売

・ミラクル［デラックス・エディション］』
ーサル UICY15196～7 ¥3800 2SHM-CD

ザ・キラーズ』
ーサル UICY80360～4 ¥3981（税込） 2SHM-CD／紙ジャケット／初回生産限定盤

ザ・マジック』
ーサル UICY80365 ¥2934（税込） SHM-CD／紙ジャケット／初回生産限定盤

ン・ライヴ!! ウエンブリー1986』
ーサル UICY80366～7 ¥3981（税込） 2SHM-CD／紙ジャケット／初回生産限定盤

ファイアー/クイーン1982』
ル UICY80368～9 ¥3981（税込） 2SHM-CD／紙ジャケット／初回生産限定盤

アット・ザ・レインボー '74』
ル UICY80370～1 ¥3981（税込） 2SHM-CD／紙ジャケット／初回生産限定盤

座の夜～ハマースミス1975』
UICY80372 ¥2934（税込） SHM-CD／紙ジャケット／初回生産限定盤

ト・ヒッツ・イン・ジャパン』
UICY75260 ¥4500 LP 初回生産限定盤

ことになる。まるで鏡をのぞきこむように、自分のような人の姿をそこに見る。息吹を感じる。

フレディ・マーキュリーならずとも、ビューティフル、とため息をつくしかない。

同時発売の来日記念関連8タイトル

最後に、アルバム『絆（Kizuna）』の発売にあわせて、以下のアルバムも再発されるので紹介しておこう。

1『ザ・ミラクル［デラックス・エディション］』は、89年の『ザ・ミラクル』と、未発表曲を含む〈ザ・ミラクル・セッションズ〉の2枚組デラックス・エディション（22年）の再発。

さらに、この『絆（Kizuna）』の素材ともいえるライヴ・アルバムもまとめて再発される。2『ライヴ・キラーズ』と3『ライヴ・マジック』は2001年の、4『クイーン・ライヴ!! ウェンブリー1986』は11年、5『オン・ファイアー／クイーンザ・レインボー1982』は04年、6『ライヴ・アット・ザ・レインボー'74』は14年、7『オデオン座の夜～ハマースミス1975』は15年と、それぞれ再発時のリマスター音源が使用されたリイシュー

CamScannerでスキャン

COLLECTORS' TOPIC

ボズ・スキャッグス

世界初CD化音源を含むレア・トラック集がリリースされる

文＝金澤寿和

ボズ・スキャッグスが昨年9月にデジタル・リリースした、米コロンビア時代のレア音源集が来日公演に合わせてCD化された。日本でのボズはAORのイメージが強いが、本誌読者ならご存知のようにルーツはブルースやR&B。10年代以降の直近3作は、メンフィスのロイヤル・スタジオ録音を含むなど、原点回帰したスタンスで高評価を得る。

そうした流れだろう、オリジナル選曲の16曲中9曲は70年代初期のもの。他は、出世作でAOR期のスタートにあたる76年の名盤『シルク・ディグリーズ』と、88年作『アザー・ロード』の関連曲で構成される。その配信版に、AOR期のレア曲2曲を日本独自に追加したのがこの『レア・コレクション（1971・88）』だ。最終的に、ボズのルーツ的トラックとAOR系楽曲がバランスよく、しかも時系列に並び、ややマニアックながらもボズという稀代のシンガーの横顔が見えるフォーマットになった。

では、収録曲を見ていこう。「恋人同志」と「きみのそば」は、ともにグリン・ジョンズがプロデュースした71年のコロンビア移籍1作目『モーメンツ』（通算3作目）からのモノ・シングル・ヴァージョン。初ヒット（全米61位）した前者はホーンが効いたファンキー・チューンで、舞い立つフルート・ソロが絶品。後者は女性コーラスを活かしたソフト・ロック調で、全米96位を記録した。

「アイ・フィール・ソー・グッド」と「ハリウッド・ブルース」は70年のライヴで、翌年のプロモーション用オムニバスEP『プレイバック』シリーズに収録。「アイ・フィール…」は正規作には未収のレア曲だ。

5曲目「ランニン・ブルー」は、71年作『ボズ・スキャッグス&バンド』からのシングル・モノ・ヴァージョン。続く「ベイビーズ・コーリン・ミー・ホーム」はフィルモア・ウエスト、71年のクロージング・ウィーク出演時のライヴからの音源で、72年発表の『フィルモア最後の日』に収録されていた。

7～9曲目は3作目『マイ・タイム』から。初期名曲「ダイナ・フロー」はマッスルショールズ・リズム・セクションを従えた、全米86位のシングル。それをモノラル版で入れている。「フリーダム・フォー・ザ・スタリオン」「フルロック・パワー・スライド」は72年の『プレイバック』シリーズに入っていたシングル・ミックスを採用。この「フリーダム…」はヒューズ・コーポレーションで知られるが、

CamScannerでスキャン

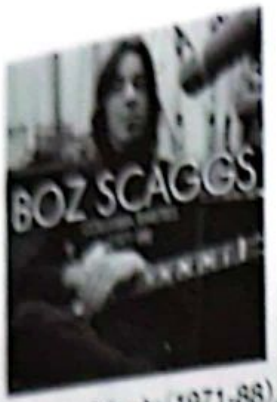
もとはアラン・トゥーサンがリー・ドーシーに提供したものだった。この時期、ボズはトゥーサン楽曲を積極的に取り上げ、後の『スロウ・ダンサー』『シルク・ディグリーズ』でもリメイクしていたことに注目したい。ここまでの前半9曲は、10年にFriday Musicが再発した『モーメンツ』『ボズ・スキャッグス&バンド』『マイ・タイム』の各デラックス版にボーナス収録されていたもの。Friday版まではどれもレアなテイクだったので、ここでの集成は大変ありがたい。

一転して後半は、いわゆるAOR系作品が並ぶ。「何て言えばいいんだろう」「ジャンプ・ストリート」「イッツ・オーヴァー」は76年8月、LAのグリーク・シアターでのライヴ。まさに『シルク・ディグリーズ』発売直後のツアーで、すべて同作からの選曲だ。バック・メンバーのクレジットはないものの、今ではTOTO周辺からデイヴィッド・ペイチ、ジェフ、マイク、スティーヴのポーカロ3兄弟と父ジョー、ギターにフレッド・タケットとドニー・デイカスの参加が明らかになっている。「ジャンプ・ストリート」の激しいスライドは、この後、シカゴに加入するデイカスによるものだそう。このライヴ3曲は、07年発表の『シルク・ディグリーズ（エクスパンディッド・エディション）』から。

さらに同作からの大ヒット曲「ロウダウン」（全米3位）をシングル・ヴァージョンで。ボズ自身『シルク・ディグリーズ』には思い入れが強く、主要曲は現在もステージ定番だ。ただし人気曲「ウィ・アー・オール・アローン」は、日本独自ヒットなので念のため。

続く「燃えつきて」と「ミス・サン」は、前述どおりこのCDだけに追加されたシングル・ヴァージョン。共に80年作『ヒッツ！』からで、前者は映画『アーバン・カウボーイ』のサントラに提供されたが、『ヒッツ！』版はイーグルス勢のコーラスが入ったテイク違い。全米14位を記録したシングル版は、さらにその短縮版になる。またこの2曲のシングル・エディションは、今回が世界初CD化とか。日本では19年に『グレイテスト・ヒッツ～ジャパニーズ・シングル・コレクション』が出たが、その時は双方ともマスターの手配がつかずアルバム版で収められた。なので、熱心なファンにはこれまた貴重なモノになる。

そしてラスト3曲は、88年作『アザー・ロード』関連曲で、これもFridayのデラックス盤に収録されたボーナス曲。「ユール・ネヴァー・ノウ」はアルバム未収のシングルB面で、「ソウル・トゥ・ソウル」は当時の日本盤と、一部欧州盤CDのみに収録の珍曲。「クール・ランニング」はシェップ・ペティボーンのリミックスによるシングル・ヴァージョン。わりと軽く見られがちな『アザー・ロード』だが、この機にいま一度お聴き直しを。



『レア・コレクション（1971-88）』

①[illegible]（モノ・シングル・ヴァージョン）▲②[illegible]（モノ・シングル・ヴァージョン）▲③アイ・フィール・ソー・グッド（ライヴ 1970）▲④ハリウッド・ブルース（ライヴ 1970）▲⑤ランニン・ブルー（モノ・シングル・ヴァージョン）▲⑥ベイビーズ・コーリン・ミー・ホーム（ライヴ・アット・ザ・フィルモア・ウエスト）⑦ダイナ・フロー（モノ・シングル・ヴァージョン）▲⑧フリーダム・フォー・ザ・スタリオン（シングル・ミックス）▲⑨フル・ロック・パワー・スライド（シングル・ミックス）▲⑩何て言えばいいんだろう（ライヴ）⑪ジャンプ・ストリート（ライヴ）⑫イッツ・オーヴァー（ライヴ）⑬ロウダウン（シングル・ヴァージョン）⑭燃えつきて（シングル・ヴァージョン）■⑮ミス・サン（シングル・ヴァージョン）■⑯ユール・ネヴァー・ノウ⑰ソウル・トゥ・ソウル⑱クール・ランニング（シェップ・ペティボーン・リミックス）

▲＝日本初CD化
■＝国内盤ボーナス・トラック（世界初CD化）

ソニー SICP31685 ¥2000 Blu-spec CD2／1・24発売 歌詞・訳詞つき 解説＝中田利樹

COLLECTION

〈アライヴ・ザ・ライヴ〉レーベル

オジー・オズボーンやヴァン・ヘイレンなどハード・ロック系の来日公演が多数を占める8タイトル

ライヴ音源を中心にCD化している〈アライヴ・ザ・ライヴ〉シリーズ。今回は1月に発売されたハード・ロック系アーティストの8タイトルを紹介したい。デビュー作発表に伴うオリジナル・ラインナップもの、またライヴ・イン・ジャパンものが多いので、各ファンは要チェックだ。

まずはオジー・オズボーンの2タイトル。[1]は、1981年5月18日に行なわれたインディアナポリス公演を収録。1曲目はフェイド・インするが、当日のショウをほぼ完全収録。ソロ・デビュー作『ブリザード・オブ・オズ』に伴うツアーからで、ギターはもちろんランディ・ローズ。キーボードは本ツアーのみに参加のリンゼイ・ブリッジウォーター。デビュー作を中心としたセットリストで、次作『ダイアリー・オブ・ア・マッドマン』収録曲やブラック・サバス『パラノイド』も披露している。音が割れぎみで、客の歓声にもオーヴァーダビングと思われる不自然さがあるが、最初期のライヴを収めた貴重な音源だ。

[2]は、84年6月29日の東京厚生年金会館公演を完全収録。『パーク・アット・ザ・ムーン』に伴う来日ツアーの二日目。ギターはジェイク・E・リー。キーボードはドン・エイリーだが、彼の母が急逝したため、この日のライヴを最後に急遽帰国。以降の6公演はドン抜きで行なわれた。当時、ドン抜きのライヴを体験したファンは、本来のパフォーマンスを知ることができるという意味で特に興味深いだろう。トリッキーなテクニックを織り交ぜたジェイクのギター・ソロ、客を煽りまくるオジーの絶好調ぶりも聴きどころだ。

[3]は、ガンズ・アンド・ローゼズが88年2月2日にニューヨークのザ・リッツで行なったライヴを完全収録している。空前の大ヒット作となったデビュー・アルバム『アペタイト・フォー・ディストラクション』に伴うもので、同作収録12曲中9曲に、ボブ・ディラン「ノッキン・オン・ヘヴンズ・ドア」、エアロスミス「ママ・キン」のカヴァーを加えた全11曲を披露している。彼らの本質であるワイルドかつ危険な香りのするパフォーマンスは、このオリジナル・ラインナップでしか味わえないもので格別だ。

[4]は、ドッケンがワールド・ツアーの一環で行なった来日ツアーから、88年4月21日の横浜文化体育館公演を収録。同年11月には日本公演音源を収録した『ビースト・フロム・ジ・イースト』が発売されるが、ライヴ音源を編集したものだった。[4]はショウの丸ごとを完全収録しているので、より生々しく彼らのライヴを追体験できる。バンドは同ツアー後に解散するが、ジョージ・リンチのテクニカルなギター、ドン・ドッケンのパワフルなヴォーカルなど、軋轢が生じていた内部事情を感じさせない熱いパフォーマンスが聴ける。

[5]は、ドッケン解散後に、同メンバーのジョージ・リンチとドラムのミック・ブラウンらで結成したリンチ・モブによる91年2月23日、ミシガン州ローズヴィル公演を収録。デビュー作『ウィキッド・センセーション』に伴うオリジナル・ラインナップによるもので、

CamScannerでスキャン

1 オジー・オズボーン・フィーチュアリング・ランディ・ローズ『ライヴ・イン・インディアナ1981 キング・ビスケット・フラワー・アワー』
IACD11291

2 オジー・オズボーン『ライヴ・イン・ジャパン1984』
IACD11292

3 ガンズ・アンド・ローゼズ『ライヴ・イン・ニューヨーク1988』
IACD11293

4 ドッケン『ライヴ・イン・ジャパン1988』
IACD11294

5 リンチ・モブ『ライヴ・イン・ミシガン1991』
IACD11295

6 ジェフリア『ライヴ・イン・ジャパン1985』
IACD11296

7 ストライパー『ライヴ・イン・ジャパン1985』
IACD11297

8 ヴァンデンバーグ『ライヴ・イン・ジャパン1984』
IACD11298〜9

同作から大半の曲が披露されている。ジョージ自らが主導権を握ったこともあってか、ドッケン在籍時以上の派手でテクニカルなギターを伸び伸びと聴かせている。オニ・ローガンのヴォーカルは不安定かつパワー不足に聞こえるところも多い。同ツアー後にオニが解雇されることに思わず納得したりして。

6は、元エンジェルのキーボード奏者のグレッグ・ジェフリアが結成したジェフリアによる初来日公演から、85年6月26日の東京・中野サンプラザ公演を収録。85年に発売されたVHS作品『ジャパン・ツアー'85』に収録されたものと同じ日の音源を完全収録している。デビュー作『美伝説』発表後のライヴで、ヒットした「コール・トゥ・ザ・ハート」を含む同作収録曲中心のセットリスト。後にメロディック・ロック・ファンから再評価されるジェフリアだが、当時は短命に終わってしまったため、オリジナル・ラインナップによるこのライヴ音源は、当時を知らないファンにとっても嬉しい。

7はアメリカのクリスチャン・ヘヴィ・メタル・バンド、ストライパーの初来日公演から、85年7月8日に東京郵便貯金ホールで行なわれたライヴを完全収録している。黄色と黒のストライプ模様の衣装に身を包み、ライヴで聖書を配るなど、当時はイロモノ的に見られることもあったが、マイケル・スウィートの伸びやかなハイ・トーンとメロディ豊かな楽曲の魅力を再評価する声が高い。ジェフリアと同様に、若いメロディック・ロック・ファンに歓迎されるだろうライヴ音源だ。

8は、後にホワイトスネイクへ参加するギタリストのエイドリアン・ヴァンデンバーグが結成したヴァンデンバーグの来日ツアーから、84年6月16日の大阪厚生年金会館公演を完全収録。ファンの多い日本でハード・ロックの名盤とされる2作目『誘惑の炎』に伴うもの。テクニックだけでなくメロディ・センスに長けたエイドリアンのギターをメインに、「ディファレント・ワールド」などのバラード、疾走感のある「ウェイティング・フォー・ザ・ナイト」などのハード・ロック曲をバランス良く並べたセットリストで、改めて彼らの楽曲の魅力に気づかされる。

CamScannerでスキャン

フェイ・ウォン

90年代に最も成功した中華圏の女性シンガーの7タイトルがアナログで再発

文=宗像明将

完全生産限定盤の国内盤アナログLPが、21年に3作品、23年に4作品リイシューされ、いずれも即完売となったフェイ・ウォン。21年の第1弾リイシューは99年のベスト盤「ザ・ベスト・オブ・ベスト」、94年の「夢遊」と「天空」、23年の第2弾リイシューは94年の「背影」、95年の「マイ・フェイヴァリット」と「DI-DAR」、96年の「ANXIETY（浮躁）」と、いずれも94年以降の作品がリリースされてきた。

そして今回の第3弾は、89年から94年までのアルバムの全7タイトル。しかも、92年からフェイ・ウォンという名義になるが、それ以前の3作品は、日本盤として初のリリースとなる。

R&B的な曲も含む初期作

89年の「シャーリー・ウォン」は、日本盤として初リリースとなるデビュー・アルバム。アルバム・タイトルのシャーリー・ウォンとは当時のアーティスト名義である。北京を離れ、レッスンを経て生まれたデビュー作だ。そうした経緯から、北京からやってきた女の子、というキャッチ・コピーで売りだされたものの、歌詞は広東語。3万枚を売り上げてゴールド・ディスクを獲得している。

「シャーリー・ウォン」の10曲中5曲はカヴァー。「無力なあの日」は、EPOの「白い街 青い影」のカヴァーだ。原曲のEPOのヴォーカルも艶やかだが、フェイによるカヴァーでの情感の豊かさと、それを生みだすヴォーカル・コントロールの的確さには目を見張るものがある。ヴォーカリストとしては、香港デビュー作の1曲目ですでに高い完成度を誇っているのだ。それゆえにカヴァーながら強いオリジナリティを生みだしている。「縁があったら」での澄んだ高音も美しい。「最終電車」は、浜田省吾の「いつわりの日々」のカヴァーで、浜田省吾流のソウル・ナンバーを自分のものにして歌いこなしている。「落ち着かない心」で彼女とデュエットしているのは、BEYONDのポール・ウォンというところ

CamScannerでスキャン

にも、フェイへのレコード会社の期待の高さがうかがえる。そして、アルバムを通じて、フェイが愛してやまないテレサ・テンの影響を感じさせるのも特徴だ。

90年の『エヴリシング』も、日本盤としては初リリースとなる。こちらもシャーリー・ウォン名義のアルバムだ。EPOのカヴァーは続き、ここに収録されている「エッフェル塔の頂上に」は、EPOの「ふたりのメロディー」のカヴァーだ。メロディーに対して深い情感を込めていくフェイのヴォーカル・スタイルを、ここでも聴くことができる。アルバムのタイトル・ナンバーである「Everything」は、ジョディ・ワトリーのカヴァーで、前作にはない大きなスケール感をもたらしている。また、前述の2曲のようにR&B、ソウル色が強い部分もあり、さながら香港産シティ・ポップ。マリリン・マーティンは2曲カヴァーされており、こちらは歌いあげるスタイルだ。「My Loneliness」は、まるで日本の歌謡曲のようである。とはいえ、EPOのウォン・カークイが作曲した「強く抱きしめて」を筆頭として、軽やかさのある楽曲のほうが魅力的だ。

90年の『ユアー・ジ・オンリー・ワン』も、日本盤として初リリース。ウォン・チン・マン名義が加わったアルバムだ。カヴァーは10曲中7曲を占める。そのうち4曲はEPOのカヴァーで、その点だけ見れば、さながら〝香港のEPO〟でもある。ただ、その歌い回しは濃厚であり、同じ楽曲を歌ってもEPOとは異なる表情になる点が、この時期になるとさらに如実になっている。取りあげられたEPO楽曲のなかでも強いフックのある「いろんな国で暮らしたい」のカヴァーである「飾らない」はその好例であり、アルバムの最後を飾るにふさわしい。ダイアナ・ロスのカヴァーである「まだ待ってる」はレゲエ・アレンジに乗せたコブシが麗しく、キャリン・ホワイトの〝Superwoman〟のカヴァーである「彼のおかげで」ではメロディーを丹念に磨きあげるかのようなヴォーカルを聴かせる。アンソニー・ロン作曲の「静かな夜のクラリネット」のメランコリーも美しい。ソウルを消化したフェイ流のシティ・ポップ期の完成形でもある。

92年の『カミング・ホーム』は、〝フェイ〟という名義が加わったアルバム。留学先のニューヨークから一時帰国して制作した作品にして、ジャケットには北京をイメージさせる〝京〟の文字が映る。ザ・パーティの〝Storm Me〟のカヴァーである「浪漫風景」やザ・ディールの〝Two Occasions〟のカヴァーである「ミス・ユー・ナイト&デイ」など、同時代のソウル、R&Bの要素がより濃くなっている。それらを歌いあげるフェイのヴォーカルは以前にも増して伸びやかであり、ニューヨークでのヴォイス・トレーニングの成果を実感させる。かと思えば、中島みゆきがちあきなおみに提供した「ルージュ」のカヴァーである「傷つきやすい女」も収録されており、フェイのヴォーカルはメロディーをたおやかに包みこむ。この「傷つきやすい女」の大ヒットにより、フェイは一躍トップスターとなる。「知らぬ同士のデート」はまさにソウル・ナンバー。「どんなことも」「ハッピーな涙」は、まさに当時のコンテンポラリーR&B。香港、ニューヨーク、日本の文化が溶けあうなかでも、同時代のニューヨークの影響が一気に表出している作品だ。

93年の『悔やまぬ心で』は、前作の大ヒットを受けて、留学先へ戻ることなく制作されたアルバム。人と抱き合うジャケットからして、それまでの雰囲気とは大きく異なる。タイトル・ナンバーである「悔やま

CamScannerでスキャン

ぬ心で」は、フェイが初めて作詞をした楽曲であり北京語だ。自身のルーツである言語にフェイのヴォーカルが息吹を深く込めていく。カヴァー曲のなかでもっとも重要なのは、エヴリシング・バット・ザ・ガールの"The Road"のカヴァーである「明日からは」だ。洗練を強く志向するフェイの姿勢が色濃く出た選曲にして、それに向き合った情感を込めすぎないヴォーカルも新鮮だ。「子供じゃないの」の長いアウトロでストリングスが響き続けるアレンジも、サウンドの洗練を印象づける。ポピュラリティを獲得する一方で、フェイの音楽的な志向がさらに表現されるようになったアルバムだ。

93年作で日本デビュー

93年の『十万回のなぜ』は、日本でのデビュー作であり、フェイを引き気味に撮影したジャケットも印象深い。フェイはこうしたデザイン面のほか、スタイリングや作曲にも関わりはじめる。ゴシップを書きたてるメディアを皮肉った歌詞の「流れるは飛ぶに非ず」は、それまでのフェイにはないほど弾けたポップさをたたえている。そこからヘレン・ホフナーの「サマー・オブ・ラヴ」のカヴァーへと続く流れには、欧米のポップスを強く意識していることがうかがえる。トーリ・エイモスの「サイレント・オール・ジーズ・イヤーズ」のカヴァーである「冷戦」も選曲の妙が光る。中島みゆきの「悪女」のカヴァーである「偽りの愛」は、テクノをベースとしたアレンジになっており大胆かつ新鮮。ポリスの「ドゥドゥドゥ・デ・ダダダ」のカヴァーも打ち込み主体だ。一方、フェイが作詞作曲を手がけた「変わらぬ心」などでは、濃厚な中華歌謡を聴かせる。ミディアム・ナンバーを重視した構成であり、アーティスト・エゴの発露が、アルバムにおけるフェイの個性を鮮やかに浮きあがらせる。

94年の『恋のパズル』は、フェイにとっての母国語である北京語で初めてレコーディングされたアルバム。フェイの愛するテレサ・テンの代表曲も北京語によるものだった。しかも、レコーディングは台湾で行なわれている。台湾の公用語も北京語をベースにしており、中国本土を含む広いリスナーの獲得を目指していたのかもしれない。さらに、広東語の楽曲を北京語に置き換えるだけではなく、台湾のリンフェアー・レコードのスタッフが制作を主導し、北京語によるオリジナル曲も制作されていった。これにより、北京語圏でフェイは大きな支持を獲得していくことになる。

アルバムは、オーケストラの壮大な演奏で始まる「私の願い」で幕を開ける。そこにフェイの歌声が乗るわけだが、その北京語でのヴォーカルの甘さ、艶やかさ、深く豊かなニュアンスは、さすが母国語での歌唱だと舌を巻くものがある。厚いオーケストラの響きに対して、フェイのヴォーカルの存在感はまったく引けをとらない。ヴォーカル・アルバムとして考えたとき、ここまでのフェイの作品群のなかでも『恋のパズル』はひとつの頂点だと感じる。

また、北京語のアルバムとして、過去のアルバムの収録曲を再び歌っているのも『恋のパズル』の特徴だ。『悔やまぬ心で』のタイトル・ナンバーである「悔やまぬ心で」は、スティール・ギターが響くカントリー・サウンドに。サウンドの味つけが濃くなっても、フェイの歌声はそれを味方につけるかのように、より伸びやかに歌いあげる。サウンド面で言えば、「まわり続ける世界」の演奏にはカリブ～南米のニュアンスがあるのも新たな試みだ。中華テイストとプログラミングが同居する「私だから

CamScannerでスキャン

『シャーリー・ウォン』
UUY75253

『エヴリシング』
UUY75254

『ユアー・ジ・オンリー・ワン』
UUY75255

『カミング・ホーム』
UUY75256

『悔やまぬ心で』
UUY75257

『十万回のなぜ』
UUY75258

『恋のパズル』
UUY75259

※レーベルはすべてユニバーサル／LP／各¥3773／2・16発売／歌詞・訳詞・解説つき／
完全生産限定盤

こそ」でのヴォーカルも濃密だ。

『十万回のなぜ』に収録されていたヘレン・ホファーの「サマー・オブ・ラヴ」のカヴァーは、北京語による「酔い痴れて」として再収録。同じく『十万回のなぜ』に収録されていたトーリ・エイモスの「サイレント・オール・ジーズ・イヤーズ」のカヴァーである「冷戦」も北京語ヴァージョンで再収録されている。リサ・フィッシャーの「ソー・インテンス」のカヴァーは、「悔やまぬ心で」に「美人のフェイフェイ」として収録されていたが、北京語で「心がワイルドすぎて」として再収録されている。この時期のカヴァーの選曲に確たる自信があった表われでもあるだろう。

こうして香港でのデビュー以降の7作品を紹介してきたが、強烈な印象として残るのはフェイのコスモポリタンぶりだ。中国、香港、日本、ニューヨーク、台湾とさまざまな地の音楽を吸収している。特に、留学後の「カミング・ホーム」の雰囲気の変わり方は、フェイというアーティストの個性を雄弁に物語る。そして、自身のアイデンティティである北京語に回帰した『恋のパズル』も生まれるわけだ。

そうしたコスモポリタンぶりは、カヴァーの選曲においても光る。初期にEPOの楽曲を多くカヴァーしていたのは、EPOがロンドンに長期滞在して制作した作品群に、当時のプロデューサーのアルヴィン・リョンが注目したからだという。当時の日本の良質なシティ・ポップを吸収しながら、留学後はフェイの音楽的なセンスが開花するかのように、エヴリシング・バット・ザ・ガールなどのカヴァーをしていく。アーティストとしての急成長ぶりを体感できる7作品でもある。

私は95年頃に香港を訪れ、当時のフェイの作品など、大量のCDを現地盤で買いこんだものだ。当時は香港返還前であり、イギリス領ならではの猥雑な香港の街の風景が忘れられない。そんな当時の香港から生みだされ、洗練の度合いを増していったのが、この時期のフェイの作品群なのだ。

CamScannerでスキャン

『SPレコード博物館』

圧倒的な量のSPレーベルを
独自の切り口で掲載した書籍が伝える時代の空気

取材・文＝小川真一
取材協力＝名古屋・open house

めくってもめくってもSPレーベル

保利透が著した『SPレコード博物館 明治・大正・昭和のレコードデザイン』が発売となった。これが実に独創的な一冊なのだ。SP盤の歴史を綴った本でもなければ、ディスコグラフィーの類とも違う。本の題名に"博物館"とあるように、SPレコードのレーベルがずらりと並べてある。すべてカラー写真で、その数2300枚。464ページという圧倒的な物量で、めくってもめくってもめくってもSPのレーベル面が出てくる。

まず最初に登場するのが、ポリドール・レコードから戦前に発売されていた"写真盤"と呼ばれていたもの。SP盤といえば、レーベル名と演奏曲目、歌手名などを記した無骨なデザインが多い中、この"写真盤"は目を引いたと思う。ちなみに、"写真盤"と呼べるのはポリドールだけで、他社のレーベルのものは、"写真付き"、"写真入り"と呼んで区別されているようだ。

昭和13年の東海林太郎〈吼えろ!蒙古〉から始まり、昭和16年の竹口前女、久保市太郎、越澤米子、如月俊夫らによる〈愛林音頭〉まで、戦前の"写真盤"だけで45ページ。ポリドールの"写真盤"は大きく捉えると、最初がモノクロで途中からチョコレート色となり、セピア色になって白黒に戻るそうだ。このあたりの遍歴を目で確かめることができる。写真といってもちゃらついたものではなくて、かつて写真館で撮った記念写真のようなものが多く、そこにモノクロの背景が付いたり、それぞれの意匠が施されているのが興味深い。

ポリドール盤関連の充実度は、さすが保利透さんだといえる。ちなみに"保利透"というのはペン・ネームであり、"ポリドール"をもじって付けられたものなのだ。

全体の構成でいえば、ポリドールに始まり、ニットー、タイヘイ、日本マーキュリー、テイチク、コロムビア、ビクター、キングなどのレコード会社各社のページが続いていく。日本マーキュリーの薄い水色を背景にしたデザインや、カラーやイラストを配したキングの戦後盤、どこか華やかさのあるコロムビア盤など、それぞれのレーベルのカラーがよく表われている。

その他のレーベル編では、アメリカやブラジルで発売された移民邦人向けのレコード、戦後の松竹歌劇団や宝塚歌劇団のレヴュー・レコードといったレアなアイテムも登場してくる。東芝といえばザ・ビートルズの日本盤発売元として知られているが、レコード事業に参入したのは遅く、SP時代には大きなヒットを飛ばすことはなかっ

た。その中から、大江洋一〈東京の横顔（プロフィール）〉（曲：浜口庫之助／編曲：三保敬太郎）が掲載されている。

後半のジャンル分けのページこそ、保利透さんの真骨頂。〝浅草オペラ〟から始まり〝お伽歌劇〟〝映画説明と漫談〟〝二村定一〟と並んでいく。〝エロ歌謡〟〝へたジャズ〟〝インチキレコード〟〝防諜のレコード〟〝映画／俳優のレコード〟といったところは、保利透さんが主催する〈ぐらもくらぶ〉が復刻CD化しているコンピレーション・アルバムと直結している。〈ぐらもくらぶ〉は、戦前のSP音源を中心に、独自の切り口で編纂し発売している独立レーベルだ。1本のヴィンテージ・マイクを使用し、戦前のレコーディングの光景を現在に再現した『大土蔵録音2020』は、翌21年にミュージック・ペンクラブ音楽賞のポピュラー部門最優秀作品賞を受賞している。

NHKの連続テレビ小説〈ブギウギ〉にちなんだ、服部良一と笠置シズ子のページも用意されている。服部良一が大輪を咲かせたコロムビア時代だけでなく、修行時代でもあったキング、タイヘイ、クリスタル・レーベルの盤面もしっかりと掲載されている。笠置シズ子の〈アロハ・ブギ〉〈ザクザク娘〉〈買物ブギー〉などの写真付きレコードも見ていてとても楽しい。

これだけの数のSP盤のレーベル面を一度に見ることは、まずはないだろう。チョイスの基準は、ヒット曲を中心としたものではなく、ノスタルジックな感覚で集められたものでもない。ここが重要。そういった郷愁のフィルターを排除し、時代の空気感をヴィヴィッドに伝えるデザインを主眼に選ばれているのだ。本の帯にも〝目で楽しむ78rpm〟と大きく書かれている。

掲載レコードのレコード番号、作詞作曲編曲のクレジットなどはもちろん記されているが、ディスコグラフィーのようなデータはあえて外したという。今の段階でデータを活字化してしまうと間違いがあっても修正することは不可能だ。アーカイヴにするのなら、ネットを活用して集合知で作っていくほうが賢明、という判断なのだ。この保利さんの判断を、とても清いと思った。

『SPレコード博物館　明治・大正・昭和のレコードデザイン』
保利透著／Pヴァイン／¥4800／発売中

案外と忙しい蓄音機DJ

さて、この『SPレコード博物館　明治・大正・昭和のレコードデザイン』の発刊を記念してイヴェントが開かれた。1月18日、場所は名古屋・今池のopen house。この店はライヴハウス：Tokuzoの姉妹店で、店名はかつて名古屋にあった伝説のブルース喫茶に由来する。

ブルースやソウルのレコードを聴きながら気楽に酒が呑める店なのだが、たまに少人数のライヴや、トーク・イヴェントなども開かれている。少し前にも、トミー・ジョンソン、フランク・ストークス、チャーリー・パットン、メンフィス・ジャグ・バンドなどの戦前ブルースをSP盤で聴くという催しが行なわれたばかりだ。

『SPレコード博物館』出版記念イヴェ

ントだが、まずは保利透さんによる蓄音機DJからスタートした。両脇に2台の蓄音機を置き、交互にSP盤をかけるというスタイル。今回はこの蓄音機の音を、持参したマッダA型ヴェロシティ・マイクというマイクロフォンで拾い会場に流すというシステムがとられた。

ポータブル型の蓄音機は高域がきつくなる傾向にあるが、その音質がヴィンテージ・マイクを介することで独特の円やかさを醸す。open doorという小屋の鳴りが素晴らしかったことと相まって、最上の音空間を生み出していた。この音質ならば、何時間でも聴いていたくなる。

若き日の美空ひばりが歌う〈上海〉で始まり、笠置シズ子〈セコハン娘〉へと繋がっていく。LPやシングル盤のDJと違い、1曲ごとにハンドルを回しゼンマイを巻いたり、針を交換するという作業をしなければならない。蓄音機DJも案外と忙しいのだ。

そもそもDJ（ディスク・ジョッキー）という言葉は、蓄音機の時代に始まったという説がある。10インチ盤の場合、片面の収録時間が4分程度であり、クラシックなどの長時間演奏ものは両面（もしくは2枚）にまたがって収録されているケースがあった。その両面を切れ目なくプレイするのがひとつの技であり、その様子が馬から馬に乗り継ぐ騎手（ジョッキー）のようなところから、ディスク・ジョッキーという言葉が生まれたという説だ。

諸説はあるにせよ、SP盤の時代からディスク・ジョッキーという言葉があることは確かだ。蓄音機DJは、その原点に立ち戻ったスタイルだともいえる。蓄音機を2台使ったDJは、世界的に見ても他におらず、唯一無二の存在だとか。

蓄音機を使って古い流行歌などを回すイヴェントは他にもあるが、大抵の場合は曲をかける前に、〝東海林太郎先生は、いつも燕尾服を着て直立不動の姿勢で歌われ……〟といった能書きをたれ、おもむろにSP盤をかける、これが一般的だ。

このようなオールド・スタイルと保利流の蓄音機DJはまったく違う。言葉を混じえずに、次から次に曲をかけていく。ノスタルジーの介在をまったく排除し、SPから流れる曲のパワーのみでフロアを揺らしていくのだ。

笠置シズ子〈おしゃれ娘〉、楠木繁夫〈どうじゃね元気かね〉、藤山一郎〈歌えば天国〉などが蓄音機から流れ出すのは痛快極まりない。キャブ・キャロウェイ楽団〈セント・ルイス・ブルース〉から、コロムビア・リズム・ボーイズの〈つもりつもりだ〉に繋がった瞬間には、思わず身を乗り出してしまった。

約45分間の蓄音機DJタイムの後は、『SPレコード博物館　明治・大正・昭和のレコードデザイン』にまつわるトークの時間となった。これには本記事筆者の小川真一も聞き手として参加した。そのトーク・ライヴを少し再現してみよう。

1月18日のイヴェントで。小川氏と保利氏（右）

CamScannerでスキャン

――蓄音機DJ、面白かったです。今日は笠置シズ子がたくさんかかったんですけど、朝ドラの〈ブギウギ〉は見てるんですか。

「見てません（会場どよめき）。ユニバーサル・ミュージックから、笠置シズ子の入っていないブギウギのコンピレーション『踊れ！ブギウギ～蔵出し戦後ジャズ歌謡1948・55』とか作っているんですけど、恥ずかしながら観ていません（笑）。

別に変な意味で観てないんじゃなくて、この業界で働いているとドラマや映画のありようもよくわかるのですが、観ると何か言いたくなっちゃうんですよ。例えばドラマの中に〝笠置シズ子がデビューしました〟という新聞記事が出てくるとするじゃないですか、活字が昔風だしよく出来ているっていうんですよ。でも、漢字にルビがふってないと、もう気になっちゃうんですよ。

あとは、笠置シズ子の舞台シーンのマイクとか、こだわり強いので観るとついそういうのを言いたくなる自分がイヤなんで、観ないで応援してます」

――本（『SPレコード博物館』）を読ませてもらったんですけど、よくぞまあこれだけ集めましたね。へたジャズとか演歌のレコードとか、子供のレコードとか、ジャンルも幅広いですよね。

「これはコレクターの見識に関わるんですよ。その人がどんなものに興味があるのか、出てしまう。例えば本の中に、浪花節も民謡もテーマとして入ってないですよね。人気のあるジャンルなんですけど、僕自身の興味がそちらにいかないからなんでしょうね」

――本のあとがきを読んでいて一番おもしろかったのは、〝レコードは聞かない〟だったんですが（笑）。

「レコードを集めてみよう、と思う時に、思い出の曲とか知ってる曲から集めると思うんですよ。笠置シズ子に興味があるのなら、やはり〈東京ブギウギ〉は欲しいとか。そういうのを辿っていくと100枚くらいは集まると思うんですよ。そこから先に進むか進まないか。ここで留まるのが常識人というものです（笑）」

――保利さんは非常識人。あ、僕もか（笑）。

「コレクターの方には、ともかく数を増やすのが好きな方もいますね。部屋中にレコードが溢れていると悦に入るとか。

もう少し高尚になると、レーベルで揃えたくなる。でも案外と、あと数枚を残して集まらないこともあって、そのままにしてしまう人もいたりする」

――コレクターの業ですよね。

「最近、集めるものがなくなって、コロムビアのコロちゃんレコードに手を出し始めたんですよ。オヤジが子供のレコードを集めるのもどうかと思うんですけど、溜まってくるとニンマリしてしまう（笑）」

このあたりの蒐集奇談・珍談はきりがない。さすが高校時代からSP盤をコレクトしてきただけはある。コレクターという人種の性癖を裏の裏まで知り尽くしているのだ。その人知を超えた濃い話もオフレコで出てきたのだが、怖くておいそれとは書けない。これらはいつか保利さん自身の筆で語っていただきたいと思う。ちなみに保利透さんは1972年生まれ。SP盤蒐集家の中では、まだ若手の部類に入る。

最後の質疑応答では、若い女性からグィバーウェイグについての質問まで飛び出てきた。これが今後、SPレコードとどう結びついていくのか興味深いのだが。

今回出版された『SPレコード博物館　明治・大正・昭和のレコードデザイン』という本を外して、大きな特徴を生み出していくような、そんな予感がした。

（1月16日　名古屋・ささしまライブにて）

CamScannerでスキャン

NOKKO

多彩なソロ・キャリアをまとめた10枚組ボックス・セット

文＝池上尚志

NOKKOのソロ・キャリアをまとめたボックス・セット『NOKKO ARCHIVES 1992-2000』がリリースされる。もともとは1月14日に発売が予定されていたが、内容を追加して2月28日発売へと変更になっていたものだ。91年にレベッカが解散すると、NOKKOは92年からソロ活動を開始。96年までにソニーに5枚のオリジナル・アルバムを残し、98年にはアリスタ・ジャパンに移籍。00年までに2枚のアルバムを残した。それ以降も数枚のアルバムを制作しているが、今回はソニーが権利を持つ00年までの作品を10枚のディスクに網羅したものとなった。NOKKOのソロ作品はストリーミングの配信状況があまり良くないので、今回のボックス発売は嬉しいところだ。

クラブ・サウンドに接近したデビュー作

NOKKOのキャリアを織り交ぜながら、各ディスクを紹介していこう。埼玉県浦和市に生まれたNOKKOは、高校の頃に歌い始め、ガールズ・バンドのDOLLを結成。なんとUFOなどのカヴァーをやっていたようだ。そのライヴを見た木暮武彦がNOKKOを誘い、82年にレベッカを結成。84年にデビューした。レベッカでの時代を変えるほどの活躍は周知の通りだろう。レベッカは解散後、幾度かの限定的な再結成の後、現在は特に活動スタンスを決めずに、ゆるりと存在しているようだ。

CamScannerでスキャン

レベッカの解散後にリリースされたソロ・デビュー・アルバムが［1］『ハレルヤ』（92年）。当時、ソウルⅡソウルでグラウンド・ビートの誕生に関わり、シンプリー・レッドのメンバーとなっていた屋敷豪太がプロデュースを担当。この時期の英国のダンス・ビートを全面的に取り入れたクラブ・サウンドに仕上がっている。この頃は、メジャー・アーティストが本格的なクラブ・サウンドに挑戦するのは珍しかったはずだ。屋敷の人脈か、当時、ボム・ザ・ベースのメンバーだった鈴木賢司（g）、ピンク・フロイドのサポートなどで知られるガイ・プラット（b）、Pファンクのバーニー・ウォーレル（kbd）が参加という豪華さ。また、「COSMIC SUNSHINE BABY」では、レベッカの「SUPER GIRL」（89年）に引き続き、ニューヨークの大御所DJでありリミキサーであるフランソワ・ケヴォーキアンと、マドンナの「ヴォーグ」のミックスを手がけるなど、ニューヨークを拠点に世界的なエンジニアとして活動するGOH HOTODAがリミックスを担当。NOKKOはレベッカの頃からダンス留学も兼ねてニューヨークの作業の現場を訪れていたようで、それがGOH HOTODAとの出会いとなったようだ。アルバムはソロ・キャリアで最高となる2位となった。

セカンドの［2］『I Will Catch U』（93年）は、新曲6曲に前作からのリミックス4曲という変則的な作品。新曲ではテイ・トウワやセイント・エティエンヌらがサウンド・プロデュースを担当。前作と打って変わってアメリカ的なハウス・アルバムに仕上がっているのは、アメリカ・デビューが決まっていたからだろう。レベッカ時代からマドンナのイメージを自身に重ね合わせてきたようなところがあっただけに、この時代のポップ・スターのトレンドにしっかり照準を合わせている印象だ。

［3］『CALL ME NIGHTLIFE』（93年）は、『I Will Catch U』の英語版で、アメリカやヨーロッパでも発売された。一部の収録曲が変更されたほか、「I Will Catch U」はシングル・カットされ、『ビルボード』のダンス・チャートで11位となった。

［4］『colored』（94年）はこれまでのダンス路線から離れたポップ作品だが、カラフルな楽曲と、岩崎工やブラボー小松、岡野ハジメなど、ニュー・ウェイヴ出身のクセのあるミュージシャンたちが参加した影響か、ポップな中にも尖った部分をほどよく残し、ソロ・キャリアの中でも最高傑作といっていい仕上がりとなった。富家哲がモントゥーノを取り入れたポップ・ハウスなアレンジをした「Vivace」、筒美京平が作曲した「人魚」（元ネタはジャネット・ジャクソン「Again」）、いくつものヴァージョンが作られた「ライブがはねたら」という、アルバム発売前にリリースされた3枚のシングルは、全く違う傾向の楽曲ながら、どれも非常に質が高い。中でも「人魚」は自己最高の2位となり、後に安室奈美恵ほか多くのアーティストがカヴァーするスタンダード的な楽曲に成長。名実ともにソロ時代の代表曲となっている。

95年には阪神・淡路大震災の復興支援を目的にレベッカが再結成。横浜アリーナでの二日間のライヴのみで活動を終えた。こういったことから活動環境や心情にも変化があったのだろうか、［5］『Rhyming Cafe』（96年）は、これまでのサウンド的なこだわりを捨てて、うさぎスタジオ＝埼玉の実家で、兄の山田貢司と共に制作した素朴なポップ作品となった。これまでの作品と比べるとあまりにも飾りっ気がないため、地味な作品と位置付けられることが多いが、楽曲の出来も含め、内容は悪くない。屋敷

＊曲目表は119ページに掲載

CamScannerでスキャン

豪太が3曲でアレンジを手がけ、ミックスはGOH HOTODAが担当している。

淡々と歌い綴るアコースティック作

［6］『ベランダの岸辺』（98年）は、アリスタ移籍第1弾作品で、キャリア中で唯一となる"のっこ。名義での作品。白井良明をプロデューサーに迎えたアコースティック・アルバムで、ほとんど声を張ることなく、淡々と歌い綴っていく異色の作品だ。歌詞には私小説的な性質も滲む。ユーミンの「ベルベット・イースター」や、ミルトン・ナシメント「TRAVESSIA」の日本語カヴァー（作詞はかしぶち哲郎）など、意外な選曲も。特に後者は非常にいい仕上がりだ。ファンの間では愛されている作品で、いつも元気なNOKKOばかりが求められているわけではないことが分かる。

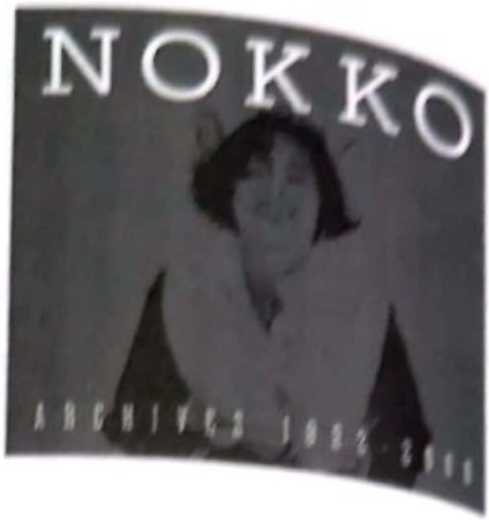
［7］『Viaje』（00年）は、前作から引き続きとなる白井良明と、これまで何度かコラボしてきた原敬豪太のプロデュースで、ロンドン、ドイツ、日本で録音された作品。久々に渡ったサウンド・プロダクションだが、全体的にビターなテイストに仕上がっている。サウンド面の仕上がりは悪くないが、この頃、NOKKOは気持ちの状態があまり良くなかったようで、トラックが要求するテンションにヴォーカルが応えきれていない印象。再びのユーミン・カヴァーは「COBALT HOUR」をチョイス。本格的なサンバの「ブラジルの朝」、さらにはダビーな仕上がりの「フレンズ」のセルフカヴァーと、とっ散らかって聞こえるのはヴォーカルへの求心力の問題か。そんな中にも「ヌーチェの朝」のような名曲が。

このアルバムのリリース直後、再びレベッカが再結成。シングル「神様と仲なおり」（00年）をリリースするものの、活動はそのまま尻すぼみになってしまう。さらに、NOKKOは事務所などすべて辞めて休業に入る。その頃にGOH HOTODAと再会。二人でパリにいた時に9・11が起き、一度ニューヨークに戻ったものの、これがきっかけで二人で日本に戻ってくることになったようだ。そして01年に結婚。03年にNOKKO & GOを結成する。

［8］『remixNOKKO』（00年）は、レベッカの再結成に合わせるように、再結成盤の1か月後にリリースされたリミックス・アルバム。内容はなかなか本格的なクラブ・ミックスで、原曲が分からないほどに形を変えているものも多い。敢えて言えば、ここに「I Will Catch U」のアメリカ盤シングルにのみ収録された数種類のリミックス・ヴァージョンを追加してほしかった。

［9］『Non-Album Single Collection』は、アルバム未収録のシングルや別ヴァージョンなどをまとめたディスク。NOKKOは00年までに16枚のシングルをリリースしているが、うち10枚にアルバム未収録曲が収録されている。さらに、リミックスなどのヴァージョン違いを除いて、楽曲自体がシングルでしか聴けなかったものが9曲もある。加えて、今回の最大の目玉は、レベッカの解散前に短冊シングルを1枚残したのみで消滅し、これまでなかなか再発されなかったショート・ヘアーズの「トランジスタ グラマー」（90年）とカップリングの「抱きしめられて」がようやく聴けるようになったことだろう。ショート・ヘアーズはNOKKOと、NOKKOのヘアメイクを担当していたギタリストのMOTOKOこと水谷基子によるユニットで、MOTOKOはNORMA JEANのメンバーとして「イカ天」に出場したキャリアを持つ（デビュー前に脱退）。「トランジスタ グラマー」はポップでファンキーな佳曲で、11位のヒットに。この2曲にはレベッカのマニ

CamScannerでスキャン



『NOKKO ARCHIVES 1992-2000』

6T（ソニー・ミュージックレーベルズ）MHCL30951～60／¥25000／9Blu-spec CD2＋Blu-ray／歌詞つき／2・28発売

[1] <ハレルヤ> ①NO RETURN ②FLY UP ANGEL ③レモン ④CRAZY CLOUDS ⑤COSMIC SUNSHINE BABY ⑥今どきの男の子 ⑦APACHE MOON ⑧奇跡のウェディングマーチ ⑨日なたのヒヨコ（Dandelion Heart） ⑩HOLY NIGHT

[2] <I Will Catch U.> ①I Will Catch U ②Cosmic Sunshine Baby（French Dub Mix） ③Don't Hold Back ④7 Ways to Love ⑤Oh Yeah ⑥奇跡のウェディングマーチ（Blow Up Mix） ⑦Liquid Fire ⑧Call Me Nightlife（English） ⑨今どきの男の子（O-Sensu Mix） ⑩No Return（Paradise Remix）

[3] <CALL ME NIGHTLIFE> ①Call Me Nightlife ②I Will Catch U ③Seven Ways to Love ④Oh Yeah ⑤No Return ⑥Liquid Fire ⑦Don't Hold Back ⑧Cosmic Sunshine Baby ⑨Crazy Clouds ⑩Vanity ⑪Holy Night

[4] <colored> ①アンテナ ②METALLIC MOTHER ③ライブがはねたら（もうはなさない Version） ④エビス・ワルツ ⑤Silver ⑥DREAM MACHINE ⑦CRYING ON MONDAY ⑧Vivace（Remix Version） ⑨Love Song ⑩イ・ノ・チ ⑪人魚

[5] <Rhyming Cafe> ①ベルベット ②GO GO HAPPY DAY ③あくびとUFO ④透明なタンバリン ⑤DNA ⑥キリン ⑦Jump a little higher ⑧天使のラブソング（Album Version） ⑨ミラクル ⑩EVERYTHING BUT BLUE ⑪Natural

[6] <ベランダの岸辺> ①ベルベット・イースター ②雨と太陽 ③わすれな草 ④calas ⑤猫の耳たぶ ⑥星のおまつり ⑦CoFFee ⑧アメージング ⑨someday ⑩TRAVESSIA

[7] <Viaje> ①昼の月 ②ヌーチェの朝 ③SPACE GIRL ④キスがきこえる ⑤サニーサイド ⑥COBALT HOUR ⑦ブラジルの朝 ⑧目ボタ（REMIX） ⑨フレンズ（Creamy）（REMIX） ⑩I LOVE YOU

[8] <remixNOKKO> ①CRAZY CLOUDS（TROY WOODS MIX） ②I Will Catch U（DAZZLE-T & QUICKY MIX） ③7 Ways to Love（Akio D.MIX） ④人魚（SIRENE MIX） ⑤ライブがはねたら（TURTLEMAN MIX） ⑥Vivace（ALEX VERHOEVEN MIX） ⑦GO GO HAPPY DAY（HIBIKI r.a.MIX）

[9] <Non-Album Single Collection> ①CRAZY CLOUDS ②FEEL ③Vivace ④ライブがはねたら（あいしてるVersion） ⑤パレード ⑥トカゲ ⑦天使のラブソング ⑧恋はあせらず ⑨GO GO HAPPY DAY（Single Mix） ⑩水の中の小さな太陽 ⑪昼下がりのイヴ ⑫春雪うさぎ ⑬やさしい雨 ⑭フレンズ（Creamy） ⑮目ボタ ⑯トランジスタグラマー ⑰抱きしめられて

[10] <Blu-ray: CLUB HALLELUJAH & CLIPS+> <CLUB HALLELUJAH> ①CHASE THE CRIME ②NO RETURN ③今どきの男の子 ④レモン ⑤COSMIC SUNSHINE BABY ⑥日なたのヒヨコ（Dandelion Heart） ⑦APACHE MOON ⑧CRAZY CLOUDS ⑨HOLY NIGHT ⑩奇跡のウェディングマーチ <Music Clips> ⑪奇跡のウェディングマーチ ⑫I Will Catch U ⑬天使のラブソング ⑭GO GO HAPPY DAY ⑮水の中の小さな太陽 ⑯わすれな草 ⑰昼の月 ⑱キスがきこえる ⑲トランジスタ グラマー <Extra> ⑳Hallelujah TV spot ㉑天使のラブソング TV spot ㉒GO GO HAPPY DAY TV spot <Bonus Track>『NOKKO in LONDON 1992』

ユビレーター担当だったアストゥーリアスの大山曜やボ・ガンボスのどんと、ゼルダの小嶋さちほらが参加している。

最後のブルーレイ『CLUB HALLELUJAH & CLIPS+』は、93年にリリースされた唯一のライヴ映像にMVなどを追加して06年にリリースされたDVDに、今回さらに6曲のMVとTVスポット映像を追加してブルーレイ化したものだ。

なお、今回のリリースに際して音源はすべてリマスタリングされているようで、立体的かつナチュラルでファットなサウンドに仕上げられていて、非常に豊かな音響も楽しめる。これを書いている時点では曲目しか資料がないため詳細は不明だが、リマスタリングをGOH HOTODAが担当しているのは間違いなさそうだ。特に、90年代初期のCD作品は音響が貧弱なものが多かったので、サウンドがどれだけ変わったか、ぜひ聴き比べて

COLLECTORS TOPIC

菊池ひみこ

世界的な評価を受けるキーボーディストのリーダー作2タイトルが再発

文＝片島吉章

菊池ひみこは、日本のジャズ／フュージョン・シーンを支えてきた名キーボーディストとして知られる。しかし、その経歴を振り返ると、ジャズの枠をこえた一筋縄ではいかない才能を実感することになる。吉田拓郎や五輪真弓の録音への参加。原信夫とシャープス&フラッツ、大橋純子と美乃家セントラル・ステイション、三木敏悟&インナー・ギャラクシー・オーケストラのメンバーとしての活躍、そして、映画『新極道の妻たち』のサントラやTV番組の音楽制作など、その活動は多岐にわたる。さらには、自身のリーダー・バンドを結成し世界を股にかけて活躍。その溢れる才能とヴァイタリティから生み出された作品群は、現在ではレア・グルーヴ的な視点から、熱く再評価されている。[illegible]

能できる人気盤だ。長らく入手できなかったアイテムなので、待望の復刻といえよう。両作とも、80年代後半に彼女がCBSソニーからリリースした作品で、今回は、最新リマスタリングが施されての発売となる。

CBSソニー移籍後の1作目となった『FLYING BEAGLE』は、87年リリースの通算7作目。彼女の得意とするファンキーな要素とラテン・テイストを盛り込んだ快活なフュージョン作品となっている。録音に集ったミュージシャンたちにも注目だ。様々なバンドに関わった菊池だけあって、彼女を慕う錚々たるメンバーの名が連なっている。オープニング曲「LOOK YOUR BACK!」冒頭の弾けるトランペットは、吉田憲司(tp)や岸義和(tp)らヴェテランたちによるもの。サルサ[illegible]

の心をわしづかみにする。渡辺直樹(b)と岡本郭男(ds)のスペクトラム～ABS一派が織りなすグルーヴも圧巻。ぶりぶりとうなる渡辺のベースに、振り回されることうけ合いだ。

他にも、バックには東京キューバン・ボーイズの納見義徳（perc）、大野雄二や鈴木勲のバンドに在籍していた市原康（ds）ら、ラテンやソウルに精通した名うてのセッションマンたちが勢ぞろい。生命力に満ちたフュージョン・サウンドを作り上げている。

そして、そんな音をベースに、玉が流れるようなプレイで聞き手を魅了する菊池のピアノがとにかく美しい。ファンキーでありながらエレガント。彼女の鍵盤の音にはそんな印象を抱くし、それはタイトル曲「FLYING BEAGLE」や「FLUFFY」などのナンバーで顕著に感じられる。超絶速弾きで聞き手を煽る高速ラテン・フュージョンの前者。穏やかな優しい指さばきで、潮風を感じる極上のブラジリアン・メロウ・ナンバーとなった後者。曲調は違えどそのプレイはどちらもたおやかで、非常に優美な印象だ。

作・編曲は菊池と、その夫でもあるギタリスト、松本正嗣の手によるもの。もちろん、松本が録音に参加していることは言うまでもない。ジャズやポップスなど多方面の録音に長年携わってきた彼女たちの音楽には、同時

CamScannerでスキャン

[illegible]

ビール[illegible]本作は「ラテン」ヴァージョンを[illegible]見せつけた[illegible]。

今回[illegible]リイシューされた『SEVILLA BREEZE』は、[illegible]年に録音されたアルバム。タイトルどおり、スペインのセビリアをテーマに作られたアルバムで、海洋的な雰囲気が心地いい作品となっている。参加メンバーは前作とほぼ変わらず。ここでもサルサ・テイストのナンバーなどで、パワフルな演奏をたっぷりと聞かせてくれる。

本作の一番のポイントは、ジョルジュ・ビゼーの歌劇『カルメン』からの2曲をモダンなアレンジで演奏していること。その一つ『GYPSY SONG』は躍動するリズムに乗っ[illegible]

[illegible]曲の『SEGUIDILLA』は、打って変わってアコースティックな編成で、市原康のドラムと[illegible]のウッド・ベースに加え、納見義徳のパーカッションという構成。表情豊かなピアノに呼応するような納見のラテン・パーカッションが、特にいい味を出している。彼の真骨頂ともいえる熱いプレイは前作と同様に[illegible]るところで楽しめるが、特に直球のラテン・ジャズ『TOREADOR』には圧倒される。

他にも、これぞ80'sフュージョンの王道という風情の『PRIMAVELA』やタイトル曲の『SEVILLA BREEZE』など、菊池の美麗なキーボード・プレイが堪能できるナンバーが目白押し。ボサノヴァ風アレンジが施された『SIESTA』で見せる穏やかなアンサンブル[illegible]

[illegible]村田陽一のトロンボーンも、南スペインに吹く海風のような温かみのある音で心地いい。ちなみに、このアルバムは世界で初めて48chデジタル録音で制作された作品だという。贅沢なプレイのディテールと重なりを、新たにリマスタリングされたいまの音でぜひ体感してほしい。

その才能を武器に世界的なフェスにもたびたび参加し、技を披露してきた菊池。だが、現在は夫の松本と共に鳥取の温泉街でライヴハウスを経営し、地元の音楽文化の発展に力を注いでいる。スケジュールを見ると、店でコンスタントにライヴも開催しているようだ。この世界的ミュージシャンの演奏を間近で楽しめるとは、近辺のファンがうらやましい。しなやかな指さばきを目の前で味わえるのだから。

『FLYING BEAGLE』

ソニー（タワー）MHC7-30071／¥2300／Blu-spec CD2／2・14発売／タワーレコード限定販売／初回生産限定

①LOOK YOUR BACK!
②A SEAGLE & CLOUDS
③FLYING BEAGLE
④FLUFFY
⑤SAND STORM
⑥BABY TALK
⑦THE SECOND SUMMER
⑧DUCKY DUCKY

『SEVILLA BREEZE』

ソニー（タワー）MHC7-30072／¥2300／Blu-spec CD2／解説＝瀬川昌久／2・14発売／タワーレコード限定販売／初回生産限定

①PRIMAVELA
②GYPSY SONG from Carmen
③SEGUIDILLA from Carmen
④TOREADOR
⑤BLUE GIBRALTAR
⑥SIESTA
⑦SEVILLA BREEZE

CamScannerでスキャン

70年代日本のポップス・シーンを支えた
作・編曲家／プロデューサーの歩み

矢野誠の点と線

第9回

大滝詠一との点と線②

取材・文＝除川哲朗
イラストレイション＝本秀康

当初はお蔵入りとなった楽曲へ参加

というわけで、ナイアガラ・フォーリン・スターズ＝大滝詠一一座の一員として、『レッツ・オンド・アゲン』の要所で大いに腕を振るった矢野誠。とりわけ一切のアレンジを託された矢野が派手目のシンセで悪ノリしている（ように聞える）〈アン・アン小唄〉は、どこかしら手慣れた印象がある。それもそのはず、矢野にとってもこの曲は2度目のトライであり、大滝の『NOVELTY SONG BOOK』（NUNGARA ONDO BOOK』（93年）でようやく陽の目を見た元歌である小高桂子の〈あんあんストリート〉で一度仕上げていたから。『レッツ・オンド・アゲン』の半年前、78年春にシングルとして発売予定だったが歌手本人の引退でお蔵入りとなった曰くつきの楽曲。矢野へのオファーはどんな経緯だったのか。

「当初はいわゆる歌謡仕事のひとつという程度の認識で受けたんだけど、いざ曲をもらってみるとカップリングの〈風が吹いたら恋もうけ〉共々、大滝君の作品だと知ってびっくりした。だからオファーは本人からではなくて、メーカーのディレクター経由だったの。現場作業も一緒にはやっていないよ」

矢野流フィラデルフィア・ソウルに三味線が入っているイメージで、その弾き手には全く業界に染まっていない邦楽の御婆ちゃん奏者を起用したという。その純度の高さがアレンジの肝になると矢野は踏んでいた。そこにシンセやストリングスをセンスよく絡めて独自のノリと風味を醸し出している。

「僕の仕上げ方から言うと、スタイリスティックスと民謡の折衷。結びつけたらこうなる。とても自然なことだったんだけど、目が点になっちゃう人もきっといたんだろうな。

CamScannerでスキャン

大滝詠一
『NOVELTY SONG BOOK / NIAGARA ONDO BOOK』
ナイアガラ(ソニー) SRCL 12450~1[2023]

石だったのかもしれない。不意に投げた石をどう返してくるのかお手並み拝見というところで、思いのほか出来映えは上々。至極ご満悦だったことを伝えるコメントも残している。おそらくこの一件も『レッツ・オンド・アゲン』への矢野招集を促したのだろう。

ディレクターはキングレコードの中田佳彦。前回の人物相関で触れたとおり、はっぴいえんど以前の細野晴臣、大滝、それに布谷文夫とも所縁の深い人物で、最初期の音楽活動を共にしてきた盟友である。この時期はポピュラー制作部門に着任し、主にセブン・シーズ・レーベルで村岡建、宮之上貴昭、高瀬アキといった邦人ジャズ・プレイヤーのリーダー作を手掛けていた。ただ、この時点では矢野

たようだ。歌謡曲の制作プロセスは基本分業システムゆえ、直に対面する機会もあまりなかったのかもしれない。

「彼は前に出てくるタイプじゃなかったから。すごく謙虚で口数の少ない大人しい人だったよ。限られた時間の中、それぞれの持ち場で忙しなく役目を全うしたような印象だったかな」

こうして出来上がった小高桂子のシングル〈あんあんストリート／風が吹いたら恋もうけ〉（両面共、作詞：伊藤アキラ／作曲：大滝詠一／編曲：矢野誠）に対して、さらに細野が〝デジタル演歌〟なるキャッチ・コピーを考案している。残念ながら未発に終わるも、ここで中田、大滝、細野の3名が久々に再会を果たすことに。つまり67年以来のランプポスト再編というエポックがあったことになる。そして〈あんあんストリート〉は〈アンアン小唄〉と改題され、歌詞もほぼ変更されてリヴェンジ録音されたのを契機に、たびたびカヴァーされ歌い継がれるのだが、小高桂子（78年）、山形かおる子（＝伊集加代子／78年）、山田邦子のアルバム・テイク（82年）、みわこ（未発プロモ・シングル／82年）の4ヴァージョンは矢野のアレンジで貫かれている。

『大瀧詠一Song Book I・大瀧詠一作品集Vol.1(1980-1888)』
ソニー SRCL5011[2010]
「風が吹いたら恋もうけ」を収録

もっとも、ソニーの白川隆三ディレクションによるみわこのヴァージョンには矢野本人は全く関与していないという。同年、やはり白川の手によって世に出た中原理恵の〈風が吹いたら恋もうけ〉の方も、編曲：矢野誠・飛澤宏元とあるが実務には関わっていない模様。いずれもベーシックな部分を踏襲したという意味合いの記載なのだろう。

リーダー作の2枚を立て続けに制作

さて、これらオーダーの合間を縫って矢野自身、いよいよ初のリーダー・アルバム制作に着手している。それも2タイトルを立て続けに。ここでまたしても奇遇かつ面白いのは、大滝詠一の最初期と最盛期でキーパーソンだった二人のディレクター（中田佳彦と白川隆三）と、矢野もパートナーシップを組んでいるところだ。まずは、キングで中田と作り上

CamScannerでスキャン

げたプラスティック・ズー名義の『スケートボード・ジャンクション』（79年）。

「小島桂子のシングルの後、彼（中田佳彦）が新しい企画を携えて僕の事務所まで訪ねて来てくれたんだよ。その時に初めて聞いたんだけど、中田喜直の甥だっていうから驚いたね。〈雪の降るまちを〉や〈夏の思い出〉を書いた大御所。童謡作曲家の中で僕が最も尊敬する人物であり、ガブリエル・フォーレやモーリス・ラヴェルなどフランス印象派の一番いいところを日本の童謡と結びつけた先駆者だとか、とにかく喜直の凄さについて捲し立てていたと思うな、その時は」

幼少時からフランス近代のクラシックを学び、フォーレを先師と仰いできた矢野にとって、これは嬉しくも運命的な巡り会わせだったと言えるだろう。しかし企画の方は全くの別もの。既に若者文化の一角を担っていたスケートボードのイメージを、シンセサイザーとコンピューター・サウンドで表現するというアイデアのもと、プロ・スケートボーダーによるライディングSEも交えたコンセプト・アルバムに仕立てている。楽曲はビーチ・ボーイズからウィングスまでポップな洋楽のカヴァーが中心。中盤でさり気なくポプ・クイーン・ジャネット・ジャンクションとアンディ・ウィリアムスで競作ヒットした〈恋はリズムにのせて〉を忍ばせているところに、矢野・中田・大滝の接点というかセンスの共有が窺えて心憎い。シンプル過ぎるほどの音像は、協力を得た平和島スケートパークのプレーンな景色を捉えてのことか。矢野がヴォコーダーで歌うオリジナルのオープニング「ブレーク・オブ・ドーン」は、クラフトワークの「アウトバーン」に続いていくような気配もある。

「シンセ以外の生演奏とヴォーカルは、お気に入りだったスクール・バンドのジョン山崎、マシュー・ザルスキー、カズ南沢と、当時、ザ・スクェアに在籍していたマイケル河合に手伝ってもらった。それで、中田君のディレクションに僕が提言するようなかたちで進めていったんじゃないかな」

ふと本盤の帯裏を見ると同時期作品の近田春夫『天然の美』、高橋幸宏『サラヴァー！』、遠藤賢司『東京ワッショイ』と共にホールド・アップの『島まで10マイル』が掲載されている。これも中田ディレクション作品で細野と大滝が参加しており、ランプポスト再編のエポックその2ともいえるアルバムである。

さらにそのメンバーには、板倉文や小川美潮とチャクラを結成する横澤龍太郎、林立夫らとパラシュートを結成する安藤芳彦など、矢野の人脈にも繋がっていく面子を擁していた。

実質的なソロ・ファースト・アルバムと言えるのがもう一枚の方。ソニーで白川のサポートで作り上げたマコト・ハイランド・バンド名義の『インジェクション』（79年）だ。

「白川さんとは旧知で、筒美（京平）さんと橋本（淳）さんの宝島音楽事務所に出入りするアレンジャーとディレクターとして出会い意気投合した間柄です。ソニー関係の筒美楽曲は白川さんが仕切っていたから、僕の仕事ぶりも分かっていたんだろうね。そういう流れから、〝矢野君がソロ・アルバム作りたがっている〟と口利きしてくれた筒美さん経由ですぐに動いてくれたの」

こちらもシンセを駆使したデジタル・ビートがテーマで、矢野のオリジナルをメインにコール・ポーターのカヴァー等をレパートリーにした全編英語詞。東京でベーシック・トラックを固めて、NYで上ものをレコーディングするというプロセスで進められた。高橋幸宏、後藤次利、仙波清彦と組み上げたリズム、編み込んだストリングスの上を、スティーヴ・カーンのギターやジョージ・ヤングのサックス、ニッキー・マレーロ（ファニア・オールスターズ）のパーカッションが彩り、匿名的なアメリカン女性コーラスが華やぎを

CamScannerでスキャン

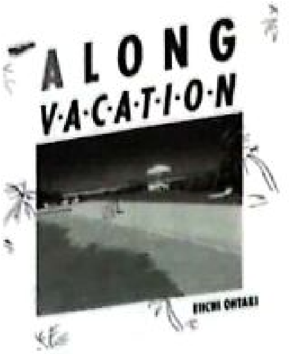
…ているサウンドスケープ。そこには着目していたジョルジオ・モロダーはもとより、前後して矢野を通過した様々なファクターが重層的に集約された感がある。一概にテクノポップだけでは括れないフェーズに達しているところが矢野ならではのスキルだろう。この2枚のアルバムで片腕となって寄与しているのが、シンセサイザー・オペレーター神谷重徳。作品の鍵を握る人物である。

「矢野顕子のライヴ『東京は夜の7時』でもオペレーションしてもらった神谷君。もともとギタリストで川崎燎や村上秀一なんかとセッションする傍らレーサーでもあった切れ者で、坂田明とWha-ha-haも立ち上げたという」

そのチームで次に派生させたのが、テクノ歌謡の傑作との呼び声も高いアパッチのシングル＜宇宙人ワナワナ＞（79年）だ。

「『インジェクション』の日本版をやろうという白川さんの企画だよね。シングルも切った＜WANNA WANNA WANNA WANNA WANNA WANNA WANNA WANNA WANNA WANNA＞をモチーフに、アイドルだった彼女たちの新曲として書き下ろした。そういうヴァリエーションもの。近田春夫＜ああ、レディハリケーン＞のサウンド・プロデュースも同じ矢野・神谷チームでやったよ」

続くアパッチのシングルが大滝編曲によるナンシー・シナトラのカヴァー＜レモンのキッス＞（80年）と、ここにも因果の流れがあったとは。矢野から大滝へのリレー、鮮やかに決まった知る人ぞ知るバトンタッチといったところか。他にも、同時期に制作された中原理恵のシングル＜ピロー・トーク＞と『夢つれづれ』（79年）で久々に松本・筒美・矢野トリオを復活させ、82年秋からの松本隆作詞による森進一の海外旅情三部作～＜冬のリヴィエラ＞（作曲：大滝／編曲：前田憲男）、＜紐育物語＞（作曲：細野／編曲：細野・坂本龍一）、＜モロッコ＞（作曲：筒美／編曲：井上鑑）～では＜モロッコ＞のB面「霧のジブラルタル」（作曲：筒美／編曲：矢野）に絡むなど、はっぴいえんど周辺との近からず遠からずの絆も引き続き散見される。



大滝詠一
『ロング・バケイション』
ナイアガラ（CBSソニー）27AH 1234［1981］（LP）

ところで、『大滝詠一レコーディング・ダイアリーVOL2』（堀内久彦著）の中に、『ロング・バケイション』の＜スピーチ・バルーン＞で使ったタブラは「矢野誠さんから借りたのでした」という大滝の回想が出てくるが、これについては…。

「う～ん、僕の記憶にはないんだよね。そもそもタブラは持っていなかったから。和楽器セットはあったけどインド・セットはなかった。いずれにせよ、そんな風に大滝君が気にかけてくれていたとしたら嬉しいね。少ない出会いだったけど、通じ合っていたことが後で分かったみたいで光栄に思います」

では、矢野視座からのナイアガラ・サウンドについて最後に。

「（大滝君が）好きなディテールを集めていったら完成したんだと思う。これはオーケストラを書く時の原理と同じで、30人以上になっても部分ごとに完成されているのが秘訣なの。寄り掛かり合ったりしない。そういえば僕がメイン・アレンジャーで関わった吉田美奈子の『フラッパー』でも、彼の＜夢で逢えたら＞だけ異様な完成度だったね。初めから見ている夢の中に完成品が出来上がっている感じ。作る時はシンプルにギターでやっているんだろうけど。今思うと、その星空はどこから来たの？って訊いてみたかったよね」

CamScannerでスキャン

プロデュース業と作品提供（その12）

イラストレイション＝菅野カズシゲ

昨年発売されたCD7枚組のデモ録音集"Songwriter Demos: Written In Their Soul: The Stax Collection"に収録されている、スティーヴ・クロッパー氏が関わった音源について、前回は語ってもらったが、今回はこの音源集から浮かび上がった疑問を中心に。筆者が特にスティーヴ氏自身に質問してみたかったのは、"オーティス・レディングのデモ録音は、なぜ残されていないのか"という点である。

残されたデモ、残らないテイク

――このデモ音源集には、オーティス・レディングに加えて、スティーヴさん自身のデモ録音も全く入っていないんですが、そういうものは残していないんですか。

「そもそもデモ録音するってこと自体が稀だったんだ。ブッカー（T・ジョーンズ）が"最初のデモ録音をした時に"なんて言うと、私は"俺たち、デモなんかやったか？"って言ったものさ。確かにエディ・フロイドとの〈ノック・オン・ウッド〉（66年）はデモ録音したし、エディと一緒にウィルスン（ピケット）を念頭に作曲した〈634・5789〉（66年）も、デモを録ってウィルスン本人に聴かせたりしたけどね」

――オーティスがデモ録音を持ってきて、スティーヴさんに聴かせたことはありましたか。

「そんなことは一度もなかった。歌詞、メロディ、ホーンのパートなど、全部、彼が自分で歌ってくれた。オーティスはいつもギターをぶら下げていたんだ。ケースにも入れずにね。彼にはいつだって13か14くらい歌のアイディアが頭の中にあった。ほとんどが未完

CamScannerでスキャン

"Written In Their Soul: The Stax Songwriter Demos" Stax/Craft CR00682 [2023] (7CD)
2024年度のグラミー賞のベスト・ヒストリカル・アルバム部門／ベスト・アルバム・ノーツ部門でノミネートされている大型貴重音源集

ラー・ソングライティング・チーム……ウィーク、リウ……ターを弾き……、から始まり……サウンドなんだ。アレンジのアイディアも、続く。〈シッティン・オン〉ザ・ドック・オブ・ザ・ベイ／（68年）はその典型的な例だ。オーティスにボーカルがあったのかも、って弾きたんだ。そんなギターを弾いているかたちだったんだから。すると彼は、〝クロッパー、何のことだかわかるかい？〟って言った。それは（カリフォルニア州の）サンフランシスコ湾を、またオークランドの対岸にあるサウサリート（Sausalito）のアパートだった。フィルモア・ウエストでのコンサートの一週間後、（フィルモアを仕切っていたプロモーター）ビル・グレアムがサウサリートに所有するボートハウスをオーティスに滞在先として提供したんだ（私たち、MGズは、ジャック・ター・ホテル……）。彼はそこで／ザ・ドック・オブ・ザ・ベイ／を書き始め、ボート・ハウスに滞在していて、後に彼はオーティスがそういった曲を書いていたと証言してくれた〈※註1〉。

／ザ・ドック・オブ・ザ・ベイ／で私が書いたのはブリッジ（'Look like nothin's gonna change'から始まる部分）までのメロディすべて。それからブリッジ後（'Sittin' here resting my bones'から始まる部分）の歌詞をいくらか手伝った。誰かが'I can't do what ten people tell me do'のところを書いたのはドン・コヴェイだと私に言ったことがあるが、この曲をドンに聴かせた時点では、まだブリッジはできていなかった。ドンが何を言おうが、そのラインをブリッジに入れたのはオーティス自身だよ。

それからエンジニアのロン・カポーンから〝クロッパー、ちょっとスタジオに来てくれ〟って連絡が入った。私はどのギターにするか選んで、アコースティック・ギターとエレクトリックを重ねることにした。そんなことをやり始めた最初の頃だよ。第一テイクでオーティスが口笛を吹いたが、うまく吹けなかったので、彼にはやらせるべきじゃないってことになった。リハーサルの時に、次にレコーディングの予定のある女の人がスタジオに入ってきて、私たちが録音している曲のことを話したら、カモメの鳴き声の真似をした。死にかけのカラスのような音がしたが、おおよその感じがつかめたので、そのアイディアを採用することにした（笑）〈※註2〉。

〝レディング／クロッパー〟とクレジットされているものは、大体オーティスが自分のことを歌っていて、〈ザ・ドック・オブ・ザ・ベイ〉のように私が手を加えたものだ。（歌いながら）〈ファ・ファ・ファ・ファ・ファ（サッド・ソング）〉／（66年）の時もそうだった。あのホーンだって彼のアイディアさ。〝ファ・ファ・ファ・ファ〟って歌いながら、ホーン・セクションに指示を出してね」

──オーティスは歌詞を書き留めていましたか。

「ノー。彼が何か書いているところなんか見たこともなかった。オーティスの場合はね、ただ頭の中にあることを引っ張り出して、口伝えに教えてくれるんだよ。彼がアイディアを話してくれて、それを形にしていくんだ。もしデモ録音があるなら、ぜひ聴いてみたいものだ」

──このセットにはスティーヴさんのデモ録

Otis Redding
'(Sittin' On) The Dock Of The Bay / Sweet Lorene'
Volt 45-157[1968] (7")
オーティス・レディングの死後ひと月ほどでリリースされたシングル。全米／R&Bチャートとも初の首位を獲得している

音も収録されていませんね。

「だって、1曲も作らなかったんだから。そういえば、ブッカーがデモ録音を作っていたことがあったな。夜、(レコーディングを終えて)みんなが帰ってから。〈オールド・シーガル〉というタイトルだった。結局、未発表に終わったけど(*註3)」

――そんな風に直接聴いたアイディアを元に4、5回通し練習をして、マスター・テイクを作ったんですね。デモ録音から発展させたのではなく。

「まさにそういうことだよ。ヘッド・アレンジメントとはよくいったものさ。アレンジだって何だって、全部頭の中から直接出てきたものだ。それからヴォイシングして(音を重ねていって)、リハーサルするんだよ。当時は新曲を習った翌日にリハーサルのセッションをして、マスターをカットするなんてことはざらだった。〈ザ・ドック・オブ・ザ・ベイ〉もそんな風にやった(*註4)」。

――よく知られているザ・ビートルズやマイルス・デイヴィスなどのレコーディング風景から、レコーディング・セッション中にはいつも(録音用の)テープが回っていたようなイメージがあるんですが、スタックスではそうじゃなかったんですか。

「そのとおり。そこがスタックスのクレイジーなところさ、私にいわせるとね。スタックスでは参加ミュージシャン全員が完全に曲を覚えるまで、ジム・スチュアートが録音用の赤いボタンを押さなかったんだ。他のエンジニア、ロン・カポーンやジミー・ゲインズがレコーディングを担当した時も同様だ。だが一度、(録音中を知らせる)赤いランプが点灯すると、我々はマジックが起こったように素晴らしい演奏を行なった。機械のせいかなんなのか、わからないけどね」

――それでデモ録音同様、アウトテイクもほとんど残ってないんですね。

「そういうことだ」

――テープを回していなかったのは経済的な理由ですか。

「部分的にはね。録音した曲が好きじゃなかった場合には、テープを再利用することもあったよ。大体は保管しておいたけどね。だから〈ザ・ドック・オブ・ザ・ベイ〉には3テイクが現存しているんだ。現在ではコンコード・ミュージック傘下のファンタジー・レコーズが所有している」

――このデモ集に収録されているエディ・フロイドとの未発表作に関して何かエピソードはありますか。いつ頃作ったとか、誰のために書いたとか。

「インタヴューの前にリストを見たけど、全然覚えてないな。〈ノック・オン・ウッド〉と同じ頃で、66年ぐらいだと思うけど」

――ブッカー・T&ジ・MGズのデモ(〈ソング#2〉／年代不明)もそうですが、スティーヴさん始め、アル・ジャクスンJr.やダック(ドナルド・ダック・ダン)が入っているデモは収録されているのに、ハモンド・オルガンがほとんど聞こえませんね。ブッカーはどうしていたんですか。

「彼は(インディアナ)大学に行っていたからね。ほとんど不在だった」

――ジ・MGズのアルバム『メルティング・ポット』(71年)の頃でもデモ録音は行なわずに、セッションしながら作品を練っていったのですか。

「そうだよ。どこの世界でも同じだと思うが、〝いい考えがあるんだ。ちょっとやって

CamScannerでスキャン

死後も尊重されるミュージシャンたち

――今回のデモ集もそうですが、映画、テレビ番組、コマーシャルなどで、ジ・MGズを始めスティーヴさんが関わったスタックス作品が未だに使われていて収入があるというのは、素晴らしいことですね。作曲者やリード・ヴォーカリストだけでなく、参加ミュージシャンも報酬の受け取り対象に含まれているんですか。

「そうだよ。リズム・トラックに参加したミュージシャンは60年代当時の基準ではなく、現在の基準で支払われるんだ。生前、ウェイン・ジャクスンが、〝ちゃんと記録を取っておいてくれてありがとう〟って電話してきたことがある。セッション・ログをつけるのはセッション・リーダーの私の仕事で、私には記録するってだけで、他のやつの倍額のギャラが支払われるという役得があった。小切手が送られてくるには1年くらいかかることもあるけどね。

最近、ウォルマートから支払いがあったよ。スタックスのカタログからの収入は、私たちが行なったことに対するリスペクトだと理解

ウ・オン・ウッド〉〈ザ・ドック・オブ・ザ・ベイ〉などからいまだに収入があるというのは、素晴らしいことさ」

――レコーディングには名前も分からないような弦楽器奏者なんかが入っていることがありますよね。そんな人たちにも支払われるのですか。

「彼らにはその時にセッション料が支払われていて、それで終わりだよ。ある程度の名前がないとダメなんだ。さもないときりがなくなるから。条件に該当して社会保障番号があって住所がわかれば、小切手が届くシステムになっている」

――ウェインは2016年に亡くなりましたが、現在の報酬の受取人は。

「彼の妻が小切手を受け取っている。だから、私が死んでも私の妻に報酬が届くようになっているんだ」

――死後何年間支払われるんですか。

「70年だ。レコーディングができて70年じゃなく、当該者が死んで70年だよ。分かるかい？　すごく長い時間だ。私はもう70年以上生きたからね」

――ワオー

「そう。〝ワオー〟としかいいようがない

ース・ブラザーズ』を再放送するたびにシュアをもらっているよ」（次号からは、スティーヴ氏のソロ作品について語ってもらいます）

＊註1＝1967年6月17日、オーティスとブッカー・T&ジ・MGズは〈モンタレー・ポップ・フェスティヴァル〉に出演した。オーティスはサンフランシスコのホテルに滞在していたが、あまりに多くのファンが殺到したため、ビル・グレアムが自ら所有するボートハウスをオーティスに提供したといわれている。

＊註2＝〈ザ・ドック・オブ・ザ・ベイ〉には二つのアウトテイクが現存していて、両方ともオーティス・レディングの未発表集『リメンバー・ミー』（92年）に収録されている。

＊註3＝"Written In Their Soul"には、ブッカーによるデモ録音、〈ウーウィー・ベイビー、ホワット・ユー・ドゥ・トゥー・ミー〉が収録されている。

＊註4＝〈ザ・ドック・オブ・ザ・ベイ〉はザ・ステイプル・シンガーズにバック・コーラスを担当してもらうというアイディアが浮上し、一度は棚上げとなる。その後、オーティスはツアーに旅立ち、67年12月10日、飛行機事故のため帰らぬ人となった。スティーヴ氏がマスターを仕上げたのは、オーティスの死から三日後だった。詳しくは本誌21年10月号掲載の本連載No.4を参照。

CamScannerでスキャン

紙ジャケ探険隊 真保安一郎の

イラストレイション=辻井タカヒロ

出た！」と紹介してくれた盤⑧は80年前後のリリースなので少しずれている。どうも彼が買っていた店とは違うようだ。だが中村さんによると、ジャングル開店当時はやたらオルタナ系の買取持ち込みが多かったそうで、どこから湧いてくるのかと調べてみたら、金沢にはその手の音楽を扱うミニコミ誌があり、500人規模のコミュニティを形成していたとのこと。それだ。そこに従兄弟は参加していたのだ。

中村さんから詳しい方がいると、ウェブ・マガジン**で記事を書かれたモカさんを紹介していただいた。そしてその記事には〝40年前の金沢に日本で唯一のアンダーグラウンド音楽専門誌があった〟と書かれていたのだ。その雑誌、その名も『AVANT-GARDE』は〝金沢アンダーグラウンダーズ・クラブ〟略してKUCという団体が発行していた月刊誌。続いてモカさんから関係者の方々を紹介してもらう。わらしべ長者の気分だ。

KUCは1976年、設立者が大学4年の時に一人で立ち上げて雑誌を編集・発行。その雑誌を見た若者たちが連絡してきて、次第に組織体となった。KUCをしてアンダーグラウンド・ミュージックとは、市場を支配していた商業的ロックに抗した〝ブルースの影響を反映していないロック〟。それは62年のワイルド・フラワーズに端を発し、ソフト・マシーンを幹とするカンタベリー・サウンド。米国ではフランク・ザッパ（現代音楽とジャズの強い影響下）の非ブルースのロックであり、むしろ欧州で発達した音楽であった。

しかしこうした音楽は当時、金沢のどこにあったのか？　学生時代にKUCに参加していた島田英明氏によると、国内盤はVAN VAN等の地元の店舗、輸入盤はKUCを通して大阪LPコーナー等のお店から一括購入もしていたそうだ。従兄弟もそうやって手にして私に聴かせてくれていたのだろう。遠く離れていながら、私もまたKUCの影響下にあったのだ。

本稿執筆中に令和6年能登半島地震が起こりました。被災者の方々にお見舞いを申し上げるとともに、速やかな復興を心より願っております。

⑦2Fで購入したブラック・ウフル『アンセム』（83年）の初期回収ミックス、ジャマイカ盤

⑧当時、従兄弟に聴かせてもらった80年のD.A.F.『サイレント・ノイズ』。写真は翌年、自分で買った国内盤

⑨KUCによる月刊誌『AVANT-GARDE』78年4月の第15号■

⑩同78年9月の第20号■

*註=*金沢レコード・ジャングル（http://www.recojun.com/）／**ウェブ・マガジン『ボンノ』（https://bonno-web.com/column/2562/）

CamScannerでスキャン

金沢レコード・ジャングル

第83回
カニとアヴァンギャルド

昨秋、家内の学会が金沢であり、これ幸いとくっついて行くことにした。何しろカニ漁の解禁期である。大きな雄の加能ガニが2～3万円、小ぶりな雌の香箱ガニが5000円前後で市場に並ぶ。もちろん目的はそれだけではない。私が高校生の頃、金沢市に住んでいた年上の従兄弟がよくノイズ／アヴァンギャルドのレコードを携えて遊びに来てくれた。その彼が通っていたレコード店を訪ねてみたくなったのだ。どんなお店だったのだろうか。金沢の中古レコード店で多くの方から薦められたのが"レコード・ジャングル"だ。老舗だし、従兄弟もきっと通っていただろうと目星をつけて伺ってみた。

カニ解禁で賑わう近江町市場を通り抜けてすぐの場所に、外壁に特徴的なペインティングが施されLED電光看板があやしく光る目的の建物があった。入店前の時点ですでにワクワクする。階段を昇ると②、2階がアナログ盤とCD、3階がCD/LD/VHSなのだが③④⑤、訪問した日は3階の倉庫が開放されていて魔窟状態。アナログ盤がオールジャンル1枚100円で、レンタル落ち／見本盤などを掘りまくることができた。特にサントラ／ムードものの充実ぶりは素晴らしく、掘っていてむせかえりそう⑥。2階ではレゲエのジャマイカ初期盤⑦をお値打ち価格で買えた。

代表の中村政利さん①は、ジャンおちの名で親しまれている気さくな人柄で、飛び込みのインタヴューにも嫌な顔ひとつせず答えてくれた。"レコード・ジャングル"はちょうど2023年12月で40周年。金沢の地で音楽を広げ、根付かせ、遠方からの客も呼び込む。アーティストを招聘してのコンサートなども主催してきた。最近は海外から訪れる方も多く、特にオーストラリアからのお客さんが大量にレコードを買っていかれると驚いていた。開店当時のお話もお聞きできたが、従兄弟が私に「凄いのが

①金沢の老舗"レコード・ジャングル"の中村政利さん

②ビルの2Fと3Fが店舗だ

③2Fにはレコードと CDが整然と並ぶ

④"パンク""オルタナ"等ジャンルも細分化されていて探しやすい

⑤3Fは逆にカオス。大量にあったKISSのVHS

⑥伺った日は倉庫開放日で、お目当てのムードモノも100円でわんさか

協力＝中村政利氏（モカさん）

CamScannerでスキャン

赤岩和美の 海外盤DVD & Blu-ray ロック映像情報

(1)

(2)

(3)

(4)

[1] Willie Nelson"Long Story Short: Willie Nelson 90 (Live At The Hollywood Bowl)"
Legacy/Sony [US] 19656653072 [RO] =BD+2CD

[2] Warren Haynes"Warren Haynes Presents: The Benefit Concert Volume 20"
Evil Teen [EU] PRD77105 [RO] =2BD+3CD

[3] Little Feat"Highwire Act: Live In St. Louis 2003"
Mercury [US] 5583560 [RO] =BD+2CD

[4] Billy Idol"State Line: Live At The Hoover Dam"
Kaleidoscope [US] KAL6839 [RO] =BD

ウィリー・ネルソンの[1]は、2023年4月29日と30日にLAのハリウッド・ボウルで開催された、彼の90歳の誕生日を記念する豪華ゲスト陣を交えてのコンサート（29日が誕生日）。主に両日とも前半がゲスト、後半がネルソンとゲストの共演といった構成で、ドン・ウィズ（b）、ベンモント・テンチ（kbd／元トム・ペティ&ザ・ハートブレイカーズ）ら12人編成のハウス・バンドがサポートしている。また、プレゼンターとしてイーサン・ホークやヘレン・ミレンら俳優たちも登場する。ゲストにはキース・リチャーズ、ニール・ヤング&スティーヴン・スティルス、ノラ・ジョーンズ、ベック、トム・ジョーンズ、シェリル・クロウ、ロザンヌ・キャッシュ、息子のルーカス・ネルソン（プロミス・オブ・ザ・リアル）、エミルー・ハリス、クリス・クリストファーソン、ボブ・ウィアー、ウォーレン・ヘインズ等々、40組以上のミュージシャンが大挙出演した。約2時間50分のパフォーマンスを見ることができる。

ウォーレン・ヘインズの[2]は、18年12月7日と8日に彼の生誕地、ノース・カロライナ州アッシュヴィルのセルラー・センターで開催されたチャリティ・コンサートの演奏。ガヴァメント・ミュールやオールマン・ブラザーズ・バンドで活動するヘインズが1988年から開催しているチャリティ：クリスマス・ジャムの30年目、第20回の模様で、グレイス・ポッター、ジョー・ボナマッサ、デイヴ・グロール（フー・ファイターズ）、ジム・ジェイムズ（マイ・モーニング・ジャケット）、エリック・チャーチ、タイラー・ラムジーなどのゲスト陣と、ヘインズはガヴァメント・ミュールほか、様々なバンドで出演している。両日とも出演したガヴァメント・ミュールによる、初日のニール・ヤング・ソミ・ハンドリクスのカヴァー、二日目のピンク・フロイド（『狂気』『炎』『ザ・ウォール』）の50分に及ぶメドレーや、ボナマッサのジェフ・ベック・グループ～クリーム～レッド・ツェッペリンのカヴァーなどが聴きものだ。

リトル・フィートの[3]は、03年8月22日、ミズーリ州セントルイスはザ・ペイジェントでのライヴ、ビル・ペイン（kbd, vo）、リッチー・ヘイワード（dr, vo）のオリジナル・ラインアップに、初期からの重要メンバーであるポール・バレア（g, vo）、ケニー・グラッドニー（b）、サム・クレイトン（per, vo）、再結成後に加わったフレッド・タケット（g, vo）、ショーン・マーフィー（vo）の7人編成でのパフォーマンス。ロック、ソウル、R&B、カントリー、ジャズなどの要素を交えたジャム・バンド・スタイルのファンキーな音楽を展開、まさにアメリカーナといったルーツ・ミュージックが聴ける。以前、DVDでリリースされていたが、初のブルーレイ化となった。

ビリー・アイドルの[4]は、23年4月8日にネヴァダとアリゾナの州境をまたぐフーヴァー・ダムで行なわれた史上初のライヴで、250人のファンを招いてのイヴェント。彼のソロ・デビュー以来40年の付き合いがあるスティーヴ・スティーヴンス（g）ら7人編成のバンドに、ゲストにスティーヴ・ジョーンズ（g／元セックス・ピストルズ）ら3人を招いてのもの。パンキッシュなロックンロールが弾けるもので、彼らしいガッツを感じさせる。3曲のアコースティック・パフォーマンスも収録。

[ ]内の"R"はリージョン・コードの意。国内の一般的な再生機器はR0（ノーリージョンフリー）、R2（DVD）、RA（Blu-ray）以外のディスクを再生できません。ご注意ください。

CamScannerでスキャン

ディスコグラフィーを基本に据えつつ視覚的な楽しみも

エアロスミス大全 野獣伝説、50年の軌跡
増田勇一監修／シンコーミュージック／3300円

デビュー50周年、キャリアの節目を迎えると共にフェアウェル・ツアー開催を公表、バンドの終活モードに注目が集まる最中に興味深い一冊が登場した。

本書は、半世紀に及ぶエアロスミスの足跡を集約したアーカイヴ本。その内訳は、成功、ドラッグ問題、低迷期、復活と激しい浮き沈みを経験したヒストリーを主軸とする一方、各メンバーにフォーカスを当てたインタヴュー、直筆アンケート、オリジナル／ライヴ／ソロ作を含めたディスコグラフィー等を基本に据えた王道が核を担っているのが個人的にはありがたい。

また、シンコーミュージックならではの未発表カット含むスペシャル・グラビアは、ライヴ、プライヴェート問わず秘蔵写真満載で視覚的に楽しめるのも嬉しい。加えて『ミュージック・ライフ』に掲載された新作発表時の広告の数々もノスタルジックな思いに浸らせてくれるはず。

1977年の初来日から2013年まで計13回に及ぶジャパン・ツアーのセットリスト、さらにはバンドに関わった人脈を掘り下げた"Who's Who"もなかなかの読み応えだ。

スティーヴン・タイラーの体調不良で休止となっているフェアウェル・ツアーにも言及。デビューから直近の情報、データをB5判288ページに網羅した本書は"エアロスミス大全"の看板に偽りなしだ。北井康仁

グリニッチ・ヴィレッジの黄金期を回顧するメモワール

My Greenwich Village: Dave, Bob And Me
Terri Thal著／McNidder & Grace［UK］

セピア色のカヴァー・フォトは、ボブ・ディラン63年のアルバム『フリーホイーリン』のそれを想わせる。副題にあるデイヴ（ヴァン・ロンク）、ボブ、そして"私"（著者テリー・サル）という60年前後の親密なフォーク仲間たちが、冬のNYの街路を歩いているんだが、実は"私"の隣に『フリーホイーリン』で、はにかむような若いボブに腕を絡ませているあの恋人、スーズ・ロトロも一緒に写っている（ちなみに"私"は、2011年、彼女が亡くなるまで親交があったという）。

本書は、かつてのフォーク・シーンのメッカ、グリニッチ・ヴィレッジの黄金期を回顧する美しいメモワールで、特段にボブの音楽的活動に焦点を絞ったものではなく、あくまでひとりのユダヤ系女子の生涯を伝記的に物語るもの。つまり、往時の政治的・社会的・文化的な景色を克明に記録したもので、必然的に彼女が長く経営に携ったヴィレッジの小屋"ガスライト"でアルバート・グロスマンヘバトン・タッチするまでボブの初代マネージャーとなった経緯や、61年9月、後にレコード化された"ガスライト・テープス"録音の興味深い逸話も出てくるというわけだ。だから、読者はまさに政治の季節だったあの頃から、"ニュー・レフト"を自負する著者の人生模様にある種の感傷を感得するだろう。杉原志啓

CamScannerでスキャン

ジャケットを中心に各種デザインを多様な図版で論じる

グラフィック・ビートルズ

松田行正著／牛若丸（Book&Design）／3600円

ビートルズのデザインが豊富な図版とともに論じられる。

来日公演も体験した筋金入りのビートルズ・ファンである著者は、長年、ブック・デザインを手がけてきた、いわば紙ものプロ。書体ひとつをとっても、デザイナーがEMIお抱えかどうかなど、様々なことが推理される。また、美術史の中にビートルズを位置づけた本は、非常に珍しいのではないだろうか。ステュアート・サトクリフからウィングスまで、点と点がモダン・アートの線で結ばれる。巻末には各オリジナル・アルバムのデザイン原案が、カラーで再現されている。デビュー・アルバムがこのデザインでは、数多くのマージー・ビートのバンドに埋もれてしまったかもしれない。『ヘルプ！』のだらしなさには脱力。想像が想像を呼んで楽しく遊べる、ビートルズのような本だ。

朝日順子

裏返し、ひっくり返し、上下逆さまにする。紙や大きさが手に馴染むこともあり、ずっと遊んでいたい、仕掛け満載の本だ。本自体がアート作品だが、古い・ホワイト・アルバム』日本盤を模した外見からも分かるように、敷居は高くなく、持ち歩いてヴィンテージ感を出したくなる。斬新な造本の藤本国彦著作『GET BACK…BAKED』（16年／牛若丸）掲載のコラムに大幅な加筆をしてできた本書では、レコード・ジャケットを中心に、

アートとロックを結びつけた作品で70年代の活動を総括

Roxy Music In The 1970s: Decades

Dave Thompson著／Sonicbond［UK］

本書は伝記的要素を廃し、70年代のロキシー・ミュージック本体とメンバーのソロ作品そのものの分析に絞ったアプローチをとっている。一読して圧倒されるのは紹介される作品量の多さで、アルバムやシングルに加えチャート・アクションやライヴ日程に至るまで余さずフォローしたデータから、当時いかに彼らが精力的だったかが分かる。また、フィル・マンザネラがこの本のためのインタヴューに応じており、彼視点からの70年代ロキシーの総括がとても新鮮だ。

70年代ロキシーは本体とメンバーそれぞれのソロ・プロジェクトやコラボレーションが数多く並行していたが、その10年間、ブライアン・フェリーはアートをポップな形でロックに応用する地固めを続け、バンドを抜けたブライアン・イーノは未来の音楽を求めて現代音楽やジャーマン・ロックとの接点を探り、やがて環境音楽に至った。そんな二人がアートとロックを結びつける際の手法の差異やメンバー間の微妙な距離感も異味深い。マンザネラの〝僕らは一人ひとりが別の異味や目的を持った上で一緒になった。そこが面白かったんだ〟という言葉通り、70年代という〝バンドの時代〟にユニット感覚を持って多方面に進出した彼らが、先進的なアート集団だったと具体的に実感できる、データ本としても読みものとしても優れた一冊だ。

田山三樹

CamScannerでスキャン

筋肉を弛緩させるようなグルーヴの快楽を意識し選盤

酩酊と幻惑ロック
ドゥームメタル・ストーナーロック・スラッジコア・ディスクガイド
1965-2022

加藤隆雅監修・著、杉本憲史編集・著／東京キララ社／3000円

ドゥーム・メタルやストーナー・ロック、スラッジ・コアと呼ばれる類の音楽に関する、ある面では決定版といえる大著である。監修を務めた加藤隆雅と編集の杉本憲史は、前述の音楽形態の源泉となった〝腰が動くようなグルーヴの音楽〟〝脳内や身体が酩酊的な快楽に包まれるような音楽〟を意識し、その快楽装置たるグルーヴがもたらす効能を〝幻惑する〟あるいは〝魅了するもの〟として書名に掲げ、その概念のもとに多様な音源を放り込んでいった。その結果、先述のジャンルの名盤を的確に押さえがらも、CynicやMassive Attack、スピッツやQueenをも含む越境的なラインナップ（実に1204作品）ができあがる。レヴューも充実しており、隅から隅まで面白い本になっている。

以上をふまえて注意すべきなのが、フューネラル・ドゥームやデス・ドゥーム、パワーヴァイオレンスといった重要な隣接ジャンルがほとんどないこと。その意味では、〝ドゥーム〟関連の全領域を充分に網羅しているとはいえないのだが、〝本書が扱う快楽は主に、筋肉を弛緩させるようなもの〟という美意識も鑑みれば、むしろ筋が通っていて良いのだろう。70年代前半のハード・ロックを好む人にとってはツボな作品ばかりのはず。レココレ読者には特にお薦めの逸品だ。

和田信一郎

全作品を録音順に掲載し徹底解説したディスク・ガイド

ボブ・ディラン完全版

和久井光司責任編集／河出書房新社／2700円

和久井光司の責任編集による〝完全版〟シリーズに、ボブ・ディランが登場。浦沢直樹との共著『ディランを語ろう』や、全ディスク・レヴューを執筆した本誌別冊『ボブ・ディラン・ディスク・ガイド』に対し、〈もう少し楽しくディランを語り、（中略）〝難しいのではないか〟というイメージを払拭したかった〉と記されている通り、菅野ヘッケル、東京ボブと編著者との鼎談、梅村昇史による漫画「ニューオーリンズ・フォレストライン」、世界有数のディラン・コレクションを有する立見伸一郎のアパレル・コレクションなど、ヴァラエティ豊かな構成。

といっても、核はディランの全作品を網羅して徹底解説したディスク・ガイド。関係ミュージシャンの活動から、2023年11月にリリースされたばかりの『コンプリート武道館』までを完璧に掲載して、オリジナル以外の作品も含め、約270作品を録音順に解説。映像作品や書籍に至るまで触れられている。ボーナス・トラック的な扱いの、アル・クーパーの全オリジナル・アルバム特集も嬉しい。

編著者のディランへの愛情の深さがひしひしと伝わってくる労作で、マニアはもちろん、これからディランを聴きたい人にも適切。ディランを聴く際には常にそばに置いておいておきたい辞典のようなガイド・ブックだ。

ガモウユウイチ

CamScannerでスキャン

恐怖なだけでなく温かい人柄をも伝える逸話の数々

ビル・エヴァンス・トリオ 最後の二年間

ジョー・ラ・バーベラ、チャールズ・レヴィン著、荒井理子訳／草思社／2400円

ビル・エヴァンス・トリオ最後のドラマーだったジョー・ラ・バーベラが、後の教え子チャールズ・レヴィンの手を借りてトリオでの2年間のことを中心に綴った一冊。ビルとの日々だけでなく、自身の生い立ちからビルのトリオに加わるまで、また、ビルの死後に体験してきた事象も詳細に述べられており、知られざる逸話を語るそれらの一文一文に、ラ・バーベラの温かい人間性がにじみ出ている。

とはいえ、なんといっても本書の中心にあるのはビルとの日々に関する記述。特にビルが亡くなる数日前からのエピソードは読んでいて本当に辛い。79年1月にラ・バーベラが加わった時にはビルの身体の状態はそれほど酷くなかったのだが、その後、再発したドラッグへの耽溺で体調はどんどん悪くなり、最後は自力でクラブまで行ってピアノの椅子に座るのすら困難な状態にまで陥る。それでも、一旦ピアノに向かうと出てくる音は生気と煌めきに満ち、聴くものは強く心を打たれることになるのだ。ここにはビルのジャズへの思いの強さが表われているのだが、並の人間にできることではなく、凄い！としか言いようがない。また著者は、それだけでなくビルの思いやりの深さや温かい人間性を伝えるエピソードもたくさん紹介してくれる。ビルに関するこのような書物はこれまでになかった。大村幸則

〝90年代に繋がる〟未来志向の評価軸で作品をチョイス

アルバム・セレクション・シリーズ 80年代ソウル

林剛監修／ミュージック・マガジン／1500円

林剛さん監修による80年代ソウルのディスク・ガイド本。ソウル・ファンからすると、60年代や70年代を贔屓目に見る傾向がどうしてもあるし、90年代以降のR&Bと呼び名が変わった時代にはまた別の評価軸がある。その中で80年代だけは〝時代の音〟的な感覚で取り残される傾向があったが、ここしばらく続く80年代感覚への再評価の中で、絶好のタイミングでの出版となった。

これまで、この時代のサウンドをブラック・ミュージックの歴史の中でどう位置づけるかという論考は少なかった印象だが、この本が画期的なのは、70年代からの回顧的な流れではなく、〝90年代に繋がる〟という未来志向の評価軸で作品をチョイスしているところだろう。マーヴィン・ゲイ『ミッドナイト・ラヴ』やマイケル・ジャクソン『スリラー』がリリースされた82年から88年をコア・タイムと設定。ブラック・コンテンポラリー、クワイエット・ストーム、ファンク／ブギー、ニュー・ジャック・スウィング、UKソウルという、この時代を象徴する五つのカテゴリーに分類するところから、90年代初頭のヒップホップ・ソウルやグラウンド・ビートに繋がる下地がどこにあったのかを示していく。各レヴューの情報量もすごい。懐古的にも新発見のためにも新鮮に機能する良書。

池上尚志

CamScannerでスキャン

本人の言に加えバンド・メンバーらの談話も豊富な評伝

空と風と時と 小田和正の世界
追分日出子著／文藝春秋／2900円

小田和正の幼少期が一気につまびらかになったという印象を受けた。〝聖歌〟や〝映画（音楽）〟〝故郷の風景〟など、後年の表現活動の大きなインスピレーションになったであろう事柄との出会いについても、著者の筆致はきめ細やかだ。

もうひとつ、〝野球〟が彼にとっていかに重要なファクターであるかも伝わってきた。超人気TVプログラムとなって久しい「クリスマスの約束」初期の打ち合わせで放ったという言葉〝もちろん個人プレーも大事だけど、誰かのファインプレーがチームを救ったり、それでチームが勝つといいよな〟や、今なおタフにアリーナを走り歌う姿をさかのぼると、そこに浮かび上がるのは野球少年としての姿。風を受け、光を浴び、打ち、守り、投げ、走る。小田音楽が持つ風通しの良さの根源を見た思いがした。

走り続ける稀代のシンガー・ソングライターに関する、胸のすくような評伝だ。2005年以来おこなってきた小田和正自身への取材はもちろんのこと、伝説的グループ、オフコースの同僚をはじめ、関連人物の談話もたっぷり挿入されている。約20年に及んだオフコース時代や、ソロに転じてからの三十数年間を描写したセクションが濃密であることはいうまでもないが、兄や叔父などの証言も含む第一章「小田薬局」がまた鮮明で、

原田和典

愛妻を失い、よりありのままの自分であろうとする日々

海の見える風景
早川義夫著／文遊社／1800円

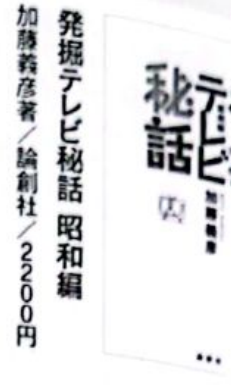
あとがきで早川義夫はこう書いている。〝面白いことがなくて、何を楽しみに生きていけばよいかわからなくなった。（中略）やりがいって何だろうとそればかり考えていた〟。本書は2019年、愛妻に先立たれた早川が、海の見える鎌倉の新居に引っ越した後の日々について綴ったもの。かけがえのない存在を失ってからも、残された者には無為な毎日が情け容赦なく訪れる。人生とは残酷なものだ。そんな空虚な時間の中で、早川は一体何を考えていたのだろう。

〝ふいに蘇ってくる映像〟という項では、22歳の頃に松本隆に「力石徹に捧げる歌」という詞を書いてもらったのに曲を付けられなかったことや、沖縄公演で遠藤ミチロウからバック入りの稲荷寿司を〝どう？〟と勧められたのに、むげに断ってしまったことなど、失礼な記憶が次々と披露される。些細な過ちに未だ良心の呵責を感じる。何と律儀な人だろうと感心する一方、別項では愛犬と散歩中、意気投合した女の子の連絡先を聞けなかったと後悔したり、日光浴をしている水着の女性にあらぬ妄想を巡らせたりと、燃える下心も健在で妙に安心してしまう。大切なものを失い、よりありのままの自分であろうとする早川。人はやがて一人になり、思い出の中に生きていく。それでもいいじゃないかと語りかける生き方の処方箋だ。

ヒロ宗和

CamScannerでスキャン

取材や調査に基づく鋭い切り口が発揮された作品論



発掘テレビ秘話 昭和編
加藤義彦著／論創社／2200円

体によって文章量は異なり、たとえば80年代のドラマ「跳んだカップル」には17ページが割かれ、「ウルトラマン」は2ページでまとめられていたりする。長いものが作品論として有意義なのは当然のこと、短い文章でも（“初耳の情報”に重きをおいた）独自の鋭い切り口が発揮される。すべて番組関係者への取材や資料の調査に基づいたものであることは言うまでもない。

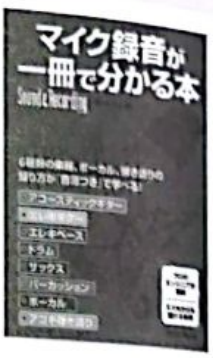
書き下ろしの「ドリフ大爆笑」のリハーサルから収録風景の見学記には、安藤鶴夫の優しさと厳しさが同居している。

ドラマとヴァラエティ、あるいは、俳優と演出家それぞれが、テレビという名のもとに結びついていることがページを繰るたびに思い知らされる。子どもの頃から“笑えるもの”ならなんでも関心を持った”という著者の“根っこ”の部分に、強いシンパシーを覚える。安田謙一

著者は『「時間ですよ」を作った男――久世光彦のドラマ世界』や、『テレビ開放区 幻の「ぎんざNOW！」伝説』などの著書を持ち、山田満郎『8時だョ！全員集合の作り方――笑いを生み出すテレビ美術』の企画構成も手掛けている。評者も長年にわたり信頼を置く、60年生まれの“テレビっ子”である。

本書は彼がさまざまな雑誌に寄稿した昭和のテレビ番組に関する文章をまとめたもの。書き下ろしも多く含まれている。媒

内容を絞りレコーディングの実際を視覚的に伝える



マイク録音が一冊で分かる本
中村公輔著／リットーミュージック／1800円

レコーディング／ミキシング・エンジニアの中村公輔によるマイク録音に特化した教則本だ。中村はエンジニアとして折坂悠太や大石晴子、宇宙ネコ子らを手掛けつつ、文筆も行なっており、レコーディングに関連した論考を本誌にも寄稿している。前著の『名盤レコーディングから読み解くロックのウラ教科書』（リットーミュージック）は、名盤の録音芸術としての魅力を教えてくれる楽しい一冊だった。今回はレコーディング初心者に向けて書かれた入門書だから、より専門的な内容になっている。レコーディング全般の教科書はこれまでにもあったが、内容をマイク録音に絞ったものは初めてではないかと思う。全編カラーで大きな写真がふんだんに使われているから、視覚的に理解しやすくて親切だ。

たとえば、ジェフ・エメリック、グリン・ジョンズ、トム・ダウド、ウォーリー・ハイダー、チャド・ブレイク、スティーヴ・アルビニといったエンジニアを知っていたとしても、彼らが様々なマイクを駆使して具体的に何をしているのかを把握している人は決して多くないと思われる。しかし、この一冊を読めば、彼らの仕事がかなりイメージしやすくなるはずだ。専門的な入門書ではあるが、録音芸術にあってマイクが楽器のように扱われていることがよくわかる一冊となっている。鳥居真道

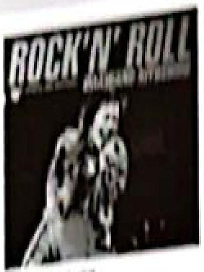
CamScannerでスキャン

RCサクセションと忌野清志郎ソロ時代のビートやグルーヴを重視した楽曲を集めた新編集盤

偉大なるソウル・シンガー。偉大なるソングライター。忌野清志郎の存在を形容する言葉はいくつも思い浮かぶが、本人に職業はと尋ねれば、"バンド・マン"と答えただろう。永遠のバンド・マン、それこそが彼に相応しい称号だと思う。

このたび、清志郎の残した膨大な楽曲群の中から、バンド本来のビート感やグルーヴが感じられるものを厳選したコンピ盤『ロックン・ロール〜Beat, Groove and Alternate〜』がユニバーサルからリリースされる。RCサクセション盤と忌野清志郎ワークス盤、それぞれ2枚組CDに30曲を収録。ロック写真家、有賀幹夫が撮影した写真を中心に構成したブックレットがついてくる。RCサクセション盤はデビュー・アルバムの『初期のRCサクセション』からラストの『Baby a Go Go』まで、各アルバムから万遍なくセレクト。「トランジスタ・ラジオ」のロング・ヴァージョンや雑誌『ロック画報10』の付属CDに収録されていた、当時未発表曲の「もっと何とかならないの?」など、レアなトラックも織り交ぜ、改めてRCのバンドとしての凄さを再確認できる内容だ。忌野清志郎盤は加部正義とのセッション「非常ベルなビル」や、配信のみだった「ジグソー・パズル」など、レア楽曲を目玉としつつ絶妙な選曲で、ソロ初期、2・3'S、タイマーズ、ラフィータフィー、LOVE JETSなど、清志郎が従えたバンドの魅力に迫る。

ヒロ宗和



忌野清志郎
『ロックン・ロール〜Beat, Groove and Alternate〜』
ユニバーサル UICZ4667〜8／2CD／¥4000／3・6発売

"いま改めてウィングスを"という視点を示す増刊『ポール・マッカートニー&ウィングスの時代』

ウィングスの最初のレコードは71年12月に英米でリリースされたアルバム『ワイルド・ライフ』だから、そこから50周年というタイミングでつくりたかったのだが、『バンド・オン・ザ・ラン』の50周年版に合わせる形になった。カラー・ページをたくさん使える本誌増刊は、ビートルズ関係の本にいちばん適していると私は思っている。制作部の高橋修さんとは『ラヴジョン・レノン』と『ジョージ・ハリスン　スワンプ・ロック時代』をつくっているので、その流れで、ということになり、話は早かった。

サエキけんぞう、藤本国彦の両氏との鼎談で、『ナウ・アンド・ゼン』でひとまず完結したビートルズと、ポールが新たに取り組んだウィングスを語ることができたから、"いま改めてウィングスを"という視点を提示できた。ポールのソロを含む特別仕様の拡大版を吉川功一さんが整理してくれたが、アーカイヴ・コレクションと『マッカートニーIII』のカラー・レコード全種、シングル80枚組木箱の中身を掲載して圧巻だ。大村亨さんによる〈日本のメディアが報じたウィングス〉は歴史的価値の高い資料になった。メンバーのソロ作やウィングスの影響を受けたパワー・ポップ系バンドを追いかけてもいるので、重層的に情報をアップデートできたと自負している。

和久井光司

『ポール・マッカートニー&ウィングスの時代』
ミュージック・マガジン／¥2200／1・30発売

CamScannerでスキャン

大滝詠一の最後のスタジオ・アルバムとなった『EACH TIME』を新たな装いで提示する40周年記念盤

大滝詠一の代表的傑作にして生前最後のオリジナル・アルバム『EACH TIME』が今年で発売40周年を迎え、これを記念して『EACH TIME 40th Anniversary Edition』が3月21日にリリースされる。CD2種とアナログの3形態があり（アイテムとしては計3種）、中でも注目は『EACH TIME VOX』だ。CD3枚組、ブルーレイ、12インチ・アナログ2枚組に、ブックレット、歴代『EACH TIMES』冊子、ポスター2種、ステッカー2種が付く超豪華版だ。

その内容はというと、CDはディスク1が"EACH TIME 40th Anniversary Edition"で、オリジナル・アルバムの拡大版的な全13曲を収録。全曲が初出となるミックス違い音源で、未発表音源「STUFFLE OFF」（リリース直後にラジオで一度だけ放送されたという）から始まり、20周年記念盤でボーナス・トラックだった「マルチスコープ」が正規の曲目に"格上げ"されていたり、しかも過去リイシューのいずれとも異なる曲順だったりと、かなりアップデイトされた印象が強い。ディスク2はリリース直後に放送された、ラジオ番組での井上大輔との対談を未編集のフルサイズで収録しており、大滝自身による解説が聞ける。他にプロモーション用に制作されたダイジェスト版の「EACH TIME Special Edit」や、初CD化の「Cider '83」放送用ミックスなども収録。ディスク3は"EACH TIME Sessions"。全16曲が初公開のアウトテイク集で、スタジオでのトークも聞けるようだ。

さらにブルーレイでは、新たにミックスした5・1chサラウンド音源や、84年のオリジナル・ミックスなどのハイレゾ・リマスタリング音源が聴ける。そしてアナログはディスク1の全13曲を2枚組で収録。なお、同時発売の単品アナログは、ボックスとは異なる内容の12インチ＋7インチなのでご注意を！

13年の逝去後も、企画盤やリイシューが発表され続け、いずれも遺志を反映してしっかりした内容なのは感服させられるし、今回もこれまで以上の充実作といえそうだ。3月19日には、大滝の創作を日記形式で追う『大滝詠一レコーディング・ダイアリーVOL3』（リットーミュージック刊）も発売されるので、あわせて楽しみたい。 小山守

『EACH TIME 40th Anniversary VOX』
ナイアガラ（ソニー） SRCL12700～5／3CD＋Blu-ray＋2LP／¥22727／3・21発売

INFO. STATION

Ohtaki Eiichi

イラストレイション＝ジミー益子

CamScannerでスキャン

米国最新情報　ローリング・ストーンズの2002年レア・ライヴ

好セールスを続ける最新アルバム『ハックニー・ダイヤモンズ』で、若いリスナーの心もしっかり掴んだローリング・ストーンズだが、アーカイヴ作品でも一切の抜かりはない。3月8日発売の『ライヴ・アット・ザ・ウィルターン』は、02～03年の〈リックス・ツアー〉中の02年11月22日、LAのウィルターン・シアターで2000人の観客の前で行なわれたスペシャル・ショウで、小さい会場ならではのレアなセットリストが見どころの公演だ。映像（ブルーレイまたはDVD）＋2CD版、2CD版、3LP版（限定のカラー盤あり）でリリースされる。

4月20日のレコード・ストア・デイに、デイヴィッド・ボウイの新たなレア作品が登場する。"Waiting In The Sky（Before The Starman Came To Earth）"は、72年『ジギー・スターダスト』制作途中の71年12月15日にまとめられたマスターを用いたもので、「スターマン」などの重要曲がまだ録音されておらず、「ヴェルヴェット・ゴールドマイン」「ホーリー・ホーリー」「アラウンド・アンド・アラウンド」「アムステルダム」などが含まれている。アナログのみのリリース予定。

15年に映像版が出ていたザ・フーの82年10月13日公演が『ライヴ・アット・シェイ・スタジアム1982』として初音盤化される。録音・ミックスはバンドの専属エンジニア、ボブ・プリデンによるもの。2CDおよび3LP仕様で3月1日発売予定。

3月29日にリリースとなるジャック・ブルースの放送音源集"Smiles And Grins, Broadcast Sessions 1970-2001"は4CD＋2ブルーレイに70～01年のラジオとテレビに出演した演奏が詰め込んであり、ドイツのテレビ番組「ビート・クラブ」の未放送セッションなど貴重なものも発掘されている。（犬伏功）

米国最新情報　ジェイムズ・ブラウンの長時間ドキュメンタリー

ジェイムズ・ブラウンの4時間におよぶ公式ドキュメンタリー"James Brown: Say It Loud"が2月19、20日の二夜、米国のテレビ局A&Eで放送される。監督は『ベルリン1936 ヒトラーに勝った黒人アスリートたち』のデボラ・ライリー・ドレイパーで、総指揮はミック・ジャガーとクエストラヴだ。南部生まれのJBが人種差別やキャリアの挫折などの困難にあいながら、アーティストとして脚光を浴びるまでを描くもの。未公開パフォーマンスやインタヴュー、さらに家族、友人、ジャガー、クエストラヴらのアーティストへのインタヴューを含む。

次はマイケル・ジャクソンの伝記映画"Michael"。マイケル役はマイケルの甥で兄ジェーメインの息子ジャファー・ジャクソン27歳。監督は『トレーニング・デイ』などを手がけたアントワーン・フークアで、プロデューサーは映画『ボヘミアン・ラプソディ』のグレアム・キングほか。マイケルの才能、栄光、挫折までを壮大なスケールで描く映画で、1月に撮影開始。25年4月18日公開予定だ。

ニール・ヤングの75年リリースのアルバム"Zuma"。この録音時の未発表曲を含んだ16曲が"Dume"として10枚組"Archives Vol.II: 1972-1976"（20年）に収録されていたが、アナログ盤2枚組として単体で、2月23日に米リプリーズからリリースされる。

1966年の結成以来、50年以上活動してきたニッティ・グリティ・ダート・バンドの7カ月間の最後のツアー"All The Good Times: The Farewell Tour"の開催が発表された。3月21日にケンタッキー州ボウリンググリーンに始まり、9月14日にミズーリ州カンザスシティで終了。ただし、解散ではなく、全米中を回る長期間に及ぶツアーはこれでおしまいということらしい。（中村彰秀）

CamScannerでスキャン

Reissue Album Guide

・リイシュー・アルバム・ガイド・

国内盤 P.8-21　海外盤 P.22-30

国内外でリリースされた幅広いジャンルの旧音源コンピレーションや再発アルバム、映像作品をくわしく紹介。音楽そのものはもちろん、リマスターやパッケージの出来にまでこだわって、豊富な知識をもつ執筆陣が徹底チェックします

2月のリリース情報 P.2-7

ニュー・アルバム・ピックアップ P.31-34

レコード・メーカー各社の電話番号とウェブアドレス P.7

※掲載されている価格は特記されている場合を除き税抜き定価です

INDEX

A

ADAMS, JOHNNY 15
AYLER, ALBERT 28
AZYMUTH 30

B

BANG 23
BRINSLEY SCHWARTZ 22
BROTHER TO BROTHER 18
BROWN, ARTHUR 23
BRUBECK, DAVE (QUARTET) 28
BRYANT, CLORA 29

C

CRAWFORD, JOHNNY 8
CYAN 31

D

DAVIS, MILES 17
DOORS, THE 25
DUSTER 11

F

FLEETWOOD MAC 12

G

GARRETT, VERNON 16
GOLD, ERNEST 29

H

HARPER, TONI 29
HEADS HANDS & FEET 14

I

IBRAHIM, ABDULLAH 32
IDLE RACE 12

J

JASKULKE, SLAWEK 33

L

LEE, PEGGY 24
LEWIS, JERRY LEE 25

M

MEDICINE HEAD 14
MIGHTY RYEDERS 16
MONTEIRO, JEREMY 33
MOURA, PAULO (HEPTETO) 30

O

O'LEARY, CHRIS 32

P

PIDGEON 8
POWERS, KERRI 32
PRIOR, MADDY 9

Q

QUEEN 14

S

SANCIOUS, DAVID & TONE 11
SCOTT, FREDDIE 15
SHEPP, ARCHIE 28
SMITH, TUK & THE RESTLESS HEARTS 31
STATON, CANDI 27
SUPER BITON DE SEGOU 30

T

TORNADOS, THE 22

U

U.D.O. 13

W

WIZZARD 22

あ〜わ

ケンソー 20
近藤等則 18
天井桟敷 19
Neighbors Complain 34
Haco 19
藤井郷子 東京トリオ 33
民謡クルセイダーズ 34
ヤング101 21
ライオン・メリィ 21
RHYTHMATRIX 34

various artists (v.a.)

ヴァン・モリソンが愛したロックン・ロール 10
ミュージック・フロム・フリー・クリーク〜スーパー・セッション・イン・ニューヨーク1969 10
The Hank Williams Connection: 33 Roots And Covers Of Hank Williams 23
100 Years Hollywood Community And A 100 Years Hollywood Sign 24
Where Were You ? Independent Music From Leeds 1978-1989 26
Windrush Rockers: Rare Sounds From The Original Black British Underground 1967-1975 26
Can You Feel It? Vol.4: Modern Soul, Disco & Boogie 1976-85 27

CamScannerでスキャン

フリートウッド・マック
『シティズン・マック 1990』

H.P.ラヴクラフト
『H.P.ラヴクラフト(ファースト・アルバム)』

ファントム
『神曲・パート1』

C.O.B.(クライウス・オリジナル・バンド)
『モイシェ・マクスティンプ&ザ・タータン・ランサーズ』

ジョー・ジャマー
『バッド・ニュース』

リンダ・ロンシュタット

『ウェン・ウィル・アイ・ビー・ラヴド '74 & '75』

▶2・21／ヴィヴィド／¥3100／2CD

74年のニューヨークと75年のカリフォルニア州バークレーでのライヴをカップリングした2枚組。バックを務めるのはケニー・エドワーズ(b)やアンドリュー・ゴールド(g, p)。輸入盤国内仕様

フリートウッド・マック

『シティズン・マック 1990』

▶2・21／ヴィヴィド／¥3100／2CD

90年に行なったツアー「ビハインド・ザ・マスク・ツアー」から、8月25日に英マンチェスターのサッカー・スタジアムで行なったライヴをBBCの放送用音源でフル収録。リック・ヴィトとビリー・バーネットのツイン・ギター編成が堪能できる。輸入盤国内仕様

H.P.ラヴクラフト

『H.P.ラヴクラフト(ファースト・アルバム)』

▶2・28／ヴィヴィド／¥2700／紙ジャケット

米シカゴ出身のサイケデリック・ロック・バンドが67年に発表したファースト・アルバムの再発。フラワー・パワー・アンセムとなった「レッツ・ゲット・トゥゲザー」のほか、フレッド・ニールやランディ・ニューマンのカヴァーを収めている。輸入盤国内仕様

ファントム

『神曲・パート1』

▶2・28／ヴィヴィド／¥2700／紙ジャケット

覆面サイケ・バンドが74年にリリースした唯一作。歌声からドアーズのジム・モリソンとの関連も指摘されたが、その正体はデトロイトのサイケ・ロック・シーンから誕生した4人組。輸入盤国内仕様

C.O.B.(クライウス・オリジナル・バンド)

『モイシェ・マクスティンプ&ザ・タータン・ランサーズ』

▶2・28／ヴィヴィド／¥2700／紙ジャケット

インクレディブル・ストリング・バンドのオリジナル・メンバーであるバンジョー奏者のクライヴ・パーマーが結成したバンドが72年に発表した2作目にしてラスト・アルバム。インド音楽など多彩なアプローチに挑んだ英アシッド・フォークの傑作。ゲストとしてペンタングルのダニー・トンプソンが参加している。輸入盤国内仕様

マイロン・ルフェーブル

『ウィーク・アット・ザ・ニース』

▶2・28／ヴィヴィド／¥2700／紙ジャケット

ナッシュヴィル録音で、ソロ・デビュー前のランディ・グッドラムやエリア・コード615のメンバーが演奏に参加し、これまでのサザン・ロック・シンガーとしてのテイストにAORが心地よくブレンドされた77年作。輸入盤国内仕様

ジョー・ジャマー

『バッド・ニュース』

▶2・21／ワサビ／¥2600／紙ジャケット

ジミー・ペイジのギター・テックとして知られ、後にオリンピック・ランナーズやノーバディズ・ビジネスでも活動したシカゴ出身のギタリスト、ジョー・ジャマーが、72年に英国に渡りリーガル・ゾノフォンからリリースしたファースト・アルバムが世界初CD化。英国盤LPを元にした紙ジャケット仕様で、音は24年の24ビット・リマスターを採用。初回生産限定

そのほかのリリース

ニコ『ザ・マーブル・インデックス』／フレンド・アンド・ラヴァー『リーチ・アウト・オブ・ザ・ダークネス』／シルヴァー・アップルズ『シルヴァー・アップルズ』

▶1・29／クリンク／各¥1800／紙ジャケット

R&B/SOUL/BLUES

マリリン・マックー& ビリー・デイヴィスJr.

『アイ・ホープ・ウィ・ゲット・トゥ・ラブ・

CamScannerでスキャン

イン・タイム（エクスパンデッド・エディション）』

▶2・7／ウルトラ・ヴァイヴ／¥2400

元フィフス・ディメンションの夫婦デュオによるデビュー作（76年発表）がリイシュー。デトロイト・ソウルの重鎮、ドン・デイヴィスがプロデュースを手がけ、「星空の二人」は大ヒットとなった。ボーナス・トラックとして収録曲のシングル・ヴァージョンなどを追加。輸入盤国内仕様

エリザベス・コットン

『シェイク・シュガリー』

▶2・11／ライス／¥3000

アメリカン・フォークの至宝、エリザベス・コットンの演奏を記録した65年作品が"スミソニアン・フォークウェイズ"からリイシュー。輸入盤国内仕様

リン・ホープ

『ブロウ・リン・ブロウ』

▶2・21／ウルトラ・ヴァイヴ／¥2000

頭にターバンを巻いたスタイルで異彩を放ったブルース／R&Bサックス奏者、リン・ホープ。本編集盤は、彼が50年代に残した録音をまとめたもの（06年リリース）。輸入盤国内仕様

JAZZ

ヴァーヴ

サラ・ヴォーン『サラ・ヴォーン・ウィズ・クリフォード・ブラウン』
オスカー・ピーターソン・トリオ、ミルト・ジャクソン『ヴェリー・トール』
エラ・フィッツジェラルド、ルイ・アームストロング『エラ・アンド・ルイ・アゲイン』
キャノンボール・アダレイ・クインテット『キャノンボール・アダレイ・クインテット・イン・シカゴ』

▶2・28／ユニバーサル／各¥3500／SACDハイブリッド

50、60年代にヴァーヴに残されたジャズ作品を復刻する"Verve Acoustic Sounds SACDシリーズ"が進行中。第5弾はサラ・ヴォーン『サラ・ヴォーン・ウィズ・クリフォード・ブラウン』（54年）ほか、全5作品をリリースする

ブルー・ノート

アンドリュー・ヒル『ダンス・ウィズ・デス』
ボビー・ハッチャーソン『サンフランシスコ』
セシル・テイラー『ユニット・ストラクチャーズ』
デューク・ピアソン『ザ・ライト・タッチ』
フレディ・ハバード『ブルー・スピリッツ』
グレイシャン・モンカー3世『エヴォリューション』
グラント・グリーン『グリーン・ストリート』ほか

▶2・28／ユニバーサル／各¥2000／UHQCD

ブルー・ノート創立85周年を記念して、日本独自のリイシュー・シリーズが進行中。第2弾は、アンドリュー・ヒル『ダンス・ウィズ・デス』（68年）ほか全20作品を再発。エンジニア、ケヴィン・グレイによる最新リマスタリングを施している

デオダート

『ナイト・クルーザー&ハッピー・アワー』

▶2・7／ウルトラ・ヴァイヴ／¥2200

名キーボーディスト／アレンジャー、デオダートのオリジナル・アルバム『ナイト・クルーザー』（80年）と『ハッピー・アワー』（82年）を2 in 1仕様で再発する。ボーナス・トラックとして収録曲のシングル・ヴァージョンなどを追加。輸入盤国内仕様

ビル・エヴァンス・トリオ

『ライヴ・イン・ロンドン1965』
『ライヴ・イン・イタリー1979』＊

▶2・16／IAC／各オープン・プライス／＊2CD

放送用アーカイヴからライヴ音源を発掘・リリースするHi Hatレーベル。今回は、ビル・エヴァンス・トリオ、65年のロンドン公演を記録した『ライヴ・イン・ロンドン

マリリン・マックー&ビリー・デイヴィス Jr.『アイ・キープ・ウィ・ゲット・トゥ・ラブ・イン・タイム（エクスパンデッド・エディション）』

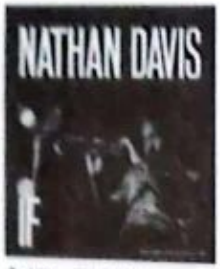
エリザベス・コットン『シェイク・シュガリー』

サラ・ヴォーン『サラ・ヴォーン・ウィズ・クリフォード・ブラウン』

アンドリュー・ヒル『ダンス・ウィズ・デス』

ビル・エヴァンス・トリオ『ライヴ・イン・ロンドン1965』

CamScannerでスキャン



ネイサン・デイヴィス
『イフ』

山本剛トリオ
『ミスティ』

エマホイ・ツェゲ・マリアム・ゴブルー
『スーヴェニールス』

高橋幸宏
『FATE OF GOLD』

モコ・ビーバー・オリーブ
『わすれたいのに』

1965』など2作品を発売。輸入盤国内仕様

ネイサン・デイヴィス

『イフ』

▶2・21／Pヴァイン／¥2400

カンザスシティー出身のマルチ奏者、ネイサン・デイヴィスが76年に〝トゥモロウ・インターナショナル〟からリリースしたリーダー作が復刻される。エイブラハム・ラボリエルなどが参加し、ジャズ・ファンク／レア・グルーヴ文脈で人気の作品

リチャード〝グルーヴ〟ホルムズ&ジミー・ウィザースプーン

『アズ・ブルース・アズ・ゼイ・ウォント・トゥ・ビー』

▶2・21／ウルトラ・ヴァイヴ／¥2000

ソウル・ジャズを代表するオルガン奏者、リチャード〝グルーヴ〟ホルムズと、名ブルース・シャウター、ジミー・ウィザースプーン。両者が91年に共演した際の演奏を記録したライヴ盤がリイシューされる。日本初CD化

スリー・ブラインド・マイス

山本剛トリオ『ミスティ』／日野元彦『流氷 +2』／峰厚介五重奏団『峰』

▶2・28／ソニー／各¥2727

ジャズ・レーベル、スリー・ブラインド・マイスのカタログを復刻する〝スリー・ブラインド・マイス・プレミアム復刻コレクション・シリーズ〟がスタート。第1弾は山本剛トリオ『ミスティ』ほか3作品を発売する。リマスタリングはバーニー・グランドマンが担当

WORLD MUSIC etc.

エマホイ・ツェゲ・マリアム・ゴブルー

『スーヴェニールス』

▶2・23／インパートメント／¥2500

23年3月に逝去したエチオピアのピアニスト、エマホイ・ツェゲ・マリアム・ゴブルー。その未発表音源が発掘・リリースされる。77〜85年にかけてレコーディングされていたもので、彼女のヴォーカルが聴ける貴重な音源。輸入盤国内仕様

エチオピーク

『エチオピーク10〜テゼタ／エチオピアン・ブルース&バラッズ』

▶2・11／ライス／¥2900

ブダ・レーベルの名編集盤シリーズ〝エチオピーク〟の復刻が進行中。最新リリースは〝エチオピアのブルース〟と称される音楽、テゼタをテーマにした『エチオピーク10』。70〜74年に同国のアムハ・レコードに残された音源をまとめている。輸入盤国内仕様

日本のロック／歌謡曲

高橋幸宏

『FATE OF GOLD』
『MR.YT』

▶2・28／ユニバーサル／各¥2800／SHM-CD／紙ジャケット

高橋幸宏、東芝EMI時代のリイシュー・シリーズが進行中。その第3弾は、95年の『FATE OF GOLD』など2作品を再発。砂原良徳による最新リマスタリングを施している

モコ・ビーバー・オリーブ

『わすれたいのに』

▶2・21／ユニバーサル／¥2500／SHM-CD

ラジオ番組「ザ・パンチ・パンチ・パンチ」のパーソナリティ3人によって結成されたモコ・ビーバー・オリーブ。その唯一作(69年発表)がリイシュー。バリス・シスターズのカヴァーなど、オールディーズ／ソフト・ロック的なサウンドが特徴の一枚

ケーシー・ランキン、前野曜子

『蘇える金狼 オリジナル・サウンドトラック』

▶2・21／ディスクユニオン／¥4400／2CD

松田優作主演映画『蘇える金狼』(79年公開)のサウンドトラックがリリース。ケーシー・ランキンによる劇伴と、前野曜子に

CamScannerでスキャン

JOHNNY CRAWFORD ◆ ア・ヤング・マンズ・ファンシー+ルーマーズ／ジョニー・クロフォード

オールデイズ（クリンク） ODR7329／紙ジャケット／¥1500／11・24／解説＝八亀弘和

子役からの人気歌手というとリッキー・ネルソンが思い浮かぶが、60年代初め日本でも人気があったTVの西部劇「ライフルマン」のジョニー・クロフォードも忘れられない。本CDは彼の2作目と3作目のアルバムをカップリングしたもの。

爽やかなルックスで甘い歌声の持ち主だった十代半ばのクロフォードをティーン・アイドル的に売り出した『ア・ヤングマンズ・ファンシー』（62年）。全米8位の大ヒット「Cindy's Birthday」は彼女の誕生日に何を贈ろうかと思い悩む歌詞で、ハツラツとした歌声と心のときめきを音にしたような明るいオーケストラ・サウンドが魅力的。全米14位の「Your Nose Is Gonna Grow」は、僕にウソをついたら（ピノキオのように）鼻が伸びるよ、という切ない恋心を歌ったもので、ここでもクロフォードの歌唱とオーケストラのかけあいが楽しい。他にもティーン・ポップス調の曲が並ぶが、フランク・シナトラでおなじみのスタンダード曲やヘンリー・マンシーニ作の曲まで、ちょっと背伸びしたような大人っぽい曲にも挑戦しており、実は意外と歌がうまい。

『ルーマーズ』（63年）では、ヘレン・ミラー＆ハワード・グリーンフィールド作、ジェリー・ゴーフィンのプロデュースでナッシュヴィル録音の、全米12位まで上がったタイトル曲が、甘いメロディのドリーミーなバラードだ。ボビー・ヴィーやリッキー・ネルソンがヒットさせた曲から、スタンダード、シャンソン調など、さまざまなタイプの曲を取り上げ、歌手として著しい進歩をみせている。注目はまだ駆け出しだったデイヴィッド・ゲイツが3曲も提供していることで、出来はよく、曲によってゲイツやレオン・ラッセルやジミー・ハスケルらがバックを担当しているそうだ。

中村都秀

PIDGEON ◆ ピジョン

Big Pink（ヴィヴィド） VSCD6171／紙ジャケット／¥2700／12・27／歌詞／解説＝小西勝／輸入盤国内仕様

本作は、ジョブライアスという奇才のレコード・デビュー作品だ。そして、単にそうした記念すべきアルバムというだけではない。発表されたのは69年だが、これは当時の彼の音楽的エッセンスが詰めこまれた傑作なのである。

ジョブライアスは米国ペンシルヴェニア州生まれで、73、74年に2作のソロ・アルバムを発表し、アメリカのデイヴィッド・ボウイなどと呼ばれた。米国エレクトラは破格の予算を注ぎこんで彼を売り出したが、遅かったグラム・ロック・ブームにわずかながら遅れてデビューしたせいか、レコードは売れずじまい。しかも長期の契約に縛られて自由な音楽活動ができず、83年に短い生涯を閉じた。けっしてゲイリー・ニューマンなど英国ニュー・ウェイヴ勢のなかには、彼へのリスペクトを公言するものも多い。ソロ2作品は長らく廃盤だったが、07年に日本で初めてCD化され、そのときにはマニアの間で話題になっていたようだ。

そんなジョブライアスが中心となってロサンゼルスで結成されたのが、ピジョンというバンド。本作は彼らの唯一のアルバムで、69年にデッカからリリースされた。ジョブライアスは作曲とギターを担当しており、メイン・ヴォーカルはチェリ・ゲイジという女性。彼女の歌に男声コーラスを絡ませ、ハープシコードのキラキラした音で味つけをした曲は、いかにもママス＆パパス風だ。その一方で、抒情的なフォーク・ナンバーもあり、オルガンと変拍子を組み合わせたプログレ風の曲もある。妙に手数の多いリズム・セクションも個性的だ。楽曲の雑多さがセールス面に悪影響を及ぼしたのかもしれないが、内容は充実。なによりジョブライアスという人が優れた作品家であることを証明する作品である。

立川芳雄

CamScannerでスキャン

MADDY PRIOR ＋ ウーマン・イン・ザ・ウィングス／マディ・プライア
ベル・アンティーク(マーキー) BELLE233977 SHM-CD 紙ジャケット ¥3182 12・20 歌詞・訳詞 解説＝宮坂聖一

MADDY PRIOR ＋ チェンジング・ウィンズ／マディ・プライア
ベル・アンティーク(マーキー) BELLE233978 SHM-CD 紙ジャケット ¥3182 12・20 歌詞・訳詞 解説＝宮坂聖一

これまで数多くのメンバーが出入りしたスティーライ・スパンは結成から56年目を迎える今も精力的にコンサートを行ない、途中バンド活動を休止したりしながらもフェアポート・コンヴェンションとともにブリティッシュ・フォーク・ロックのフロントランナーであり続けている。結成時からのメンバーで現在まで唯一残っているマディ・プライアは、バンド活動とは別に10枚のソロ・アルバムを発表しており、その1作目『ウーマン・イン・ザ・ウィングス』と2作目『チェンジング・ウィンズ』が紙ジャケット、リマスター、SHM-CDで日本初発売された。

3作目以降はCDでのリリースだが、この2枚は発表当時はアナログ盤でのリリースだった。イギリスでは94年と95年にCD化されている。

スティーライ・スパンは77年に傑作アルバム『ストーム・フォース・テン』を発表後、活動をいったん停止した。マディにスティーライ・スパンではできなかったことを表現する機会が訪れる。マイク・オールドフィールドの『呪文』へのゲスト参加もあった。78年発表の『ウーマン・イン・ザ・ウィングス』は全曲が自作。制作には繋がりのあったジェスロ・タルのイアン・アンダーソンとそのスタッフがあたり、(ポピュラー・シンガー) マディのデビュー作となったが、スティーライ・スパンの面影のない音楽に発表当時は驚いたものだった。タイトル曲の「舞台袖の女」をはじめ多くはオーケストラをバックに歌うソロ・シンガーの姿が浮かぶ。「冷たき炎」はオーケストラに、当時のジェスロ・タルのメンバー、マーティン・バレ、ジョン・グラスコック、バリモア・バーロウによるロック・バンドが加わる形、ファースト・シングルの「側溝のガチョウ」ではアンダーソンの激しいフルート演奏が聴け、そのB面の「そう言ったはずよ」はクラリネットがオールド・タイム・ミュージックの雰囲気を醸し出し、レゲエに救世軍のブラス・バンドもどきが顔を出す「キャッツアイズ」、コケティッシュな女性を演じるセカンド・シングルの「バギー・パンツ」は想像もしなかった完璧なジャズ・ヴォーカルだ。

間を置かず同年に発表した『チェンジング・ウィンズ』は、マンチェスターのシンフォニック・プログレッシヴ・ロック・バンド、マンダラバンドの中心人物、デイヴィッド・ロールのプロデュースで、同時期に発表されたマンダラバンドのアルバム『魔石ウェンダーの伝説』にマディが参加しており、そこからの繋がりのようだ。前作でのミュージシャンを一掃し、マンダラバンドのリッチー・クロース、スティーライ・スパンのリック・ケンプのほか、クリス・ステイントンやB・J・コールを起用している。ここでも1曲を除きマディの自作曲で、社会を見つめる姿勢を貫く「持つこと、守ること」で始まり、続く「貧しき夜間勤務のポーター」はレゲエ調、ケンプとの夫婦共作となるバーバラ・ディクソンと歌う「アカペラ・ステラ」、「アリ・パパ」は中近東メロディが流れるブギウギ、「もう一杯」はジャズ・ヴォーカルと多彩だ。特に8分を超えるスケールの大きな曲の「皇太子」は、オーケストラとハープシコードが、透き通るような美しいマディの歌声を際立たせている。

山岸伸一

CamScannerでスキャン

ヴァン・モリソンが愛したロックン・ロール ✦ v.a.

オールデイズ(クリンク) ODR7325／紙ジャケット／¥1500／11・24／解説＝八亀弘和

70代後半を迎えてもリリース・ペースが全く衰えないヴァン・モリソンだが、2023年はいずれもカヴァー企画ではあったもののなんと2作品を発表し、溢れ出る音楽への情熱には圧倒されるばかり。最新作の“Accentuate The Positive”は若きヴァンが影響を受けてきたR&B、ロックンロールを取り上げたものだったが、本CDはそのオリジネイターや代表的なヴァージョンなどをヴァンのアルバムと同じ順番に並べて聴いてみようという興味深い独自企画。やはりヴァンの最新作と聴き比べて楽しむのがお薦めだ。

さらに20曲目からはボーナス・トラック扱いで収録曲のさらに別ヴァージョンを収めている。誰もが知るスタンダード「ユー・アー・マイ・サンシャイン」はまず40年に作者のジミー・デイヴィスが発表したものが冒頭で聴けるが、ボーナス収録されているのはレイ・チャールズの、元とは似ても似つかない62年のブルージーなヴァージョン。レイの大ファンでもあったヴァンのものもテンポ感は違えど、これにインスパイアされた可能性を聴き取ることができるだろう。

ヴァンもジョニー・キッド&ザ・パイレーツのオリジナルに忠実にやっている「シェイキン・オール・オーヴァー」をゲス・フーの完コピ・ヴァージョンも収めているあたりには、多くのロック・ファンにお馴染みザ・フー版のオリジナルはこのアレンジが本式！とばかりに強調したかったであろう編者の意図が感じられたりもする。またヴァンのアルバム・タイトルになっていた「アクセンチュエイト・ザ・ポジティヴ」は本編にヴァンのものに近いジーン・ヴィンセント版を収めつつ、ボーナスでオリジナルのジョニー・マーサー版を聴かせたりと、あれこれ趣向が凝らされている。

青山陽一

ミュージック・フロム・フリー・クリーク～スーパー・セッション・イン・ニューヨーク1969 ✦ v.a.

June Dream(IAC) IACD11286／紙ジャケット／オープン・プライス／12・15／解説＝アール・ダウド／輸入盤国内仕様

今年の正月休みに見たテレビ番組では、TAKUYAやKenKenらその場限りの組合せであろう4人がhide with Spread Beaverの「ピンク スパイダー」をセッションする模様を放映した「六本木レンタルスタジオ」が印象に残ったが、今から55年前、優に40人を超えるミュージシャンが集って行なったセッションを収めたのが、73年にカリスマから2枚組LPとして発表された『ミュージック・フロム・フリー・クリーク』だ。俳優の顔も持つアール・ダウド(本盤のライナーも執筆)作のナンバーもあるが、企画の性格上、ローリング・ストーンズ「悪魔を憐れむ歌」やビートルズ「ヘイ・ジュード」、アントニオ・カルロス・ジョビン「イパネマの娘」といった有名曲のカヴァーが目立つ。

多くの楽曲に参加しているのはムーギー・クリングマン(kbd)とスチュ・ウッズ(b)だが、キーボードではキース・エマーソンとドクター・ジョンの名前もあるし、チャック・レイニーがベースを弾いている曲も二つある。しかし、本盤を語るうえで、なんと言っても外せないのがA・N・アザーとキング・クールの参加だろう。そう、前者がジェフ・ベック、後者がエリック・クラプトンの変名なのだ。二人の共演こそないものの、ベックは4曲、クラプトンは3曲でギターを弾いている。前者なら「ビッグ・シティ・ウーマン」、後者では「ノー・ワン・ノウズ」に、名前を伏せていてもこの二人だとわかってしまう個性が刻まれている。聴いてすぐにわかるという点では、リンダ・ロンシュタットの歌声もそう。彼女が参加した「ヒー・ダーク・ザ・サン」(70年リリース)の『シルク・パース』収録曲)と「リヴィング・ライク・ア・フール」の音源は77年には後者をA面としたシングルも発売された。

杉原徹哉

CamScannerでスキャン

DAVID SANCIOUS & TONE ◆ 啓蒙時代の舞踏／デヴィッド・サンシャス・アンド・トーン

Iconoclassic / ベル・アンティーク(マーキー) MAR233982／¥3200／12・20／解説＝坂本理／輸入盤国内仕様

デイヴィッド・サンシャスは、70年代前半にブルース・スプリングスティーンのEストリート・バンドに参加してその名を馳せ、その後、スタンリー・クラーク、サンタナ、ピーター・ゲイブリエル、スティングなど数多くの大物たちと共演した売れっ子キーボード奏者。彼がEストリート・バンド脱退後に結成したバンドが、デイヴィッド・サンシャス＆トーンである。本作はその3作目（1作目はソロ名義）で、77年に録音されたがお蔵入りになっていたアルバム。プロモーション用のLPやブートレグCDが流出していたようだが、それらの音源ではテープの回転数が操作されていたらしい。今回のCDはサンシャス本人がリマスタリングを手がけたもので、回転数も是正されているとのこと。いわば、これが本作品の初めての公式リリースである。

1・2作目はプログレ風味の強いジャズ・ロックだったが、この3作目ではさらにシンフォニック・プログレ的な要素が強まっている。それもそのはず、本作はもともと、4楽章から成るバレエ組曲として作られたものらしい。前2作と同じくジェラルド・カーボーイ(b)と、Eストリート・バンドの同僚でもあったアーネスト・カーター(ds)が参加。さらに本作では、チック・コリア夫人のゲイル・モランが、ジャズとオペラの狭間を行くような歌声を聴かせてくれる。

しかし本作の聴きどころは、やはりサンシャスの演奏だろう。正直いうと、楽曲はやや練られていないような印象を受けるのだが、キーボード類の音色の選択が的を射ており、その音色に合わせたフレージングが絶妙なのだ。随所でギターも弾いているが、その腕前もなかなかのもの。実力派プレイヤーがその腕前を遺憾なく発揮した作品である。　立川芳雄

DUSTER ◆ リモート・エコーズ／ダスター

Numero(ディスクユニオン) NUM924CDJP／¥3000／12・13／解説＝間食王 a.k.a. 松坂貴亮／輸入盤国内仕様

90年代の後半に北カリフォルニアでスタートした“脱力ロック・プロジェクト”の初期音源集。これは、シカゴのヌメロ・グループが昨秋発売した米国盤の日本仕様版である。デジパックのジャケットを包装したヴィニールに貼られているステッカーには、デモ・カセット作品の“On The Dodge”と“Christmas Dust”を混ぜ、未発表音源を含むと印刷されている。デモといっても音質良好で、後に出すアルバム等の曲とのダブりはなく、ライナーによればすべて96年の録音の約28分14曲入りである。

98年のファースト・アルバム“Stratosphere”をはじめ、一般的なアーティストと同じくダスターも音作りに気を使いながら緻密に曲をクリエイトしてきた。活動を進めるにつれてサウンドが研ぎ澄まされていくほど、ミュージャンシップも高い。ただこのCDは、ダスターの本質とも言うべきバンド名どおりの“ヘタレ感”が濃く滲み出ている。

ヴォーカルの佇まいが象徴するように、“スラッカー（怠け者）・ロック”と呼ばれているのも納得のゆるいサウンドだ。主要メンバーの二人が以前やっていたバンドのモヒンダーの、ケイオティックな激情噴出ハードコア・パンクの反動にも聞こえる。だが、唐突に終わる曲もあるとはいえローファイなようで音作りはしっかりしており、オリジナル・アルバムみたいな流れで聴きごたえ十分。悠々自適で勝手気ままだが、要所をビシッ！と締めた仕上がりなのだ。初期ペイヴメントからスロウコアまでフォローする音楽性で、アシッド・フォークと言える曲も聴けるし、ドラムが目立つアップ・テンポのロック・チューンもなかなかクール。たそがれのメロディに、やんわりと包まれた一枚である。　行川和彦

CamScannerでスキャン

IDLE RACE ◆ タイム・イズ／アイドル・レース

Big Pink（ヴィヴィッド） VSCD6169／紙ジャケット／¥2700／12・27／解説＝小西勝／輸入盤国内仕様

バーミンガム出身のアイドル・レースは、『バースデイ・パーティ』（68年）、『アイドル・レース』（69年）と2枚のスタジオ・アルバムを発表したあと、多くの曲を書き、編曲も手掛けたジェフ・リンがグループを脱退する。リンはロイ・ウッド率いる同郷のザ・ムーヴに移籍（のちにエレクトリック・ライト・オーケストラに発展）するのだが、ロイ・ウッドはもともとアイドル・レースの母体となったバンド、マイク・シェリダン＆ザ・ナイトライダーズに所属していたり、アイドル・レースの「ヒア・ウィ・ゴー・ラウンド・ザ・レモン・トゥリー」もウッドの提供曲だったりと、二つのバンドは深いつながりを持っていた。

ジェフ・リン脱退後、残りの3人は新しいヴォーカル（デイヴ・ウォーカー）、リード・ギター（マイク・ホプキンス）を迎えてEMI傘下のリーガル・ゾノフォンから3枚目のアルバムとなる本盤をリリースする。

トラッド色濃厚な「ダンシング・フラワー」にはじまり、スリム・チャンスあたりのアーシーな感覚のロックンロールや、牧歌的なフォーク・ソングを中心に構成されている。洗いざらしのジーパンに象徴される1970年代の楽観的世界に支配されたピースフルなアルバムだ。カントリー・ロックの「アンド・ザ・レイン」なんて山本コウタローとウィークエンドの「岬めぐり」を聴いているような気持ちになってくる。

残念ながらセールスには結びつかず、これが最後のアルバムとなった。本盤は23年、韓国ビッグ・ピンクからのCD復刻。ライナー・ノーツを付加している。（96年のボックス・セット『バック・トゥ・ザ・ストーリー』を除き）これがはじめてのCD化となる。　安田謙一

FLEETWOOD MAC ◆ ユー・メイク・トウキョウ・ファン 1977／フリートウッド・マック

[illegible]（ヴィヴィッド） [illegible]／[illegible]／12・[illegible]／解説＝[illegible]／輸入盤国内仕様

75年、リンジー・バッキンガムとスティーヴィー・ニックスを加えた新ラインナップでブレイクを果たしたフリートウッド・マックは、77年に『噂』のリリース[illegible]

「オー・ウェル」が2曲目（実際は4曲目）という早い段階で登場。マック加入以前から至るまでリンジーがピーター・グリーンへのリスペクトを込めて演奏してきた曲だが、この日もソウルフルな快演が聴ける。

本来3曲目で演奏されたマックを代表する名曲「ドリームス」はカットされ、このCDで聴ける「リアノン」はスティーヴィーがメロディのレンジを下げて歌っており、喉の調子がやや不調であったことは窺える。だが中盤の「オーヴァー・マイ・ヘッド」や「ユー・メイク・ラヴィング・ファン」でクリスティン・マクヴィーが見せ場を作り、「ゴールド・ダスト・ウーマン」ではスティーヴィーがパワーを取り戻すあたり、プライヴェートはさておきステージ上での彼らのチームワークは見事。[illegible]から一気に加速し「ワールド・ターニング」や「ザ・チェイン」の興奮に繋がっていく。　青山[illegible]

U.D.O. ● マン・アンド・マシーン アニヴァーサリー・エディション
メタル・ヴァイブ／ウルトラ・ヴァイブ　MTVB1009　¥2200　12/27　発売　解説＝[illegible]

U.D.O. ● サンダーボール
メタル・ヴァイブ／ウルトラ・ヴァイブ　MTVB1010　¥2200　12/27　発売　解説＝[illegible]

U.D.O. ● ミッション・ナンバーX
メタル・ヴァイブ／ウルトラ・ヴァイブ　MTVB1011　¥2200　12/27　発売　解説＝[illegible]

U.D.O. ● マスターキュートー
メタル・ヴァイブ／ウルトラ・ヴァイブ　MTVB1012　¥2200　12/27　発売　解説＝[illegible]

U.D.O. ● ドミネイター
メタル・ヴァイブ／ウルトラ・ヴァイブ　MTVB1013　¥2200　12/27　発売　解説＝[illegible]

U.D.O. ● レヴ・ラプター
メタル・ヴァイブ／ウルトラ・ヴァイブ　MTVB1014　¥2200　12/27　発売　解説＝[illegible]

ドイツのヘヴィ・メタル・バンドU.D.O.は、アクセプトのリード・シンガーだったウド・ダークシュナイダーを中心として87年に結成され、現在まで精力的に活動を続けている。23年4月には来日公演を行なったことも記憶に新しい。今回再発されたのは、彼らが2000年代から10年代に発表したタイトルで、23年リマスター音源が使用されている。

『マン・アンド・マシーン アニヴァーサリー・エディション』は、02年に発表された通算8作目の、発売10周年記念エディションでの再発。『マン・アンド・マシーン』は、前作で不在だったドラムにロレンツォ・ミラーニが正式加入して録音された。ウドのだみ声ヴォーカル、ヘヴィなギター・リフに勇壮なコーラスと、アクセプトの頃からの骨太なメタル・サウンドを貫いている。かなり異色な作風だが、元ウォーロックの女性シンガー、ドロ・ペッシュがゲスト参加した美しいバラード「ダンシング・ウィズ・アン・エンジェル」も収録。「マン・アンド・マシーン」のライヴ・テイク、「ダンシング・ウィズ・アン・エンジェル」のリミックスをボーナス収録。

『サンダーボール』は04年発表の通算9作目。U.D.O.らしさ溢れる王道のヘヴィ・メタルだが、スピードとパワー、ギター・リフのフックは前作以上に強化されている印象を受ける。前作と同じメンバーでレコーディングされたのも功を奏したか、アルバム全体がエネルギーに満ちている。「トレインライド・イン・ロシア（ポエズ・パ・ラシー）」は、ロシア・ツアーのドタバタを描いた曲で面白い。

『ミッション・ナンバーX』は、05年発表の通算10作目。ドラマーが元エッジ・オブ・フォーエヴァーのフランチェスコ・ジョヴィーノに交代している。オープニングのインスト曲からタイトル曲へつながる重厚な展開に胸が熱くなる。疾走するギター・リフの「プライムクライム・オン・プライムタイム」、イーリアン・パイプが哀しく響く反戦曲「クライ・ソルジャー・クライ」、『ノー・リミッツ』(98年)収録曲「ウェイ・オブ・ライフ」のセルフカヴァーが、アルバムの良いアクセントになっている。

『マスターキュートー』は07年発表の通算11作目。本作からデジタル・レコーディングを採用している。それも理由か発売当時は批判的な意見もあったが、王道ヘヴィ・メタル路線に変化はない。エキゾチックなメロディを導入した「ザ・ロング・サイド・オブ・ミッドナイト」、デジタル・ビートを導入した「マスター・オブ・ディザスター」などの新機軸も見せている。「ボーダーライン」「スクリーミング・イーグルス」の2曲をボーナス収録。

『ドミネイター』は09年発表の通算12作目。前作に続いてデジタル・レコーディングを敢行。またダウン・チューニングしたギターとベースにより、ヘヴィさにダークさが加味されている。それでいて随所にはU.D.O.らしさを十分に感じさせる意欲作。

『レヴ・ラプター』は11年発表の通算13作目。前作で培ったモダン・ヘヴィネスの魅力を、比較的コンパクトな曲のなかでストレートに聴かせている。重金属のようなギターの迫力にも圧倒されるが、本作を最後に二人のギタリスト、ステファン・カウフマンとイゴール・ギアノラが脱退する。　舩曳将仁

MEDICINE HEAD ✦ ダーク・サイド・オブ・ザ・ムーン／メディスン・ヘッド

Big Pink(ヴィヴィド) VSCD6173／紙ジャケット／¥2700／12・27／歌詞／解説＝小西勝／輸入盤国内仕様

ベースを弾いた元ヤードバーズのキース・レルフがプロデュースしてジョン・ピールのレーベルから72年に出た、英国バーミンガム出身のロック・バンドのサード。デジタル・リマスタリングが施され、音圧が高い硬めのサウンドで楽しめる。ブルース・ロックと言い切れない繊細な抒情性を帯び、ところによってレッド・ツェッペリンの静かな曲も思い起こし、ささやかなギターとピアノなどの音をバックにした歌ものの良作だ。中心メンバーのジョン・フィドラー(vo、g、p)は、後にモーガン・フィッシャーらとブリティッシュ・ライオンズで活動。同タイトルで翌年発売のピンク・フロイドのアルバムとは無関係である。

行川和彦

HEADS HANDS & FEET ✦ オールド・ソルジャーズ・ネヴァー・ダイ／ヘッズ・ハンズ&フィート

Big Pink(ヴィヴィド) VSCD6172／紙ジャケット／¥2700／12・27／歌詞／解説＝小西勝／輸入盤国内仕様

73年にリリースされたヘッズ・ハンズ&フィートの3作目が紙ジャケ・リイシュー。前年の末に既にバンドは消滅しており、これがラスト・アルバムとなった。米R&Bやカントリーをベースにしたオリジナルを卓越した演奏力でクリエイトしてきた彼らだが、ここでは大編成のオーケストラを導入した演劇的なものや英国ポップ色の強いもの、パワフルなロックンロールまで、幅広いヴァリエーションを打ち出した。中でもタイトルや曲調、歌詞の世界観にザ・バンド愛が溢れている「ジャスト・アナザー・アンブッシュ」は、アルバート・リーのソウルフルな歌唱と強力なギター、そして独特なコード展開が耳を捕らえる。

青山陽一

QUEEN ✦ ザ・フル・ワークス:ライヴ・アット武道館 '85／クイーン

Straight(ヴィヴィド) VSCD4621~2／2CD／¥3100／12・20／解説＝池上尚志／輸入盤国内仕様

QUEEN ✦ ザ・マジック・アワー - 大阪城ホール 1985／クイーン

Straight(ヴィヴィド) VSCD4619~20／2CD／¥3100／12・20／解説＝池上尚志／輸入盤国内仕様

クイーンの通算6回目にして、フレディ・マーキュリーとジョン・ディーコン在籍時最後の来日公演となった1985年の<ザ・ワークス・ツアー>から、5月9日の日本武道館と、5月15日の大阪城ホール、それぞれの公演を2枚組CDに収録したライヴ・アルバムがリリースされた。

85年のクイーンといえば、1月にブラジル、リオデジャネイロで行なわれた<ロック・イン・リオ>、さらに7月に行なわれた<ライヴ・エイド>という大規模な野外公演でライヴ・バンドとしての底力を発揮した年。日本公演での音源からも、パフォーマンスの醍醐味はストレートに伝わってくる。

「炎のロックンロール」「ライアー」などの初期作品から、『ザ・ワークス』からのヒット「RADIO GA GA」「ブレイク・フリー」「永遠の誓い」「ハマー・トゥ・フォール」に至るまでのキャリアを総括したセット・リスト。二日の内容はほぼ同じだが、大阪城ホールでは「ハマー・トゥ・フォール」の導入で「ムスターファ」が歌われたり、エルトン・ジョン「土曜の夜は僕の生きがい」のカヴァーも披露されたり、などのサーヴィスがある。「ボヘミアン・ラプソディ」のオペラ展開の部分はテープで代行されているが、それにあわせて“ガリレオ~”と歌う観客が羨ましい。映画『ウェインズ・ワールド』(92年)の、あの車中の合唱シーンを先駆けている。

安田謙一

CamScannerでスキャン

FREDDIE SCOTT ✦ ザ・ヴェリー・ベスト・オブ・フレディ・スコット／フレディ・スコット

Playback(BSMF) BSMF7714／¥3200／1・26／解説＝上柴とおる／輸入盤国内仕様

おもに60年代から70年代前半にかけ、ポピュラー系バラディアーとディープ・ソウル・シンガーという振れ幅ある表現を融合、あるいは往き来したフレディ・スコット。全盛期の60年代後半には、ソロモン・バークを先駆としたいわゆるNYディープ・シーンで、ガーネット・ミムズやハワード・テイトらと並んで注目された。本CDはシングル曲中心のレーベル横断アンソロジー。細かい選曲には賛否もありそうだが、全米R&Bヒット9曲を含めてその歩みを俯瞰しつつ、彼の多様性も踏まえた24曲といえる（本稿は日本語解説や資料類が未着時点での記述）。

小レーベル作品を含む冒頭数曲は、60年代前半の録音。コルピックスでの63年初ヒット 'Hey Girl'（テンプテーションズなどカヴァー多数）をはじめキャロル・キング＆ジェリー・ゴフィンの曲が並ぶ。レイ・チャールズ 'I Got A Woman' さえポピュラー系バラード仕立てなのも、当時の彼らしさか。60年代半ばのコロンビア録音では 'Mr. Heartache' が出色で、本CDは同曲以降、ディープ感が増す。60年代後半のシャウト・レーベル期には、ソロモン・バークを手がけたバート・バーンズのもとでその資質に磨きをかけた。大ヒット 'Are You Lonely For Me' やバークの名曲 'Cry To Me'、ロン・ウッドが取り上げる 'Am I Grooving You'、ヴァン・モリソン曲 'He Ain't Give You None'、後年、ジャネール・モネイも歌うギャンブル＆ハフ制作の名曲 '(You) Got What I Need' などが並ぶ。70年の 'I Shall Be Released'（ボブ・ディラン）など、数曲では70年代ディープ・スタイルの模索もみられ興味深い。未発表2曲のうち 'Watermelon Man'（あの有名曲とは別）は音が新しく、後年の録音と目される。

出田圭

JOHNNY ADAMS ✦ リリース・ミー:ザ・SSS・アンド・ベースメイカー・サイド・1966-1973／ジョニー・アダムス

Playback(BSMF) BSMF7715／¥3200／1・26／解説＝西村雅人／輸入盤国内仕様

ゴスペル期を含め、40年代終盤から、98年に66歳で他界する直前まで歌い続けたニューオーリンズのシンガー、ジョニー・アダムス。広い音域と美声の持ち主で、ブルース系、カントリー系、ポピュラー系などどんなソウルでも歌い、正確なピッチとリズム感が泥臭さの中にもたらす洗練味も、ファルセットが一瞬で地声と入れ替わる名人芸も唯一無二。日本での知名度は低いが、地元では〝褐色のカナリア〟と呼ばれるレジェンドだ。ソウルに転向した50年代終盤に地元のリックと契約。デビュー前のドクター・ジョン（当時はマック・レベナック）がプロデュースとピアノを担った 'I Won't Cry' がローカル・ヒットになった。本盤にも収録されているが、これは70年の再録音。'A Losing Battle' 'Too Much Pride' も同様に、リック時代の曲の再録音だ。

それらを含め、本作に収録されているのは、彼が60年代半ばにフリーの立場でシングルを出していたレーベルのひとつであるベースメイカーと、68年に契約したテキサスのSSSに残した音源。前者はヒューイ・モー制作による65、66年の楽曲で、この頃はまだ無骨な感触も色濃く、高音も控えめだ。ドクター・ジョン作の 'Operator' も収録されており、リック時代からの縁が続いていたことがわかる。その他はSSSでの録音で、冒頭の3曲 'Release Me' 'Reconsider Me' 'I Can't Be All Bad' は全米ホット100にも入ったヒット曲。全体に洗練味を増した歌声が印象的だ。SSSは71年に閉鎖されたが、リリースは74年まで続き、ラストに配された 'Kiss The Heart Away' は、本作の区切りである73年の発表。なお本アルバムには未収録ながら、71、72年にはアトランティックから4枚のシングルを発表している。

河地依子

CamScannerでスキャン

VERNON GARRETT ◆ ゴーイング・トゥ・マイ・ベイビーズ・プレイス／ヴァーノン・ギャレット

Pヴァイン PCD94187／紙ジャケット／¥2400／12・20／解説＝高澤仁
Pヴァイン PLP8074／LP／¥3980／4・3

ゴリゴリと塩辛い佇まいに甘味系の隠し味が潜む歌声が、どうにもクセになるファンキー・ソウルマン、ヴァーノン・ギャレット。その原盤激レアな1stアルバムが本作だ。90年代にはIchibanレーベルなどでも気を吐いたヴァーノンは、60年代からシングル盤とクラブ・ギグを中心に活躍してきたロサンゼルス拠点のローカル・シンガー。75年リリースとされるこの『ゴーイング・トゥ・マイ・ベイビーズ・プレイス』は、それ以前の数年間に発表されたシングル曲群に、新録とおぼしい数トラックを加えた全10曲。初期に発表されたシングルも人気のヴァーノンだが、パワフルで筋肉質なヴォーカルの魅力に加え、ディープ・ファンク感覚さえ匂いたつ本盤も強力である。

突進力あるタイトル曲や、粘り腰な 'I Learned My Lesson' などのファンク系から、勢いの良いノーザン調の 'To Be A Part Of You'、独特の歌いまわしを伴える 'One Man's Loss' 'Something Went Wrong' などのミディアム群もずはやられる。女性コーラスとの相性抜群な彼は、もとより得意としてきた性とのデュエット曲 'Satisfied Woman Satisfied Man' もきっちりキメてくれグルーヴィな 'Keep On Forgiving Yo スロウ系 'I Made My Own World' とった、これまた得意なブルージー・チーンも高水準。聴き進むにつれ、ロールなファンキー・ソウルの底知れない量を思い知る。バックの演奏は後年、ラコ作品などでも活躍するリチャード・ケーソンとビリー・レイ・チャールズらの（当時の）フォーミュラ・フォー組と、この後ほどなくブレイクするL.T.D.が数曲ずつ分け合っているようだ。なお、クレジットに名はないがデイヴィッド・T・ウォーカー参加説がある模様。

出田圭

MIGHTY RYEDERS ◆ ヘルプ・アス・スプレッド・ザ・メッセージ／マイティ・ライダース

Pヴァイン PCD94170／紙ジャケット／¥2400／12・20／解説＝水谷聡男ほか
Pヴァイン PLP7695CB／LP／¥3980／12・22

オリジナル盤がレアなことに変わりはないが "レア・グルーヴの秘宝" として何度も再発され、今では容易に入手できる定番となったマイティ・ライダーズの78年作。ホーン隊を擁する8人編成のヴォーカル&インスト・グループで、人気の要因は、デ・ラ・ソウルが 'A Roller Skating Jam Named "Saturdays"' で引用した 'Evil Vibrations' の存在がやはり大きい。この曲や 'Let There Be Peace' などエレピが軽やかに舞うライトなジャズ・ファンクは、マイアミのクライテリア・スタジオで録音されたせいか都会のナイトクラブより南国のリゾートを思わせる開放感があり、ディスコでもローラー・ディスコ的なイメージがある。グループ名をタイトルに冠した冒頭のファンキー・チューンやメロウ・フローターの 'Lovely' などはTKレコーズ発と言われても信じてしまいそうだ。表題曲はウォーに通じるスロウ〜ミディアムだったりする。プロデュースはサミュエル・ソロモンJr.。後に本バンドのメンバーが組むリヴァージュも手がける才人だ。

内容についてはたびたび語られてきたこともあってか、対談形式の新規ライナーでは楽曲についてほとんど触れず、"盤" の謎に迫ることに注力。ファースト・プレスには音質が異なるプロモ盤と市販盤があること、80年代に出たらしきセカンド・プレスには 'Evil Vibrations' が途中でスロウ・ダウンする "ハズレ盤" も存在するなど、骨董品鑑定団のような会話がなされている。本CDは、リーダーのロドニー・マシューズ公認だというが初回プレス市販盤のマスターを使っているようだが、そんな話が飛び出すだけで "途中でスロウ・ダウンするヴァージョン" が追加収録されていたら面白かった、というのは悪趣味だろうか。

鈴木

CamScannerでスキャン

MILES DAVIS ◆ ライヴ・イン・ポートランド1966／マイルス・デイヴィス
Hi-Hat(IAC) IACD11280〜1／オープン・プライス／12・15／解説＝石沢功治／輸入盤国内仕様

MILES DAVIS ◆ ライヴ・アット・フィルモア・ウエスト1970／マイルス・デイヴィス
Hi-Hat(IAC) IACD11282／オープン・プライス／12・15／解説＝石沢功治／輸入盤国内仕様

MILES DAVIS ◆ ライヴ・イン・ジャパン1981／マイルス・デイヴィス
Hi-Hat(IAC) IACD11283／オープン・プライス／12・15／解説＝石沢功治／輸入盤国内仕様

MILES DAVIS ◆ ライヴ・イン・ジャーマニー1990／マイルス・デイヴィス
Hi-Hat(IAC) IACD11284〜5／オープン・プライス／12・15／解説＝石沢功治／輸入盤国内仕様

ラジオ音源やテレビ音源などから発掘されたアーカイヴをリリースしているHi-Hatから、新たに4タイトルがリリースされた。今回はすべてマイルス・デイヴィスの音源だ。

『ライヴ・イン・ポートランド1966』は、66年5月のアメリカのポートランドでの公演を収録した2枚組。ライヴがほとんど録音されていない66年の、貴重な音源だ。音質面は、高音が強く低音が弱いが、音源のレアリティと内容を考えれば無問題ともいえる。「枯葉」からして、マイルスの隆々たるトランペットは音数が多いわけではないのに、そのプレイが強烈な混沌を呼び込む。マイルスからウェイン・ショーターのサックスへのソロのリレーを聴くと、当時のライヴ音源が少ないことが惜しくなるほどだ。『カインド・オブ・ブルー』収録曲である「オール・ブルース」「ソー・ホワット」も渦を巻くかのような演奏で、この時期の編成の魅力を雄弁に物語る。ミュージカル楽曲「フー・キャン・アイ・ターン・トゥ」の演奏も珍しい。エレクトリック化前、第2期クインテットによる圧巻の演奏が記録されている。

『ライヴ・アット・フィルモア・ウエスト1970』では、70年4月のアメリカ、サンフランシスコ公演を完全収録。フィルモア・ウェストでの四日間のライヴのうち別日の演奏は音盤化されているが、今回は4月12日の音源が発掘された。この公演は、まさに『ビッチェズ・ブリュー』発表後のマイルスの姿を記録している。「イッツ・アバウト・ザット・タイム」では、チック・コリアのエレクトリック・ピアノが強烈な存在感とともに響くなか、デイヴ・ホランドの複雑なベースがうねり続け、さらに当時、43歳のマイルスのトランペットと、当時、19歳のスティーヴ・グロスマンのサックスが並走しながらせめぎ合い、そのまま「ディレクションズ」へと突入する。「ディレクションズ」終盤は、チックによるミュージック・コンクレートだ。『ビッチェズ・ブリュー』の収録曲は、「サンクチュアリ」「ビッチェズ・ブリュー」「スパニッシュ・キー」を演奏。エレクトリック化した時期のマイルスを堪能できる。

『ライヴ・イン・ジャパン1981』は、81年10月、来日時の福岡公演を完全収録。80年に活動再開した後のライヴになる。『ザ・マン・ウィズ・ザ・ホーン』のリリース後でもあり、同作から「バック・シート・ベティ」「アイーダ」「ファット・タイム」が演奏されている。その「バック・シート・ベティ」は、5年の空白が嘘のように軽快な演奏だが、マーカス・ミラーのベースとアル・フォスターのドラムを中心に強靭なファンクネスが繰りだされる。ミノ・シネルのパーカッションの存在感も大きい。

『ライヴ・イン・ジャーマニー1990』は、90年7月のドイツ公演を完全収録した2枚組。マイルス死去の約1年前という時期である。キャメオの「イン・ザ・ナイト」やTOTOの「ドント・ストップ・ミー・ナウ」もあるが、聴衆の盛り上がりのピークはマイケル・ジャクソンの「ヒューマン・ネイチャー」とシンディ・ローパーの「タイム・アフター・タイム」。「TUTU」では聴衆とのコール・アンド・レスポンスも起きる。とはいえ、今回の4作品で優先的に聴くべきは66年と70年の音源だろう。　**宗像明将**

CamScannerでスキャン

BROTHER TO BROTHER ◆ レット・ユア・マインド・ビー・フリー／ブラザー・トゥ・ブラザー

Big Pink（ヴィヴィド） VSCD6160／紙ジャケット／¥2700／10・31／解説＝小西勝／輸入盤国内仕様

ブラザー・トゥ・ブラザーは、シルヴィア・ロビンソンの援護を受けて結成され、スタジオでのセッションをメインとした匿名性の高いヴォーカル＆インスト・グループだ。当初はシンガーのマイケル・バートン、ドラマーのヨギ・ホートン、ギタリスト／パーカッション奏者のビリー・ジョーンズらが在籍。シルヴィアが主宰したオール・プラティナムのアーティストを支えつつ、74年には、傘下のターボからモーメンツのメンバーが制作に関与したアルバムを発表した。それに続くのが、76年に発表された本作。ただし、メンバーはビリー・ジョーンズを除き一新されている。スタジオ・プロジェクト的な性格を持つ万能型バンドだけに一貫した音楽性はなく、あえて言うならスライ＆ザ・ファミリー・ストーンやオハイオ・プレイヤーズの流れを汲むファンクをやっているのだが、内容は前作から劇的に変化しているわけではない。

本作は、ビリーと女性鍵盤奏者、バーナデット・ランドルによる共同制作で、ニュージャージーにあるレーベル所縁のスタジオで録音。演奏／ヴォーカル陣には、同じオール・プラティナム系列からリムショッツやシャーリー＆カンパニーの腕利きを招いている。冒頭の表題曲など、ファンキーで陽気なディスコ系のアップ・ナンバーは、KC&ザ・サンシャイン・バンドに影響を受けたものだろう。ユニークなのは、ビリーのものと思われる道化っぽくナスティな歌で、バラードの 'Take My Love' で情熱的に歌い上げるあたりも含めて、バーケイズのラリー・ドッドソンに通じるものを感じた。ギロを鳴らしたメロウ・チューン、アナログ・シンセがウニョウニョとした音を発するインストも登場。出来としてはまずまずだが、素通りできない一枚だ。林剛

近藤等則 ◆ 1993 - east west days -

ブリッジ BRIDGE386／¥2400／12・15

20年10月に71歳で急逝したトランペット奏者、近藤等則を振り返るコンピレーション・アルバムが発表された。本盤がテーマにするのは、93年の近藤等則だ。70年代から半世紀にわたって、果敢に独自の道を切り開いてきた近藤。常に実験を恐れず、ジャズを超えて世界と連携しながら驚くような表現に挑戦し、聴く者の心に響くことを念じて活動を展開し続けてきた。残された作品は数多くあるが、時期により、また共演者により、その音楽性は様々だ。そんな近藤の93年。そこに照準を当てると、この時期が彼の最も大きな転換点だったということが見えてくる。この年に近藤は1年間、イースト・ウェスト・ジャパンと契約し、4枚のアルバムを発表した。その4枚から全14曲を選曲し、最新リマスタリングを施したうえで並べたのが本作だ。

フリー・ジャズからキャリアをスタートした近藤は、80年代のビル・ラズウェルらの台頭に機を合わせ、活動の舞台をシフト。ハード・エッジなビートを武器にアヴァン・ロックとポップ・センスを融合させたバンド、IMAを結成して他に例のない活動を展開した。ライヴ・シーンをひたすら疾駆してきたが、93年に同バンドを解散する。その後は活動の拠点をイランダに移し、スタジオを設立。エレクトロ・サウンドとトランペットを自在にコントロールすることで制約から解放され、音楽制作に集中する一方、世界と対峙する視野を確立する。本盤の前半でフィーチャーされているのは、IMAの最終作『Red City Smoke』からの楽曲だ。10年間にわたる活動の成果を継承し、のうえですべてを一人でコントロールしたソロ作『TOUCHSTONE』収録の曲を聴くと、近藤の心のなかで醸成されていたものが伝わってくる。

CamScannerでスキャン

天井桟敷 ✦ 呪術音楽劇「邪宗門」

マーキー(ベル・アンティーク) BEL101673／SHM-CD／紙ジャケット／¥3181／12・20／歌詞

71年、寺山修司率いる劇団、天井桟敷がパリやオランダで公演を重ね、好評を博した「呪術音楽劇：邪宗門」。翌年の1月30日、渋谷公会堂で行なわれた日本公演を収めた実況録音盤が紙ジャケ、高品質CDで復刻された。邪宗門とは、いわゆる邪教。国家の秩序を乱す宗教という意味である。寺山は、69年に日本版「ヘアー」の脚本を担当する（あまりに過激な内容のため却下）などロックの動向に敏感で、既存の枠組みに対するカウンターカルチャーとして、ロック（邪教）と演劇の融合に関心を持っていた。「邪宗門」はその最初の成果で、J・A・シーザーの書き下ろした御詠歌ロックが鳴り響くなか、演劇が進行していくというスタイルを決定づけた記念碑的作品だ。

公演前から“芝居を壊す”と脅迫電話が入り、当日は状況劇場や劇団円などの劇団員が陣取り、怒号が飛び交う。舞台では人形に火がつき、舞台袖が炎上するなどの出来事が発生。それ以降、渋公は使用禁止になったという。御苑スタジオでわずか半日という驚異的なスピードで作曲されたシーザーによる劇伴の数々は、アメリカ大使館職員から行進曲に使いたいと申し出があった「狂女節」から、読経ロックと形容したい、ミニマルな酩酊感が心地よい「母捨般若経」まで、テンションの高さが尋常でない。オラトリオのような和讃の合唱、部族的でパワフルな太鼓のリズム、シタールや琵琶で奏でられるドローンの反復効果。一言一言を噛みしめる役者の呟きや土俗的な叫びも音楽の響きと同化し、混然一体となって異空間を形作る様は、まさに呪術音楽劇という名が相応しい。音質は劣るが、三上寛が絶唱する「犯されたら泣けばいい」も収めた完全版CDブック『邪宗門』（99年）も併せて楽しみたい。　ヒロ宗和

Haco ✦ HACO

ミディ CXCA1319／¥2700／1・24／解説＝門脇綱生

アフター・ディナーなどの活動でも知られる音楽家、Hacoが95年にリリースした1stソロ・アルバムが今年1月にリイシュー。ニュー・ウェイヴから民俗音楽、アンビエントからミニマル・ミュージックを横断するユニークなアヴァンギャルド・センスが光る作品でありながら、どこか牧歌的で、親しみやすいポップな雰囲気さえもまとっている（それが日本語詞に依拠していることはいうまでもない）。そういう意味では開放的な表現が展開されており、アフター・ディナーと同じようなサウンドを期待して聴くと、良い意味でも悪い意味でも違う感じがするかもしれない。しかし、その状況下で聴いた人であってもサウンドのどこかに必ずドキリとするはずである。

面白いのは、日本語の持つ韻律や詩性にもとづくヴォーカルが現代的なサウンドとうまく融合し、欧州由来（のはず）の音楽が日本的な咀嚼により、独自の音楽に昇華されている点だ。しかもそれは、けっしてきわどくミクスチャーな印象を我々に抱かせない。実験音楽シーンの音楽なのだが、あえてポップスという文脈からいえば、横川理彦や橋本一子などと同じように、凡庸な日本語ポップスに飽きたフリークスがたどり着く先の日本語ポップスであるように思う。実験音楽の観点からいかに解釈するかという閉鎖的な観点で聴かれるだけではもったいない。そう考えてみれば、たしかにヨーロッパで正当な評価を受けるのは納得できる。ギターで今堀恒雄が、バーンスリー、アルト・サックス、タブラで中川博志が参加。また今回、ボーナス・トラックとしてポップ・ナンバーである「A Fragment」のイタリアでのライヴ版（今堀と横川が参加）が収録されている。リマスタリングは畠山地平が担当。　エブリデ

CamScannerでスキャン

ケンソー ◆ 空に光る〜アーリー・ライヴ VOL.1
マーキー(ベル・アンティーク) BELLE233975／SHM-CD／紙ジャケット／¥3182／12・20／解説＝清水義央

ケンソー ◆ 陰影の笛〜ライヴ VOL.2
マーキー(ベル・アンティーク) BELLE233976／SHM-CD／紙ジャケット／¥3182／12・20／解説＝清水義央

74年に結成され、現在まで長きにわたって活動している、清水義央(g)率いるインストゥルメンタル・プログレッシヴ・ロック・バンド、ケンソー。彼らの初期音源を収録した2枚のライヴ・アルバムが、紙ジャケット仕様、2023年最新リマスターによってリイシューされた。

94年にリリースされた『空に光る〜アーリー・ライヴ VOL.1』は、デモ音源2曲と、83年4月3日、7月24日に吉祥寺シルヴァー・エレファントで行なわれたライヴ音源6曲を収録。デモは、『KENSO』(80年) リリース後にライヴを行なうために録音された4曲のうちの2曲で、清水、矢島史郎(fl)、牧内淳(kbd)、森下一幸(kbd)、松元公良(b)のほか、のちにLOOKの鍵盤奏者として活躍する山本治彦 (山本はるきち／ds)が参加している。次作の『KENSO Ⅱ』(82年)をリリースした後、83年4月に行なったライヴからは「日本の春」を収録。森下はすでにバンドを辞めており、脱退を決めていた矢島にとってもラスト・ライヴとなった。鍵盤は、牧内と清水が一部を担当した。そして、83年7月のライヴからは「空に光る」など5曲を収録。この間に、のちに特撮やアニメの劇伴で活躍する佐橋俊彦(kbd)がバンドに参加している。佐橋はこのあと一時期脱退する(85年に復帰)ので、牧内とのツイン・キーボードが聴ける貴重な音源だ。矢島史郎もゲストとして参加したが、1年半後に急逝したため最後の参加音源となる。当時ならではの熱い演奏で、フレアークのカヴァー「プレリュード・イン・ソフィア」では、佐橋が素晴らしいオルガン・ソロを聴かせる。

続いて95年にリリースされた『陰影の笛〜ライヴ VOL.2』は、89年12月10日、六本木ピットインでのライヴ音源と、82年4月25日、吉祥寺シルヴァー・エレファントでの伝説のデビュー・ライヴの音源を順に並べるほか、最初期のデモ2曲を収録。89年のライヴでは、清水義央、佐橋俊彦に加え、83年に加入した元ピノキオの小口健一(kbd)や、のちに佐藤博や古内東子などのバックを担う三枝俊治(b)、のちに松任谷由実や椎名林檎などのバックを担う村石雅行(ds)が参加した。これは三宅加入後の初ライヴであり、佐橋にとってのラスト・ライヴでもある。「陰動」では、三枝が長尺の素晴らしいベース・ソロを聴かせ、傑作との呼び声も高い6th『夢の丘』(91年)へつながる、過渡期的な雰囲気が漂う。82年のデビュー・ライヴは、『KENSO Ⅱ』に参加した清水、山本、矢島、松元、森下、牧内という編成で、1曲目に演奏された「空に光る」を除く全曲を収録している(1曲目とアンコールで2回「空に光る」が演奏されたため、後者のテイクのみを使用)。清水らが神奈川歯科大にいた時代、軽音楽部の部室で夜な夜な"かごめセッション"なる即興の集まりが行なわれていたそうだが、デモ音源の「日本の春」は、その時の音源。清水と初代ベーシストの田中政行がシンセサイザーをプレイするほか、牧内と矢島が参加している。同じくデモの「空に光る」は、『VOL.1』に収録されたライヴを行なうために録音された4曲のうちの1曲で、当時は"マテリアルD"と呼ばれていた。最初期でありながらクオリティの高い熱き演奏を堪能できる、貴重な音源だ。

ガモウユウイチ

CamScannerでスキャン

ライオン・メリィ [illegible]

[illegible]

[illegible]

ヤング101 ＊ ステージ101 ポップスを歌う

[illegible] ¥3000 12・16 発売

「ステージ101」は、かつてNHKで放送されていた音楽番組。70年1月から74年3月まで続き、中村八大や東海林修、宮川泰らが音楽監督を務めた。そこで番組レギュラーのオーディションで結成されたのが「ヤング101」であった。このアルバムは、彼らが取り組んだ洋楽カヴァーを25曲集めたＣＤ。既発の[illegible]ポップスには洋楽の日本語カヴァーが収められていたが、ここではポップスに収録しきれなかった洋楽カヴァーから、英語詞で歌われたものが中心に収められた。

オーディションで選出されたヤング101のメンバーは実力派揃いで、[illegible]、小林啓子、田中星児、谷山浩子、太田裕美ら、のちにソロやグループで活躍する優れたシンガーが多数輩出された。冒頭を飾るのは、躍動感溢れる「セイブ・ザ・カントリー」。ステージ上で歌い踊る姿が想起される。ブレッドの日本語カヴァー[illegible]「灰色の朝」は、番組のオリジナル・ソング「人生すばらしきドラマ」を歌っていた[illegible]と、のちにデュオや特撮ソングでも大活躍する[illegible]が歌う。シカゴ「自由になりたい」からディープ・パープル「ブラック・ナイト」はいい流れ。[illegible]を、[illegible]らが歌うビートルズ「ホエン・アイム・シックスティ・フォー」、[illegible]「ビーナス」と日本語も鮮やかにマッチしたショッキング・ブルー[illegible]など、幅広い楽曲をコーラスの形で聴かせてくれる。[illegible]のバラード「アンド・アイ・ラブ・ハー」を塩見大治郎、田中星児らで聴かせたあと、[illegible]「オー・ハッピー・デイ」で締め。豊かな時代の洋楽メロディと、伝説の音楽ショウ番組が鮮やかに蘇る。 鈴木啓之

CamScannerでスキャン

THE TORNADOS ✦ Love And Fury: The Holloway Road Sessions 1962-1966

Cherry Red [UK] TCTBX8／5CD

このところ英チェリー・レッド・レーベルが〝ティー・チェスト・テープ〟と銘打つジョー・ミークの遺産を続々とレコード化している。で、ミークの手がけた代表的グループのひと組トルネイドースのこの5枚組がその最新盤となる。

トルネイドースといえば、むろん62年、英米でNo.1スポットへ昇りつめたワールドワイド・ヒット「テルスター」。このセットは、あの異次元的なサウンドのインスト・レコード始め、シングル、アルバム、その別テイクやデモ等をほとんど完璧に網羅――リハーサル・テイクやバッキング・トラック、同一曲のスピード違いなど、それはもう至れり尽くせりだ。なかでも興味深いのは、やはり未発表テイク中心の関連トラックを集積のディスク5だろう。そもそも彼らは、ビッグ・ネーム、ビリー・フューリーのバック・バンドとしてスタートしているんだが、ここには彼のヒット曲「アイル・ネヴァー・ファインド・アナザー・ユー」他、3トラックも収録。それで霞がかかったような音像に改めての気付きも。

杉原志啓

BRINSLEY SCHWARTZ ✦ Thinking Back: The Anthology 1970-1975

Lemon / Cherry Red [UK] CDLEM7BOX250／7CD

1970年から74年までのオリジナル・アルバム6作、そして88年になって出た74～75年録音のお蔵入り作『イッツ・オール・オール・オーヴァー・ナウ』をパッケージしたブリンズリー・シュウォーツの7枚組ボックス・セット。しかしそれだけじゃあつまらない。各ディスクには6曲～12曲のボーナス・トラックがあって、折々のアウトテイクやライヴ音源、ヒッターズ、ライムライト（ビートルズのカヴァー）など別名義のシングル曲などがたっぷりの構成で、初登場も3曲。もっともそれらボーナスも既出のものが大半で、レアものが全部収録されているわけではないが、よほどのマニアでなければこれで十分満足のいくセットでしょう。

ニック・ロウがフロントに立ち、ロックンロール、ポップ、R＆B、そしてちょっとカントリー／フォークな英パブ・ロック時代の抜きん出たセンスとユーモア、そしてバンドスタンドの心意気をご賞味あれ。ともかく、これからブリンズリー・シュウォーツをという世代にはピッタリのセット。お薦めです。

宇田和弘

WIZZARD ✦ The Singles Collection

7T's [UK] QGLAM2CD200／2CD

イギリスでは毎年年末のクリスマス・シーズンになるとヒット・チャートに上がる 'I Wish It Could Be Christmas Every Day'。いくつもカヴァー・ヴァージョンがあり、2023年末にもチャート・インしたこの曲のオリジナルが、元ザ・ムーヴ～ELOのロイ・ウッドが結成したこのウィザードによるものだ。本作には72～78年の間にイギリスで発売されたシングルのAB面が順に収録されている（2枚のCDに全22曲収録）。

60年代の実験的な作風から一転してヒット・シングルは完璧なポップ・ソング。ここには全英1位を含むヒット曲が多く収録されている。彼らに影響を与えたフィル・スペクターや50年代のジャンプ・ブルースなどを聴くと、本作も一層興味深く思えるだろう。B面曲はロイ以外のメンバーの提供曲が多く、ディスク2の後半はRoy Wood's Wizzardと Roy Wood's Wizzo Band名義で、音楽性も変わっている。単なるヒット曲集でなく、音楽性の変遷を聴けるのもこのセットならではの楽しみ方だろう。

白音家弘

CamScannerでスキャン

BANG ✦ Bang
Cleopatra [US] CLE36982

フィラデルフィア出身の3ピースのハード・ロック・バンドが、72年にキャピトルから発表したデビュー・アルバム。結成は69年で、71年にアルバムを録音しているが未発表に（2011年にリー・ドリアンのライズ・アバヴ・レコードから発表）。その後、新たに録音されたものが本作である。彼らはブラック・サバスに影響を受けたといい、音色やリフにその影響が表われているようだ。それが3人のギター・バンドで演奏されることで、個性となっている。

本作にはオリジナル盤と同様の全8曲を収録。すべてがメンバー3人か、プロデューサーのマイケル・サンディ（変名を使用）を入れた4人の共作となっている。前述の未発表アルバムに比べると、さらに重く、楽曲もストレートなものが並んでいる。ここから 'Questions' がシングル・カットされ、全米トップ100に入るヒットとなった。今回はCDとともに、歌詞や写真が掲載されたダブル・ジャケット仕様によるアナログ盤も発売されている。

白谷潔弘

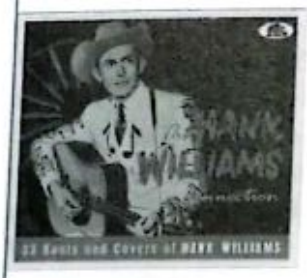
ARTHUR BROWN ✦ Dance
Esoteric [UK] ECLEC2847

60年代にはクレイジー・ワールド・オブ・アーサー・ブラウン、70年代初めはキングダム・カムで活動したアーサー・ブラウンが初めて発表したソロ・アルバム。オリジナルは75年、ガル・レーベルから。プロデューサーはロジャー・ベイン。アニマルズで知られる「朝日のない街」に始まり、ミック・ジャガー／キース・リチャーズ作 'Out Of Time' や自作曲が収録されている。アレンジはキングダム・カムのギタリストであったアンディ・ダルビーが行なっており、シンセやリズムがこの時代を強く思わせる一方で、ブラウンの歌唱はやはり一聴して彼と分かるほど、際立っている。

ボーナス・トラックとして75年4月のBBCライヴを6曲追加。女性コーラスとサックスを含むバンドを従えた30分ほどのライヴで、アルバムの収録曲を多く演奏している。前述のブラウンのバンドほど顧みられる機会は多くないが、楽曲がオーソドックスであるためシンガーとしてのブラウンの個性と実力が伝わるライヴとなっている。

白谷潔弘

The Hank Williams Connection: 33 Roots And Covers Of Hank Williams ✦ v.a.
Bear Family [Germany] BCD17706



端的に言えばハンク・ウィリアムズの作品やレパートリーのカヴァー全33曲集。しかし副題に〝ルーツ〟の文字もあるとおり、ハンクがカヴァーした曲もある。たとえばレックス・グリフィンの「ラヴシック・ブルース」、ビー・ウィー・キングの「ルーティ・トゥーティ」など。しかし大半はハンク存命中から60年代までのカヴァーで、カントリー、ロカビリー、ポピュラー音楽のジャンルから幅広く選曲されている。70年代以降はロック・サイドからのカヴァーも続出するが、そこまで入れると収拾がつかなくなるというのがルーツ音楽復刻の老舗、ベア・ファミリーの見識だろう。もっともだ。

選曲にも同レーベルならではの説得力があり、また面白い。たとえばルイ・アームストロングの「コールド・コールド・ハート」、レイ・チャールズの「テイク・ジーズ・チェインズ・フロム・マイ・ハート」はじめ、デルタ・リズム・ボーイズ、ロニー・ホーキンスから、スプートニクスまで。ハンクの歌・音楽の広がりが実感できる好編集盤だ。

宇田和弘

CamScannerでスキャン

100 Years Hollywood Community And A 100 Years Hollywood Sign ✦ v.a.

Bear Family〔Germany〕BCD17691／2CD

映画の都、ハリウッド。1900年初めには農村から市となり、1910年代初めには米映画産業の中心地となり、20年代には世界中に映画の都として知られることに。100年を超えるその歴史を音楽を通して振り返ろうという2枚組であり、20年代から最近の曲まで61曲が収録されている。

ディスク1では、まずはハリウッドのことを歌い、タイトルにもその名が入った曲が8曲。NYイースト・ハーレムの白人グループ、ティアドロップスの 'You're My Hollywood Star' は陽気なティーン・ポップス、コニー・スティーヴンスの 'Hollywood' は派手なロックンロールで、さらにカール・パーキンス、レイ・キャンピら、60年前後のロックンロールが並ぶ。次にサイレント・ムーヴィー時代のラテン系スター、ドロレス・デル・リオに始まり、ビング・クロスビー、極楽コンビのローレル＆ハーディ、ジュディ・ガーランド、ドロシー・ラムーア、アンドリュース・シスターズら銀幕の大スターの華やかな歌声が続く。さらにマーロン・ブランド（スピーチ）、カーク・ダグラス、エロール・フリンら男性スターの意外な歌声、マリリン・モンロー、ジーナ・ロロブリジーダ、ジェーン・ラッセルら魅惑の女優陣の艶っぽい歌唱も楽しめる。アンソニー・パーキンスの繊細なイメージ通りのヴォーカルも圧巻だ。

ディスク2では、ジョン・ウェインの語り、クリント・イーストウッドが歌うカントリー・チューンも面白い。そして名コンポーザーのインスト曲が本編集盤のハイライト。アーネスト・ゴールド『栄光への脱出』、ヘンリー・マンシーニ『ティファニーで朝食を』など、モーリス・ジャール『アラビアのロレンス』、フランシス・レイ『男と女』はどれも名曲だ。

トロイ・ドナヒュー『パーム・スプリングの週末』とアン＝マーグレット『バイ・バイ・バーティ』は、青春スターのハツラツとした声が新鮮。『何がジェーンに起こったか？』のデビー・バートンのキュートな歌唱、『グレート・レース』のロビン・ウォードの清らかな歌声も絶品だ。アニメ・コメディ『ロジャー・ラビット』でのエミー・アーヴィング、パロディ・コメディ『トップ・シークレット』でリトル・リチャードの曲を歌うヴァル・キルマーも意外や実力派。アニメ西部劇『ランゴ』のロス・ロボスの曲はヴェンチャーズのインスト・ロックを再現したものだ。中村彰秀

PEGGY LEE ✦ The Velvet Lounge: Fever

Bear Family〔Germany〕BCD17720

ジャズ・エイジから活躍のペギー・リー。最後のチャート・ヒット「イズ・ザット・オール・゛ゼア・イズ」がローリング・ストーンズ「ホンキー・トンク・ウィメン」（69年）リリース直後というんだから恐れ入る。一般にジャズ／スタンダード・ジャンルに括られる彼女の上質のシルクみたいなグルーミーなヴォーカルがロック・アーティストとも親和性があったのも想起しておきたいところだろう。

ベア・ファミリーの古典集〝ヴェルヴェット・ラウンジ・シリーズ〟最新作の本作は、そのあたりも示唆する好盤だ。つまり、映画のサントラ「ジャニー・ギター」のような代表曲やビッグ・バンドを従えたスウィンギーな「ラヴァーズ、R&B「カンサス・シティ」、あるいはレイ・チャールズで有名な「アイ・ガット・ウーマン」始め、〝キング〟エルヴィス・プレスリーやマッコイズもカヴァーの「ラヴァー」、ティーヴァー」、クリフ・リチャードでヒットのバラード「アイム・ルッキン・アウト・ザ・ウィンドウ」なんてとても渋い選曲という内容で。

CamScannerでスキャン

JERRY LEE LEWIS • At The Palomino Club

THE DOORS • Live In Bakersfield, August 21, 1970

Where Were You: Independent Music From Leeds 1978-1989 ✦ v.a.

Cherry Red [UK] CRCDBOX149／3CD

パンク・ムーヴメントの流れで英国イングランド北部のリーズから発表された78～89年の曲を、ほぼ時系列で68組分収めたボックス。たいへん丁寧な曲解説と関連写真で彩った24ページのありがたいブックレットも、小箱に収納されている。

ギャング・オブ・フォーを筆頭にデルタ5やガールズ・アット・アワ・ベストなど、80年前後にデビューしたバンドの個性が強烈なためか、リーズは左翼っぽい知的なイメージもある。でもこれは、そんな固定観念を崩すコンピレーションだ。先月号で紹介した『ジ・アート・スクール・ダンス・ゴーズ・オン：リーズ・ポストパンク 1977-84』とも色合が異なり、いい意味で彼の地のシーンの流れを客観的にまとめた作りである。マスタリングが良いのか、原曲の魅力を引き出した鮮やかな音の仕上がりも特筆すべきだ。

ディスク1はリーズを象徴するメコンズからスタート。ジャークスやボーイズといった初期パンク勢の間にスクリッティ・ポリッティの変拍子の曲が入り、ソフト・セルの次に、ハードコア・パンク寄りのエイブラッシヴ・ホイールズやアイコンA.D.、イクスペルドが続く曲順で、一筋縄ではいかないリーズの面白さをしっかり伝えている。ディスク2と3も彩り豊かだ。シスターズ・オブ・マーシーやその"分派"のミッションとゴースト・ダンスの他、ローズ・オブ・アヴァランチなどのゴスやネオ・サイケ勢。カサンドラ・コンプレックス周辺やエイジ・オブ・チャンスなど、ダンス・ミュージックとも接点を持つビートの効いた面々。ウェディング・プレゼントやペイル・セインツ、エドゼル・オークショナーなどの穏やかなギター・ロック・バンドたち。雑然と紙一重なほど多彩な選曲が、みんな違って当たり前の世の中そのもので、"差別"せずパンクをキーワードにまとめた眼力と編集も評価したい。

だがもちろん無節操なノンポリの作りではない。隣接するマンチェスターに比べれば地味だが、荒ぶっているように聞こえても育ちが良さげで端正なサウンドの曲が大半を占めるのも、生真面目なイメージが強いリーズらしい。もちろん、有名なアーティストが少なかろうがB級と片づけられないクオリティだ。ギャング・オブ・フォーの曲 'Not Great Men' じゃないが、歴史は偉人が作ったものじゃない。体温が低めのサウンドからポジティヴなエナジーが滲む。

行川和彦

Windrush Rockers: Rare Sounds From The Original Black British Underground 1967-1975 ✦ v.a.

Rubble [UK] RUB3CDBOX21／3CD

67～75年に英国で生まれた"ロック"がキーワードの黒人音楽の編集盤。アーティストによっては数曲選ばれている57曲入りの3枚組だ。長文ライナーの間に関連写真を盛り込んだ32ページのブックレットも小箱に収め、僕のような"門外漢"でもすんなり入っていける作りだ。

ブルースの流れのブリティッシュ・ロックとは一線を画すのが特徴で、あえて言うなら、ニュー・ウェイヴ／ポスト・パンク～マッドチェスターあたりにもつながっている。プロデューサーとしても知られるデニス・ボーヴェルを擁したマトゥンビの初期の曲をはじめ、CDタイトルのようにアンダーグラウンドで広まっていた曲なのかもしれない。だがいわゆるアングラな雰囲気は皆無で、暗めながら開放的で陽気な曲が続く。ファンク、アフロビート、レゲエ、サイケデリック、ロックンロールの要素のハイブリッドだ。有名なレゲエ・バンドと同名のサード・ワールドのポリリズムの曲など、妖しく怪しいスタミナたっぷりながら英国の気品も感じる発見無数の豊潤盤。

行川和彦

CamScannerでスキャン

Can You Feel It? Vol.4: Modern Soul, Disco & Boogie 1976-85 ✦ v.a.

Tramp [Germany] TRCD9117

ここまでやるかというのが正直な気持ちだった。どんなレアなコンピであれども少なくとも1曲は持っているか、知っていると半ば自負していたのだが、それが木っ端みじんに砕かれてしまった。残念なことに知っている曲が1曲もないのだ。ヴァンテージ・ポイント、フランキー・ステイトン、ダルトン・リードの名には記憶があったが、それもおぼろげ。個人的にはそう強いとは言えない70年代後半から80年代前半にかけてのディスコやブギーを集めたものなのだが、想像以上に発掘が進んでいるらしい。

とはいえ、音自体にねじ伏せられたわけではない。ダルトンの南部っぽいものを別にすれば、勢いのある都会的な作品が集められてはいるのだが、歌っているのに白人が多いせいか、ヴォーカルの弱さが気になってしまう。文句なしにしびれたのはスワンクという4人組。バックアイ・ポリティシャンズの生まれ変わりとは驚き。マター・オブ・テイスト、バット・カーペンター、トリー・ウィンターあたりも悪くない。 **鈴木啓志**

CANDI STATON ✦ I'm Just A Prisoner

Kent / Ace [UK] CDKENM516

CANDI STATON ✦ Stand By Your Man

Kent / Ace [UK] CDKENM517

キャンディ・ステイトンが70年にフェイムから放った問答無用の名盤2枚が、アナログでの復刻に続いてCDでも再発。両作の音源は、20年前に英オネスト・ジョンズの編集盤で初めて正規CD化され、英ケントがフェイム時代のコンプリートを謳った2枚組CDにも収録された。が、LPのミニチュア版として紙ジャケットで単体CD化されるのは今回が初めてだろう。ここにきてケントがわざわざストレート・リイシューをするのは、これらがアルバムとしていかに優れ、理想的な作りであったかを伝えるためだと思われる。本人へのインタヴューを掲載した資料価値の高いカラー・ブックレットや厚紙の内ジャケットも含めて所有欲を掻き立てる。

両作ともアラバマはマッスルショールズのフェイム・スタジオで録音。プロデュースはリック・ホール、演奏はフェイム・ギャングと呼ばれた同スタジオの名手たちだ。"I'm Just A Prisoner" は記念すべきデビュー・アルバムで、ファンキーなジャンプ・ナンバーでもサザン～ブルース・フィーリング全開のバラードでも、とにかく圧倒的なのがキャンディの曇りのない歌唱。単に"ディープ"というだけではない、瑞々しさの中に感じられる強さや逞しさに惚れ惚れする。アレサ・フランクリンのフェイム録音へのアンサー的なバラードなどを共作したジョージ・ジャクソン、当時、キャンディの夫だったクラレンス・カーターらのペンの力にも唸らされる。ここで披露された 'I'm Just A Prisoner (Of Your Good Lovin')' と 'Sweet Feeling' を再収録したのが、次作 "Stand By Your Man" だ。タミー・ワイネットのカントリー・ソングを、オリジナルのポップネスはそのままにチャーチ・ルーツを覗かせながら歌った表題曲の素晴らしさは言うまでもない。ハーラン・ハワードが書いた曲の女性版リメイク 'He Called Me Baby' も元はカントリーの曲。軽やかな演奏と歌がかえって胸を締めつけるジョージ・ジャクソン＆レイモンド・ムーア作の 'Too Hurt To Cry' など快曲の連発で、満点のアルバムと絶賛されてきた理由を改めて実感した。 **林剛**

CamScannerでスキャン

THE DAVE BRUBECK QUARTET ✦ Live From The Northwest, 1959

Brubeck Editions [US] BECD2310001

これは、ポール・デズモンド(as)、ジーン・ライト(b)、ジョー・モレロ(ds)を従えたデイヴ・ブルーベックが、1959年4月にオレゴン州ポートランドで行なったふたつのライヴ・パフォーマンスを収めたCD。“Gone With The Wind”を録音する直前、そして“Time Out”の録音を2か月半後に控えた時点でのコンサートだけに、4人のコンビネイションは頂点にあり、録音の良さもあって、このクァルテットの魅力を存分に味わえる。

楽しげにスウィングする‘When The Saints Go Marching In’を皮切りに、“Gone With The Wind”からのタイトル曲や‘The Lonesome Road’まで、全7曲を目いっぱいスウィングさせていくクァルテットの演奏が圧巻で、いつもながらデズモンドの小気味よいフレイジングは冴えわたっているし、モレロの切れ味鋭いドラミングも最高。そこかしこに発揮されるブルーベックのユーモアのセンスにも脱帽だ。なお、ブルーベックのオリジナル曲‘Multnomah Blues’は、ここでしか聴くことができない。 大村幸則

ALBERT AYLER ✦ More Lost Performances Revisited

Ezz-Thetics [Switzerland] Ezz-Thetics1160

かつてリリースされたRevenantレーベルの10枚入りボックス・セットを買い損ねた方は絶対に入手しておきたい一枚。アイラーの大変貴重な録音が3種類収められている。まずは、1962年にコペンハーゲンで行なわれたセシル・テイラー・トリオとのライヴ演奏‘Four’だが、今のところふたりの共演を聴くことができるのはこの1曲だけ。テイラー・トリオのタイトな演奏がしばし続いた後、そこにアイラーが加わるとテンションが一段と高まり、あっという間に21分を超える演奏は終結へと向かう。この時点での両者の相性は抜群で、もっと共演してほしかったとつくづく思ってしまう。

次は、1967年6月30日と翌日にクインテットでニューポート・ジャズ・フェスへ出演したときの3曲。録音回数の少ない‘Japan’を聴けるのが嬉しい。そして最後は、ジョン・コルトレーンの葬儀でアイラー兄弟がリチャード・デイヴィス(b)、ミルフォード・グレイヴズ(ds)と繰り広げた3曲のメドレー。深々と心に刺さる感動的なパフォーマンスだ。 大村幸則

ARCHIE SHEPP ✦ Derailleur: The 1964 Demo

Triple Point [US] TPR311LP／LP

ウェイン・ショーター亡き後、ソニー・ロリンズと並んでサックス奏者としては最後の生き残りの巨匠であるアーチー・シェップ。本人も存在を忘れていたら新しい未発表音源が発掘された。正確な録音日は不明だが、ジョン・コルトレーンの推挙でインパルスと契約する直前の64年春頃と推定される。リハーサル・デモとはいえ、ベル・サウンド・スタジオで正規のエンジニアが録音したものだから音質になんら問題はない。

メンバーは当時活動していたラズウェル・ラッド(tb)とスティーヴ・レイシー(ss)の双頭四重奏団をそのまま拝借。演奏された3曲のうち、デューク・エリントンの‘Sophisticated Lady’はワン・テイクで完了。自作2曲はファンキーなシャッフル・ブルースとレイシーの作風を完璧に取りしたような5拍子のジグザグ風味を複数テイク収録する。特筆すべきは濁ったトーンとズーズー弁で不良っぽく引きずったスタイルが既に確立されていること。ただしカンで凌むことなく奔放でおおらかさもある。LPのみのリリースである。 松延史郎

CamScannerでスキャン

CLORA BRYANT ♦ Plays And Sings: Her Complete Recordings 1957-1960
Fresh Sound [Spain] FSR11480

女流ラッパ吹きといえば、"リトル・ルイ"と呼ばれたヴァライダ・スノウはその第一人者だが、恐らくはマルチ器楽奏者だった彼女同様、このクローラ・ブライアントも数えることが妥当だった。1927年テキサス生まれで92年の長寿を全うし、50年代はLAとNYの両方で活躍。アルバムは57年の"Gal With A Horn"の1枚しか残していないのが不思議とはいえ、ポートレイトの数々を見ても全年齢を通して堂々たる佇まいに惚れぼれする。

"Gal..."の8曲はいずれもスタンダードで、エラ・フィッツジェラルドがドスを利かせたような歌がリードする。中ではニーナ・シモンでも有名な'Little Girl Blue'のしっとりした味わいが出色。トランペット・ソロも何処かギクシャクした感はあっても遠慮のない潔さが気持ち良い。今回のボーナス曲のうち冒頭は西海岸の豪華なメンツが揃ったビッグ・バンドがバック。短さが勿体ない。やはりオケと共演の'Angel Eyes'はマイルス・デイヴィスとギル・エヴァンスの影も。サックス抒情のラストが感動だ。　松尾史朗

TONI HARPER ♦ Miss In-Between: Selected Singles As And Bs, 1948-1953
Jasmine [UK] JASMCD2711

トニ・ハーパーといえば、ノーマン・グランツのプロデュースでヴァーヴにオスカー・ピーターソン・カルテットと1955年に吹き込んだ"Toni"、59年、RCAにマーティ・ペイチのアレンジで吹き込んだ"Lady Lonely"と"Night Mood"がジャズ・ファンの間では有名だ。

4歳から芸能活動を始め48年にデビュー・シングル'Candy Store Blues'を大ヒットさせて有名になった時は、まだ9歳だった。その後、舞台、TVなどで大活躍。コロンビアから、ハーブ・ジェフリーとデュエットの'You're Too Tall, I'm Too Small'、'Peppermint Stick'やハリー・ジェイムス楽団との'Baby Blues'等の5曲を含め数多くのシングルを発表している。本作は48〜53年の6年間に発表されたシングル28曲を集めたもので、完璧ではないが、彼女の初期の録音の大半が聞ける。彼女は63年にはキャノンボール・アダレイと来日して、その後に仏教に帰依、それが原因の一つといわれるが66年に29歳の若さで引退して、2023年に85歳で亡くなった。　高田敬三

ERNEST GOLD ♦ The Ernest Gold Collection Vol.2
Dragon's Domain [US] DDR793

公開当時、ヒット・チャートを賑わせた映画『栄光への脱出』（60年）のテーマ音楽で知られ、自作スコアに既成曲やその旋律・音階などを巧みに取り込むことに長けた作曲家、アーネスト・ゴールド。本盤は氏の未音盤化サントラ作品集の第2弾で、主演のスティーヴ・マックイーン急逝の直前に撮られた2作中の1本『トム・ホーン』（80年）と、劇音楽としてはゴールドの最終作になる『リンカーン』（88年／TVミニ・シリーズ）を収録。

自らの命とひきかえに西部開拓期や南北戦争といった時代の幕を下ろしていった実在の人物を描くこれらのドラマだが、もともと鳴かず飛ばずだったキャリアを『真説・南北戦争』（56年／日本未公開）という記録映画によってブレイクスルーしたゴールドにとっては、これは大きな運命の輪を閉じるようなめぐり合わせでもあり、宿命を背負って、静かに退場してゆく主人公たちにむけられる主題曲にも哀愁といった情念をつき抜けたような諦観があふれ出していて、聴く者の心をゆさぶらずにはおかない。　上原昭一

CamScannerでスキャン

PAULO MOURA HEPTETO ✦ Mensagem

Mad About [Portugal] EQ001／LP

ブラジルのサックス奏者が率いるグループ：パウロ・モウラ・エプテートのアルバムは2枚あり、これはそのファースト、1968年作である。2007年にCDで再発されているが、こちらは重量盤LPリイシューで、当然のことながらWAVなど様々な電子ファイルのダウンロード・サーヴィスも完備している。

パウロ・モウラ（1932-2010）というサックス奏者は、ブラジリアン・ジャズとひとくくりにできないほど時代とともにアルバム制作コンセプトが変わり続けている。50年代にはブラジルのメロディを活かしたハード・バップ・スタイルだったが、本盤を含むエキッピ盤2作ではミルトン・ナシメントのメロディを4管アンサンブルで色付けしつつ、パーカッシヴなリズム・アンサンブルも大幅に導入した。USジャズでいう新主流派とイメージが重なる。70年代中期以降はショーロをモチーフとしたアドリブ重視となり、ますます至高の存在になっていくが、本盤のホーン・アンサンブルの風合いもまた格別である。

山本幸洋

AZYMUTH ✦ Live At Copacabana Palace

LMLR [France] LMLR783655／LP

1985年にフランスのみで発売されていた、アジムチの謎めいた珍盤がLPで再発された。

"79年にコパカバーナ・パレスで録音されたライヴを収録した"とされるアルバムだが、実際には79年作『ライト・アズ・ア・フェザー』の音源を使った疑似ライヴと思われる。しかし、オミットされた曲がある一方で、後にCD化に伴って陽の目を見た「オ・ベスカドール」という曲が「モントルー」というタイトルで入っていたりもする。米マイルストーンの公式盤には収録されなかったトラックを含め、マスター・テープから作られた疑似ライヴ盤なのかもしれない。看板曲のひとつ「ヴー・ソーブリ・オ・オリゾンチ」は1分16秒ほど長い。

また、これは褒めるべきところではないのかもしれないけれど、疑似ライヴの拍手を入れるタイミングは絶妙で、ウソと分かっていてもうっかり乗ってしまいそうになる。疑似ライヴとはいえ、ぞんざいな作りでもなく。アジムチの熱心なファンの仕業？

駒形四郎

SUPER BITON DE SEGOU ✦ Afro, Jazz, Folk Collection Vol.2

Mieruba [France] no number／CD

Mieruba [France] no number／2LP

ニジェール川中流の古都セグーを拠点に置くシュペール・ビトン・ド・セグーは、政府主催の音楽コンクールで連続優勝して76年に国立バンドへ昇格した名門バンド。マリを代表するバンドで200曲を超すレパートリーがあると言われながら残されたレコードは数少ない。それだけに、2年前にマンデ・ポップの新進レーベル、ミエルバが往時の70年代録音を復刻した時は大きな話題を呼んだ。日本でも配給されたそのアルバムは第1集と題されていたので続編が期待されたが、よううやくその第2集がリリースされた。

第1集には2曲の既発曲があったが、今回の11曲はすべて未発表曲のもよう。第1集にあった15分を超すような壮大な叙事詩はなく、音質難のトラックも今回は見当たらず、前作より今作の方が粒が揃っているのは嬉しい。バンバラらしい泥臭いアフロ・ポップが詰め込まれている。貴重な復刻にもかかわらず、今回も解説はなくメンバーや録音データのクレジットも一切ないこのレーベルの姿勢はいただけない。猛省を促したい。

荻原和也

CamScannerでスキャン

New Album Pickup

・ニュー・アルバム・ピックアップ・

ヴェテランの新作から注目の新人まで、
編集部が選んだおすすめの新録アルバムを紹介します

TUK SMITH & THE RESTLESS HEARTS ✦ しくじった青春のバラッド／タック・スミス&ザ・レストレス・ハーツ

ソニー　SICX195／¥2272／12・13／歌詞・訳詞／解説＝増田勇一

まず、ファッション、バンド名、そしてこの邦題にニヤリ。さらに、曲名にもすべて邦題が付けられているなど、日本の担当氏の熱くて青い気分が伝わってくる。リーダーのタック・スミスはアトランタ出身。10年代にはバイターズとして活動、拠点をナッシュヴィルに移して現在のバンドを18年に結成した。半世紀前から脈々と受け継がれている、愛しき北米大陸歌謡ロックンロール全開。ヒューイ・ルイス、ブライアン・アダムス、シン・リジー、AC/DC、ボン・ジョヴィあたりの匂いがちらほらと。すごんで歌っても可愛い感じは少しトム・ペティっぽい。ロゴ・マークもハートブレイカーズのそれを反転させたみたいだ(笑)。

本作は22年の6曲入りEPと、23年のシングルに3曲を追加した本邦デビュー盤。その3曲にリジーの「ダンシング・イン・ザ・ムーンライト」が含まれているのがいい。彼らのヴァージョンを聴くと"ボン・ジョヴィのルーツであるポップ・ロック・バンドとしてのリジー"という流れがみえてきて興味深い。　**人見欣幸**

CYAN ✦ ピクチャーズ・フロム・アナザー・サイド／サイアン

Tigermoth/マーキー(ベル・アンティーク)　MAR233981／¥2500／1・15／解説＝宮坂聖一／輸入盤国内仕様

サイアンは、マジェンタのリーダーとして知られるロブ・リードが84年に結成したバンドだったが、93年にデビュー・アルバムを発表した頃にはリードのソロ・プロジェクトになっていた。その後、マジェンタを結成して高い評価を得るに至って、サイアンの活動はクローズ状態に。しかし、サイアンで発表した作品を現代の技術を使ってバンドで再録音したいと考えたリードがイット・バイツやマジェンタのメンバーらに声をかけ、プログレッシヴ・ロック・バンドとして復活。21年にデビュー作を再録音して発表すると、23年暮れには2作目のアルバムを再録音した『ピクチャーズ・フロム・ジ・アザー・サイド』を発表し、同時にそのコンパニオン・ディスクとしてこの『ピクチャーズ・フロム・アナザー・サイド』がリリースされた。

ここに収録されているのは今回作成された、アレンジやミックスの異なるテイク4曲と、前リメイク作のスタジオ・セッションにおけるライヴ・テイク4曲。計64分で、聴き応え充分だ。　**坂本理**

CamScannerでスキャン

CHRIS O'LEARY ◆ ザ・ハード・ライン／クリス・オリアリー

Alligator(BSMF) BSMF2851／¥2700／1・24／解説＝大野木一彦／輸入盤国内仕様

クリス・オリアリーは68年、ニューヨーク生まれのブルース・シンガー＆ハーモニカ奏者。90年代にリヴォン・ヘルムが経営していた店のハウス・バンドに誘われ、以来、彼のザ・バーンバーナーズの一員として活動。42歳でソロ・デビュー作発表に漕ぎ着けた遅咲きだ。分厚い体格やハードな面構え、元警察官の経歴にも納得だが、ワイルドなアンプリファイド・ハープを吹き鳴らし、朗々と野太く汗臭い歌声を響かせる様は、60年代のポール・バタフィールド以来、脈々と続いてきたアメリカン・ホワイト・ブルース・シンガーの系譜に位置するものだろう。

約5年ぶり、通算5枚目となるアリゲーターからの本作でも、潔いほどのブルース／R&B世界を自作曲のみで展開。もはや“ホワイト”などという冠をつけてしまったことも後悔するほどに本格派だ。重心の低いミディアムから軽快にスウィングするアップ、マイナーのスロウやニューオーリンズ風など、ホーンを含む様々なプレイヤーを揃えたバンドが、多彩なアレンジでクリスを支える。 青山陽一

KERRI POWERS ◆ ラヴ・イズ・ホワイ／ケリー・パワーズ

Must Have(BSMF) BSMF2851／¥2700／1・24／解説＝西村雅人／輸入盤国内仕様

ケリ・パワーズ。十代の頃からギターを抱いてコーヒーハウスを回り、02年にはアルバム・デビューしており、現在、おそらく四十代と思われる。ヴェテラン女性シンガー・ソングライターだ。

通算6作目となる本作は、彼女のルーツであるフォーク、ブルース、ロックをベースにしているが、機は熟したと言いたくなる充実作だ。その魅力は、ふてぶてしいという表現がぴったりのソウルフル・ヴォイス。生き様を示したような楽曲もいいが、堂々たる歌唱に惚れ惚れする。彼女を形容する時、ジャニス・ジョプリン、ボニー・レイット、カレン・ダルトンが引き合いに出されるのも納得だ。さらに圧倒されるのが、バックの力強い演奏。キーボード、ドラムも見事だが、ボー・ラムジー、ダグ・ランチオらによるギターが強烈だ。唯一のカヴァー、グレッグ・オールマン作でボール・ソーンとデュエットした‘Please Call Home’のけだるいムードも絶品。‘Morning Glory. Midnight Blue’では、彼女のスライド・ギターを堪能できる。 中村雅秀

ABDULLAH IBRAHIM ◆ 3／アブドゥーラ・イブラヒム

ギアボックス GB1591CD／¥4000／1・24
ギアボックス GB1591／LP／¥9000／1・31

今年の10月で満90歳を迎えるリヴィング・レジェンド、アブドゥーラ・イブラヒムの新作。彼が80年代から率いているラージ・アンサンブル、“エカヤ”の現メンバーであるクリーヴ・ガイトン（サックス、フルート、ピッコロ、クラリネット）およびノア・ジャクソン（チェロ）と組んだ三重奏だ。録音データは手元の資料には未記載だが、調べたところロンドン、バービカン・センターでのライヴ・パートは23年7月15日に収録されているようだ。

イブラヒムのプレイは無伴奏ソロ、トリオ、ともに枯淡の境地。70年代に次々とソロ・アルバムを発表していた頃の、あの滾々と湧き出るようなフレーズづくり、強靭なタッチに代わり“レス・イズ・モア”を地で行くようなプレイで興味をみせる。ジャクソンはアルコ（弓弾き）以上にピチカート（指弾き）を多用、クリーヴはフルートの音色がことに美しい。「ミステリオーソ」の旋律を導入部においた「スキッピー」（セロニアス・モンク作）に高揚させられた。 原田和典

JEREMY MONTEIRO ◆ Sings

Jazznote[Singapore] 261084-103

ジェレミー・モンテイロは、シンガポールの"キング・オブ・スウィング"といわれる、同国を代表するジャズ・ピアニスト。ジェイムズ・ムーディ、ベニー・ゴルソン、ブレッカー兄弟などとも共演し、ジョン・ヘンドリクス、ボビー・マクファーリン、カサンドラ・ウィルソンといった歌手の伴奏も務めたことがある。すでに41枚のアルバムを発表しているが、本アルバムは彼が初めて全曲を歌う作品だ。

ハンガリーのサックス奏者、トニー・ラカトスを含むカルテットに、曲によりウェスリー・ジャーリング(g)とジェンス・パンジ(hca)が加わり、5曲でストリングスが入る。オリジナル1曲のほかは 'Smile' 'Let's Fall In Love' 'Walkin' My Baby Back Home' などスタンダード9曲を、ナット・キング・コールを思わせる柔らかく心地よい弾き語りで聞かせる。ラカトスのロマンチックなサックスもよいムードを醸し出している。日本での知名度はあまり高くないが、もっと注目されてよい。 高田敬三

SLAWEK JASKULKE ◆ 蘇涼寺ライヴ／スワヴェク・ヤスクウケ

コアポート RPOZ10091／¥2800／1・24／解説＝オラシオほか

ポーランドのピアニスト、スワヴェク・ヤスクウケが、23年5月に来日した際、岡山の蘇涼寺で行なったソロ・ピアノでのコンサートのライヴ録音盤。蘇涼寺は、国内外のさまざまなアーティストの公演を行なっていることで知られるお寺だ。本盤は 'Kintsugi' という冒頭の新曲が素晴らしい。本堂の響きに合わせてグランド・ピアノにフェルトをセットして演奏されたそうだが、アタックが緩和されたような、柔らかな響きがとても印象的だ。まるでエンヴェロープ・フィルターをかけたようにも聞こえる。

ヤスクウケは独特の音色を出すことにとても秀でている。ピアノが発するきしみや環境音も聞こえる "Sea" にいまも惹かれるのは特にそのせいなのだが、本作もまた魅力的な音色を生み出している。そして、シークエンスやスペースの作り方も見事で、アルバム・タイトル曲 'Sea' の演奏にそれはよく表われている。小雨の降る日だったようだが、アンビエント・ミュージックとして環境に馴染む様を感じ取れるような録音だ。 原雅明

藤井郷子 東京トリオ ◆ ジェット・ブラック

リブラ LIBRA203-073／¥2300／1・26

ピアニストの藤井郷子が19年に結成した、須川崇志(b)と竹村一哲(ds)を率いる"東京トリオ"の2作目。まだ3度目の共演だった新宿ピットインでのライヴを収めた前作に対し、今作は日本ツアー最終日の渋谷公園通りクラシックスでの公開録音を収録。それだけに三者のコンビネーションはいっそう磨き上げられており、ピアノ・トリオという古典的フォーマットの可能性をさらに押し広げるかのような作品に仕上がっている。

即興と一口に言っても、ソロから丁々発止のやりとり、非器楽的な奏法を交えた不定形な音響の重なりまで様々だが、それらすべてを含みつつ、カオスのなかからコンポジションがばっちりと姿を現わす場面は痛快だ。フリー・ジャズ的な熱を帯びることもあれば、時には叙情的な美しさも聴かせる。こうした七変化は、音楽にもノイズにもアプローチしうる形でトリオが緊密な連携を保っているからだろう。全6曲だが、一連なりの音のかけ合いから自発的にアンサンブルが生まれ続けていくようでもある。 細田成嗣

CamScannerでスキャン

民謡クルセイダーズ ◆ 日本民謡珍道中

ユニバーサル UCCJ9248／¥3000／11・24

やはり土台の良さだと思う。その頑丈な土台の上に櫓を組んで、踊りまくる歌いまくる暴れまくる。民謡クルセイダーズの約6年ぶりとなるニュー・アルバムは、超スロウなBPMの「佐渡おけさ」からしてすでに異形だ。まるで60年代のフリー・ジャズを思わせるような混沌の渦。そのなかをかき分けるように、フレディ塚本の歌声が立ち上がっていく。これはもう、ラテンと民謡の融合といった単純なものではない。戦前・戦後のさまざまな音楽が、地獄絵巻のように描き出されていく。かつて渋さ知らズがやろうとしていたことを、さらにプログレッシヴに体現していると言っていいだろう。時間軸のなかに、歴史の重みがねっとりと盛り込まれているのだ。

日本はとてつもなく奇っ怪なグループを生み落としてしまったと思う。聞き進めるうちに、剥き出しの人間性に翻弄され、激烈な酩酊感に襲われてしまうはずだ。南方熊楠が呆然と立ち尽くす。柳田國男が褌一丁で走り出す。そんなたぐいの音楽であるのだ。　小川真一

RHYTHMATRIX ◆ BRIGHTNESS

ジャンプ・ワールド KATS1023／¥2727／1・10

日米両国で活躍してきたピアニストのクリヤマコトと、スティーヴ・ガッドやアンソニー・ジャクソンとの共演歴もある安井源之新(per)。本作はこの名手二人が組んだユニットのアルバムだ。ジャズとブラジル音楽の結節点を探るようなサウンドが軸だが、ダバダバなスキャットが挟まれるなど、フレンチ・テイストもちらつく。また、リターン・トゥ・フォーエヴァーの1stや、フローラ・プリムのソロ作を参照した痕跡も。ドナルド・バード『プレイシズ・アンド・スペイシズ』やCTIの諸作に通じる、軽快なフュージョン・テイストも隠し味だ。

卓越した技術で魅せる安井のバンディロを筆頭に、音のヌケが良く、弾むようなグルーヴが全体を貫いている。聴き心地が良く、リラクゼーション効果があるが、イージー・リスニング的なお気楽さがないのもポイントだ。ちなみに、安井はブラジル在住歴通算6年、インド在住歴3年。このワールドワイドで聴かれるべき逸品を、マルコス・スザーノあたりがどう感じるか聞いてみたい。　土佐有明

Neighbors Complain ◆ Back Side

ヴィヴィド VSCD3235／紙ジャケット／¥2727／12・20

コテコテソウルな浪花に、ウィンディ・シティのブリーズを撒き散らすソウル・バンド、ネイバーズ・コンプレイン。ラヴ・バンドである彼らは、パンデミックによって活動がままならない時期を過ごしたが、結成10年の節目となる24年を前にして、23年の後半からアルバムを3枚も連続リリース。1枚目が通算5作目となる『First Contact』で9月のリリース。クリスマス・イヴの12月24日には、通算6作目の『A life like ice cream』を配信で先行リリースした（フィジカル盤は今年3月に発売予定）。

昨年12月20日にリリースされた『Back Side』はタイトル通り、B面的な楽曲を集めたコンピレーション作品。過去にシングルでリリースされた曲や、会場限定CD、配信のみの曲など、現在では聴くことが困難になっている曲を中心に収録している。「Gotcha Feelin'」と「Life Goes On」はこのアルバム用に再録されたもの。ジャケットはもちろん、ビル・ウィザースのベスト盤のパロディで、ここにも彼らのこだわりが見える。　池上尚志

CamScannerでスキャン